

# 「斜めの誠実」——南北戦争とエミリ・ディキンソン

金澤 淳子

目次	2
序論	5
第1節 「戦争詩人」ディキンソン	5
第2節 先行研究（1984年から2007年）	8
第3節 先行研究（2007年以降）	12
第4節 21世紀に南北戦争とディキンソンを論じる意義	15
第5節 本論の構成	18
第1章 ディキンソンから「大佐」ヒギンソンへ ——南北戦争中の手紙を読む	23
序節	23
第1節 文通の始まり	24
第2節 「若き投稿者への手紙」と戦争	25
第3節 「斜めの場所」をめぐって	30
第4節 死の淵からの帰還	37
第5節 詩人の立脚点	43
第2章 定期刊行物の戦争詩とディキンソン	48
序節	48
第1節 北軍系新聞に掲載されたディキンソンの詩	52
第2節 ジュリア・ウォード・ハウの戦争詩	58
第3節 ディキンソンが手紙に書いた「戦争」	62
第4節 ディキンソンの「戦いの詩」	67
第3章 ディキンソンと「読者」 ——南北戦争時に「送られた」詩	77
序節	77

第1節	19世紀アメリカ詩と雑誌	80
第2節	ディキンソンと南北戦争	82
第3節	南北戦争期のふたつの詩群	84
第4節	「送られた」詩	88
第4章	南北戦争時に「送られなかった」詩	94
序節		94
第1節	苦悩から詩作へ	96
第2節	フレイザー・スターンズの戦死	99
第3節	母と息子の詩	109
第4節	戦場の詩	113
第5節	ディキンソンの両面性	119
第5章	戦争前の「戦いの詩」	124
序節		124
第1節	戦争前の「戦いの詩」	126
第2節	ディキンソンとヘレン・ハント・ジャクソン	131
第3節	逆説の展開	140
第4節	言葉の力	145
第5節	戦争前のディキンソン	147
第6章	声なき者たちの声	
	——ディキンソンと「殉教者たち」	153
序節		153
第1節	ディキンソンとブラウン	157
第2節	ソローとブラウン	158
第3節	ディキンソンと政治	164
第4節	“Through the Straight Pass of Suffering” ( F 187) を読む	171
第5節	「殉教詩人」の仕事	183

第7章 言葉の軌跡	191
序節	191
第1節 苦悩の記録	191
第2節 詩の記録と回覧の変化	197
第3節 詩人の挑戦	199
結論	203
参考文献	207

## 序論

“Who was the best war poet, Rupert Brooke or Emily Dickinson?”

---*The Catcher in the Rye*

### 第1節 「戦争詩人」ディキンソン

戦争とエミリー・ディキンソン (Emily Dickinson) —— この組み合わせが論じられるようになったのは、この30年ほどである。それ以前はむしろ「戦争」と「ディキンソン」は、撞着語法的な印象を与えてきた。その端的な例は、1951年出版J・D・サリンジャー (J. D. Salinger) の *The Catcher in the Rye* に見ることができる。主人公ホールデン・コールフィールド (Holden Caulfield) の兄D. B.が、弟アリーに尋ねる —— 戦争詩人として相応しいのはどちらか。実際に戦争に行き、戦争詩を書いたルパート・ブルック (Rupert Brooke) か、それとも「隠遁詩人」ディキンソンか、と<sup>1</sup>。この小説の出版当時、ディキンソンを戦争詩人として本気で考えていた読者はいなかったのではないか。1955年にハーバード大学出版局からトマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) 編ディキンソン詩集が出される以前は、読者にとって、「戦争詩人」の選択肢にディキンソンの名が入ること自体、意表を突くものであったはずだ<sup>2</sup>。第二次世界大戦に従軍し、D-Day (1944年6月6日) にも参加したD. B. (そしてサリンジャー自身) の問いは重い余韻を残す。第一次世界大戦に従軍したブルックと、アマストの父の

---

<sup>1</sup> ルパート・ショーナー・ブルック (Rupert Chawner Brooke; 1887-1915) 英国の詩人、詩集 *1914* (1915) を出版。

<sup>2</sup> ディキンソン詩集出版には当初から多くの問題が絡む。1890年にトマス・ウェントワース・ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson) と共に最初のディキンソン詩集を出版したメイベル・ルーミス・トッド (Mabel Loomis Todd) の編集作業については、その娘ミリセント・トッド・ビンガム (Millicent Todd Bingham) が *Ancestors' Brocade: The Literary Debut of Emily Dickinson* にまとめている。ディキンソンの兄オースティン (Austin Dickinson) の愛人でもあったトッドと、オースティンの妻スーザン (Susan Dickinson) 両者の「二家族間の戦争」 (“War Between the Houses”) によって、その後ディキンソン関係資料が分断された弊害についてはマーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) が取り上げている。スミスによればディキンソン詩集や書簡集の編纂、さらには詩の受容や詩人の伝記に至るまで大きく影響し、特にディキンソンの詩の良き理解者であったスーザンが除外されたことを問題視している。また、ヒギンソンによっていかに「常軌を逸した女性詩人」 (“eccentric poetess”) としてのディキンソン像が強調されたかなど、1955年のジョンソン版出版に至るまでの研究をまとめている (“Editorial History I: Beginnings to 1955”)。

屋敷にいたディキンソンのどちらが、戦争の本質を詩に表現できたのか<sup>3</sup>。

サリンジャーの意図がどのようなものであれ、*The Catcher in the Rye* 出版当時、1950年代における詩人ディキンソン像は、時代に背を向けた内向的な姿が主流であった。20世紀に出版された代表的なディキンソン評伝は彼女の内向的な側面を強調するものが目立つ。そこで描かれる詩人像は、社会を意識した「戦争詩人」には程遠い。ジョージ・frisbie・ウィッチャー (George Frisbie Whicher) 著 *This Was a Poet: A Critical Biography of Emily Dickinson* (1938)、リチャード・チェイス (Richard Chase) 著 *Emily Dickinson* (1951)<sup>4</sup>、トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) 著 *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (1955)、チャールズ・R・アンダーソン (Charles R. Anderson) 著 *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise* (1960)<sup>5</sup>、リチャード・B・シューアル (Richard B. Sewall) 著 *The Life of Emily Dickinson* (1974) 等のディキンソン評伝は外の世界に無関心な、孤高の詩人像を伝える。1862年3月、アマスト大学学長の息子の戦死に触れたディキンソンの手紙 (L 256) について、シューアルは次のように述べている——「彼女が戦争自体について述べたのはこれらが、精一杯のところである。フレイザー・スターンズ (Frazer Stearns) の戦死についてボウルズに送った手紙は、政治的論争とも大義とも何ら関係がなかったことが今後記憶されるだろう」 (“These are her most extended comments on the war as such. Her letter to Bowles about the death of Fraser Stearns had nothing to do, it will be remembered, with issues or causes.” [Sewall 536])。

アメリカ南北戦争から百年を経て、エドマンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は南北戦争時代の文学を論じた大著 *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the*

---

<sup>3</sup> この作品を翻訳した村上春樹は次の註を付している、「ルパート・ブルック (1887-1915)。英国の詩人。第一次世界大戦中に病死。戦後、美貌と夭折によって、伝説化された。エミリー・ディッキンソン (1830-86)。米国の女流詩人。ブルックは戦争に題材をとった詩を多く書き、一方ディッキンソンは直接的な戦争詩を書いたわけではない。しかし本当に戦争について書いたのはディッキンソンの方なのだということが言いたいわけだ」 (233)。

<sup>4</sup> チェイスは例外的に索引で「南北戦争」 (“Civil War”) の項目を設定している。本文で従姉妹のノアクロス姉妹 (Frances and Louisa Norcross) に宛てた手紙を引用し、出征したフレイザーに触れている。戦争における知人の死によって「苦しみ」 (“anguish”) を経験したと述べている (Chase 115-116)。

<sup>5</sup> アンダーソンの研究書の場合は、ジョンソンによる詩集およびジョンソンとウォードによる書簡集出版後であるため、それ以前の評伝と比較して、ディキンソンの作品理解に基づいた内容になっている。ただし、補遺のディキンソンの生涯には南北戦争についての記載は全くない。

*American Civil War* (1962) もまたその系譜にあり、戦争に無関心な詩人ディキンソンを強調する——「南北戦争中はディキンソン嬢にとって特別多作の時であったが、私が知る限り、詩のなかで戦争について言及しておらず、手紙でもほとんど言及していない」(“The years of the Civil War were for Miss Dickinson especially productive, but she never, so far as I know, refers to the war in her poetry, and there are very few references to it in her letters.” [Wilson 488])。

だが、ディキンソンが暮らした人口三千人ほどのアマストの町では、教会や大学で戦争の大義が説かれ、日々、戦争の後方支援としての奉仕活動、アマスト大学学生の出征の動きがあり、父や兄も熱心に戦争協力に携わっている<sup>6</sup>。戦争の期間は、ディキンソン自身の詩作が最も充実した期間とまさに重なる。ラルフ・W・フランクリン (Ralph W. Franklin) によれば、1862年に227篇、1863年に295篇、1864年には恐らく目の調子が悪化したために減少して98篇、1865年には再び増えて229篇と、驚異的な勢いで詩を書き、この期間だけで人生の半数以上の詩を清書している (Franklin, *Poems* 1533)<sup>7</sup>。ディキンソンがどれほど同時代のアメリカ社会の変動に心を向け、内なる思索へと踏み込んで行ったのか。また、外の世界からどれほどの影響を受けたのか。詩人ディキンソンを考えるうえで南北戦争を避けて通ることはできない。

戦争とディキンソンの関係を巡る、アメリカの研究者たちの綿密な資料収集は、ディキンソン家の動向、政治的背景の調査など多岐にわたる。これらの先行研究に、本研究が負うところは非常に大きい。「隠遁詩人」ディキンソンがしっかりと同時代の社会に根差して生きていた事実には、私自身とてつもなく大きな衝撃を受けた。ディキンソンの詩が掲載された新聞紙面を取り寄せ、彼女が生きた時代を意識して、その詩を読み直す試みが本研究の根幹となる。

だが、北軍系新聞に載ったディキンソンの詩を最初に目にしたとき、違和感を覚えた。新聞紙面のディキンソンの詩は「戦争詩」には程遠く、周囲の記事や他の詩から浮いて見えたのだ。紙面にあるのは紛れもなくディキンソンの詩なのだが、なぜわざわざここにあるのか。この詩ではなく別の詩でも良かった

---

<sup>6</sup> ディキンソンの父エドワードのこの頃の政治的活動についてはコールマン・ハッチンソン (Coleman Hutchinson) が“Eastern Exiles?: Dickinson, Whiggery and War”にまとめている。ハッチンソンは“Papa above!” (F 151B) の詩の敗者のレトリックを父エドワードの所属するホイッグ党の斜陽と関連付ける。ただし、父エドワードが娘エミリの詩をどの程度読んでいたかは不明であり、「父の注意を引いた喩え」を前提とするハッチンソンの議論には疑問が残る。

<sup>7</sup> *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. 3 vols. Ed. Ralph W. Franklin. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1998.

のではないか。やはり「隠遁詩人」は時代から超越しているのだろうか——この違和感から、本研究は出発した。他の詩や記事との相違、そこから生じる違和感を指摘したものはほとんどない。新聞という時代の見取り図において、ディキンソンの詩と他の記事や作品とのズレは何を意味するのか。時代との関連性を追う論考は次々と発表されるものの、ディキンソンの詩を「戦争詩」とすることの違和感を取り上げた論考はない。この違和感は、ディキンソンの詩の本質を探るうえで重要な糸口になるのではないか。

## 第2節 先行研究（1984年から2007年）

1980年代の「修正主義的学術研究の波」(“a wave of revisionary scholarship” [Marrs 127]) に従い、これまでの「隠遁詩人」像を覆す研究が登場する。1984年に相次いで3つの先駆的な論考が出版され、南北戦争とディキンソンとの関わりを「南北戦争の言語、事件、そして概念」(“the language, events, and ideas of the war” [Marrs 127]) の問題意識から論じている<sup>8</sup>。シーラ・ウォルスキー(Shira Wolosky) 著 *Emily Dickinson: A Voice of War*、バートン・リーヴァイ・セント=アーマンド(Barton Levi St. Armand) 著 *Emily Dickinson and Her Culture: The Soul's Society*、カレン・ダンデュランド (Karen Dandurand) の“New Dickinson Civil War Publications”の3つの論考である。ウォルスキーの主張では、戦争によってディキンソンが宗教的な懐疑を抱き、戦いのメタファーを詩に用い始めたものとしている。彼女の破格の詩はモダニストの詩を先取りし、分断されたアメリカという現実を映し出したものだとする。セント=アーマンドは、19世紀のアメリカン・ヴィクトリアン文化を背景にディキンソンを論じ、1862年3月のアマスト大学学長の息子フレイザー・スターンズ の戦死がディキンソンに与えた影響について1章分を割いている。ダンデュランドは、1864年に発行された北軍支援の新聞にディキンソンの4篇の詩が掲載されていたことを発見し、出版問題の再考を促すとともに、ディキンソンが同時代に無関心ではなかったと論じている。ただし掲載は友人によるものであり、ディキンソンがそれを黙認していたとする。

この先駆的な論に続き多くの論考が発表され、近年では、特にフェイス・バレット (Faith Barrett)、エライザ・リチャーズ (Eliza Richards)、クリスタン・ミ

---

<sup>8</sup> 1984年以前にもディキンソンを南北戦争に結びつけた論考はあり、1965年にトマス・フォード (Thomas W. Ford) が早々に “Emily Dickinson and the Civil War” を論じている。また1973年にダニエル・アーロン (Daniel Aaron) が *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* の補遺で言及している。



ラー (Cristanne Miller) の3人が、同時代の文学、社会との関わりを検証しつつ、精密な読みを具体的に展開している。フェイス・バレットは、戦争とディキンソンに関する研究について、1984年から2007年の20年間にわたる動向をまとめ、21世紀的な視野において、イデオロギー的な観点の必要性を強調する<sup>9</sup>。バレットによる概要で特筆すべきは、ヴィヴィアン・R・ポラック (Vivian R. Pollack)、ベッツィ・アーキラ (Betsy Erkkila)、ベンジャミン・フリードランダー (Benjamin Friedlander) 等の研究者たちが、21世紀に入り、それまでの自説を修正し、戦争

---

<sup>9</sup> フェイス・バレット (Faith Barrett) “Public Selves and Private Spheres: Studies of Emily Dickinson and the Civil War, 1984-2007”参照。バレットは主な論文として次のものを挙げている——レイ-アン・アーバノウィッチ・マーセリン (Leigh-Anne Urbanowicz Marcellin) “‘Singing Off the Charnel Steps’: Soldiers and Mourners in Emily Dickinson’s Verse” (戦争を内在化していたとするこれまでの論とは異なり、「戦争詩人」ディキンソンが様々な声を用いて戦争を描いていると論じる)、ローレンス・L・バーコヴ (Lawrence L. Berkove) “‘A Slash of Blue!’: An Unrecognized Emily Dickinson War Poem” (新たな戦争詩を提示する)、ルネ・L・バーグランド (Renée L. Bergland) “The Eagle’s Eye: Dickinson’s View of Battle” (戦争中に科学技術が発達し、視界の拡大が詩に与えた影響を考察する)、エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) “‘How News Must Feel When Traveling’: Dickinson and Civil War Media” (戦争中の新聞表現を参考に、兵士の体験を表現することは不可能だという認識を詩において分析する)、タイラー・ホフマン (Tyler Hoffman) “Emily Dickinson and the Limit of War” (“The Name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465) の詩を戦場の詩として解釈する)、デイヴィッド・コーディ (David Cody) “Blood in the Basin: The Civil War in Emily Dickinson’s ‘The name - of it - is ‘Autumn’ -” (コーディと同様に、“The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465) の詩を旅行書の記述を参照しながら戦争詩として読む)、ベンジャミン・フリードランダー (Benjamin Friedlander) “Auctions of the Mind: Emily Dickinson and Abolition” (奴隷制を背景に“Publication - is the Auction” [F 788]を読む)、コールマン・ハッチンソン (Coleman Hutchinson) “‘Eastern Exiles’: Dickinson, Whiggery, and War” (父エドワードの政治家としての立場を考慮しながら、ディキンソンの詩を解釈する)、モーリス・リー (Maurice Lee) “Writing through the War: Melville and Dickinson after the Renaissance” (戦争から距離を置いているとされてきたふたりの詩人メルヴィルとディキンソンがどのように戦争と対峙したかを論じる。ディキンソンの “oblique” の語を科学的な用語として解釈する)。クリスタン・ミラー (Cristanne Miller) “Pondering ‘Liberty’: Emily Dickinson and the Civil War” (ディキンソンの戦争関連の詩で使われている “Liberty” の語を、時代の用法と比較しつつ分析する)、そしてバレット自身の “Addresses to a Divided Nation” (ディキンソンとホイットマンふたりの詩人の声を、戦争を背景に解釈する) も含まれる。加えてバレットとクリスタン・ミラーの南北戦争詩集 (共編) “*Words for the Hour*”: *A New Anthology of American Civil War Poetry* を紹介している。また、オンライン上の資料として、マータ・L・ワーナー (Marta L. Werner)、カティ・チャプル (Katie Chaple)、デイヴ・ヒギンボサム (Dave Higginbotham)、ミッチェル・ニューカム (Michelle Newcome)、そしてレベッカ・ハリソン (Rebecca Harrison) 等による “A Nosegay to Take to Battle: The Civil War Wounding of Emily Dickinson” (授業において、南北戦争を背景にディキンソンを理解するために作られている。詩、書簡、関連の新聞記事など包括的に紹介されている) も挙げている。

との関係から新たなディキンソン像を再提示したことである<sup>10</sup>。また 2001 年にアルフレッド・ハベガー (Alfred Habegger) が新たなディキンソン評伝 *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson* を出版し、その中に “The Poet and the Civil War” の章を設け、戦争とディキンソンを積極的に結び付けている。詩人ディキンソン像が大きく変化した証である<sup>11</sup>——「南北戦争はディキンソン

---

<sup>10</sup> 図らずも 1984 年出版の *Dickinson: The Anxiety of Gender* において、ポラックは戦争に関心がないディキンソン像を強調している。同じ年に出版されたウォルスキー等とは異なり、依然として内向的なディキンソン像である——「彼女が最も芸術家として追い立てられた年はアメリカ南北戦争に偶然重なるが——1775 篇のうち半数近い詩が 1861 年から 1865 年の間に書かれた——彼女には戦争へと急降下する大義、出来事、その結果について何ら言うべきことはない」 (“[T]hrough her most driven years as an artist included and may indeed have coincided with the period of the American Civil War—almost half of her 1,775 poems appear to have been written from 1861 to 1865—she has almost nothing to say about its precipitating causes, its events, or its consequences.” [*The Anxiety of Gender* 18])。ベツィ・アーキラ (Betsy Errkila) は “Emily Dickinson and Class” において、ディキンソン批評で主流であった感傷的な隠遁詩人像を大きく塗り替えたのがフェミニスト批評であるものの、却ってディキンソンを社会から遠ざけたと述べている——「排他的にジェンダー、性心理、父権制を唯一の制圧として注目したことで、フェミニスト批評家たちは逆説的にディキンソンを歴史から遠ざけ、家庭と魂の領域に彼女を再び封じ込めた」 (“[T]hrough an almost exclusive focus on gender, psychosexuality, and patriarchy as the only oppression, feminist critics have also tended paradoxically to take Dickinson out of history, (re)privatizing her in the space of the home and the psyche.” [“Emily Dickinson and Class” 12])。アーキラは特にホイッグ党の政治家であった父エドワードとの関わりから、ディキンソンの階級意識を論じ、奴隷制や社会問題にほとんど関心がないとしている。ただしアーキラは “Color - Caste - Denomination -” (F 836) の詩の引用に際しても戦争について何ら言及していない。またベンジャミン・フリードランダーは 論文 “Auctions of the Mind: Emily Dickinson and Abolition” においてディキンソンと出版の問題を取り上げている。過激なことを嫌うディキンソンが、白人どうしが戦う羽目になることを厭い、反奴隷制運動を疑問視するものとして考察する。南北戦争に対するディキンソンの消極的な姿勢を次のように説明づけている——「彼女の最も深遠な反応は実際、明白な反応の欠如であり、『否定的な言葉で論議すること』を要求する戦争の話題への沈黙である」 (“Her most profound response is in fact the palpable absence of response, a silence on the topic of war which requires . . . ‘a discourse in negative terms’.” [“Auctions of the Mind” 21])。)

<sup>11</sup> ハベガーによるディキンソン評伝のタイトルは “My Wars are laid away in Books -” (F 1579) の冒頭行から成る。フランクリン版では 1882 年頃の作とされる。人生の困難な

に赤裸々な象徴的な劇場を提示し、そこには究極的な恐怖と歓喜が見られ、日常的生活は忘れられ、全てを失う危機があると共に、失うものは何もないかもしれない。戦争は彼女自身の窮境を分析するための力強い手段を与えた」(“The Civil War offered Dickinson a stark symbolic theater, a place of ultimate terror and exultation in which mundane life was forgotten and there was both everything and nothing to lose. War gave her a powerful vehicle with which to parse her own extremity.” [Habegger 404])。

20世紀に書かれたいくつもの評伝と、21世紀のハベガーによる前掲の評伝との決定的な違いは、南北戦争の捉え方にある。それまではウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の“A Rose for Emily”の主人公エミリの如く、時代の変化を超越した「隠遁詩人」としての存在が主流であった<sup>12</sup>。21世紀におけるディキンソン像の変化において、ウォルスキー等に遡る、先行研究が果たした功績は大きい<sup>13</sup>。

一方で、南北戦争とディキンソンを結びつける研究への批判もあり、クリストファー・ベンフィ(Christopher Benfey)の“Emily Dickinson and the American South”もそのひとつである。「ディキンソンは周囲の戦争熱に影響を受けなかった」(“Dickinson was immune to the war ever around her as well.” [Benfey 47])と主張し、ベンフィはディキンソンの詩に「戦争」を読み込む解釈に疑問を呈する——「研究者たちは南北戦争への言及を探して、ディキンソンの詩や散文を徹底的に調査してきた。この時期は溢れ出るように多くの詩が書かれた時と一致する。だがこの頃の彼女の詩的靈感は修辭的表現を受け入れるよりは抵抗してきたように見受けられる」(“Scholars have combed her verse and prose for mention of the Civil War, which coincided with her greatest outpouring of verse. But her inspiration

---

局面としての「戦い」を経てきた語り手が、最後の(死との)「戦い」を仄めかす詩として解釈できる。

<sup>12</sup> この問題については註10で先述したアーキラが指摘するように、フェミニズム批評によってディキンソンが歴史的考察からむしろ遠ざけられてきたことと関わる。フェミニズム批評の例としてアーキラは主に次の批評家たち——アドリエンヌ・リッチ (Adrienne Rich), サンドラ・ギルバート (Sandra Gilbert), ジョアン・フェイト・ディール (Joanne Feit Diehl), バーバラ・モスバーグ (Barbara Mossberg), ヴィヴィアン・ポラック (Vivian Pollak), ウェンディ・マーティン (Wendy Martin)——を挙げている(“Emily Dickinson and Class” 1)。

<sup>13</sup> ハベガーはウォルスキーの *Emily Dickinson: A Voice of War* の先駆的な面を認めつつ、内容に不満も述べている——「[ウォルスキーの論は]先駆的立場にあるがディキンソンと南北戦争の扱いは希薄な状況説明をしているに過ぎない」(“[A Voice of War] stands as the pioneering but thinly contextualized treatment of ED and the Civil War.” [714n.400])。

during those years seems to have been more resistance to high rhetoric than acceptance of it.” [47])<sup>14</sup>。ベンフィは、戦争自体よりもむしろ「戦争中の退化した言葉遣い」 (“the degraded verbiage of the Civil War” [48]) にディキンソンが批判的だったと述べている。だが、彼自身も、南部側に同情的な詩人像を描くことで、南北戦争研究の一例を提示しているのである。

### 第3節 先行研究 (2007年以降)

2008年に出版された、マーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) とメアリー・ロップェルフオルツ (Mary Loeffelholz) の共編 *A Companion to Emily Dickinson* には “The Civil War – Historical and Political Contexts” の項目があり、3つの論考が収録されている。戦争中の技術革新によって、上空から撮った写真が読者に与えた影響を論じたルネ・L・バーグランド (Renée L. Bergland) の “‘The Eagle’s Eye: Dickinson’s View of Battle’”、戦場の報道と詩の表現との関わりを論じたエライザ・リチャーズ (Eliza Richards) の “‘How News Must Feel When Traveling’: Dickinson and Civil War Media” そしてディキンソンの詩を政治動向と並べて丹念に読み込んだバレットの “‘Drums off the Phantom Battlements’: Dickinson’s War Poems in Discursive Context” である。これらの論考は、戦争を意識しながら詩を分析する新たな可能性を提示している。

ここで先行研究についてのリチャーズの指摘が参考になる。それまでは、詩に現れる戦争を、ディキンソンの内面の表象として解釈するのが主流であったが、レイ・アン・アーバノウィッチ・マーセリン (Leigh-Ann Urbanowicz Marcellin) の論で転換期を迎える。リチャーズは、それ以前の研究の一例として、ダニエル・アーロン (Daniel Aaron) を取り上げている。4頁の補遺で、軍事的メタファーを論じているが、リチャーズはその限界を批判する——「ダニエル・アーロンは、ディキンソンの『個人的な軍事行動』を『補遺』に追いやっている。彼 [アーロン] が述べるのは『国家的な争いがディキンソンの個人的な苦しみの時期と一致し、軍事的な類比やイメージが彼女の心と気持ちの戦争の描写に当然なが

---

<sup>14</sup> ベンフィはディキンソンに南部に同情的な面があったと解釈する——「彼女はメルヴィルやホーソン——南部に対して親愛なる作家たち——に加わり、悲劇的な諦めの態度をとる」 (“She joins Melville and Hawthorne – writers dear to the South – in assuming an attitude of tragic resignation.” [48])。そして「隠遁者」ディキンソンを解釈するふたつの流れ——エイドリアン・リッチなどフェミニズム批評はニュー・イングランドの父権制への反抗としてディキンソンの詩作を捉え、アレン・テートなど南部農本主義に基づく南部詩人たちは、金ぴか時代の産業主義への反抗としてディキンソンの詩を位置付ける——をまとめ、いかに南部詩人たちがディキンソンを評価してきたかを論じている。

ら入ってきた』ことである」(“Daniel Aaron relegates what he calls Dickinson’s ‘private campaign’ to a ‘supplement’ in which he says that ‘since the national conflict coincided with her private anguish, martial analogies and imagery naturally entered into her depictions of the wars of the Heart and Mind’.” [“How News Must Feel” 163])。また、ウォルスキーについては、「閉鎖的な性質が薄めのディキンズン」(“a less insular Dickinson” [163]) を論じてはいるが、依然としてディキンズンの詩を個人的感情の主張として捉える点を、批判している。「ディキンズンの心象」として戦争を考察する傾向がそれまで主流であったのが、マーセリンに至り、それとは異なる画期的な論が登場したことを分岐点とする。マーセリン以降、“private”な詩人を論じる解釈から、ディキンズンを“public”な詩人として論じる解釈へと批評の動向が変化する (164)。

その後も南北戦争との関わりの研究が次々と発表されている。同時代の作家や詩人たちと結びつけて論じる方法と、戦争との関係で詩を読み直す方法が主となる。2010年以降の論考を発表順に並べると、ジョン・ショップトロー(John Shoptaw) が“Dickinson’s Civil War Poetics: From the Enrollment Act to the Lincoln Assassination” (2010) において男性兵士とは異なる、内なる戦いの詩に注目、ミシェル・コーラー (Michelle Kohler) は “Dickinson and the Poetics of Revolution” (2010) で、アメリカの歴史観を象徴する語 “revolution” を、南北戦争を背景にした詩において分析<sup>15</sup>、ウォルスキーは新たな著書 *Poetry and Public Discourse in Nineteenth-Century* (2010)における“Emily Dickinson and American Identity”の章で、女性詩人が負う“modesty”と“private”の要素が南北戦争中いかに“public”な要素に結びついたかを論じている。またランダル・フラー (Randall Fuller) は *From Battlefields Rising: How the Civil War Transformed American Literature* (2011)で、ヒギンズン、ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson)、ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)、ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne) 等、同時代の男性作家たちの動向と絡めている。クリスタン・ミラーは *Reading in Time: Emily Dickinson in the Nineteenth Century* (2012) の“Reading and Writing the Civil War”の章において、戦争に関わりがあるとされる詩を再読し、ディキンズンが同時代のナラティブやレトリックを用いながらも、時代を超えた未来の読者を念頭に書いたと解釈する。

さらにバレットはこれまでの南北戦争詩に関する論考を 1冊にまとめ、*To Fight Aloud Is Very Brave: American Poetry and the Civil War* (2012) を発表した。バレットは、アメリカにおける詩の役目を、イデオロギーを発展させ、拡散させ

---

<sup>15</sup> クリスタン・ミラーが“Pondering ‘Liberty’: Emily Dickinson and the Civil War” において “liberty”を分析した論を意識したと、コーラー自身が言及している。

ることと位置付け、戦中・戦後に、家族や友人など近しい間柄の人々に対して、詩人がどのようにメッセージを送ったか、同時にそれまでの「家族」「共同体」「国家」が戦争によって揺らぐとき、詩はどう反応したかという問題に迫る。「抒情詩」(“lyric”)の要素を主眼にバレットは戦争詩を読み、ディキンソンとホイットマンそれぞれの一人称の語り手の違いに論及する。他の章でも2人または3人ずつ詩人たちを対照させて論じており、ジュリア・ウォード・ハウ(Julia Ward Howe)とフランシス・ハーパー(Frances Harper)、ヘンリー・ティムロッド(Henry Timrod)とサラ・パイアット(Sarah Piatt)とジョージ・ホートン(George Moses Horton)、そして南部兵士とハーマン・メルヴィル(Herman Melville)を組み合わせている<sup>16</sup>。

リチャーズ編 *Emily Dickinson in the Context* (2013) に収録された “Slavery and the Civil War” でバレットは、ディキンソンが戦時中の報道に熱心に目を通していたことを強調し、ディキンソンが詩の出版を差し控え、北部・南部の党派的な立場をとることなく、様々な視点の詩を書いていると解説している。ポール・クラムブリイ(Paul Crumbley) 及びエレノア・エルサン・ヘギンボサム(Eleanor Elson Heginbotham) 編纂 *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities* (2014) に収録されたポーラ・ベネット(Paula Bennett) の “‘Looking at Death, is Dying’: Fascicle 16 in a Civil War Context” では、Fascicle 16 を、戦争を背景に読み、この詩群に共通する語りを分析し、死者、非戦闘員の観察者、兵士など複数の視点を束ねたものと解釈する。ミッシェル・コーラーの “The Ode Unfamiliar: Dickinson, Keats, and the (Battle) fields Autumn” では、これまで何度も論じられてきた “The name - of it - is ‘Autumn’”(F 465) の詩とキーツの秋の詩 “To Autumn” の比較を、戦争の場面で再考している。ウェンディ・マーティン(Wendy Martin) 編 *All Things Dickinson: An Encyclopedia of Emily Dickinson's World* (2014) では、“The Civil War”, そして “The Civil War and Dickinson” の項目が設置され、20頁ほどが充てられている。南北戦争との関わりはもはや事典類では必須項目である。こうした数々の論考の締め括りとして相応しいのが、コーディ・マーズ (Cody Marrs) による一冊 *Nineteenth-Century American Literature and the Long Civil War* (2015) である。マーズは、アメリカ文学を、「戦争前」 (“ante-bellum”) と「戦争後」 (“post-bellum”) に分断してきた文学史観を批判し、代わりに “Trans bellum” 史観を提案し、戦争前から戦争時を経て戦争後に至るまで、断絶のない文学の営みを多面的に分析しながら、ホイットマン、メルヴィル、フレデリック・ダ

---

<sup>16</sup> 2015年アマストにおいて開催された Emily Dickinson International Society の Annual Meeting において、バレットから、読まれていない、埋もれた、面白い詩を発掘しているとの話を聞いた。有名な詩人の他に、兵士たちの詩も視野に入れた研究は、こうした発掘作業があってこそ成り立つと推察する。

グラス(Frederick Douglas)、ディキンソンを再考察している。第4章において、ディキンソンの詩を連続的な時間軸と複数の周期(“multiperiodicity”)の観点から論じている。

1984年に発表されたウォルスキーの画期的な論考から30年を経て、2010年以降、「隠遁詩人」像を塗り替え、歴史的コンテクストを背景にした論考が次々と発表されてきた。その際、同時代の政治や科学、経済など様々な角度から詩を再読する論が目立つ。こうした研究動向は、文学全体の批評傾向とも連動し、ニュークリティシズム的批評、伝記批評、心理分析的アプローチ、フェミニズム批評、文化的背景の考察、草稿研究などを経て、新歴史主義的手法、さらにはそれ以前の方法を新たに組み合わせた方法などが見られる。

#### 第4節 21世紀に南北戦争とディキンソンを論じる意義

ディキンソン研究において南北戦争が次々と、クローズアップされてきたのは何故だろうか。21世紀幕開けの年、2001年9月11日に同時多発テロがアメリカで起こり、世界各地でテロや紛争が度重なり、途方もなく争いが増殖し、現在もなお、憎しみの連鎖が姿を変えながら新たな争いを生んでいる。先述の南北戦争詩集のアンソロジーを編集したバレットとミラーに、昨今の南北戦争を背景にした研究傾向は2001年のテロと関わりがあると思うか、と質問したところ、両氏とも、直接とは言えないが間接的には関わりがあるだろう、と認めた<sup>17</sup>。また2011年から15年は南北戦争150周年とも重なり南北戦争と結びつけて考察する傾向を助長したと考えられる<sup>18</sup>。

日本においても2011年に東日本大震災、それに伴う原発事故、2016年の熊本地震、火山の噴火など、自然災害と人災が次々と起こっている。第二次世界大戦終結70周年(2015年)を経て、「戦争と文学」「災害と文学」を形にする動きが数多く見られる<sup>19</sup>。ディキンソンの言葉は、150年の時を経て、不穏な時代を

---

<sup>17</sup> バレットは著書 *To Fight Aloud Is Very Brave* の最終章のエピローグを “Civil War Poetry in the Twentieth and Twenty-First Centuries” と題して、2011年9月11日の犠牲者追悼場面から書き出している(281)。

<sup>18</sup> 南北戦争百周年にロバート・ペン・ウォーレン (Robert Penn Warren) の *The Legacy of the Civil War* (1961) およびエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) の *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War* (1962) が出版されている。

<sup>19</sup> 戦争を主題にした顕著な例として2012年発刊、集英社「コレクション戦争×文学」全20巻(+別巻)がある。日清・日露戦争から9・11以降までを射程に入れたコレクションのキャッチフレーズは、「単なる『過去』ではない。遠い国の『ニュース』でも

生きる私たちに、直截に響く<sup>20</sup>。

さて、ロバート・ペン・ウォーレン(Robert Penn Warren) は *Selected Poems of Herman Melville* の序章で「非常に奥深い方法で南北戦争がメルヴィルを詩人にしたと言える」(“In a very profound way it can be said that the Civil War made Melville a poet.” [11]) と述べている。メルヴィルは、戦争終結翌年(1866年)に戦争詩歌集 *Battle-Pieces and Aspects of the War: Civil War Poems* を出版以降、詩作に向かい続けた。この言葉はディキンソンにも当てはまるのではないか。ディキンソンが次々と詩を書いた時期と南北戦争とが偶然重なったのではなく、南北戦争の時代がディキンソンを詩人にしたという発想へと私たちを導く。仮に南北戦争が起きなければ、彼女の詩はかなり異なっていたに違いない。詩人を自覚し始めた30歳代前半に南北戦争を経験したからこそ、「詩人ディキンソン」が存在することになった——この見地に立ち、主に戦争前の1858年頃から戦争の期間に作られた詩を中心に考察する<sup>21</sup>。この時期にディキンソンは珠玉の作品を次々と生み出し、多い時には一日に一篇を書いている。ヘレン・ヴェンドラー(Helen Vendler) が慧眼を以って選び、解説を付けて、*Dickinson: Selected Poems*

---

ない。戦争は『文学』となって、新しい世代の中で生き続ける——。」であり、新たな視点で現代を読み直す姿勢を示す。東日本大震災及び原発事故を扱った文学作品としては和合亮一『詩の礫』(2011年6月)が早い例である。以降、『それでも三月は、また』(2012年2月、17人の日本・アメリカ・イギリスの作家たちの寄稿によるアンソロジー)など、多くの詩人や作家、俳人、歌人による作品出版が続く。

<sup>20</sup> 朝比奈緑氏は、2011年3月11日の東日本大震災の後、『朝日新聞』(3月19日)のコラム「天声人語」に掲載されたディキンソンの詩“Unto a broken heart”(F 1745)について紹介している。ディキンソンの詩が日本の読者にどのように読まれたかを伝えている。「傷ついた心のもとへと」を参照。

<sup>21</sup> ジョン・ショップトー(John Shoptaw) もまた“Dickinson’s Civil War Poetics: from the Enrollment Act to the Lincoln Assassination”において、戦争が詩人ディキンソンを成したとする設定で論を進め、冒頭で次のように述べている——「私の主たる目標は道徳あるいは政治思想家ディキンソンではなく詩人としてのディキンソンに注意を促すことである。彼女は不朽の詩人たちの列に加わることを目指し、それを望んでいたからこそ、戦争は彼女に特別な難題を提起した」(“[M]y primary goal is to call attention not to Dickinson the moral or political thinker, but to Dickinson the poet. It is because she aimed and hoped to join the ranks of the immortal poets that the war posed the special problem it did for her.” [2])。しかしながら、ショップトーが論文で最終的に提示するのは次のような結びである、「ディキンソンは戦争を無視することもまた戦争を表現する方向へと彼女の詩的活力を向けることもできなかった。戦争[の主題]と斜めに取り組むことによってのみディキンソンは名を揚げる事ができた」(“Dickinson could neither ignore the war nor direct all her poetic energies toward its representation. Only by engaging the war obliquely could Dickinson make her name.” [17])。結局は従来 of 詩人像に従った結論で終わっている。



*and Commentaries* に収録したのもこの時期の作がほとんどであり、150 篇中のうち 135 篇が該当する。だが、本論で扱う詩はヴェンドラーの選から漏れた詩ばかりである。ヴェンドラー選の詩群が、詩人ディキンソンへと通じる、いわば本街道あるならば、本論で考察する詩群は、脇街道あたる。目指すところは同じであるが、本街道とは異なる詩群を辿りながら、別の角度からディキンソンの詩を取り上げることになる。

この時期に焦点を絞り、ディキンソンの詩作を考えるうえで大きなふたつの疑問がある。ひとつは、先述した、ディキンソンの「戦争詩」について私自身が抱いた違和感である。つまりは、ディキンソンの詩が北軍の戦争協力の新聞に掲載された紙面において、他の詩や記事から浮いた印象を与えることである。そしてもうひとつは、なぜ、ディキンソンは戦争と関係のある詩を送らずに手元に置いていたのかという、回覧をめぐる問題である。ホイットマンやメルヴィルは同時代の読者に向けて「戦争詩」を自ら出版した。一方、ディキンソンが、友人や親戚に回覧した詩が、他人を介して新聞・雑誌、アンソロジーに掲載されながら、戦争に関わると思われる詩の大部分が友人や親戚に送られることがなかった。なぜ、送ることを差し控えたのか、という問題である。

この事実に関しては、クリスタン・ミラー編 *Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them* (2016) の編集方針に反映されている。ミラーは「詩作するディキンソン」(“Dickinson at work on the poems” [EDIS Bulletin 14]) を念頭に詩集を構成しており、詩の回覧の情報も掲載している<sup>22</sup>。ディキンソンの詩を読むうえで、回覧の事実の重要性を認めた意義は大きい。回覧の有無については、ミラー、バレット、マーズがすでに言及している<sup>23</sup>。特にミラーは、送られなかった理由

---

<sup>22</sup> ミラーは新詩集出版についてのインタビューで、詩集編纂の意義のひとつについてこう答えている——「詩が回覧されたかどうか、誰に送られたかについての情報を提供する唯一のリーディングエディションです」(“It is the only reading edition that gives information about whether a poem was circulated, and to whom.” [The Emily Dickinson International Society Bulletin 14])。

<sup>23</sup> フェイス・バレットは “‘Drums off the Phantom Battlements’: Dickinson’s War Poems in Discursive Context” (2008) において “It dont sound so terrible - quite - as it did” (F 384) を回覧した記録がないこと(112)、“Over and over, like a Tune -” (F 406) も回覧した証拠はないが、仮に回覧していた場合を推測している——「スターズ家との家族ぐるみの交際と共同体の深い喪失感というコテクスト故に、スターズが聖戦におけるキリスト教的殉教の死を遂げたとする見方を裏書きする詩として[回覧された]読者は解釈するだろう」(“[T]he context of her family friendship with the Steans family and the community’s deep sense of loss would have enabled her readers to interpret this poem as endorsement of the view that Steans died a Christian martyr in a holy war.” [114])。また、クリスタン・ミラーは *Reading in Time: Emily Dickinson in the Nineteenth Century* の第6章 “Reading and Writing the Civil War” の冒頭と結びで、ディキンソンが戦争と関連した詩を回覧していない事実に触れ、その理由づけ提示している。マーズは、戦争に関わる詩とは限定せず、後期に書かれた詩と

も考察している (*Reading* 174-175)。本論では送られなかった詩だけではなく、送られた詩も一緒に取り上げることによって、これまで見過ごされてきた事実について論究する。

回覧の問題に加え、ディキンソンの詩の「読者」の存在もまた重要である。ディキンソンの詩の「読者」を考える際、その性質そのものについてさほど意識されずにきた。マーティン・オーゼック (Martin Orzeck) とロバート・ワイスバック (Robert Weisbuch) 共編 *Dickinson and Audience* (1996) では、具体的な「読者」との文通を各章ごとに扱っている。例えば、幼友達アバイア・ルート (Abiah Root)、謎の男性 (“Master”)、エリザベス・チェーピン・ホランド (Elizabeth Chapin Holland)、ヘレン・ハント・ジャクソン (Helen Hunt Jackson) 等が、ディキンソンの交友関係における「読者」とされている。ディキンソンを “private” な詩人として捉え、特定の交友関係のなかで詩を読む試みである<sup>24</sup>。唯一、マーサ・ネル・スミスが “A Hazzard of a Letter’s Fortunes: Epistolary and the Technology of Audience in Emily Dickinson’s Correspondence” において、未知の読者の可能性を示唆するも、残念ながら具体的な考察はない (239-256)。本論でこの「読者」の存在についても取り上げる。

回覧と読者の問題は、同時代と微妙な関係をとった詩人を考えるうえで重要であり、21世紀のディキンソン像とも関わる。初めてヒギンソンに手紙を送った1862年4月から150年を経て、2017年の早春1月20日から5月28日の間、“I’m Nobody! Who are you? The Life and Poetry of Emily Dickinson” がニューヨークのモーガン・ライブラリィで開催された。展覧会のために作成されたカタログのタイトルは *The Networked Recluse: The Connected World of Emily Dickinson* である。このタイトルは、21世紀におけるディキンソン像を的確に示している。新聞や雑誌、人々との文通や会話など、あらゆる手段を駆使して時代と結びついていたディキンソンは、同時に、自分自身を守る「隠遁」を続けた。社会との繋がりや社会からの隔絶という微妙な均衡を維持しながら詩作したディキンソン像である。同時代に発表された他の戦争詩との隔たり、詩の回覧方法、読者の捉え方は、ディキンソンが戦争をどのように見据え、戦争の時代に詩人としてどう対峙しようとしたか、という問題と密接に絡む。

## 第5節 本論の構成

最初のディキンソン詩集は1890年にヒギンソンとメイベル・ルーミス・トッド (Mable Loomis Todd) の編集によって出版された。ディキンソン死後4年を経

---

いう括りかたで言及している。本論では、詩によって回覧のされ方に例外があるため、個々の詩を具体的に分析しながらこの問題を考察する。

<sup>24</sup> ただしドローレス・ダイアー・ルーカス (Dolores Dyer Lucas) は身近の「聴衆」と共に未知の読者 (“the World”) を想定している (*Emily Dickinson and Riddle* 106)。

た1890年であり、ディキンソン自身の意向がどれほど反映された編集であるかはわからない<sup>25</sup>。「戦争詩集」を出版した同時代人ホイットマンやメルヴィルとは異なり、ディキンソン自身が、どのような読者に向けて、「戦争詩」を書いたかは定かではない<sup>26</sup>。そもそも「戦争詩」として意識したかさえもわからない。この問題に関してこれまでほとんど考慮されることなく、ディキンソンの「戦争詩」が論じられてきた。私自身、このような方法に違和感を覚えるため、本論では「戦争詩」ではなく、「戦いの詩」と呼び、以下の3つの観点から扱う。

1. 戦いに関連した語やイメージが用いられた詩
2. 解釈の仕方によって南北戦争と関係づけて解釈することが可能な詩
3. ディキンソンが南北戦争に具体的に触れた詩もしくは実際に戦争に触発されて書いた詩

「戦いの詩」の射程を以上のように定めたいうえで、詩人ディキンソンと南北戦争との関わりについて、以下の手順で論を進めていく。

第1章「ディキンソンから『大佐』ヒギンソンへ——南北戦争中の手紙を読む」では、大佐T・W・ヒギンソンとの文通を通して、戦争に対するディキンソンの姿勢を考察する。戦争の最中1862年4月に始まったふたりの文通は、詩人ディキンソンを考えるうえで不可欠である。ヒギンソンに対しては詩人としての姿勢で手紙を書いているからである。「文芸批評家」ヒギンソンとの繋がりを考察する批評がこれまで多かったが、本章では、軍人ヒギンソンに注目する。1862年4月前後のアマストの状況と、黒人連隊を率いた「軍人」ヒギンソンの言動を確認しながら、ヒギンソンのエッセイ「若き投稿者への手紙」および、ディキンソンが送った詩を通して、ディキンソンの戦争観を表すとされる言葉

---

<sup>25</sup> トッドとヒギンソンの編集については、トッドの娘ミリセント・トッド・ビンガム (Millicent Todd Bingham) 著 *Ancestors' Brocades: The Literary Debut of Emily Dickinson* を参照。その後、様々な編集者によるディキンソン詩集が編集・出版されてきたが、2016年にクリスタン・ミラー編集 *Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them* が出版された。ディキンソンがどのように出版を想定していたのか、という問題意識を反映させたこの版でさえも、構成上の課題が依然としてある。

<sup>26</sup> ベッツィ・アーキラ (Betsy Erkkila) は *Whitman: The Political Poet* (1988)において「アメリカで最も明白な政治詩人のひとり」(“one of America's most overtly political poets”)として詩人ホイットマンの積極的な政治との関わりを論じている。

「戦争は私には斜めの場所に思えます」の意味を考察する<sup>27</sup>。

第2章「定期刊行物の戦争詩とディキンソン」では、北軍衛生委員会の日刊紙『ドラム・ビート』(*Drum Beat*)にディキンソンの詩が掲載された事実を中心に考察する。南北戦争時はディキンソンの詩作が最も充実した時期でもあり、この時に、ディキンソンの詩が新聞に載り、資金集めに貢献することで、戦争に間接的ながら協力していたことがわかる。しかし掲載された他の詩や作品と比較すると、ディキンソンの詩は、戦争とは無関係の印象を与える。戦争の時代とディキンソンの繋がり、そして、隔たりを考察するために、戦争に言及した手紙と、その頃に書かれた詩、そして掲載された詩とを取り上げ、表現の使い分けを分析する。さらに同時代の女性詩人・作家と比較し、ジュリア・ウォード・ハウの戦争詩“*Battle Hymn of the Republic*”および、従軍看護師として戦争を体験したルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott)の*Hospital Sketches*を取り上げる。戦時における対象との距離の取り方が、それぞれの女性作家・詩人の表現にどう反映されているかを見る。特に知人の戦死について、ディキンソンが書いた手紙と詩に見られる表現の相違点を見ていく。

先述したように、本研究のもうひとつの動機として、ディキンソンはなぜ戦争に関わる詩を友人や親類に送らずに手許に残したのかという疑問がある。この事実についてはハベガーやクリスタン・ミラー、バレット、そして近年ではコーディ・マーズが言及していることも前述した<sup>28</sup>。本稿ではさらに進めて、送

---

<sup>27</sup> ブレンダ・ワインナップル (Brenda Wineapple) は *White Heat: The Friendship of Emily Dickinson & Thomas Wentworth Higginson* (2008) でふたりの親交関係をまとめている。表紙に用いられたヒギンソンの写真が軍服姿であり、ディキンソンとの関わりが生じる南北戦争中にも注目し、軍人ディキンソンの内面を捉えようとしている。ただし、本書全体に引用されている詩が、伝記的な記述とどれほど関連があるのか不可解な選択が目立ち、詩の選び方では大いに疑問の余地が残る。また、ベンジャミン・リース (Benjamin Lease) も *Emily Dickinson's Readings of Men and Books: Sacred Soundings* (1990)において、軍人としてのヒギンソンとディキンソンの交友関係について取り上げている。牧師のウィリアム・スコット・ワズワース (William Scott Wadsworth)、ヒギンソン、イギリスの讃美歌作者アイザック・ワッツ (Isaac Watts) など、男性の知人、または男性作家の作品からディキンソンへの影響関係を論じている。朝比奈緑氏は、ナチュラリストとしてのヒギンソンとディキンソンのやりとりを、書簡において分析している。“‘Fascination’s is absolute of Clime’: Reading Dickinson’s Correspondence with Higginson as Naturalist”を参照。

<sup>28</sup> コーディ・マーズは、戦争に関わる詩ではなく、「後半生に作られた詩」(“her later poems” [150])という括り方をしている。

った詩と送らなかった詩のふたつの詩群を一緒に並べ、送らないことによって、詩人にとって何が可能となるのか、という問題を考える<sup>29</sup>。特に第3章と第4章が本論文の中心部分となる。

まず、第3章「ディキンソンと『読者』——南北戦争時に『送られた』詩」においては、戦争中における詩の役割を概観したうえで、ディキンソンの詩と読者との関わりを考える。戦争中は、ディキンソンの詩が何度も新聞に掲載された時期であるが、これらの詩のほとんどは、戦争前に書かれている。戦争とは無関係に書かれながら、北軍系新聞に何度も載った詩を、戦争と結びつけて読み直す。

続けて、第4章「南北戦争時に『送られなかった』詩」では、ディキンソンの手許に置かれた詩を中心に考察する。戦争に直接関係して書かれた詩、または戦争に関わると解釈できる詩のほとんどが送られていない。これらの詩を同じ時期に書かれた手紙と比較しながら分析する。どちらも、知人の戦死を機に書かれ、類似した表現を含みながらも、手紙は送られ、詩は手許に残された。他に、手許に置かれた詩として、戦死した息子と母を扱った詩、戦場の詩もある。これらを併せて読みながら、送った詩と送られなかった詩のふたつの詩群があることが、どのような意味を持つのかを考える。

これまでの先行研究について疑問に思えるのは、戦争のどの段階で書かれた詩であるかがさほど考慮されていないことである。様々な選集において、ディキンソンの詩が清書された時期が戦争前・戦争中、戦後に関わりなく並べられている。何をもち「戦争詩」なのか、断りがほとんどない。例えばある選集では1858年に清書されている作品が1861年以降の作品と一緒に断りなく収められている。もちろん、1858年は戦争前ではあるが、不穏な空気が漂っていた

---

<sup>29</sup> クリスタン・ミラーは *Reading in Time: Emily Dickinson in the Nineteenth Century* の “Reading and Writing the Civil War” の章において、ディキンソンの “war poems” の扱いについてこう述べている——「注目に値するのは、ディキンソンは明らかな戦争詩はどれも、また政治問題に間接的にでも接する詩もそのほとんどは誰にも回覧していないことである。おそらく彼女はそのような詩を共有したいと思わなかったのだろう。兵士が衝撃を受けたり、苦しんだり、瀕死の状態に場面を想像するのは不適當であり、または主題自体が非常に難しいものであったためだろう」 (“Notably, Dickinson circulates none of her explicit war poems and very few of those intersecting with its issues indirectly. Perhaps she did not want to share such poems because imagining the situational perspective of a soldier in shock or pain or dying seemed unseemly, or because the subject matter itself was so difficult.” [147])。私自身、「戦いの詩」の回覧についてはミラーと同じ観点でディキンソンの詩の扱い方を考察する。ただし、手紙の宛先によっては詩を部分的に送っている場合もあり、この操作の仕方からも、受け手をかなり意識していたことは十分に推測できる。このような例外的な面も考察に加えながら進める。

のは確かである。書かれた時代に対する目配りも不可欠である<sup>30</sup>。

この問題と関わるのが、シーラ・ウォルスキーやダニエル・アーロン等による指摘である。彼等によれば、ディキンソンが戦いの言葉を用いるようになったのは、南北戦争がきっかけであったことになる。ところが実際は、戦争前の1858年から1860年の時期に、すでにディキンソンは戦いの用語を使っている。この事実注目し、第5章「戦争前の『戦いの詩』」では、ディキンソンが戦前に書いた「戦いの詩」を取り上げる。セント＝アーマンドは、ピューリタニズムの伝統において戦闘の用語が使われてきたことを指摘している。この指摘を踏まえ、同じアマスト出身で幼馴染の詩人・小説家ヘレン・ハント・ジャクソンの詩と比較しながら、戦いにまつわるディキンソンの詩の展開方法と表現を考察する。戦争前に、ディキンソンが詩人としての意識を持ち始めていたことも考慮しつつ、戦争の用語を使って書かれた詩を解釈する。

第6章「声なき者たちの声——ディキンソンと『殉教者たち』」において、歴史の見取り図にディキンソンを置いて論じる。ディキンソンとジョン・ブラウン (John Brown) を結び付けた論考としては、デイヴィッド・S・レノルズ (David S. Reynolds) のブラウン評伝 *John Brown, Abolitionist: The Man Who Killed Slavery, Sparked the Civil War, and Seeded Civil Rights* が先駆を成す。レノルズは、ディキンソンの詩人としてのラディカルな気質をブラウンに結びつけている。レノルズの示唆を受け、本稿では、戦争中の詩で多く使われた語「殉教者」を、ジョン・ブラウンを意識しながら考察する。

最終章、第7章「言葉の軌跡」では、最終的にディキンソンの詩に戦争の影響をどのように認めることが可能かを考察する。1858年頃からディキンソンは草稿集を作成し始めたが、戦争の最中1864年にその作業を止めている。クリスタン・ミラーの分析に拠れば、生涯で最も詩を多く書いた時期に、詩の回覧の割合が激減している。この事実とこの頃に書かれた詩を照合させることによって、戦争の時代にディキンソンが詩の形に捉えようとした模索を考察する。

以上の構成にしたがって、南北戦争直前から戦争中にディキンソンが書いた詩を取り上げて、戦争の時代を背景に読み解く。そのうえで詩人ディキンソンの戦争に対する「斜めの」(“oblique”) 姿勢が、いかに積極的な探求を意味しているかを最終的に明らかにすることが本論の目的である。

---

<sup>30</sup> 2015年8月にアマストで開催された年次大会において、戦争詩歌集 “*Words for the Hour*”: *A New Anthology of American Civil War Poetry* を編集したフェイス・バレットにこの点について質問したところ、戦前とはいえ、この時期には南北の軋轢が厳しくなり、戦争の気配があったために収録したとの返答を得た。

## 第1章

### ディキンソンから「大佐」ヒギンソンへ

#### ——南北戦争中の手紙を読む

War feels to me an oblique place - (L 280)

## 序節

生涯の詩作の半数以上が集中する南北戦争中、エミリ・ディキンソンは詩人として戦争にどう対峙したのか。ディキンソン自身の言葉を踏まえながらもこの問題を取り上げたい。その際、トマス・ウェントワース・ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson) との文通は大きな足掛かりを与えてくれる。それは、従軍中のヒギンソンに宛てた手紙の中で直接戦争に言及しているからである。また、詩作が充実するこの時期、マリエッタ・メスマー (Marietta Messmer) が注目するように、家族や親類に宛てた手紙とは異なり、ヒギンソンに対しては「ディキンソンは自分のアイデンティティを詩人や作家のそれに努めて範囲を定めており、社会文化的なジェンダーの帰属からは取り外している」 (“Dickinson endeavors to delimit her identity to that of poet and writer, stripping it of any sociocultural gender ascriptions.” [116])。

ヒギンソンは良き文通相手であると同時に、ディキンソンの詩を評価しない批評家として描かれてきた。トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) のディキンソン評伝 *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (1955) 第5章のタイトル「最も安全な友人——放棄」 (“My Safest Friend: Renunciation”) はまさにそれを反映している。リチャード・シューアル (Richard Sewall) もまたディキンソン評伝 *The Life of Emily Dickinson* (1974) において、ヒギンソンの真摯な友情に触れながらも「文学的な教えをヒギンソンに頼ったのはディキンソンの判断の過ちであった」 (“[O]ne of Emily Dickinson’s failures of judgment was to turn to Higginson for literary advice.” [575]) と述べている。どちらの評伝もディキンソンの詩を理解しない文芸批評家ヒギンソンが描かれている。

だが、21世紀に入り、ブレンダ・ワイナップル (Brenda Wineapple) は *White Heat: The Friendship of Emily Dickinson and Thomas Wentworth Higginson* (2008) の中でふたりの友情の記録をまとめ、ヒギンソンを再評価している。ディキンソンがヒギンソンを選んだのは、「植物や蝶、書物に精通し、信じるものの為なら全てを賭ける、勇敢な因習打破の感性を彼女は信頼することができた」 (“[A] sensibility she could trust—that of a brave iconoclast conversant with botany, butterflies, and books and willing to risk everything for what he believed.” [4]) 為であると述べ、

ディキンソンを「詩人以外の何者でない存在として」 (“not as anything but a poet” [114]) ヒギンソン宛ての手紙に見出す。先述したメスマーの見解と同様である。その意味で、ヒギンソン宛ての手紙はディキンソンの書簡のなかでも特異な位置を占める。

## 第1節 文通の始まり

ふたりの文通は南北戦争只中の1862年4月、奴隷制反対の立場で活躍していたヒギンソンにディキンソンが手紙を出したことに始まる。戦争中にヒギンソンに送った書簡のうち9通が残っている<sup>31</sup>。『アトランティック・マンスリー』 (*Atlantic Monthly*) 1862年4月号掲載のヒギンソンのエッセイ “A Letter to a Young Contributor” (以下「若き投稿者への手紙」) をディキンソンが読み、詩の批評を仰ぐ手紙を送り、文通が始まったとされている<sup>32</sup>。ヒギンソンのエッセイの何が、次第に家族以外の人々を避け始めていたディキンソンを触発し、まったくの他人であるヒギンソンに宛てて手紙を書かせたのか。先述したように、ワイナップルはヒギンソンの急進的な要素を挙げているが、それが理由だろうか。ディキンソンはヒギンソンの文章を読み、反奴隷制主義者としての過激な行動を知っていたことは確かである。ただし、彼女を取り巻く外的な要因も考える必要がある。

そこで視野に入れたいのが、アマストの町の状況である。ディキンソンが手紙を投函した4月15日から遡る一か月間は、アマストの人々が戦況に大きく動揺した時期であった。アマストの青年フレイザー・スターンズ (Frazer Stearns) が戦死し、バートン・リーヴァイ・セント＝アーマンド (Barton Levi St. Armand) の表現を借用するなら、その訃報は「アマストの人々に雷電の如き衝撃を与えた」 (“broke upon the townspeople of Amherst like a thunderbolt” [109]) ためである。

ポリリー・ロングズワース (Polly Longworth) およびジェイ・レイダ (Jay Leyda) の詳細な情報によると<sup>33</sup>、1862年3月14日、スターンズはノースカロライナ州

---

<sup>31</sup> 南北戦争中にディキンソンがヒギンソンに送った書簡として、1862年 (L 260, L 261, L 265, L 268, L 271, L 274), 1863年 (L 280, L 282), 1864年 (L 290) が残っている。1863年以降はヒギンソンの出征と負傷のため、またディキンソン自身の眼科治療のため極端に少ない。

<sup>32</sup> ディキンソンから書簡を受け取ったヒギンソン自身の回想は *Atlantic Monthly* (1891年10月号) 掲載 “Emily Dickinson” にまとめられている。

<sup>33</sup> ロングズワースは、戦争勃発の報がアマストに届いた際の人々の動揺、南部出身の4



ニューバーンで戦死。その報が18日にアマストに届き、19日に遺体がアマストに到着、22日に葬儀が営まれる。アマスト大学学長の息子で、兄オースティンの友人でもあった21歳の若きスターンズの戦死がディキンソンに与えた影響は大きく、3月下旬に従姉妹のノアクロス姉妹(Frances and Louisa Norcross)に宛てた手紙(L 255)、そして友人の『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*) 編集長サミュエル・ボウルズ(Samuel Bowles) に宛てた手紙(L 256)でそれぞれ詳細を伝えている。29日の『スプリングフィールド・リパブリカン』がヒギンソンの「若き投稿者への手紙」を賞賛、4月14日父エドワード主催で、ニューバーンの戦場で南軍から奪取した大砲をアマスト大学で展示、翌15日ヒギンソン宛ての手紙を投函し、17日にヒギンソンに手紙が届く<sup>34</sup>。1862年3月中旬から4月中旬にわたる一か月間には、友人の戦死、ヒギンソンのエッセイの雑誌掲載、ディキンソンが手紙を書き、投函するといった、戦争に関わる出来事と、ディキンソン個人の行動とが立て続けに起きている。戦争の影が色濃く射すこの時期にふたりの文通が始まったのは単なる偶然ではない。

## 第2節 「若き投稿者への手紙」と戦争

エッセイ執筆時の1862年1月頃、ヒギンソン自身は戦争をどう見ていたのだろうか。ヒギンソンのエッセイ「若き投稿者への手紙」は、作家志望の若者たちに向けた、文学の指南書としてみなされることが多い<sup>35</sup>。ところが、戦争中の

---

人の学生が帰省したことなど、大学町アマストの不穏な状況をスターンズの戦死を中心にまとめている。特に注目すべきは、当初アマストが率先して志願兵を送り、割り当てを補充するのに事欠かず、「反乱」(“the insurrection”)を早急に終わらせようとする熱意が高かったことである。スターンズは、1861年6月中旬リンカンの3度目の志願兵招集を受けてアマスト近隣で結成された第21連隊に、ウィリアム・スミス・クラーク(William Smith Clark)教授に従って入隊した(26)。“Brave among the bravest: Amherst in the Civil War.” *Amherst College Quarterly* (Summer 1999)を参照。

<sup>34</sup> この日付の *Springfield Daily Republican* には初期の戦死者セオドア・ウィンスロップ(Theodore Winthrop 1861年6月1日死)の追悼文“*Our Martyrs*”が掲載されており、戦争の影が感じられる。この追悼文については第6章で考察する。

<sup>35</sup> アンナ・メアリ・ウェルズ(Anna Mary Wells)による評伝 *Dear Preceptor, The Life and Times of Thomas Wentworth Higginson* では、ヒギンソンの慧眼があってこそディキンソンを世に知らしめたとされている。「若き投稿者への手紙」においてヒギンソンが執筆の手ほどきをしている箇所を取り上げ、文体への配慮、読者との関わり、死後の名声、語彙や博識の用い方に触れた部分を具体的に紹介している(118-119)。またシュールは

興奮を自ら戒めようとする言葉もまた随所に散見される——「目下の興奮に目を眩まされ、軍隊生活の魅力に過大評価してはいけない」(“Be not misled by the excitements of the moment into overrating the charms of military life.” [Magnificent Activist 539])、「家での日常生活を送る以上に、偉大で男らしい生活を[軍隊で] 発見できるなど一瞬たりとも夢想してはいけない」(“[N]ever fancy for a moment that you have discovered any grander or manlier life than you should have been leading every day at home.” [Magnificent Activist 540])。ベンジャミン・リース(Benjamin Lease) がこのエッセイを「戦時における精神的独立の必要性の主張」(“affirming the need for spiritual independence in time of war” [Dickinson Encyclopedia 139]) とみなすのも頷ける。それにしてもなぜ 1862 年の時点で、ヒギンズンは戦争からの「精神的独立の必要性」を説く必要があったのか。

ヒギンズンは過激な奴隷解放論者として知られ、戦前から自他ともに認める“activist”であった。過去 1854 年に逃亡奴隷アンソニー・バーンズ (Anthony Burns) 救出の実力行使に参加し、1859 年にハーパーズ・フェリー武器庫を襲撃したジョン・ブラウン(John Brown) を支援する「秘密の六人」にも加わり、『アトランティック・マンスリー』1861 年 7 月号に掲載されたエッセイ「戦闘による試練」(“The Ordeal by Battle”) では、戦争において奴隷制が重要な争点であると述べている。だが、彼自身の信条に従って戦争に赴くことは容易ではなかった。妻メアリ・チャニング・ヒギンズン (Mary Channing Higginson) が病身のため介護が必要であったからだ。戦地へと逸る気持ちを自ら諫め、戦時に文人としてどう生きるべきかを自問するヒギンズンの姿をここに見いだすことができる。ヒギンズンの評伝を書いたティルデン・G・エデルスタイン (Tilden G. Edelstein) は 1861 年 8 月中旬のヒギンズンの日誌を引用し、自然散策しつつ苦悶する言葉を示している。

私はすっかり決心した、現在の義務は家庭にあるのだ。私が望み、それを目指して何年も訓練してきた戦争は、私には全く参加できないものであり、ナポレオン戦争に私が加われないのと同じなのだ。

I have thoroughly made up my mind that my present duty lies at home—that this war, for which I long and for which I have been training for years is just as absolutely unobtainable for me as a share in the wars of Napoleon. (Edelstein 247)

その後、1861 年 10 月ボールドブラフの戦いにおける北軍の惨状を知り、戦場へ

---

ディキンズンの関心を捉えた点として、ヒギンズンが女性作家たちを援助していた事実を挙げている(539)。

と気持ちが駆り立てられる。結果的に 1862 年夏、ジョン・アルビオン・アンドルー (John Albion Andrew) マサチューセッツ州知事から連隊招集の許可を得て、とうとうヒギンソンの出征が決まる (Edelstein 248)。

それでは、ディキンソンは 1862 年 4 月に「若き投稿者への手紙」をどのように読んだのか。リースとエデルスタインのどちらも、ディキンソンの隠遁生活と照らし合わせて推論している。リースは特に結びの部分が、ディキンソンに強く訴えたものと解釈する (Lease 76) ——「戦時であれ平時であれ、名声であれ忘却であれ、毎日を高潔に生きるために確固たる目標を立てた人には何ら実際的な危害を与えることはできない」 (“War or peace, fame or forgetfulness, can bring no real injury to one who has formed the fixed purpose to live nobly day by day.” [Higginson 541] )。それはディキンソンが「悩みながら神を探求する自身のペルソナを[詩に] 描いていた」 (“depicting her persona’s troubled search for God” [Lease 76]) からだとしている。エデルスタインもやはりリースと同じ箇所を指摘している。そして、このエッセイが書かれた 1862 年 1 月の段階では従軍の可能性がなかったことを踏まえ、ヒギンソンが「人生において戦争がいかに重要ではないか」 (“how unimportant war was in the context of life”) を指摘した箇所にも、ディキンソンが共鳴したものと推測する。「戦闘的な奴隷制反対論者」 (“a militant Abolitionist”) として知られるヒギンソン自身も「諦め」 (“renunciation”) を抱えていることが「隠遁」のディキンソンに強く訴えかけたに違いないと述べている (Edelstein 250)。しかし、「詩人」としての意識を持ち始めた時期にあり、スターンズ戦死という衝撃を受けた直後であることを考慮するならば、むしろ次のヒギンソンの言葉に自分のすべき方向を見出したものと考えられる。

著しい文学表現の才能を持って生まれた人はどの時代にもほんの僅かしかない。(中略) その力を十分に発揮する個人的な高潔を持ち合わせている人はその中に殆どおらず、このごく少数の人々も最終的には病や数多くの災難で死ぬため、時代を具現した知性のなにごく僅かしか遺されないのを見るにつけても身震いする。

So few men in any age are born with a marked gift for literary expression. . . . so few of even of these have their personal nobleness to use their powers well, and this small number is finally so decimated by disease and manifold disaster, that it makes one shudder to observe how little of the embodied intellect of any age is left behind.  
(*The Magnificent Activist* 541)

これに続いて次の言葉がある——「文学は薔薇の香油であり、百万の花から蒸

留される一滴なのである」 (“Literature is attar of roses, one distilled drop from a million blossoms.” [541])。将来を囑望されたスターンズのような青年が戦死し、ディキンソンは生きている者としての使命を捉えたに違いない。それというのもヒギンソンの薔薇の比喩は、ディキンソンの詩人論・詩論とみなされる詩 “This was a Poet -” (F 446, 1862 年) および “Essential Oils - are wrung -” (F 772, 1863 年) に用いられた薔薇の香油の比喩を連想させるからだ。ヒギンソンは、失われた命を背景にほんの一握りの言葉だけが後世に遺されることを薔薇の香油に喩えている。ディキンソンの詩にあっては、同様の思想が、精神的および肉体的な痛みの要素も伴って表現されている。

Essential Oils - are wrung -  
The Attar from the Rose  
Be not expressed by Suns - alone -  
It is the gift of Screws - (F 772)

精油は 搾りだされるもの  
薔薇の香油は  
太陽のみに圧搾されるのではない  
それは搾り器の賜

薔薇の花は自然の恵みによって咲いて、散る。だが、詩は詩人が死んだ後も残る。詩が永遠である所以は何か——ディキンソンの “Essential Oils - are wrung -” (F 772) の詩で目に留まるのは、“wrung”, “express”, “screw”の語である。「香油」 (= 詩) が力づくで、否応なく「搾り出される」ことが強調されている。ディキンソンがヒギンソンの文章を読んだのは、スターンズ戦死の衝撃からまだ日が浅い時期だ。多くの若者が戦地で命を落とし、肉親や友人、知人が容赦なく命を奪われる時に、その場限りの詩ではなく、永遠の意義を持つ詩を書くにはどうすべきか。この問題を突き付けられたのが、まさに詩人として意識を持ち始めた時期であり、戦争の時代であったことの巡り合せは大きな意味を持つ。エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) も強調するように、この時代に「多くの詩人たちが戦時における詩の役割を問うた」 (“A number of poets questioned the role of poetry in wartime.” [“How News Must Feel When Travelling” 158])。言葉の重みを実感しつつ詩作に向かうディキンソンが、詩人論・詩論ととれる詩をいくつも書き、詩人の在り方を模索しているのは偶然ではないはずだ<sup>36</sup>。ヒギンソン

<sup>36</sup> この頃に作られた詩論または詩人論と解釈できる詩の主な例として、ここで挙げたふたつの詩 “Essential Oils - are wrung -” (F 772), “This was a Poet” (F 446) の他に “I would

が散文で書いた主旨を、ディキンソンが詩の言葉に凝縮した表現に沿って考えるならば、詩は「百万」の人々の声なき声を糧に「搾り出された一滴」の重みを持つ。芳しいだけの一滴ではない。否応なく身を削られるような思いを込めた一滴である。

ヒギンソンとの文通が始まって8か月後の1862年12月に、ノアクロス姉妹に書いた手紙は戦時下の「死」がディキンソンを詩作へと導いたことをはっきりと示す。

戦争が始まって以来、悲しみは少数の人々の財産ではなく、以前よりももっと一般的に見えます。他の人々の苦悩を自分自身の苦悩で助けてあげられるなら、多くの薬となるでしょう。(中略) ロバート・ブラウニングがもう一篇詩を書いていたことに気が付き、驚きました。私自身も、私なりのささやかな方法で、納骨堂の階段で歌ったことを思い出したのです。毎日の暮らしがいよいよ力強く思われます。そして私たちが所有する力であるところのものが、さらに途方もなく大きくなっています。

Sorrow seems more general than it did, and not the estate of a few persons, since the war began; and if the anguish of others helped one with one's own, now would be many medicines. . . . I noticed that Robert Browning had made another poem, and was astonished - till I remembered that I, myself, in my smaller way, sang off charnel steps. Every day life feels mightier, and what we have the power to be, more stupendous. (L 298)<sup>37</sup>

ハベガーは戦争とディキンソンの創作の関わりを、国家的な視野で捉えて説明している——「彼女は自分の新たな力が国家的な試練と関わりがあると捉えていた。死すべき危険と大きな問題と究極的なものへの近さを捉える感覚が戦争によって増加し、一般化した」(“[S]he saw that her new powers had something to do with the national ordeal. The war multiplied and generalized her sense of mortal risk

---

not paint - a picture -” (F 348), “They shut me up in Prose -” (F 445), “I died for Beauty - but was scarce” (F 448) などがある。

<sup>37</sup> トマス・H・ジョンソンはこの手紙を1864年に分類したが、ジェイ・レイダが1862年12月頃のものとして修正した(Leyda II 72)。ハベガーもレイダの解釈に賛成し、「ディキンソンは戦争と増殖する自身の力とを関係づけている」(“[T]he poet made the connection between the war and her growing powers.” [Habegger 400]) と述べている。

and large issues and a nearness to ultimates.” [400])。ディキンソンが戦争の初期の段階から「国家的な」観点に立っていたかは疑問である。むしろアマストや近隣の若者たちの訃報が次々と届くにつれて、次第に戦争というものを実感していったと考えられる。だが、手紙にある“power”はディキンソンなりに詩作(“to sing”)の手応えを感じていたことを示す、重要な言葉であろう。

ヒギンソン宛の最初の手紙では、彼女自身の詩の「生」を追求する言葉が響く——「私の詩が生きているかを教えて下さるにはお忙しいでしょうか」(“Are you too deeply occupied to say if my Verse is alive?”)、「それ [詩] が呼吸をしているとお考えでしたら、お知らせくださるお暇がありましたら、早々に御礼したく存じます」(“Should you think it breathed - and had you the leisure to tell me, I should feel quick gratitude -”)<sup>38</sup>。戦争を背景に「死」と「生」の主題をディキンソンは強く意識し、それを深めていく。その意識と連動するように、ディキンソンは「詩人」としてヒギンソンに手紙を送り、ふたりの文通が始まったのである。

### 第3節 「斜めの場所」をめぐって

24年間にわたるヒギンソンとの文通で、ディキンソンの手紙は71通残っており、最初の9通が戦争中のものだ。けれども奇妙なことに、ディキンソンが初めて戦争に直接言及するのは文通開始10か月が経ち、1863年2月頃に送った7通目(L 280)である<sup>39</sup>。その頃のヒギンソンの境遇は大きく変化し、1862年11

---

<sup>38</sup> ヒギンソンの著作における表現をディキンソンが詩や手紙に反映させていることについては、エリザベス・ヒューイットを参照。

<sup>39</sup> この手紙には様々な比喻やディキンソン自身の詩が部分的に織り交ぜられている。手紙の冒頭部分「私が思うに惑星の力が無効になったのではなく、領土の、或いは世界の交換を被ったのです」(“I did not deem that Planetary forces annulled - but suffered an Exchange of Territory, or World -”)は、1863年夏頃にファシクル(Fascicle 27 H117)に清書された詩(F 568 B)の形もある。手紙の冒頭に散文の形で用いられたのは詩の後半部分である。詩全体は次のようになる。

It knew no lapse, nor Diminution -  
But large - serene -  
Burned on - until through Dissolution -  
It failed from Men -

月から初の黒人連隊 (the First Carolina Volunteers) の大佐となり、サウスカロライナ州ポートロイヤルに駐屯する。この連隊は連邦政府によって初めて公認された黒人連隊であり、かつ解放奴隷によって組織されていた<sup>40</sup>。その後、サウスカロライナ州南部の都市ビューフォートから 4 マイルにあるスミス・プランテーションで 600 人の黒人兵たちの訓練にあたっている。ディキンソンが 7 通目で初めて戦争に言及したのは、『スプリングフィールド・リパブリカン』(1 月 1 日および 2 月 6 日) の記事でヒギンズンの出征を知ったためと考えられる。

---

I could not deem these Planetary forces

Annulled -

But suffered an Exchange of Territory -

Or World -

それは何の消滅も、何の縮小も経なかった

ただ大きく 静かに

燃え続け ついに分解によって

人間の前から消えてなくなった

惑星の力が無効にされたと

私には思えなかった

ただ領域、あるいは世界 の交換を

被ったのだと

この詩自体は彗星の消滅を歌ったものと解釈できる。後半部分が散文の形となり、ヒギンズン宛の手紙の冒頭に置かれ、先述した次の箇所が続く——“I should have liked to see you, before you became improbable. War feels to me an oblique place -”。彗星のメタファーを用いて戦地にいるヒギンズンの運命を表したものと思われる。この詩の天文学的なメタファーについてはロビン・ピール(Robin Peel) を参照 (263)。また、天文学的なメタファーと南北戦争の諸相との関わりについては第 6 章において “Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩を中心に考察する。

<sup>40</sup> 認可された黒人連隊を率いたのはヒギンズンが最初であるが、同じく黒人連隊マサチューセッツ 54 連隊を率いたロバート・グールド・ショウ (Robert Gould Shaw) のほうが最初と見なされ、注目を浴びた。ショウが連隊を率いてワグナー要塞 (Fort Wagner) の攻撃で戦死したのが 1863 年 7 月 18 日。ショウとヒギンズンは一度だけ出会っている。ヒギンズンは軍人としては繊細で “kind” であり、他の “tough” な軍人たちとの違いがいかにも歴然としていたかはワイナップルを参照。ヒギンズンは負傷後、7 月 27 日から 2 週間休暇をとってウースターの自宅に戻り、8 月 20 日に軍隊に復帰。その後 10 月にマラリアで将校用の病院に入院。最終的には 18 か月の黒人連隊での従軍の後、除隊して 1864 年 5 月 14 日にニューポートに帰る (Wineapple 138-145)。

この 7 通目の手紙がこれまで注目を集めてきたのは、ディキンソンの戦争観を端的に示すとされる次の表現のためである——「戦争はわたくしには斜めの場所に思えます」(“War feels to me an oblique place -” [L 280])。「斜めの」(“oblique”)という語は、戦争と距離をとる「隠遁の」詩人像を連想させてきた。この一文は、ハーマン・メルヴィル(Herman Melville) の戦争詩がウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) など同時代人たちに批判されたように、傍観者的な印象を確かに与える<sup>41</sup>。リチャード・B・シューアル (Richard B. Sewall) はディキンソン評伝において、「戦争に関する最大限の言及」(“her most extended comments on the war” [536]) と断じている。先述した手紙についても、「フレイザー・スターンズ の戦死についてボウルズに送った手紙は、政治的論争とも大義とも何ら関係がなかったことが今後記憶されるだろう」(“Her letter to Bowles about the death of Frazer Stearns had nothing to do, it will be remembered, with issue or causes.”[536]) と述べ、社会の動向に背を向けたディキンソン像を強調する。アルフレッド・ハベガー(Alfred Habegger) もまた 21 世紀の幕開けとともに出した評伝 *The Life of Emily Dickinson: My Wars Are Laid Away in Books* において、傍観者的な姿をこの言葉に捉えており、戦争協力した兄の妻スーザンや妹ラヴィニアとは異なり、「戦争に関してエミリの立場は斜めであった」(“Emily’s position relative to the war was as oblique.” [402]) と書いている。

だが、ディキンソンの伝記的な事実が明らかになってきた今日にあって、“oblique” の語は、戦争への無関心ではなく、むしろ戦争との「関わり」において、もっと積極的に解釈する必要がある。そのうえで大きくふたつの捉え方がある。ひとつは戦争との認識上の隔たりを捉える解釈であり、もうひとつは戦争への対峙の仕方についての解釈である。まず、ディキンソンが“oblique”の語を用いた他の例を見ると、書簡ではこの手紙しかないが、詩では 2 箇所 (F 1210 と F 1520) ある。そのひとつ “Some we see no more, Tenements of Wonder” (F 1210, 1871 年) では、来世は「不思議の住処」(“Tenements of Wonder”) であり、この世の人間には認識できない場所だとする。その際、人間の限界を表す意味で「わたしたちが推測と呼ぶ斜めの信仰」(“That oblique Belief which we call Conjecture”) と使っている<sup>42</sup>。この使い方は、アマストから、ヒギンソンのいる戦地を思う、

<sup>41</sup> メルヴィルの詩集 *Battle-Pieces and Aspects of the War: Civil War Poems* は切迫感に欠けた印象を与え、ハウエルズはメルヴィルの主題の扱い方が現実味に欠け、まるで夢幻のように、対象そのものから「かけ離れている」(“remote”)と酷評した (*Review of Battle-Pieces* 253)。

<sup>42</sup> 朝比奈緑氏は、この箇所が、エマソンの影響を強く受けたヒギンソンの立場に呼応するとして、詳細に解説している (「エミリー・ディキンソンと『アウトドア・ペーパーズ』」 226-228)。



問題の一文と通底する。ディキンソンにとって、戦地とは、そもそも来世のように認識を越えた場所なのである。この手紙が書かれたのが1863年2月であり、その頃のヒギンソンはサウス・キャロライナ州南部のビューフォートで黒人兵の訓練にあたった後、1863年1月には戦闘に参加している。アマストからはるか遠く隔たった未知の場所であることに加え、黒人兵と共に戦場にいる。ディキンソンが経験したことのない、想像を超えた状況を「斜めの場所」と表現したものとまず考えられる。

フェイス・バレット (Faith Barrett) は、ディキンソンの“oblique”の語の用い方を、自身の「保護された」(“sheltered”) 立場として解釈する。従軍中のヒギンソンに対して、自分自身は「戦地からは遠く隔たり、その恐ろしさを想像したり理解したりすることはできない」(“too far removed from combat to imagine or understand its horrors”), そうした表現を、「ヒギンソンが期待するものと想像してディキンソンは語っているのだろう」(“Dickinson may well be telling Higginson what she imagines he wants to hear.” [“Addresses” 131]) と考察する<sup>43</sup>。もちろん、従軍中のヒギンソンを配慮した面もあるだろう。

ただし、この一文は、手紙から抜き出され、独り歩きしてきた感は否めない。戦地にいるヒギンソンに送った7通目の手紙の中にこの一文を改めて置いてみる。すると、これまで見落とされがちであった直前の文——「あなたが存在しているようには思えなくなる前にお会いするのを望むべきでした」(“I should have liked to see you, before you became improbable”) には、ヒギンソンを案じる言葉を確認できる。ウェブスターの辞書(1828年版)での“improbable”の定義“Not likely to be true”に基づくならば、アマストで暮らすディキンソンには、出征したヒギンソンがこの世にいるような気がしない。出征前に会うべきだったと後悔し、続く「戦争はわたしには斜めの場所に思えます」と併せて読むと、「死」と紙一重の戦場にいるヒギンソンを案じる姿が浮かぶ。ヒギンソン自身も後に、この手紙の「あなたの土の精より」(“Your Gnome”)という奇妙な署名について回想し、「彼女の友人 [ヒギンソン自身] が信じられないほどかけ離れた状況にいると想像し、そのことが彼女に不思議な感覚を伝えたのではないか」(“[S]he imagined her friend to be in some incredible and remote condition, imparting its strangeness to her” [Magnificent Activist 553]) と推測している。したがって、相手が地理的にも遠い場所において、それが戦場という未知の状況であり、死と隣り合わせの場にいるために相手の無事を念ずる。出征した家族や知人を案じる立

---

<sup>43</sup> バレットは、南北戦争中に兵士達が作った詩を数多く調査したうえで、北部の女性達が「守られた」(“sheltered”) 立場にあり、戦争を知らないことを述べる“common refrain”(共通のさびの部分)を反映したとする見解も述べている(“Addresses” 131)。

場から発した言葉として捉えることができ、また実際、ヒギンズン自身もそのように受け取っている。

“oblique”の語には、こうした「隔たり」の意味に加えて、戦争との向き合い方を捉えることもできる。「戦争」という言葉を初めてヒギンズンに宛てて言及したこの手紙において、彼女なりの態度を読み取ることができる。

この見方を推し進めるうえで、“oblique”に幾何学的な用法を捉えるモーリス・リー(Maurice S. Lee)の解釈は、この語が持つ重層的な意味を喚起する——「円周を自分の仕事とし、知識の状態を議論する際にしばしば幾何学的な比喻を用いる詩人が、戦争を斜めの場所として記述するのはひとつの見方と決定的な意見との分岐を強調するためである」(“[F]or a poet who makes circumference her business and often uses geometric tropes when discussing the status of knowledge, to describe war as an oblique place is to emphasize the divergence between one line of vision and a definitive view.” [1126])<sup>44</sup>。生と死の境界線を意識する意味と重ねて、リーが指摘する「ひとつの見方と決定的な意見との分岐」、すなわち、時代の主潮と異なるディキンズン自身の見方を仄めかすという解釈は、この7番目の手紙を読むうえで説得力がある。それは、同じ手紙の次の箇所も同様の要素を持つからだ。

死は友人への畏れの気持ちをもたらしました。(中略)あなたが戦争の境界線を超えぬものと確信しています。お祈りをするように育てられてはおりませんが、わたしたちの軍のために教会で礼拝があるときは、あなたのことを[お祈りに]入れます。(中略)どうか、名誉にかけて、死を避けてください、切に願います。

Perhaps Death - gave me awe for friends - . . . I trust you may pass the limit of War, and though not reared to prayer - when service is had in Church, for Our Arms, I include yourself - . . . Could you, with honor, avoid Death, I entreat you - (L 280)

戦地にいるヒギンズンの身を案じる文面である。ただし、「お祈りするように育

---

<sup>44</sup> モーリス・リーは“oblique”の語を、遠まきに戦争を見る、という従来のディキンズン解釈に加え、科学用語を解釈の手立てとして示唆する。天文学用語としては惑星の軸が正しい角度になっていないこと、また植物学の用語としては葉の形が有機的な調和をもたぬ、ゆがんだ、不等辺であるという意味、幾何学の用語としては斜線の意味を持つとリーは示唆する。自身の戦争観がいかに他の人々のものと掛け離れているかをディキンズンが強調していると、リーは解釈する。

てられてはおりませんが」という表現には、教会に対する、或いは戦時の人々の行動に対する信条的な距離感が見え隠れする。そもそもディキンソンが生きてきた時代にはそれまでも信仰復興運動が何度も起きており、アマストでも顕著な例として、1831年、1834年、1841年、1850年、1857年、1858年、1869年、1870年が記録されている (Eberwein “New England Puritan heritage” 49)。マウント・ホリオーク女子専門学校 (Mount Holyoke Female Seminary) 在学時にも信仰告白をせず、その後も家族の中でただひとり、信仰告白せずにいた。このような状況を考えても、教会という枠で祈ることへの抵抗感や違和感があり、また、それ故に後ろめたさもあったものと推測できる。信仰の問題は常にディキンソンの心であり、「形のない 震える、祈り」(“shapeless - quivering - prayer -”[F 252]) を秘めながら暮らしていたと考えられる。その状況をも含めると、“oblique”の語は、戦争から信仰までも含め、未知のもの、把握不可能なもの、受け入れ難いものとの向き合い方を示す語として見做すことができる。

当時の北部の思潮に目を向けるならば、戦争到来を神意として解釈する動きが広まっていた。ジェームズ・H・ムアヘッド (James H. Moorhead) の詳細な研究によれば、北部において、共和国の理想を實踐し、その理想を広めるために必要な、「キリスト教的な民主主義を守るための偉大なる人民の戦い」(“a great people’s war for Christian democracy” [40]) とする戦争解釈が、教会を中心に広まっていた。また南北双方の兵士 1076 人の家族宛の私信を分析したジェームズ・M・マクファースン (James M. McPherson) は、兵士たちが当初の信仰心を戦争中も持ち続けたことに言及している。ピューリタニズムの牙城として 1821 年創立のアマスト大学を擁するアマストにおいても同様に、戦死したスターンズの父、すなわちアマスト大学学長ウィリアム・オーガスタス・スターンズ (William Augustus Stearns) は戦争の必然性を聖書に準えて説いた中心人物であった。息子が戦死する一年半前にあたる 1861 年 9 月 26 日に、「戦争の必然性、および戦争における成功の諸条件」(“Necessities of the War and the Conditions of Success in it”) と題して説教を行い、戦争は合法で神の意志によるものと解釈したうえで、「神は[わが]国の設立者であり、指揮官であり、国が人類と救世主の大義の促進に寄与することを望んでおられる」(“God is founder of the nation and superintends it, who hope that it may yet subserve the cause of humanity and Christ, pray.” [A Sermon 23]) と述べている。

そもそもディキンソンのこの手紙で目立つのは、人智を超えた事象を宗教的に説明付けてきた慣例を覆すかの表現である。今一度引用するならば、「お祈りするように育てられてはおりませんが、わたしたちの軍のために教会で礼拝が行われるときには、あなたのことを[祈りに]入れます」の部分もその一例だろう。敬虔な解釈の代わりに顔を出すのが即物的な表現だ——「わたしは考えていま

した、今日、気が付いたのですが、『超自然』とは露わにされた自然なものに過ぎないのです」 (“I was thinking, today - as I noticed, that the ‘Supernatural,’ was only the Natural, disclosed -” [L 280])。宗教的な解釈ではなく、敢えて人間の経験軸で捉え直す論理展開が目立つ。その際、“not but”の構文および“dis-”, “un-”, “super-”の接頭辞を持つ語が逆説的な発想を導き、神意を読み解こうとする時代の思考回路を転覆するかのよう、手紙の至る所に潜む<sup>45</sup>——「『啓示』が控えているのではない / 私たちの備えのない目があるのです」 (“Not “Revelation” - ‘tis - that waits, / But our unfurnished eyes -”) もそのひとつである。この7通目の手紙全体を考え併せると、「斜めの場所」 (“oblique place”) とは、戦争の大義を神意に結びつけて解釈する時代の風潮に呑み込まれることなく、自身の立ち位置から戦争を捉えて、発した表現なのである。同時代に広がる宗教的な解釈や、新聞の解釈に頼らずに、彼女自身の感覚で事態を把握し、表現しようとする試みなのである。それは次の言葉にも窺われる。

あなたがお発ちになったことを、偶然、知りました、自然の秩序、または一年の季節を見つけるように。何の根拠を手にしなくても、それが [季節の] 進行という反逆であるものと推測します。進むにつれて消滅するのです。

I found you were gone, by accident, as I find Systems are, or Seasons of the year, and obtain no cause - but suppose it a treason of Progress - that dissolves as it goes.  
[L 280]

ヒギンソンの出征を、季節の移り変わりの気づきに喩えている。しかも、南部の行動を国家に対する「反逆」 (“treason”) とし、戦争の「大義」 (“cause”) を説く北部の言説をここで用いながらも、それらを季節の推移を示す用語に摩り替えている。

さて、1849年にその過激な思想ゆえにユニテリアン派の牧師を辞したヒギンソンは、先述したように行動の人であり、1856年に奴隷制を巡って大揺れのカンザスへ向かった。そのような彼を、ジョージ・M・フレデリクソン (George M. Frederickson) は「最初に武装したトランセンデンタリスト」 (“the first

---

<sup>45</sup> ディキンソンの不可知論者の要素については、マグダレナ・ザペドスカ (Magdalena Zapadowska) を参照。無神論者的側面を論じたデイヴィッド・ポーターや当時の科学との関係を述べたニナ・ベイムに依拠しつつ、カルヴィニズムの伝統におけるディキンソンの苦悩を考察している。

transcendentalist in arms” [37]) と呼ぶ<sup>46</sup>。ヒギンスンの従軍日誌には宗教的な大義についての記述はほとんど見当たらず、アン・C・ローズ (Anne C. Rose) は『黒人連隊従軍記』(*Army Life in a Black Regiment*) のヒギンスンの語りについて、「明らかに世俗的なペルソナの観点」(“from the perspective of a decidedly secular persona” [31])であると示唆する。

ヒギンスンはいまや自身の信念を直接行動に移して戦場にいる。一方、ディキンソンはアマストから戦争を見る。アマストを支配する宗教的な言説を越え、ディキンソンは周囲とは異なる価値を、意味を、戦争との対峙の仕方を“oblique”の語に込めて、ヒギンスンに向けて発信したのである。

#### 第4節 死の淵からの帰還

南北戦争百周年にあたる冷戦時代、エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は『愛国の血糊』(*Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*) を出版し、その中で戦争とディキンソンの関係について述べていることは序章で触れた——「南北戦争はディキンソン嬢にとって特に多作の時期であったが、私の知る限り、詩において戦争に言及しておらず、手紙においてもほとんど言及がない」(“The years of the Civil War were for Miss Dickinson especially productive, but she never, so far as I know, refers to the war in the poetry, and there are very few references to it in her letters.” [488])。米国同時多発テロ勃発以降のディキンソン研究では、南北戦争に直接・間接的に触発されて書かれたと解釈される詩は、現在のところ40篇ほどに及ぶ<sup>47</sup>。そのひとつ “That after Horror - that ‘twas us -” (F

---

<sup>46</sup> 戦後1867年5月30日にヒギンスンはボストンで開催された The Free Religious Association (the F. R. A.) に参加している。宗派を超えた人々の集まりが、ヒギンスンの理想とする宗教観が実現された場としてエデルスタインは触れている——「ヒギンスンにとっての戦争の宗教的側面について「反奴隷制運動は大義を提供するものとみなされた。南北戦争は聖戦とされていた。しかし戦争が終わった今、ヒギンスンが言えるのはこれだけだった、『おそらくアメリカの暮らしにおける大きな潮流は宗派の力を抜け脱していくだろう』」(“The antislavery movement was meant to provide the cause; the Civil War was supposed to be the crusade. But when the war was over, Higginson could only say, ‘Perhaps the great currents of American life are outgrowing the power of one sect or any dozen.’” [Edelstein 310])。

<sup>47</sup> 直接戦争に関連した詩、戦争と関連する解釈が可能な詩、戦争に関わる設定の詩を含む。主にトマス・フォード (Thomas Ford)、シーラ・ウォルスキー (Shira Wolosky)、クリスタン・ミラー (Cristanne Miller)、フェイス・バレット (Faith Barrett)、ヴィヴィアン・ポラック (Vivian Pollack)、エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) 等の論考を参照。本論

243) を 1863 年頃の 8 通目の手紙でヒギンズンに送っている。ただし、奇妙なことに後半部分のみを送っている。

ヒギンズンは 7 月 9 日から 11 日のサウスカロライナ州ウィルトOWN・ブラッフ(Wiltown Bluff) の戦闘で負傷した。ヒギンズンからの返信が途絶え、事情を知らぬディキンズンが相手の機嫌を損ねたものと案じて送ったのがこの 8 番目の手紙である。フォアダイス・R・ベネット (Fordyce R. Bennett) は手紙の署名「バラバ」(“Barabbas”) を、磔刑を免れたバラバの心情と、寛恕を願うディキンズンの心情を重ねたものと解釈する (60-61)。リースはヒギンズンの負傷を知ってこの詩を送ったと指摘するが(82-83)、8 通目の手紙の段階で負傷を知らずにいたことは、次の 9 通目の言葉から明らかである——「危険な状態にいらっしゃるのでしょうか、あなたが負傷なされたことは存じあげませんでした」(“Are you in danger - I did not know that you were hurt.” [L 290])。詳細がどうであれ、“That after Horror - that ‘twas us -” (F 243) の詩、すなわち、「生」と「死」の狭間を経

---

文で参考にした研究論文から、該当すると考えられる詩は次の通りである。“Success is counted sweetest” (F 112), “Who never lost, are unprepared” (F 136), “To fight aloud, is very brave -” (F 138), “Through the Straight Pass of Suffering” (F 187), “Victory comes late -” (F 195), “A Slash of Blue! A sweep of Gray!” (F 233), “That after Horror - that ‘twas us -” (F 243), “Unto like Story - Trouble has enticed me -” (F 300), “Of Bronze - and Blaze -” (F 319), “Of Tribulation - these are They,” (F 328), “I like a look of Agony,” (F 339), “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384), “Over and over, like a Tune -” (F 406), “I died for Beauty - but was scarce” (F 448), “The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465), “Whole Gulfs - of Red, and Fleets - of Red -” (F 468), “He fought like those Who’ve nought to lose -” (F 480), “When I was small, a Woman died -” (F 518), “One Anguish - in a Crowd -” (F 527), “It feels a shame to be Alive -” (F 524), “They dropped like Flakes -” (F 545), “The Black Berry - wears a Thorn in his side -” (F 548), “I’m sorry for the Dead - Today -” (F 582), “If any sink, assure that this, now standing -” (F 616), “The Battle fought between the Soul” (F 629), “No Rack can torture me -” (F 649), “The Martyr Poets - did not tell -” (F 665), “There is a Shame of Nobleness -” (F 668), “Triumph - may be of several kinds -” (F 680), “To know just how He suffered - would be dear -” (F 688), “My Portion is Defeat - today -” (F 704), “If He were living - dare I ask -” (F 719), “Bereavement in their death to feel” (F 756), “My life had stood - a Loaded Gun -” (F 764), “The Birds reported from the South -” (F 780), “Publication - is the Auction” (F 788), “The only News I know” (F 820), “Color - Caste - Denomination -” (F 836), “My triumph lasted till the Drums” (F 1212), “‘Twas fighting for his Life he was -” (F 1230), “There’s the Battle of Burgoyne -” (F 1316), “I never hear that one is dead” (F 1325), “My Wars are laid away in Books -” (F 1579).

験した語り手がその経験を振り返る詩を、戦闘に参加し、死と隣り合わせの場を経た直後のヒギンズンに送ったのは、相手に対するディキンズンなりの配慮のためだろう。この詩 (“That after Horror - that ‘twas us -”) は後半部分のみが送られたが、最初に全体を見てみたい。

That after Horror - that ‘twas us -  
That passed the mouldering Pier -  
Just as the Granite crumb let go -  
Our Savior, by a Hair -

A second more, had dropped too deep  
For Fisherman to plumb -  
The very profile of the Thought  
Puts Recollection numb -

The possibility - to pass  
Without a moment’s Bell -  
Into Conjecture’s presence  
Is like a Face of Steel -  
That suddenly looks into our’s  
With a metallic grin -  
The Cordiality of Death -  
Who drills his Welcome in -

(F 243)

恐怖のあと - わたしたちが -  
崩れかけた埠頭を渡ったちょうどそのとき -  
花崗岩のかけらを放ったのは -  
救世主、間一髪だった -

一秒遅ければ、漁師も測れないほど  
深くへ落ちてしまっただろう -  
その考えが横顔となり  
回想を麻痺させる -

一瞬の警笛もなく  
推測の現前へと -

涉りうる事態は  
鋼鉄の顔のよう -  
突然わたしたちの顔を  
金属的な薄笑いをして覗きこむ -  
招き入れの教練をする -  
死の真心 - <sup>48</sup>

奈落の底に危うく落ちるところを免れた語り手が、その危機を思い返す詩である。第1連と第2連で回想し、第3連では紙一重のところであらゆる救われてもなお、大砲の口径のような「鋼鉄の顔」(“a Face of Steel”)が眼前に迫る。

回想部分にあたる前半(第1連と第2連)8行では、危機を切り抜けた直後の動揺がまだ収まらない。そのためか、前半では冒頭から何度も指示代名詞「それ」(“that”)が繰り返され、もどかしいような語りが目立つ。だが後半になると俄然、語り口は勢いを増す。この後半部分がヒギンスンに送られた。ヒギンスンの負傷を知らずにいたものの、戦場を連想させる語彙——「鋼鉄の顔」(“a Face of Steel”)、「金属的な薄笑い」(“a metallic grin”)、「教練する」(“drills”)——が並ぶ後半部分を送ったのは、明らかに戦場のヒギンスンを意識した選択といえる。こうした語句と現在時制によって、今もなお恐怖に付き纏われる緊迫感を孕む。6行にわたる句またがり、死の恐怖がひと続きに回想され、はっと息を呑む一瞬に、語り手の乱れた息遣いがダッシュで伝えられる。

ヒギンスンには送られなかった前半部分には、「死」の危機を脱して「生」へと帰還する主題を考えるうえで、解釈に惑う箇所がある。3行目から4行目“*Our Saviour, by a Hair -*”を経て5行目に至る部分では、主語と目的語が不明瞭であるためだ。クリスタン・ミラーはこの特徴を「回復不可能な省略」(“Nonrecoverable Deletion”)と呼び、文法的に意味を成す形に戻すのが困難な箇所として指摘している(*A Poet's Grammar* 28-30)。シャロン・カメロン(Sharon Cameron)はこの部分を仮定法として解釈し、「私たちが一筋の髪をさらに落としたなら、救世主と出会っただろう」(“If we had dropped a hair further, we would have met our savior” [107])と言い換えてみせる。けれども、カメロンとは異なる解釈をここで用いたい——“*Our Saviour let go the Granite*”と主語と目的語を整えたうえで、「一筋の髪」(“a hair”)と文字通りにとらず、慣用句「危ういところで」(“by a hair”)として捉えると、「花崗岩のかけらが崩れた」出来事をめぐってふたつの相反する観点が浮上する。つまりは、神は救ってくれたのか、それとも逆に、危機的な場面を設定したのは神なのか、という見方である。「私たち」が渡り終わった瞬

<sup>48</sup> 本論におけるディキンソンの詩の和訳ではダッシュを使っていないが、この詩(F 243)の和訳では、ダッシュを反映させた。



間に埠頭を崩して「救世主」が助けてくれたのか、或いは、「花崗岩のかけらが崩れた」際どい出来事は神意が介在していたのか。仮に後者の意見に耳を傾けるならば、そもそも人が殺し合う戦争に神意が関わること自体に、懐疑の念さえ見出せる。

危機を脱した語り手の懐疑は、戦死したスターンズのそれとは対照的できえある。詩の語り手は、自分が脱した危機と神意とがどれほど結びついているのか、神は救ってくれたのか、それとも危機に陥れたのが神なのか惑う。その懐疑を、文法的に不明瞭な表現に捉えても良いだろう。

戦場において神意を懸命に読み取ろうとする例は、フレイザー・スターンズの言葉に見つけることができる。戦争を神意と説く父に宛てて戦場から手紙を送り続けたスターンズは、いわばマタイ伝の「一羽の雀」として、あらゆる局面に何らかの神意を懸命に読み取ろうとする。

砲弾が音を立てて頭上を行き交っていました。それなのに私は最後まで撃たれずにいたのです。そして神様がどんなに親切であるかを示されたかのように私は二度撃たれました。(中略) 私は気を失い、地面に沈み込みました。やがて意識が戻り、数歩分這い、血が顔から滴っていましたが、まったく無事であると実感しました。あの日、私が国のために事を成すお許しをくださった神に感謝します。

The bullets whistled all around me, --the cannon shots flew over me, --and yet none hit me until the very last. Then, as if God wished to show me how kind he was to me, I was hit twice . . . and I sank down on the ground. Then I revived, and crawling a few steps, I found I was all right, tough the blood was streaming down my face. I thank God that I was permitted that day to do something for my country.

*(Adjutant Stearns 94-95)*

スターンズは幼児期から宗教に関心があり、12歳で洗礼を受けた。早熟ゆえに、特に母の死後、信仰の在り方に悩むようになる。アン・C・ローズ (Anne C. Rose) は、南北戦争の時代に、親の世代の宗教観が子供の代に揺らぎ始めた傾向を指摘している——「宗教的な確信を一時的な報酬にすり替え、自分たちの仕事、余暇、家族、政治、特に戦争に永続的な意味を付与しようともがいた」 (“[T]hey tried to replace religion’s assurances with temporal rewards, striving to invest their work, leisure, families, politics, and particularly their war with enduring meaning.” [Rose 20])。スターンズもまたその一例として見做すことができる。彼は、戦場の体験に神の祝福の証を探し続けるのである。

F 243の詩に戻ろう。ディキンソンはなぜこの詩の後半のみ送ったのだろうか。ヘレン・ヴェンドラー(Helen Vendler) は、詩の後半における差し迫った語りに注目し、この部分のみをヒギンソンに送ったことを評価する(84-85)。詩としての出来栄もさることながら、宗教的な懐疑を含む前半分とは異なり、送られた後半は、死の危機に直面する瞬間を力強く捕えた箇所である。戦場の大砲がいきなり大寫しとなり、恐怖と同時に「死」の怪しい魅惑すら付される。そして6行目の「薄笑い」(“grin”)と最終行の「招き入れ」(“Welcome in”)が押韻し、死の淵へ容赦なく引き寄せる磁力が強調される。前半が過去形と仮定法で語られるのに対して、後半では現在形が用いられ、語り手は、超越した存在の意向を問うことなく、眼前に迫る「顔」に釘づけとなって思考が停止する。そして、抜けようにも抜け出せぬ強い力にいつしか屈して金縛りに陥るのである。その強引な力は「にやにや笑い」、「大砲」、「警笛」など視覚と聴覚の共感覚によって強調されている。全体としては「生」と「死」の紙一重の狭間に繰り返し立ち戻り、たじろぎながら死の恐怖に向き合う詩である。しかし、過去を振り返る眼差しが、表層とは別の深層を捉えた可能性がある。危機一髪の状態を振り返るうえで、後半の「より真に迫った語り」(“more realistic narrative” [Vendler 85])の深層には、前半部分の神の行為への疑いが潜むからである。語り手が味わった真の恐怖は、死の淵に立ったこと自体よりも、その一瞬に神意が介在していたかもしれぬという疑念にある。この疑念が底知れぬ恐怖となり、後半部分へと結びつく。この部分はそのまますきに置かれ、ヒギンソンにも送られていない。

ヒギンソン宛ての7番目の手紙の言葉「斜め」(“oblique”)は、先述してきたように、戦場にいる相手の状態を離れた場所から認識する難しさを込めたものとして読むことができる。エライザ・リチャーズ(Eliza Richards)は、戦場を理解するのは不可能だという見地を、ディキンソンの詩において解釈する——「ディキンソンの南北戦争詩は、他者の経験を十分に知ることができると見做すのは危険だと警告する。新聞報道や写真の表象を通じて、兵士の身になって市民が戦争を経験することと、兵士達が直接、身体で、想像不可能な戦闘体験をすることの隔たりは克服できないと、繰り返しディキンソンの詩は提示する」(“[H]er Civil War poems warn of the dangers of assuming that one can fully know the experience of another. They repeatedly posit an insurmountable gap between civilians’ vicarious experience of the war, gained through newspaper reports and pictorial representations, and soldiers’ direct, physical, and largely unimaginable experience of combat.” [“How News Must Feel When Travelling” 164] )。リチャーズの解釈から、ディキンソンはどのような読者を想定して詩を書いていたのか、という疑問が生じる。詩の送り先についての議論は第3章および第4章で改めて進める。こ

ここでは、8番目の手紙に付された詩“*That after Horror - that 't was us -*” (F 243) に限定すると、ディキンソンはヒギンソンに後半のみ送っただけで、他の親しい人々に渡した記録はほとんどない。戦争に関わる詩を戦争の最中に部分的であれ送ったのは非常に珍しい例である。ただし、そのヒギンソンにさえ送らずに控えた部分もまたある。詩を送るのを差し控えたのは、その出来具合のためかもしれない。しかし、この“*That after Horror - that 't was us -*” (F 243) の詩は、前半の神意を巡る推測部分は手許に置かれ、後半の視覚的な恐怖を扱った部分のみ送られた。前半の推測部分は、詩人の心の闇を示しているのかもしれない。戦いに関わる詩を詩人としてディキンソンがどこまで人と共有するつもりであったのか、共有を差し控えることにしたのか。その境界線を示す選択として見做すことができる。

## 第5節 詩人の立脚点

ディキンソンは親しい人々に頻繁に詩を送り、南北戦争の期間だけでもスーザンに100篇、ノアクロス姉妹に38篇、T・W・ヒギンソンに32篇、ボウルズに30篇送ったことがフランクリンによって記録されている。しかし、先にも触れたように、戦争に関わる詩をこうした人々に送った形跡は極めて稀である。南北戦争の兵士たちを描いていると解釈できる詩で、手許に置かれた詩を挙げてみよう——戦いに倒れた親族の男性たちが天国で栄光を手にする姿と懷疑する語り手の声とを並置した“*Unto like Story - Trouble has enticed me -*” (F 300)<sup>49</sup>、スターンズの戦死に関連して書かれた“*It dont sound so terrible - quite - as it did -*” (F 384)、秋の紅葉の風景を戦場と重ねた“*The name - of it - is 'Autumn' -*” (F 465)、死を恐れることなく戦い、「内気な」死のほうを避けて生き延びた「彼」の姿を書いたと読める“*He fought like those Who've nought to lose -*”(F 480)、戦死した息子と母とが天国で再会することを想像した“*When I was small, a Woman died -*” (F 518)<sup>50</sup>、人々のために命を投げ出した兵士がいる一方で、生きている自分の浅ましさを感じる“*It feels like a shame to be Alive -*” (F 524)、倒れる兵士たちを花片に

---

<sup>49</sup> ポール・クラムブリイ(Paul Crumbley) は、この詩における語り手が上流階級の女性であり、政治的な想像力に欠けていると解釈する (*Winds of Will* 48-51)。

<sup>50</sup> クリスタン・ミラー (Cristanne Miller) は、この詩では「キリスト教殉教者を記す言葉」が用いられていると論じている (“*Liberty*” 15)。フェイス・バレット (Faith Barrett) は特に季節の巡りと弾丸 (“*minie ball*”) が青年を貫いたときの回転と重なると捉えている (*To Fight Aloud* 168-170)。

喩えた “They dropped like Flakes -” (F 545)<sup>51</sup>、兵士と思われる「彼」の死に思いを馳せる “To know just how He suffered - would be dear -” (F 688)、戦場に響く苦悶の声や戦死者を敗者の視点から語る “My Portion is Defeat - today -” (F 704)<sup>52</sup>、そして語り手が銃の設定である “My Life had stood - a Loaded Gun -” (F 764)<sup>53</sup>、人種や社会的階層、宗派の区別なく死は「民主的に」訪れるとした “Color - Caste - Denomination -” (F 836)<sup>54</sup>などを挙げるができる。これらの詩は全て、送られることなくそのままディキンソンの手許に置かれた。

ヒギンソンは 1863 年 7 月に負傷し、後に軍隊に戻るもマラリアにかかり、回復が捗々しくなく、1864 年 5 月に除隊する。そのヒギンソンに宛ててディキンソンは 1864 年 6 月頃、9 番目の手紙 (L 290) を送り、“Are you in danger - I did not know that you were hurt. Will you tell me more?” (「危険なご容態なのでしょうか、お怪我なされたことを存じ上げませんでした。もっと教えて頂けませんか」) と安否を気遣っている。この手紙には “The only News I know” (F 820) の詩の一部も添えられている。

The only News I know  
Is Bulletins all day  
From Immortality.

わたしが知る報せは  
不滅から終日届く  
戦況報告だけ

ヒギンソンを気遣う言葉で手紙は始まる。ここにディキンソンが挿入した詩は、

---

<sup>51</sup> デイヴィッド・コーディ (David Cody) は “The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F465) を戦場とアマスト近隣の紅葉の名所ホワイトマウンテンの秋の風景に結びつけ、当時の旅行書の描写と照合させて論じている (“The name - of it - is ‘Autumn’ -”)

<sup>52</sup> セント＝アーモンドはこの詩をニューバーンの戦いで戦死したスターンズの内面を扱ったものと論じる(113)。ウォルスキーは、北部・南部どちらの側にもつかぬ語り手の特徴に言及する(56)。

<sup>53</sup> 語り手の立場を「女性芸術家」(Bennett “Looking at Death, is Daying”)、「書きかけの詩」(江田) とする様々な解釈があるなかで、ウォルスキーは戦場との関連で解釈する (“Public and Private” 110-111)。

<sup>54</sup> フェイス・バレットはこの詩をリンカンの人身保護令(1863) との関連で論じている (“Drum off the Phantom Battlements”)

戦地から刻々と届く「戦況報告」ではなく、「不滅」(“Immortality”)からの報告である<sup>55</sup>。相手の容態を案じつつも、この詩でディキンソンが強調するのは詩人としての自分の仕事である。ディキンソンにとって「不滅」とは「洪水のような主題」(“the Flood subject” [L 319])であり、詩人として追いつける主題である。先の手紙 (L 290) は、眼の治療でボストンに滞在している時に書かれている。

9月から具合が悪かったので、4月からボストンで医者の治療を受けております。医者は外出させてくれませんが、わたしは牢獄で仕事をして、お客様をもてなしています。

カルロは来ませんでした、牢獄で、死ぬかもしれないからです、そしてわたしは山も持ってくることはできませんでした、そこで神々だけ持ってきたのです。

I was ill since September and since April in Boston, for a Physician' care - He does not let me go, yet I work in my Prison, and make Guests for myself -  
Carlo did not come, because that he would die, in Jail, and the Mountains, I could not hold now, so I brought but the Gods - (L 290)

アマストを離れて目の治療を受けながらも、ディキンソンは次々と訪れる詩神(“Gods”)を「客」としてもてなしている。ボストン滞在中にもなお詩作を続けていた証に、ハベガーは、1865年の頃のものとして推測される、ペン書きの清書が数多くあることを指摘している (489)。

ヒギンソンとの文通開始当初の十か月間、ディキンソンはなんら戦争の話題に触れていない。それは、ディキンソンがヒギンソンと語り合うことを望んだのは戦況ではなく、詩についてだからだろう。シンディ・マッケンジー(Cindy MacKenzie)の解釈は、ヒギンソンとの文通の特異性を把握するうえで示唆に富む——「友人や家族との手紙のやりとりでは手紙の内容や文脈が、詩の話題をよそに追いやってしまう。しかしヒギンソンとの場合、彼が自分の詩をどう読むのか、そして彼の読みが自分の詩にどのような影響を与えるのか、そうした

---

<sup>55</sup> ディキンソンが用いる「不滅」(“Immortality”)は宗教的な用語であると同時に、詩の永遠性を意味する。文学の手ほどきをしてくれたベンジャミン・ニュートン (Benjamin Newton) についてヒギンソン宛ての2番目の手紙にこう書いている——「私が少女の頃、お友達がいる、その人は私に不滅を教えてくださいました。ただあまりにもそばに行きすぎて、彼は戻らず、それからすぐ、私の先生は亡くなりました」(“When a little Girl, I had a friend, who taught me Immortality - but venturing too near, himself - he never returned - Soon after, my Tutor, died.” [L 261])。

ことを深く考えているのではないだろうか」 (“[W]ith friends and family, she could expect content and context of letters to overwhelm poetics, but with Higginson, more than any other correspondent, she presumably thought deeply about how he was reading her and about what the impact of his reading might have on her poetry.” [17])。マッケンジーの解釈を援用するならば、やがてヒギンソンが戦争に赴く段になり、それまでディキンソンが人知れず培ってきた戦争への眼差しが、手紙や詩の言葉となり、部分的ではあるが、ヒギンソンに伝えられたことになる。そもそも戦争の話題は、直接会ったこともない、文通を初めて間もないヒギンソンに対して、容易に話題にするのは躊躇われたのではないか。ディキンソンなりに十か月ほどの月日が必要でもあったのだろう。

そのうえで、ディキンソンがヒギンソンに書簡を送るという行為に反逆性を見過ごすことはできない。ヒギンソンは過激な奴隷制廃止論者として知られていたことは先述したとおりである。奴隷制打破のためにハーパーズ・フェリーを襲撃したジョン・ブラウンをヒギンソンは支援していた。デイヴィッド・S・レノルズ (David S. Reynolds) は、1859年にディキンソンの父が「反ジョン・ブラウン連合集会」を支持する書簡を送ったことに言及して、「文学の法則に対する内なる反逆において、ディキンソンはジョン・ブラウンの最も因習打破主義的な支持者ヒギンソンに導きを求めた」 (“[I]n her private rebellion against literary laws, Dickinson sought guidance from John Brown’s most iconoclastic supporter: Thomas Wentworth Higginson.” [*John Brown, Abolitionist* 450]) と意味づける。

ディキンソンが戦地にいるヒギンソンに送った書簡は、詩人として臨んだものであった。その意味でディキンソンの「反逆性」は「文学の法則」を打破するという狭義のものに留まらず、時代と関わりつつ、詩人としての意識を育んでいくものであったに違いない。当初は自身の詩や文学についての話題に限られていた文通も、回を重ねて行くうちに、戦争という現実も言及されるようになる。人々を動揺させ、ともすれば同じ方向へと人々を促す時代にあって、「私には戦争は斜めの場所に思えます」という言葉は、詩人としての立ち位置を示すものでもある。直線のようにまっすぐではない。こうあるべきという見方からは逸れる。時代の言葉を受け売りに用いることはせず、自分の見方を反映させた言葉を使う。この「斜めの」姿勢には、一見、控えめなようであり、したたかな反逆性がある。

「斜めの」(“oblique”) の語を用いたもうひとつの詩 “The Robin is a Gabriel” (F 1520) では、ニュー・イングランドでお馴染みのコマツグミを詩人に喩えている<sup>56</sup>。コマツグミといえば F 256 の詩 “The Robin’s my Criterion for Tune -” 「コマツ

<sup>56</sup> ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau) はコマツグミの鳴き声をニュー・イングランド的なものとして 1852年4月11日に記している、「コマツグミがホ

グミがわたしの歌の基準です」にもあるように、ニュー・イングランドに生きる詩人の姿を投影した鳥だ。自身の分身ともいえるコマツグミについて、“The Robin is a Gabriel” (F 1520) の詩では「ニュー・イングランドの農夫」 (“the New England Farmer”) と記し、その信条を「斜めの誠実さ」 (“oblique integrity”) と表現している。

ウェブスター辞書の定義を参考にするならば、「斜め」 (“deviating from right line; not direct”) と「誠実さ」 (“uprightness; honesty”) の組み合わせは、とるべき方向から逸れることを「誠実」としており、一見、撞着語法的な印象を与える。だが、「真直ぐ」に直視するのではなく、「斜めの」眼差しを、詩人ディキンソンは敢えて向ける。戦後、15年を経て1880年頃に書かれたこの詩には、「直接」 (“direct”) ではない関わりかたこそ「誠実さ」 (“integrity”) を貫くことができるとある。戦争における「生」と「死」、それらにともなう「苦しみ」の主題に取り組むうえで、容易に把握できぬ、受け入れ難い「隔たり」があつてこそ、ディキンソンを探索へと突き動かしていったのである。

---

スマーの森の南で歌っているのが聞こえる。ニュー・イングランドの村の暮らしに結びついた音だ (“I hear a robin singing in the woods south of Hosmer’s, just before sunset. It is a sound associated with New England village life.” [Thoreau on Birds 437])。

## 第2章

### 定期刊行物の戦争詩とディキンソン

[W]e will mind ourselves of this young crusader -  
too brave that he could fear to die. (L 255)

#### 序節

19世紀中葉のニュー・イングランドに暮らしながら、南北戦争に無関心でいることができるだろうか。没後百年間、エミリー・ディキンソンの場合、アメリカを二分し、未曾有の死傷者を出した初の近代戦争の最中、同時代の影響をほとんど受けることなく、いわば真空のなかで詩作していたかのように見なされてきた<sup>57</sup>。戦争終結後百年を経た1960年代に、エドモンド・ウィルソン (Edmund

---

<sup>57</sup> ディキンソンが同時代の社会の動向に無関心であったとする批評の主なものとして、トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) 編集ディキンソン全詩集出版を受けて評伝を書いたリチャード・シューアル (Richard Sewall) の例がある。シューアルは、ディキンソンを「個人的な自我と個人的な領域の詩人」(“a poet of the private self and the private sphere”) と見做している。カール・ケラー (Karl Keller) およびデイヴィッド・ポーター (David Porter) も同様で、ケラーは、ディキンソンを同時代から隔絶した存在とみなす——「ディキンソンが書いたものをいかなる意味においても政治的であると言及することは全くできない。他の人物ならほとんど常に何らかの意味で可能ではあるが。彼女には政治的なものを創作する能力が欠けていることは次の事実から最もよくわかる、彼女には自分に耳を傾けてくれる人の存在を想像できないのである。この理由のため、予型論的な問題でもあるのだが、彼女は自分の存在が歴史上の出来事の外にあり、そこから隔たったものとみなしている」(“[I]t is not at all possible, I believe, to refer to her writings as political in any sense, whereas those of the others almost always are in some sense or other. Her lack of an ability to invent politics is best seen in the fact that she could not imagine anyone listening to her. For that reason—and it is a matter of typology —she sees her existence as both outside of and apart from action in history.” [122])。同様にデイヴィッド・ポーター も内向的なディキンソンの眼差しについてこう述べている——「ディキンソンの詩には社会的な現実、具体的な出来事、政治、現存した人々について、実証できる方法で言及した例はほとんどない。戦争の年月から生み出された洪水のような詩においても戦争について何もないのは驚くことだ。その代わりに、かなりの部分の言葉が、私たちが気付いてきたような方法で、内的に比喩的であり、それ自体が経験の権威から分離し、読みにくい形と選り抜きの大胆さで、自己本位で誇張したものになっている」



Wilson) は南北戦争中のアメリカ文学の動向を『愛国の血糊』(*Patriotic Gore*, 1962) で論じた。そのなかでディキンソンについて次のように述べていることはすでに序章および第 1 章で触れた——「南北戦争はディキンソン嬢にとって特に多作の時期であったが、私の知る限り、詩において戦争に言及しておらず、手紙においてもほとんど言及がない」(“The years of the Civil War were for Miss Dickinson especially productive, but she never, so far as I know, refers to the war in her poetry, and there are very few references to it in her letters.” [488])。だが、事実は異なる。

ウィルソンの否定的な見解とは裏腹に、ディキンソンもまた熱心な新聞購読者であり、戦況を伝える「速報」(“Bulletin”) を逐一追っている<sup>58</sup>。アマストから出征した青年たち——アダムズ夫人の息子やフレイザー・スターンズ (Frazer Stearns) の死——や T・W・ヒギンソン(T. W. Higginson) の動向をディキンソンが知るのには新聞を通してなのである<sup>59</sup>。人々の関心が南北戦争へと向けられ、ジ

---

(“Dickinson’s poems have remarkably few references to a social reality, to particular events, to politics, to real people in a verifiable way. There is, astonishingly, no Civil War in the flood of poems from the war years. Instead, a considerable part of the language is inwardly parabolic in the way we have noticed, having detached itself from the authority of experience and become, in its cramped form and selectional daring, self-regarding and hyperbolic.” [*Dickinson, the Modern Idiom* 115])。

<sup>58</sup> ディキンソン家の雑誌購読についての基本情報はジャック・L・カップス (Jack L. Capps) の *Emily Dickinson’s Reading 1836-1886* に拠る。詩の主題や表現 (警句的なで端的な表現、冒頭行のインパクトの大きさなど) がいかに雑誌から影響を受けたかが指摘されている。

<sup>59</sup> 雑誌や新聞がディキンソンに与えた影響についてはジョアン・カークビー (Joan Kirkby) を参照。カークビーはディキンソンが生きた時代はまさしく、アメリカのジャーナリズムが発展した時代であることを強調し、ディキンソン家の知的環境について説明している——「ディキンソン家が購読していた雑誌は、洗練され、志高く、当時の最新の思想に共同体が通じており、その地方や毎日の暮らしの有意義性に慣れておく重要性に鋭くも配慮したものだった」(“The periodicals to which the Dickinsons subscribed were urbane and high-minded, keenly aware of the importance of keeping their community abreast of the latest thought of the day and attuned to the significance of the local and the everyday.” [139])。カークビーはディキンソンが 10 代前半の頃の記事を例証に用いているため、実際にディキンソンが読んだかは疑問に思われる例も散見され、時代的に噛み合わない指摘が気になる。ディキンソンの知的好奇心に雑誌や新聞が不可欠な役割を担った例としては、戦争の動向だけでなく、ダーウィンの進化論や天文学など当時の科学の最先端の情報、作家や詩人の動向 (出版や死) があり、これらの話題にディキンソンは書簡で機敏に反応している。シャノン・L・トマス (Shannon L. Thomas) はさらに厳密にディキ

ジャーナリズムは飛躍的に発展する。戦争中に新聞購買数が急激に伸びたことから、南北戦争はアメリカのジャーナリズムに貢献した大事件といえる<sup>60</sup>。『ニューヨーク・ヘラルド』(*New York Herald*) は当時の額にして 50 万ドルの予算で特派員を大勢派遣し、戦場からの報告を逐一掲載することで読者の要求に応えた。他紙もこれに倣い、競って戦況を報道している (Hooker 91)<sup>61</sup>。

---

ンスンとマスコミとの関わりについて『スプリングフィールド・リパブリカン』を中心に分析している。ここでトマスはディキンソンがあくまでも “an artist” として、マスメディアの一読者の立場にあると言及している。

<sup>60</sup> 人々が熱心に戦争報道を求めた傾向は同時代の文学作品にも反映されている。戦後 1867 年に出版された J・W・デフォレスト (J. W. De Forest) の『ミス・ラヴェネルの分離主義者から愛国者への転向』(*Miss Ravenel's Conversion from Secession to Loyalty*) は、南部によるサムター攻撃後間もないニュー・イングランドの架空の町ニューボストンに住む主人公エドワード・コルバーン (Edward Colburne) の日常から始まる。戦況報道を読みに出掛けるのが彼の日課である。

In those days, not yet a soldier, but only a martially disposed young lawyer and arathful patriot, he used to visit the New Boston House nearly every evening, running over all the journals in the reading-room, devouring the telegraphic reports that were brought up hot from the newspaper offices, and discussing the great political events of the time with the heroes and sages of the city. (4)

当時はまだ兵士ではなく、戦争に興味を持つ青年弁護士であり[南部の攻撃に] 激怒する愛国者に過ぎなかった。そんな彼は、ニューボストンハウスをほとんど毎夕訪れるのを常とし、閲覧室の新聞に全て目を通し、新聞社から到着したての電信報道をむさぼるように読み、当節の政治的重大事を町の英雄や賢人たちと論じあった。

1826 年生まれのデフォレストは、同時代の文学者の中では珍しく従軍し、「直接体験で出来事を書き留めた」 (“chronicled events at first hand” [ix]) 作家である。物語となる舞台の大学町ニューボストンは、ディキンソンが住んだアマストを彷彿とさせる。エリザベス・ヤング (Elizabeth Young) は、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) が南北戦争の小説執筆に「若い女性作家たちが不釣り合いなほど群がっている」 (“incongruously overrun by ‘young-lady writers’” [7]) と懸念した事実と言及している。ハウエルズは、従軍経験のある男性作家デフォレストのこの小説を取り上げ、経験に基づく (“authentically”) 故に「芸術的に」 (“artistically”) 書かれていると賞賛した。しかし読者の大半を占めた女性たちには、ハウエルズやデフォレストたちが期待していたほどは受け入れられなかった (Young 7-8)。

<sup>61</sup> デイヴィッド・S・レノルズ (David S. Reynolds) は、1850 年代にディキンソンが『ス

ディキンソン家では『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*)、『ハンプシャー・アンド・フランクリンエクスプレス』(*Hampshire and Franklin Express*)、『ハーパーズ・ニュー・マンスリー』(*Harper's New Monthly*)、『アマスト・レコード』(*Amherst Record*)、『アトランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*)などの雑誌や新聞を購読しており、ウィルソンの指摘に反して彼女の書簡には戦争に関する記述が随所に見られる。実際、1861年に4通、1862年に7通、1863年に2通、1864年に2通、そして1865年に1通の書簡で戦争についてディキンソンは触れており、戦況や人々の話題に関心を払っていたことが分かる<sup>62</sup>。しかも、単に熱心な読者であったばかりでない。北軍系の新聞にディキンソンの詩が掲載されていることをカレン・ダンデュランド(Karen Dandurand)が1984年に発表している(“New Dickinson Civil War Publications” 12-17)<sup>63</sup>。ディキンソンにとって南北戦争の時期とは、アマストに届く戦況報告に衝撃を受け、新聞・雑誌に詩が掲載され、第一章で先述したように文芸批評家トマス・ウェントワース・ヒギンソン(Thomas Wentworth Higginson)との文通が開始した時でもある。しかもディキンソンは生涯書いた詩の半分以上の九百篇近くをこの時期に書いている。多いときには一日一篇のペースで書いていた時もある。これは単にディキンソン個人の詩人としての成果ではなく、彼女を取り囲む動乱の時代が彼女を詩作へと駆り立てたともいえる。

本章では、最も多作だった南北戦争期に、ディキンソンが詩人として同時代

---

プリングフィールド・リパブリカン』を愛読し、とりわけ犯罪記事、大惨事の記事を好み、その扇情的な表現に影響を受けたことを指摘している(*Beneath the American Renaissance* 429-32)。また、新聞の戦争記事とディキンソンの詩作との関係についてはタイラー・B・ホフマン(Tyler B. Hoffman)を参照。特に、アンティータムの戦い(1862年)の戦況報告をディキンソンがいかに詩で再現したかを具体的に分析している。

<sup>62</sup> ディキンソンが戦争中に送った書簡で戦争や政治に言及しているものとして、13通残っている。解釈によっては今後さらに増えるだろう。1861年にはL 234(ノアクロス姉妹宛)、L 235(ボウルズ夫人宛。)、L 240(兄オースティン宛)、L 245(ルイーザ・ノアクロス宛)。1862年はL 255(ノアクロス姉妹宛)、L 256(ボウルズ宛)、L 257(ボウルズ宛)、L 265(ヒギンソン宛)、L 271(ヒギンソン宛)、L 272(ボウルズ宛)、L 277(ボウルズ宛)。1863年はL 279(ノアクロス姉妹宛)、L 280(ヒギンソン宛)。1864年はL 297(妹ラヴィニア宛)、L 298(ノアクロス姉妹宛)、1865年はL 308(妹ラヴィニア宛)。

<sup>63</sup> これまで生前の詩の発行はアマスト近郊のスプリングフィールドの地域とボストンのみであるとされていたが、ダンデュランドの発見により、ニューヨークやブルックリンでも出版されていたことが判明し、計10篇が4都市で生前に発行されていたことになる。

の社会と関わっていた重要な例として、北軍系の日刊紙に掲載された詩に注目する。ダンデュランドの発見によって、ディキンソンが南北戦争に無関心なところか間接的なりとも戦争協力をしていること、そしてディキンソンの詩がほとんど修正されずに同時代の人々に受け入れられていたことが明らかになった。その意味でダンデュランドの発見の意義は非常に大きい。序章で先述したように、この発見から30年間、南北戦争とディキンソンの詩作との関わりが盛んに論じられてきた。それにもかかわらず、ディキンソンの詩は掲載された新聞紙面から切り取られ、掲載された事実および掲載された詩のみが個別に論じられてきた傾向がある。本章では、同時代におけるディキンソンの詩の意義を検証するうえで、人々の目に留まった新聞紙面にディキンソンの詩を戻して分析する。新聞という公的な場に現れたディキンソンの詩を通して、ディキンソン自身はどのように戦争の時代に繋がっていたのか。また、どのように時代から乖離していたのかを考察する。

## 第1節 北軍系新聞に掲載されたディキンソンの詩

ディキンソンの詩は生前に、再掲載も含めて18箇所で開催されている。その3分の2以上を占める13箇所が南北戦争中であり、北軍系新聞——『ブルックリン・ユニオン』(*Brooklyn Union*), 『ドラム・ビート』(*Drum Beat*), 『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*)——などに掲載された<sup>64</sup>。特

---

<sup>64</sup> フランクリンの資料を参考にすると次のとおりである(1531-32)。但しここでの詩の一行目の表記は掲載時のものに拠る。

1852年 “Sic transit gloria mundi” (F 2; *Springfield Daily Republican*, 20 February 1852).

1858年 “Nobody knows this little rose” (F 11; *Springfield Daily Republican*, 2 August 1858).

1861年 “I taste a liquor never brewed” (F 207; *Springfield Daily Republican*, 4 May 1861 / *Springfield Weekly Republican*, 11 May 1861).

1862年 “Safe in their alabaster chambers” (F 124; *Springfield Daily Republican*, 1 March 1862).

1864年 “Flowers - Well - if anybody” (F 95; *Drum Beat*, 2 March 1864 / *Springfield Daily Republican*, 9 March 1864 / *Springfield Weekly Republican*, 12 March 1864 / *Boston Post*, 16 March 1864).

“These are the days when birds come back” (F 122; *Drum Beat*, 11 March 1864).

“Some keep the Sabbath going to church” (F 236; *Round Table*, 12 March 1864).

“Blazing in gold and quenching in purple” (F 321; *Drum Beat*, 29 February 1864 / *Springfield*

に本章で取り上げる『ドラム・ビート』は北軍衛生委員会 (U. S. Sanitary Commission) の資金調達を目的に、1864年2月22日から3月5日(及び11日の特別号)までの期間、ブルックリンで発行された日刊新聞である。ブルックリンでの行事と連携して発行され、発行規模は六千部に及ぶ (Dandurand, “*Drum Beat*” 89)。

ディキンスンの詩がなぜこうした北軍系の新聞に掲載されることになったのか、その正確な経緯は判明していないが、ダンデュランドの推測が最も妥当であろう。ダンデュランドによれば、編集に携わった牧師リチャード・ソルター・ストーズ (Richard Salter Storrs, Jr.) はディキンスンの兄夫婦と親しく、兄の妻スーザンを介してディキンスンの詩が渡されたのである。これについては R・W・フランクリン (R. W. Franklin) の見解も同様である (Franklin, *Poems* 156)<sup>65</sup>。こうした新聞掲載を、ディキンスン自身が認めていたかは定かではない。だが、“Safe in their Alabaster Chambers -” (F 124) の詩が『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』 (*Springfield Daily Republican*, 1 March 1862) にスーザンの詩 (“The Shadow of Thy Wing”) と共に掲載された折、スーザンはその成果を一か月前のバーンサイド (Ambrose Everett Burnside) 将軍によるノアロック島攻略に喩えて次のように書いている——「『リパブリカン』を読んだかしら。バーンサイド将軍と同じくらい私たちの艦隊を始動させるのに時間がかかるわね」 (“Has girl read Republican? It takes as long to start our Fleet as the Burnside.” [*Open Me*

---

*Daily Republican*, 30 March 1864 / *Springfield Weekly Republican*, 2 April 1864).

“Success is counted sweetest” (F 112; *Brooklyn Daily Union*, 27 April 1864).

1866年 “A narrow fellow in the grass” (F 1096; *Springfield Daily Republican*, 14 February 1866 / *Springfield Weekly Republican*, 17 February 1866).

1878年 “Success is counted sweetest” (F 112; *A Masque of Poets*).

<sup>65</sup> マーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) も “Success is counted sweetest” の『ブルックリン・デイリー・ユニオン』 (*Brooklyn Daily Union*) 掲載については、ダンデュランドと同様の説明を付している——「この詩は南北戦争中に『ブルックリン・デイリー・ユニオン』において最初に掲載された。スーザンがこの詩を、エヴァグリーン[兄夫婦の家]の客人であったリチャード・ソルター・ストーズ牧師に手渡したらしい」 (“This was first printed during the Civil War in the *Brooklyn Daily Union*. It is likely that Susan passed the poem along to the editor Reverend Richard Salter Storrs, who was a guest at the Evergreens.” [*Open Me Carefully* 86]). ダンデュランドの発見を評価したうえで、ヴァージニア・ジャクソン (Virginia Jackson) はさらに別の可能性を提示して、ディキンスンが詩を渡した人物はリチャード・ソルター・ストー (Richard Salter Storrs) ではなく、ニューヨーク在住のガートルード・ヴァンダービルト (Gertrude Vanderbilt) であると推論している (252n.3, 253n.14)。

Carefully 96-97] )。ここから、ディキンソンが掲載を認め（或いは黙認し）、スーザンと掲載の話をしていた可能性が窺がえる。ディキンソンの詩は、家族や知人の間での回覧の枠を超えて、北軍支援の寄付を募る新聞にも掲載され、社会と繋がっていたのである。

さて、ディキンソンの 3 篇の詩が掲載された『ドラム・ビート』の紙面をここで具体的に見てみたい。『ドラム・ビート』には、寄付を募るブルックリン慈善市の報告を中心に、病院や戦地からの報告、戦争にまつわる記事が並ぶ。執筆には著名人が多数参加し、小説家ルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott)、詩人・編集者ウィリアム・カレン・ブライアント(William Cullen Bryant)、詩人・小説家オリヴァー・ウェンデル・ホームズ(Oliver Wendell Holmes)、牧師・弁論家エドワード・エヴェレット(Edward Everett) など当時の文学界の錚々たる顔ぶれが見られる。例えば 1864 年 2 月 29 日付の号ではブライアントが「戦争の大義」(“The War’s Cause”) と題して南部の奴隷制を非難し、1864 年 3 月 11 日付の号ではワシントンで看護婦として働いたオルコットの『病院点描』(*Hospital Sketches*) の一部が掲載されている。

『ドラム・ビート』には毎号、数篇の詩が掲載されている。題名を見ると、“Rally!”、“Bully for Memminger”, “Wanted!”, “Rhymes Sent with Needle Books To the Soldiers”, “The Virginia Mother”, “The Vicksburg”, “Footsteps”などがあり、明らかに、戦闘、兵士、銃後を守る女性の言葉、逃亡奴隷への同情など、戦争の意義に関するものが多い。

例えばディキンソンの詩と同じ 1864 年 3 月 11 日号の一面に掲載された匿名の詩「集まれ！」(“Rally!”) は次のように始まる。

Rally, for our native land!  
Heart to heart and hand to hand,  
Freedom’s rights maintaining;  
Rally till from shore to shore  
Treason’s voice is heard no more,  
Not a foe remaining!

集まれ、我らの祖国のため！  
心と心、手と手を携え、  
自由の権利を守りつつ。  
集まれ、岸から岸までもろとも  
反逆の声はもはや消え、  
敵が残らずいなくなるまで！

“Freedom’s rights”, “Treason”, “foe”などの言葉から、「自由」と「権利」を守る主張が前面に出ている。このように勇ましい命令形が 3 連にわたって繰り返されている。詩の題名自体が読者を戦争へと誘い、北部の側に立って書かれているのは明確である。

だが、同じ号の新聞の 7 面下方に掲載されたディキンソンの詩は、戦争とはほとんど無関係な印象を与える。ディキンソンの詩は、周囲の記事や作品からひとつだけ浮いている。この違和感をどう解釈したらよいのだろうか。ディキンソンの伝記を書いたリチャード・シューアルは、政治的主張や国家的動向に対するディキンソンの見解は詩や書簡においてほとんど見当たらないと指摘している(535)。その特徴は、『ドラム・ビート』に掲載された彼女のこの詩にも該当するともいえる。3 月 2 日付 “Flowers” (F 95; “Flowers - Well if anybody”), 同年 2 月 29 日 “Sunset” (F 321; “Blazing in Gold and quenching in Purple”), 同年 3 月 11 日 “October” (F 122; “These are the days when Birds come back -”) の 3 篇の詩は、それぞれ編集者によって題名が付けられている。少なくとも題名の付け方に、自然詩として扱おうとする編集者の意向が感じられる<sup>66</sup>。先の「集まれ！」と同じ号に載った、ディキンソンの詩「十月」は次のように始まる<sup>67</sup>。掲載された形で前半を引用する。

These are the days when birds come back,  
A very few, a bird or two,  
To take a backward look.

These are the days when skies resume  
The old, old sophistries of June, -  
A blue and gold mistake.

いまごろは鳥たちが戻ってくるとき、  
ほんの数羽、一羽か二羽が、

---

<sup>66</sup> トッドとヒギンソン編集による 1891 年出版の詩集では “Blazing in Gold and quenching in Purple” (F 321) のタイトルは“The Juggler of Day” となっており、また “These are the days when Birds come back -” (F 122) は 1890 年版では“Indian Summer”のタイトルが付けられ、「自然」の項目に分類されている。

<sup>67</sup> フランクリン版[B]の型に拠る(Vol. I, 156)。『ドラム・ビート』に掲載されたこの形ではファシクルにディキンソンが清書したものと若干相違がある。ダッシュがカンマになっている点、大文字が小文字になっている点などである。

うしろを振り返る。

いまごろは空がああ古い、昔の  
六月の詭弁を取り戻すとき  
青と金の思い違いを。

3月号の紙面に掲載されたディキンソンのこの詩は10月に秋が深まっていくなか、ふと夏日が訪れる、そんな気配を捉えたものだ。6月の「詭弁」のようなインディアンサマーが訪れる。着実に冬に向かって進むなかで、その惑わしを見抜き、捉えた詩だ。ディキンソンの詩の直後には、「ヴィックスヴァーグの老朽船」(“The Vicksburg Scow”)と題する詩が続き、1863年4月から7月にかけてのグラント将軍の行軍が勇ましく歌われている。さらに締め括りとして、慈善市に協力した人々への謝辞が述べられている。

また、『ドラム・ビート』2月4日号に“Sunset”というタイトルで掲載されたのが“Blazing in gold, and quenching in purple,” (F 321)である。掲載された形で記す。

#### SUNSET.

Blazing in gold, and quenching in purple,  
Leaping like leopards in the sky,  
Then at the feet of the old horizon  
Laying her spotted face to die;  
Stooping as low as the oriel window,  
Touching the roof, and tinting the barn,  
Kissing her bonnet to the meadow -  
And the Juggler of Day is gone!

黄金に燃え立ち、紫になって消えていく、  
空を跳ぶ姿は豹たちのよう、  
それから古い地平線のふもとに  
斑の顔を伏せて息絶える、  
その身を出窓まで低く屈め、  
屋根に触れ、納屋に陰翳をつけ、  
ボンネットに触れて牧草地に投げキスをする -  
やがて陽の魔術師は姿を消してしまう



日没前、鮮やかに染まる夕空の壮大な移り変わりが、豹の動きに見立てられている。動詞の進行形 —— “leaping”, “laying”, “stooping”, “touching”, “tilting”, “kissing” —— が各行で次々と顔を出し、空いっぱいに広がる黄金色と紫色のうねるような躍動感が豹の素早い動きに準えられ、韻律も句またがりで一気に進む。

この詩が掲載された第3面には、2面から続く「夜明けの野営」 (“Bivouac at Daybreak”) の記事があり、2万人もの兵士たちが武器を枕に眠る様子が描かれている。その真下には「謎」 (“Enigma”) というタイトルの詩があり、“A winged minister of Truth” (「真実という羽根をつけた牧師」)、“a prison-house of groans and tears” (「呻きと涙の牢獄」) が登場して、語り手は剣の刃に倒れる。その後ディキンソンの詩が配置されている。ディキンソンの詩の後には、ジョージ・ワシントン (George Washington) の行軍の日記が続き、その後 “Odds and Ends” (「雑記」) というタイトルでニューヨークの連隊のこぼれ話が並ぶ。そして野戦病院の様子を綴った「ナッシュビルの病院における光景」 (“Scene in a Hospital at Nashville”)、黒人兵の歌を記した「元黒人奴隷たちの歌」 (“Contraband Singing”) が続く。同じ紙面に掲載された記事や詩を見渡すと、ディキンソンの自然詩はいかにも異質である。

後にヒギンソンやトッドが「自然詩」として分類した詩が、何度も短期集中的に、しかも戦争関連の記事や作品を中心に掲載している新聞に選ばれたのは何故だろうか。同じ紙面の他の作品とディキンソンの詩との隔たりは主題を見ても大きい。しかもこの3篇のうち、戦争中に清書されたのは “Sunset” (F 321; “Blazing in Gold and quenching in Purple”) だけである。“Flowers” (F 95; “Flowers - Well if anybody”) と “October” (F 122; “These are the days when Birds come back -”) が清書されたのは戦前であり、戦争に触発されたものではない。確かに『ドラム・ビート』の編者がディキンソン家の知人であったため、個人的な「慈善」としてディキンソンが、あるいは家族や友人が彼女の詩を編者に渡したものと推測できる<sup>68</sup>。

戦争前に書かれ、直接戦争に関わりのない印象を与える詩が何度も北軍支援の新聞に掲載された事実について、ダンデュランドは、ディキンソンの詩を受け入れる下地が同時代に既にあった証しとして述べている。掲載の際にほとん

---

<sup>68</sup> 『ドラム・ビート』に掲載された詩とは異なり、戦争に関連した印象を与える詩が戦時中に掲載された例もある。1864年4月27日に『ブルックリン・デイリー・ユニオン』 (Brooklyn Daily Union) において無題で掲載された “Success is counted sweetest” (F 112) は、戦死者の言葉として解釈することも可能である。しかしこの詩もやはり戦前の作である。

ど修正されておらず、またディキンソンの「無言の承諾」(“her tacit consent” [“Civil War Publication” 22] ) があつた可能性も言及している( “Civil War Publication” 21-27)。ダンデュランドは紙面における主題の異質性については何も言及していないが、ディキンソンの詩の「自然」の主題は却って、戦時の人々に喜ばれたのだろう。季節の移り変わりや美しい夕空を描いた詩は、動乱の時代にあつて気持ちに潤いをもたらすものだったに違いない。その意味で、ディキンソンの詩は、編集者たちには埋め草として、無難な作品に映つたものとも考えられる。紙面に載せるには一見、無害であり、自然のひとコマを凝縮した、ささやかな一篇として重宝だったのだろう。

ただし、現代の視点からすると、これらの詩を戦争の悲惨な情景と結び付けて読むことも可能である。“These are the days when Birds come back -” (F 122) の前半部分では、鳥に残兵の姿を重ねて、多くの仲間を失つた戦場を振り返る様子を連想することもできる。「古い、昔の六月の詭弁」(“The old, old sophistries of June”) には、古の時代から人々を駆り立ててきた、戦いにおける栄光を捉えても良い。また、“Blazing in Gold and quenching in Purple” (F 321) の詩に、銃弾や大砲が炸裂する戦場の動乱を読み込むこともまたできる。

## 第2節 ジュリア・ウォード・ハウの戦争詩

当時の詩人や作家は、雑誌や新聞において南北戦争という主題をどのように表現したのだろうか。ここで、戦争の主題を直接扱つた女性詩人と女性作家を見てみたい。エリザベス・ヤング (Elizbeth Young) は、この時期に活躍したのは男性だけではなく、むしろ女性たちこそ「民間および戦闘の領域で南北戦争に携わつた主なる参加者」(“key participants in the Civil War in civilian and combat arenas” [2])であつたと強調する。男性が「前線」(“battlefront”)を、そして女性が「銃後」(“homefront”)を守るべきとする、性差による境界が、戦争中には「浸食され」(“eroded” [2])ている<sup>69</sup>。ただし、性差に限らず、「戦う」という行為には、戦場で武器を持って目の前の敵と戦うことだけではなく、様々なレベルでの

<sup>69</sup> 具体的な役目をヤングは列挙している——「家庭において大規模な支援を率先する組織づくりをしながら、女性達は軍隊において料理人、洗濯係、看護師、スパイ、偵察、兵士として働いた」(“Organizing massive support initiatives at home, women worked in the army as cooks, laundresses, nurses, spies, scouts, and soldiers.” [2])。ディキンソン自身、妹ラヴィニアと兄の妻スーザンが戦争のための奉仕活動に出掛けていることを「ヴィニーとスーは、戦争に出掛けてしまいました」(“Vinnie and Sue, have gone to the War” [L 272])と書いている。(戦争のための)奉仕活動を「戦争に行く」とする表現には、女性たちの自負心を読み取ることもできるだろう。

戦い——偏見、差別、伝統、慣習などとの戦い——がある。女性にとっては「書く」という行為そのものに、それぞれの「戦い」が存在していたとヤングは指摘する。

戦争詩で活躍した女性詩人の代表格ジュリア・ウォード・ハウ (Julia Ward Howe) もまた、彼女なりの「戦い」を経験した作家・詩人といえる。結婚前にすでに著書があったものの、夫サミュエル・グリドレイ・ハウ (Samuel Gridley Howe) は妻が結婚後も文筆業を続けることには反対であった。夫との確執のなか、5人の子供を育て、2冊の旅行随筆、戯曲、自叙伝、多数の随筆をハウは書いている<sup>70</sup>。だが、21世紀の視点から見ると、意外にも、ハウの「戦争詩」は、彼女自身の女性ならではの「戦い」とは無関係に、いわば北部の党派的な印象を放つ。

1862年2月号の『アトランティック・マンスリー』巻頭ページを飾ったハウの「リパブリック賛歌」(“Battle Hymn of the Republic”)はいわゆる“battle piece”として特に成功した例である<sup>71</sup>。ディキンソン家も購読していたこの雑誌は、1857年創刊時から奴隷制批判に連なってきた。雑誌に深く関わった人物の多く——ジェイムズ・ラッセル・ローウェル (James Russell Lowell), フランシス・アンダーウッド (Francis Underwood), ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアー (John Greenleaf Whittier)——がニュー・イングランド奴隷制反対同盟に参加していた背景もあり、戦争中に掲載された作品には、奴隷制批判に関わるものが目立つ (Ellery Sedgwick 62)。

夫と共に反奴隷制主義者であったハウもまた、北軍衛生局の資金集めのためにボストン慈善市に協力し、戦後は女性参政権や社会問題について発言した。ハウの一連の戦争詩は *Later Lyric* (1866) に収められている<sup>72</sup>。収録された戦争詩は、「我らの国」(“Our Country”)、「最初の殉教者」(“The First Martyr”)、「罰」(“Requital”)、「国旗」(“The Flag”)などのタイトルが示すように、北部への忠誠心、奴隷制を打破するために流された尊い血、自由の象徴を歌っている。また、「リパブリック賛歌」掲載の7か月前、すなわち戦争勃発3か月後の1861年7

<sup>70</sup> Faith Barrett 編 “Words for the Hour”: A New Anthology of American Civil War Poetry を参照 (384)。

<sup>71</sup> 「リパブリック賛歌」がいかに書かれ、広まったかについての有名な逸話は、ハウ自身が記している (*Reminiscences* 273-277)。

<sup>72</sup> ハウの夫サミュエル・グリドレイ・ハウは奴隷制反対者ジョン・ブラウンを支えた「秘密の六人」のひとりであった。ハウの詩作の詳細については西垣内磨留美『「リパブリック賛歌」とジュリア・ウォード・ハウ」を参照 (『ジョン・ブラウンの屍を越えて』67-87)。

月号『アトランティック・マンズリー』巻頭ページに載ったハウの「我らの隊列」(“Our Orders”)もまた、国旗を歌った詩である。

ハウの詩を含め、戦争中の『アトランティック・マンズリー』に掲載された詩に共通して見られるのは、「国旗」「自由」「神」などのモチーフである。北部の正当性、戦争続行の意義、信仰上の真理をそれぞれ歌っている<sup>73</sup>。ハウの「リパブリック賛歌」が広く知られたのは、北軍兵士が歌った「ジョン・ブラウンの屍」(“John Brown’s Body”)の節に合わせて作られ、軍歌として歌いやすいばかりか、信仰上の観点から戦争の意義を力強く説いているためであろう。ハウの「リパブリック賛歌」は次の一連から始まる。

Mine eyes have seen the glory of the coming of the Lord:  
He is trampling out the vintage where the grapes of wrath are stored;  
He hath loosed the fateful lighting of His terrible swift sword:  
His truth is marching on.

我が眼は見た、主の到来という栄光を。  
主は踏み潰しておられる、怒りの葡萄が貯えられた収穫を、  
主は放たれた、畏れ多い速さの剣の、運命の雷を、  
主の真理は進み続ける。

ハウは戦場の殺戮を秋の葡萄の収穫に喩えており、“vintage”, “grapes” など収穫にまつわる言葉を用いている。ここで詩人は戦いで夥しく流される血を嘆いてはいない。むしろ神の正義を実現させる戦いとして、その栄光を目撃した高揚感がこの詩にみなぎっている<sup>74</sup>。エドモンド・ウィルソンは、愛の象徴であるキリストの存在は「単に周縁」(“merely peripheral” [96])のものでしかなく、むしろ南部の悪を処罰する観点から、イザヤ書の怒れる神のモチーフが前面に出ていると指摘する(94-96)。この詩が掲載された1862年2月という時期を考えあわせると、ハウの詩が時代の風潮といかに合致していたかがわかる。ちょうどこの

---

<sup>73</sup> 南北戦争で用いられた「自由」(liberty, freedom)の概念とディキンソンの詩との関わりについてはクリスタン・ミラーの“Pondering ‘Liberty’: Emily Dickinson and the Civil War”を参照。

<sup>74</sup> ルネ・L・バーグラント(Renée L. Bergland)は戦時中の技術発達によって生じた視覚的な変革が、どのように文学作品に反映されたかを論じている。その一例として、ハウのこの詩における鳥瞰図的な視界を示唆している(“The Eagle’s Eye” 137)。

時期、北部は苦戦を重ねており、ハウの詩は北部に戦争続行の意義を与え、士気を高めるうえで、時宜を得たメッセージを帯びていたといえる (Grant 46-47)。

「国旗」「自由」「神」——という戦争詩のモチーフは、とりわけニュー・イングランドを中心とする宗教的土壌にも結びつく。「南北戦争において、宗教的レトリックが政治的事件に適用される際の強烈さは、アメリカの歴史における長い伝統を反映している」(“The intensity with which religious rhetoric was applied to political events in the Civil War reflects a long tradition in American history.” [A Voice of War 46]) と、ウォルスキーが指摘するように、北部の愛国心を煽るうえで教会が戦時中に果たした役割は大きい。愛国心をそのまま敬虔な信仰心に結びつけたのも教会であった。先述したように、親の世代の信仰をそのまま受け入れることに迷いや動揺が若い世代に広がる中、南北戦争は人々にとって、宗教的な「個人的試験」(“personal testing” [19]) の場となったことをアン・C・ローズ (Anne C. Rose) は指摘している<sup>75</sup>。また、奴隷解放あるいは戦争の大義に関しては、ウィルソンの説明が参考になる。ウィルソンは、アメリカの「擬似道徳的」(“pseudo-moral” [xvi]) な要素を、『愛国の血糊』執筆当時、冷戦下のアメリカの政治政策にも通じるものとして、激しく指弾する——「このような利他主義的な宣言を発することが我が国の公式政策となってきた。我が国が戦争に従事するとき、もしくは他国に進軍するときはいつでも、常に誰かを解放するためなのである」(“To utter these altruistic professions has become our official policy. Whenever we engage in a war or move in on some other country, it is always to liberate somebody.” [xxiii])。

ハウの戦争詩は、19世紀中葉までニュー・イングランドを中心に培われてきた、アメリカ詩のある種の道徳的要素を究極まで凝縮させた例ともいえる。詩の主題展開において、結末に何らかの道徳・教えを説く型が、特に南北戦争期に作られた詩に目立つ。「国家」「自由」「神」といった典型的なモチーフはそれぞれ、当時のアメリカにおける一筋縄ではいかぬ問題——ひとつの国家としての存続、人種、信仰——へと、様々な危うさを孕みながら結びついている。にもかかわらず、そうした問題を楽観的・肯定的な宗教的確信・説明に委ねている。その特徴は、ハウの「リパブリック賛歌」最終連にも顕著に表れている<sup>76</sup>。

In the beauty of the lilies Christ was born across the sea,  
With a glory in his bosom that transfigures you and me:

<sup>75</sup> 「個人的な試験」の実例として、スターンズの経験 (第3章において引用) を挙げる  
ことができる。

<sup>76</sup> この詩には本来もうひとつ連が存在していた。西河内氏は、削除された最終連について  
フローレンス・ハウ・ホール (Florence Howe Hall) を参考に言及している(79-80)。

As he died to make men holy, let us die to make men free,  
While God is marching on.

百合の美しさに包まれ、キリストは海の彼方で生を受けられた、  
御胸のうちの栄光はあなたがたやわたしを変貌させる。  
キリストは人のために逝かれた、我らも自由のために命を捧げよう、  
神が歩まれているときに

「人を自由にするために」(“to make men free”)の詩行が示すように、奴隷制反対論者ハウにとって南北戦争の意義とは奴隷解放であり、“God is marching on”の詩行には「歩む」とともに軍事的に「進軍する」意味も含まれる。この詩行を見る限り、残念ながらハウ自身の女性としての苦悩を見いだすことはできない。ハウ自身が抱えていた執筆をめぐる苦悩には何ら触れられていない。ハウの詩が男性兵士たちによって歌われたのは、時代の主潮に従った表現であった証しだろう。夢のなかでこの詩行が浮かび、起床後すぐに書きつけたというハウ自身による逸話を引いて、エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) は、ハウ自身を神の言葉を伝える器 (“vessel”) として位置付ける (“How News Must Feel When Travelling” 159)。ハウの言葉が「北部の人々の怒りを表す集団の声」 (“the collective voice of Northern wrath” [“How News Must Feel” 160]) となり、性差を越えて同時代の人々を促す力になったことは歴史によって証明されたといえる。

### 第3節 ディキンソンが手紙に書いた「戦争」

ハウとはまったく境遇の異なるディキンソンは、戦争に触発され、どのような表現を記したのか。先述したようにディキンソンはいくつかの手紙で戦争に言及している<sup>77</sup>。宛先は、ボウルズ他に、文芸批評家で、戦時中は黒人連隊を率いたヒギンソン、当時ボストンに住んでいた母方の従姉妹ノアクロス姉妹である。手紙の中でディキンソンはアマストの女性たちによる慈善裁縫会のこと、出征兵が花束を求めてディキンソン家に立ち寄ったことなどに触れ、大学と教会とが中心となって愛国心を煽っていた町の気配を伝えている<sup>78</sup>。

<sup>77</sup> ディキンソンが戦争に触れた手紙については註 62 を参照のこと。

<sup>78</sup> ブル・ランの戦いの後、アマストでは大学や教会が中心になって、人々の士気を高める演説が行われた。その一例として、1861年7月22日に説教を行ったC・L・ウッドワース (C. L. Woodworth) の説教があり、ウッドワース自身、次のような記述を残して

ここで特に取り上げたいのはアマストの若者フレイザー・スターンズの戦死を巡ってディキンソンが書いた 2 通の手紙と一篇の詩である。スターンズは、学生に戦意を鼓舞していたアマスト大学学長ウィリアム・オーガスタス・スターンズ (William Augustus Stearns) の息子である。彼は最初に志願した学徒兵であり、アマスト大学教授ウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark) とともに戦地へ赴いた。アマストの歴史書 *History of the Town of Amherst, Massachusetts 1731-1896* では、スターンズの死は別格の扱いである。将来を嘱望された青年であり、「連隊のなかでも理想的な兵士で、容姿端麗、友情に厚く、ひたむきな勇気を持ち主」(“ideal soldier of the regiment, handsome in face and person, true in his friendship, and enthusiastic in his devoted courage” [479]) として称えられ、英雄的存在であったことがわかる。彼の戦死についてディキンソンは、1862 年 3 月にノアクロス従姉妹とサミュエル・ボウルズそれぞれに宛てて書いている。どちらの手紙もアマストに広がる衝撃に直接触れており、ディキンソンと戦争との関わりを確認するうえで不可欠である。

しかし、同じ時期に書かれているにも関わらず、ディキンソンの表現はノアクロス姉妹に宛てた書簡 (L 265) とボウルズに宛てた書簡 (L 266) とでは大きく異なる。どちらもディキンソンが直接戦争に触れた顕著な例として引用されることが多いのだが、同時期に書かれたとみられるこの 2 通を照らし合わせて論じた例はほとんどない<sup>79</sup>。この 2 通を並べることでディキンソンが戦争中に用いた言葉の幅を確認できる。

まず、1862 年 3 月 14 日に戦死の報せが入って恐らく初期の段階に書かれたのが、ノアクロス姉妹宛ての手紙である。ここで目を引くのは、新聞記事を思わせる情報提供の仕方である。ディキンソン自身が手紙の冒頭で断っているように、スターンズの訃報は新聞の情報を元にして<sup>80</sup>。スターンズの遺体がアマ

---

いる—— 「次の安息日に、私は一日中そのこと [ブル・ランの戦い] について説教をした。(中略) 私はしばしば同じ主題で安息日になると説教をした。まったくのところ、大学では私はあまりにも熱心になりすぎたと思われていた。私の良き友タイラー教授が親切にも諫めてくれた。私があまりに多くの学生に影響を与えて、入隊させてしまったと彼は思ったのだ」 (“The next Sabbath I preached all day on the subject . . . I preached, frequently, on the same subject Sabbath evenings. Indeed, I was thought, at the college, to be over zealous, and my good friend, Prof. Tyler, kindly remonstrated, as he thought I was influencing too many of the students to enlist in the army.” [Leyda II 31])。

<sup>79</sup> ディキンソンの書簡を一冊の研究書で論じたマリエッタ・メスマー (Marietta Messmer) はノアクロス姉妹宛てのこの手紙について何ら言及していない。

<sup>80</sup> スターンズに関する新聞報道的な描写についてはバートン・リーヴァイ・セント＝ア

ストに戻って来た描写から始まり、戦死の場面、葬式の様子、参列した人々、牧師の説教、遺族の態度に至るまで、スターンズに関する情報を余すことなく伝えている。

また、この手紙全体の筆致も見ておきたい。ノアクロス姉妹は早くに両親を亡くし、ディキンソンはいわば姉役、母親役を務める関係にあり、20代の若いふたりに向けた手紙は次のように結ばれている。

皆でこの若い十字軍兵士のことを偲びましょう——勇敢すぎて死を恐れることを知らなかった彼のことを。みなで彼の調べを奏でましょう——恐らく彼に届くことでしょう。皆で悲嘆に暮れるエラを慰めましょう。牧師様のお話ですと、彼女は彼に「特別な信頼を寄せていた」そうですから。オースティンはすっかり打ちのめされています。もっと愛し合ひましょう。それが残された為すべきことなのです。

[W]e will mind ourselves of this young crusader – too brave that he could fear to die. We will play his tunes - maybe he can hear them; we will try to comfort his broken-hearted Ella, who, as the clergyman said, “gave him peculiar confidence.” . . . Austin is stunned completely. Let us love better, children, it’s most that’s left to do. (L 255)

ここで“crusader”という語が気になる。北部側の戦争の大義と深く関わる語であり、エドモンド・ウィルソンの表現を借用するならば、「北部と南部の利権の争いを、神に率いられた聖なる戦争へと転じることになったニュー・イングランドの十字軍兵士達」(“the New England crusaders who were to turn the conflict of interests between the Northern and Southern states into a Holy War led by God” [114-115]) を指す。つまりは戦争の正当性を表す語をディキンソンが用いていることになる。また、ここでディキンソンは、友人の戦死にまつわる彼女自身の衝撃や悲しみは書いてはいない。相手が年下の若い従姉妹であるためか、当時の常套句を用いており、敢えて強い感情を曝け出すことを控えたと考えられる。女性読者を意識した戦争文学については、ダニエル・アーロン (Daniel Aaron) が「お上品な文学」(“polite literature”) として取り上げている。当時、文学作品の読者の大半は女性読者が占めており、その趣味を反映させた「お上品な文学」は南北戦争前後、ある種の経験を排除した。その結果、普通の兵士の領域が、アメリカ文化の保護者 [女性] たちによって『境界外』に置かれたのも不思議でない。病気、泥酔、猥褻、冒瀆、犯罪は言及されるにしても僅かに仄めかされる

---

ーマンド(Barton Levi St. Armand) を参照(109-110)。



のみであった。火薬で煤け、シラミにたかられ、銃弾と砲弾に日々晒され、上官を妬み、黒人を憎む戦闘員は、主に女性である読者層に提示するにはほとんど不可能な主題であった」(“Polite literature before and after the War excluded certain kinds of experience, and it is not surprising that the territory of the common soldier should have been placed ‘off bounds’ by America’s cultural guardians. Disease, drunkenness, obscenity, blasphemy, criminality could only be alluded to if mentioned at all; powder-blackened, lousy combatants daily exposed to bullets and shells, resenting their superiors, hating the ‘Nigs,’ were hardly presentable subjects to the predominantly feminine reading public.” [vii])。この傾向は、遺族たちさえもスターズに会うことを禁じた医師たちの配慮にも結び付く<sup>81</sup>。

悲惨な現実をオブラートで包むように直視を避ける傾向がある一方で、戦争を伝えるマス・メディアの発展が人々に大きな衝撃を与えたことも確かである。戦場の写真やイラストを添えて報道するジャーナリズムが読者に与えた暴力性にエライザ・リチャーズは注目し、前線から銃後の読者へと直接的に伝えられた視覚的な衝撃のために、「ニュースの読者が戦争の負傷者と類似した状態であったかもしれない」(“reading news of the Civil War may have been analogous to receiving a battle wound.” [“How News Must Feel” 157]) ことも指摘している。

ディキンソンがノアクロス姉妹宛てて用いているのは、情報提供のうえで新聞の戦争記事の表現と、衝撃を控えた表現の、ふたつの要素が合体したものと言える。もちろん、ここで考察しているのは書簡である。けれども、文学作品およびジャーナリズムに影響された要素をこの書簡に見出すことは可能だろう。一見、対照的でさえある遠回しな言葉と戦争記事の言葉とが、共存している<sup>82</sup>。ディキンソン自身、熱心な雑誌読者であり、先にジュリア・ウォード・ハウの詩にも見られる語彙を用いている。スターズを「十字軍兵士」と呼ぶ言葉は、戦時下のアマストにおいて、さらには北部で用いられた、戦死者を「殉教者」に見立てるものであり、『ドラム・ビート』に掲載された戦争詩と同種の性質を孕む。先述したように、スターズのような若者たちを戦場へ駆り立てた説教が大学や教会でなされ、ディキンソンの父や兄が資金援助をして志願兵を募る

---

<sup>81</sup> ドルー・ギルピン・ファウスト『戦死とアメリカ南北戦争 62 万人の死の意味』(黒沢眞理子訳)では死体処理を施すエンバーミングの技術が広く用いられた例を紹介している (105-114)。

<sup>82</sup> セント＝アーマンドは、スターズの戦死に先立つ 1861 年 12 月 31 日にディキンソンがノアクロス姉妹に宛てて、アダムズ夫人の息子の戦死を伝えた手紙を引用し、「ディキンソンの感傷的な言葉はヴィクトリア朝のアルス・モリエンディ [往生術] の慣例に従っている」(“Dickinson’s sentimental language here follows the conventions of the Victorian *ars moriendi*.” [105])と解釈している。

動きがアマストでも見られた。しかしながら兄オースティンが 500 ドルの身代わり代を払って戦役を免れたことも先述したとおりである。アマストの町で見られた矛盾、欺瞞、軽率さに対する批判はこの手紙には一切ない。彼の死について感じたはずの疑問も何ら語られていない。あくまでも戦時下における、差し障りのない言葉でノアクロス姉妹に宛てて書かれている<sup>83</sup>。

だが、同じくスターンズの戦死をめぐる手紙でありながら、サミュエル・ボウルズ宛ての場合は書き方が一変する。先の公的な差し障りのない表現とは対照的に、剥き出しともいえる率直な言葉で記されている。

オースティンはスターンズが殺されたことで身震いしています。彼が言うには、「スターンズが死んだ」「スターンズが死んだ」と脳が繰り返し語り続けるそうです——ちょうど父が伝えた言葉で——鉛の言葉がふたつみつ深く落ちて、重くのしかかり続けるのです。オースティンに教えてあげてください——鉛の言葉を克服する方法を。

Austin is chilled - by Frazer's murder - He says - his Brain keeps saying over  
"Frazer is killed" - "Frazer is killed," just as Father told it - to Him. Two or three  
words of lead - that dropped so deep, they keep weighing -  
Tell Austin - how to get over them! (L256)

この手紙はスターンズの死が兄オースティンに与えた衝撃を伝えている。「鉛の言葉」("Two or three words of lead") は、衝撃の大きさだけでなく、スターンズの死に纏わる疑念、不可解さ、自責の念など、重くのしかかる感情を表す<sup>84</sup>。この手紙でディキンソンは、即物的な表現を用いている。"chill", "murder", "Brain",

---

<sup>83</sup> ポーラ・ベネットはこの手紙の書き方を「それは公的な、大いに美化して描かれた物語であった」("That was the public, highly romanticized story.") と指摘し、「ディキンソンはスターンズの戦死に衝撃を受けた悲しみに浸る地域社会に加わるかに見え、手紙を哀調に満ちた記念碑のようなものにした」("Dickinson appears to join her community in shocked grief at Stearns's death, making the letter something of an elegiac memorial.") と解釈する。そのうえでスターンズの死に接したウィリアム・スミス・クラーク(William Smith Clark)が大泣きする場面など子供っぽさを強調しており、一見、ディキンソンにしては「あまりにも行儀よくひとまとめにされた」("far too neatly packaged") 描写にある種の「鋭さ」("edge")を見出し、批判を暗示しているものと解釈している("Looking at Death" 122-123)。確かにその読みも有効であるが、ノアクロス姉妹宛てであることを考えると、そこまでの深意があるかは定かではない。むしろ私は、同じ時期に書かれた 2 通の手紙の表現の差の大きさに注目する。

<sup>84</sup> セント＝アーマンドはスターンズの死をディキンソンが自身の死と対応させたものと解釈している(107)。

“lead”などの単語によって、精神的な衝撃が、感覚上の衝撃および物理的な圧迫感に結びつけられている。従姉妹宛ての手紙が死の場面や葬式について事細かに、言葉を尽くして説明しているのに対し、ジャーナリストのボウルズにはスターンズの訃報を繰り返す必要はないためだろう。ボウルズにはオースティンの衝撃を如実に語っている<sup>85</sup>。

それにしても、2通の手紙の隔たりは大きい。かたや、友人の死を穏やかな言葉で伝えて締め括る。また一方で、身近な人物の戦死から受けたとてつもなく大きな衝撃を身体的な感覚で伝えようとする。

姉役、母親役として接していたノアクロス姉妹と、個人的な悩みを相談していた4歳上のボウルズとでは、異なった筆致で書くのは当然ともいえる。だが、ひとりの青年の死を報告するうえで、ディキンソンが使い分けた2通の手紙の隔たりの大きさ——戦死者を「十字軍兵士」(“crusader”)とすることでその死を正当化し、受け入れようとする声と、動揺する心を和らげる術がないと訴える声——は、『ドラム・ビート』に掲載された他の戦争詩と、次に見るディキンソンの詩との隔たりに通底する。

#### 第4節 ディキンソンの「戦いの詩」

スターンズの訃報を受けて、ディキンソンは “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) を書いている。衝撃的な報せを聞いた後、心の痛手をどのように鎮静させれば良いのか。その試行錯誤を書いた詩である。冒頭部分を載せる。

It dont sound so terrible - quite - as it did -  
I run it over - “Dead”, Brain - “Dead”.  
Put it in Latin - Left of my school -  
Seems it dont shriek so - under rule. (F 384)

その言葉は前ほど恐ろしく響かない  
わたしは繰り返した 「死んだ」、脳よ 「死んだ」と。  
学校時代に習った ラテン語に置き換えてみよう

---

<sup>85</sup> ディキンソン書簡の編集者トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) とセオドラ・ウオード (Theodora Ward) は、ボウルズ宛ての手紙(L 256)の註で、オースティンの名前は「口実」(“cover”)であると指摘している (Letters 399)。だが、ノアクロス姉妹宛ての手紙 (L 255)においてもディキンソンは「オースティンは本当に呆然としています」 (“Austin is stunned completely”)と書き、オースティンの動揺の大きさを伝えている。

文法のもとだと それほど金切り声をあげないようだ。

恐ろしい出来事（訃報）を代名詞“it”で繰り返している。具体的に記すことが不可能なほど途方もなく大きな衝撃であるためだ。この衝撃とどのように向き合えば良いのか。戦時下には何度も必要に迫られる場面である。その方法として、自分自身に言い聞かせる命令形が連なる。ボウルズ宛ての手紙では、スターンズの死の報せに兄がたじろぐ姿を即物的な言葉で伝えていた。一方、この詩では、語り手「わたくし」自身の言葉となっている。衝撃的な事実には狼狽える語り手が、自身の動揺する心を制御するための試行錯誤を繰り返す。スターンズの訃報を伝える 2 通の書簡を書いてから、時間が多少経過したために、この詩では衝撃に始終するだけでなく、対象（事実）との心理的な距離感を見出そうとする段階に至っている。この詩を書いた 1862 年 8 月頃には、ボウルズに宛てて次のようにも書いている——「後になって痛みを振り返る方が、やってくるのを見るよりも簡単です」（“It is easier to look behind at a pain, than to see it coming.” [L 272]）。極度の衝撃から受けた痛みを和らげるためには、重くのしかかる苦痛を自分なりに調整していく術を得なくてはならない。この言葉を記すまでには、試行錯誤の日々があったはずだ。

ポーラ・ベネット (Paula Bennett) は、典型的な戦争詩の一例として、特に『アトランティック・マンスリー』1861 年 11 月号に掲載されたオリヴァー・ウェンデル・ホームズの詩「自由の花」(“The Flower of Liberty”)を取り上げている。ベネットは、ホームズの作品に見られる近視眼的な要素を指摘している。それは、国家主義の理想に鼓舞され、時代の通念に結びついた表現であるとする。ホームズの詩には、対象との距離感はなく、ましてやアイロニーの眼差しは皆無であるとベネットは言い切る(“Not Just Filler and Not Just Sentimental” 210)。ホームズの詩「自由の花」は次のような問いかけで始まる——「朝に挨拶してくれるこの花の名はなんだろうか / 天から生まれたばかりの色だ」(“What flower is this that greets the morn, / Its hues from heaven so freshly born?”)。そして各連の末尾で「それなら自由の旗に万歳 / 星をちりばめた自由の花よ」(“Then hail the banner of the free, / The starry Flower of Liberty!”)の句が繰り返される。北部を象徴する清らかな白い「自由を表わす類なき聖なる花」(“Thrice holy Flower of Liberty”)を讃える、美しい言葉の羅列に過ぎない。語り手は苦しみも迷いさえも抱くことなく、賛美に徹している<sup>86</sup>。友人の訃報という大きな衝撃にたじろぎ、

---

<sup>86</sup> 美辞麗句を並べる父ホームズを息子ホームズ・ジュニアは批判し、「共和国の信念を能弁に説くチャンピオン」(“a voluble champion of the Republican faith”)であり、戦争の大義を説く「肘掛け椅子の将官職」(“some armchair generalship”)的な態度を揶揄している。実際に従軍し、負傷した息子ホームズ・ジュニアが父に宛てた書簡をルイ・メナン

喘ぐ語り手が、搾り出すように発したディキンソンの詩“*It dont sound so terrible - quite - as it did -*” (F 384)と並べると、ホームズの言葉はあまりにも流麗である。

ディキンソンと同時代を生きた女性作家ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) が記した言葉にも目を向けたい。表だった戦争協力をしなかったディキンソンとは対照的に、オルコットは、看護婦の経験を通して、女性として間近に戦争を体験した。興味深いことに、ディキンソンとはまた別の方法で、距離感を保ちつつ戦争を表現している。衝撃的な事実との向き合い方は、戦争の時代を生き抜くために必要な術であることがわかる。悪夢のような惨状を前に、オルコットの『病院点描』(*Hospital Sketches*)ではむしろ軽い筆致で病院の日々が記される。

新米看護人の語り手「ツルニチソウ」(“*Periwinkle*”) は、フレデリクスバーグからの負傷兵到着という陰惨で深刻な場面も、劇の台詞のような言葉を差し挟みつつ、とぼけた会話や看護人たちの軽やかな動きを記していく。

「やってきたわよ！着いたわ！急いで、みなさん。出番よ」

「誰が来たの？反乱軍？」

この突然の呼び出しがあったのはまだ夜明け前であり、看護人3日目の新米の私には仰天する出来事だった。ドアを叩く音が雷のように響き、私はベッドから飛び起きて支度をした。

「身支度を整え、  
城壁にて死す」

“They’ve come!” they’ve come! Hurry up, ladies—you’re wanted!”

“Who have come? The rebels?”

This sudden summons in the gray dawn was somewhat startling to a three day’s nurse like myself, and, as the thunder knock came at our door, I sprang up in my bed, prepared

“To gird my woman’s form,  
And on the ramparts die,” (*Hospital Sketches* 25)

新米の語り手と同僚や婦長とのテンポある会話や病院での逸話が続く。

オルコットは1862年秋にワシントンで看護婦として奉仕する志願を出し、12月のフレデリクスバーグの戦いの後、北軍衛生委員会の管轄下にあったユニオンホテル病院に配属された。同じ時期にウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) が、やはりフレデリクスバーグの戦いで負傷した弟を探しにワシント

---

ド(Louis Menand) が引用している (44-45)。

ンに出掛けている。『ドラム・ビート』(1864年3月11日付)において、「控えめなご婦人にふさわしい場所かどうか」(“whether that is the proper place for a modest female to be” [6]) と危ぶまれる惨状のなか、オルコットは負傷兵の看護にあたっている<sup>87</sup>。この期間にワシントンから家族に宛てて書いた手紙が『病院点描』(*Hospital Sketches*)の下地になっている。手紙は反奴隷制主義を掲げた週刊誌『コモンウェルス』(*Commonwealth*)に、1863年5月22日から6月26日にかけて連載された後、北部の雑誌や新聞で再掲された。そして反奴隷制主義者ジェイムズ・レッドパス(James Redpath)の依頼で一冊にまとめられ、8月に出版された。オルコットにとって初めての本である(Saxton 263-264)<sup>88</sup>。

特に興味深い描写のひとつが、夜勤の場面である。患者の寝顔に現れる、昼間とは別の表情を語り手は観察する。昼間には覆い隠されていた戦争の恐怖、心の苦痛が、眠りの無意識の中で、生々しく曝け出される<sup>89</sup>。

---

<sup>87</sup> 実戦には参加不可能であった女性達が、「市民」として政治的見解を示しつつ、奉仕活動にいかに従事したかについてはジーニー・アティ(Jeanie Attie)を参照。オルコットの『病院点描』においても同様の要素を多分に見出すことができる。1863年4月付けで『病院点描』を締めくくる際、オルコットは反奴隷制の立場を明らかにしている——「次に働く病院は、黒人部隊のための場所であって欲しい。彼らは、白人同胞の讃嘆と思いやりある看病を受ける権利があることを見るからに証明している。白人同胞は彼らに非常に多くの借りがあり、ささやかながらその一部を返すことに私は誇りを感じる」(“The next hospital I enter will, I hope, be one for the colored regiments, as they seem to be proving their right to the admiration and kind offices of their white relations, who owe thme so large a debt, a little part of which I shall be proud to pay.” [*Hospital Sketches* 95-96])。ディキンソンが人種問題に触れる詩(“Color - Caste - Denomination -” [F 836])を清書するのは1864年である。

<sup>88</sup> 『病院点描』の10年後に出版した『仕事』(*Work*)においても、オルコットは南北戦争を扱っている。「独立し」「役立つ」ことを信条とする女性主人公クリスティ(Christie)が体験する南北戦争は、ジョン・バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*Pilgrim's Progress*)の主人公クリスティ(Christy)の女性版を連想させる。主人公の名前が示すように、北部の正義、道徳、信仰を反映した行動をとるクリスティが描かれている。

<sup>89</sup> エリザベス・ヤングはオルコットの書き方に、男性兵士を女性化する傾向を見出し、人種および性差の規範に対する戦いを、戦時中の国家の内なる争いに結びつけて解釈している。そのうえで、兵士を女性的に、看護婦を男性的に描き分ける方法に注目している。オルコット自身が抱えるジレンマの素として、教育者であった父ブロンソン・オルコット(Bronson Alcott)による家庭教育の影響を指摘する。父オルコットは「自己否定」(“self-denial”)を目指すべく、「自己管理」(“self-control”)——ラルフ・ウォルドー・エマソン(Ralph Wald Emerson)なら「自己信頼」(“self-reliance”)を男性に説くところであるが——を教育の主軸としたことをヤングは述べている(71-78)。この事実から、オルコットの作品に見られる「女性化」(“feminization”)の操作は重要であろう。ただしハウと同様、女性であるが故の苦しみを抱えながら、北部の正義や戦争の意義に対して根本的

彼等[負傷兵]のことを、昼間の交流を通してよりも、夜間にもっとよく知るようになった。時々、彼らには失望させられた。昼の光のなかでは楽しげで愉快的な様子顔も、夜の暗がりの訪れ共に、不快な、陰悪な表情になったからだ。彼らは[昼間に]言葉で打ち明けはしなかったが、私は彼らの人生を読みとった。真夜中の魔法が及ぼした私の態度の変化について、彼らは不思議がった。

I learned to know these men better by night than through any intercourse by day. Sometimes they disappointed me, for faces that looked merry and good in the light, grew bad and sly when the shadows came; and though they made no confidences in words, I read their lives, leaving them to wonder at the change of manner this midnight magic wrought in their nurse. (*Hospital Sketches* 44)

昼間には隠れていた、心の闇に触れる箇所では、内省的な文章になる。また、精神を病んだ負傷兵たちが、夢遊病者となって夜間に歩き回る様子は、ゴシック調のお化け屋敷に喩えて、ユーモア混じりの書き出しで紹介している——「幽霊が出没する時間帯にご一緒する無害な幽霊のひとり（中略）」（“One of the harmless ghosts who bore me company during the haunted hours, was . . .”）、「私の許によく姿をあらわす別の小鬼は（中略）」（“Another goblin who frequently appeared to me, was . . .” [42]）。

活動的で男勝りなオルコットとはいえ、やはりヴィクトリア朝的な道徳観が幅を利かせた時代の女性として、ワシントンでの看護生活が与えた衝撃は相当なものだったに違いない。オルコット自身もチフスに感染し、契約期間半ばにして父に付き添われ、1863年1月16日にコンコードに戻っている。看護婦としての勤務は2か月弱である。チフス治療に用いられた水銀の副作用も手伝い、極度の妄想に脅かされる後遺症が続いた (Saxton 251-268)。オルコットには辛い体験であったといえる。

出版当初、作品中の「軽快な語り口」(“a tone of levity” [*Hospital Sketches* 95]) を読者に非難されたことをオルコットは書いている。しかし、『病院点描』のユーモラスな筆致は、彼女自身が受けた衝撃を和らげるために不可欠な距離感を得るためであったと考えられる。そのまま正面から見据えるには、自身の心を押し潰しかねない光景であったはずだ。そのうえで、確かにオルコットは兵士達の朗らかで勇氣ある昼の「陽」の顔と、夜の「陰」の顔の二面性をしっかりと描いた。しかし、戦争の恐怖を扱う際に、「軽快な語り口」を用いるのは、「陰」

---

に肯定的であったオルコットの態度はその作品にも反映している。

の部分、「不快な、陰悪な」ものを、変形させてしまうことにもなる。オルコットは、ハウと同じく戦争随行を肯定的に捉えており、彼女自身もまた、エドモンド・ウィルソンの指す「擬似道徳的」(“pseudo-moral”)な言説を用いていることも否めない。そのために、むしろ「陰」の要素を敢えて引き受けて「戦いの詩」を書いたディキンソンとは、根本的に異なる。

ディキンソンがヒギンソンに宛てた手紙の言葉、「戦争はわたくしには斜めの場所に思えます」(“War feels to me an oblique place -” [L 280])は、社会の動乱に対する無関心の表れではない。これまでそうした解釈をしばしば許してきたことは前章でも触れた。むしろディキンソンは、鋭い眼差しで失われていく命を見つめていたのではないか。そうした印象を与えるのが次の詩 “Victory comes late -” (F 195) である。ボウルズ宛ての手紙 (L 257) に同封されている。冒頭部分を、ボウルズの手紙に書かれた形 (F 195A) で引用する。

Victory comes late,  
And is held low to freezing lips  
Too rapt with frost  
To mind it!

勝利は遅れてやってくる、  
凍りつつある唇に低く差し出される  
霜であまりにも恍惚となり  
気にならなくなる

「勝利」が訪れた時にはもはや瀕死の状態にあり、勝利感を味わうことさえできない。小さき者にも目を向けるという聖書の言葉と違うのではないかと、儉約家(“economical”)の神に対して語り手は不満をぶつける——「神はそんなにも儉約家だったのか / 神の食卓は私たちには高すぎて / 爪先立ちでなければ食事ができない」(“Was God so economical? / His Table’s spread too high for Us - / Unless We dine on Tiptoe -”)。残された者が発する強い苛立ちの口調は、オルコットには見られない<sup>90</sup>。戦死を殉教として讃えた時代にあって、神に対して抗議

<sup>90</sup> この詩はボウルズに送られているため、共通の友人であるスターズを意識していると思われる。ジョンソンはスターズを歌ったものと解釈し、フランクリンは1861年(ボウルズに送付)と1862年頃の版(ファシクルに清書)を挙げているが、スターズとの関連は明記していない。ただし2行目 “And is held low to freezing lips”は、スターズの臨終の場面を想起させる。ディキンソンがノアクロス姉妹に宛てた手紙では臨終の場面に触れている——「彼は上官のクラーク教授の脇で倒れ、兵士の腕に抱えられ10分間息がありました、そして2度水を求め、『ああ神よ』と呟いて息絶えたのです」



するこの詩の語り手は、異質な存在である。次の詩 “It feels a shame to be Alive -” (F 524)も、やはり残された立場から書かれている。この詩は 1863 年の春ごろに清書されている。

It feels a shame to be Alive -  
When Men so brave - are dead -  
One envies the Distinguished Dust -  
Permitted - such a Head -

The Stone - that tells defending Whom  
This Spartan put away  
What little of Him we - possessed  
In Pawn for Liberty -

The price is great - Sublimely paid -  
Do we deserve - a Thing -  
That lives - like Dollars - must be piled  
Before we may obtain?

Are we that wait - sufficient worth -  
That such Enormous Pearl  
As life - dissolved be - for Us -  
In Battle's - horrid Bowl?

It may be - a Renown to live -  
I think the Men who die -  
Those unsustained - Saviors -  
Present Divinity -

(F 524)

生きていることが恥ずかしく思える  
とても勇敢な人々が 死んだとき  
そのような墓標が許された  
気高い亡骸を人は羨む

---

(“He fell by the side of Prof Clark, his superior officer - lived ten minutes in a soldier’s arms, and asked twice water - murmured just ‘My God!’ and passed!” [L 255]) 。

石碑は語る この剛勇の人が誰のために  
私たちが所有していた彼のほんのささやかな存在を  
自由の抵当として  
放棄したかを

その代価は大きく 荘厳にも支払われた  
私たちは値するのか  
手に入れる前に  
ドル紙幣のごとく積み上げられねばならない命に

待つ私たちは 十分に値するのだろうか  
生命のように大きな真珠が  
私たちのために戦闘の恐ろしい鉢のなかで  
溶けてなくなるとは。

生きていることは栄誉かもしれない  
ただ私としては死んだあの人々が  
擁護されぬ救世主たちであり  
神聖を示していると思う

先の詩 “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) は、知人の死という衝撃をどう静めるかを思案するものであった。この詩では、特定されぬ兵士達 (“Men”) の戦死を取り上げ、多数の犠牲者をどう悼むべきか、という問題を直視している。ここでも、ハウやホームズの戦争詩で見られるキーワード「自由」が使われている<sup>91</sup>。ただしディキンソンの詩では、北部の戦争続行の大義であり、命を捧げるべき理想の「自由」は、取引や金銭に関わる語彙と一緒に用いられており、戦死という形で「放棄」された命の価値を、ドル紙幣に喩える露骨な表現が目を引く。“Victory comes late -” (F 195) の詩では「儉約」する神を非難し、この詩 “It feels a shame to be Alive -” (F 524) では命が紙幣のように惜しげもなく積み上げられ、浪費されていく。ヘレン・ヴェンドラー(Helen Vendler) は、紙幣のイメージを戦場の大量殺戮と結び付ける際に、名詞の単数形・複数形の使い分けを指摘する。第 2 連で兵士を “This Spartan” と定冠詞で特定し、その墓石 (“The Stone”) が故人の業績を讃えているものの、実際の死は「大量殺戮のより

---

<sup>91</sup> 南北戦争で数多く用いられた単語 「自由」 (liberty, freedom) をめぐってはクリスタン・ミラーの論 (“Pondering ‘Liberty’”) を参照。

広範囲なぞっとさせる光景」(“the wider, horrying spectacle of mass death” [Vendler 240]) であったことを、詩人が見抜いていると示唆する<sup>92</sup>。この詩においては、人称の単数形・複数形の使い分けにも配慮する必要があるだろう。ヴェンドラーは、最終連における“I think”を “[But] I think” と解釈し、語り手自身の「個人的な意見」 (“personal opinion” [242]) があることに着目する。ヴェンドラーの指摘を援用するならば、冒頭行 “It feels a shame to be Alive -” には、語り手自身の存在は明示されてはいない。だが、最終連で語り手は主格を用いて (“I think”)、 「[神によって] 擁護されぬ」兵士たちを「救世主たち」 (“Saviors”) として悼む、自身の声をしっかりと記している。

金銭の喩えに関しては、フレイザー・スターンズが戦死した4か月後の7月に、割り当ての兵員数を確保するためにアマストの町が100ドルの奨励金を支給することを決定している。その動きの中心にいたのが、ディキンソンの父エドワードであった。奨励金が功を奏したのか、その月の18日に、アマストは新たな兵団を送り出している。だが先述したように、エドワードの息子、すなわちディキンソンの兄オースティン自身は、1864年に召集された際に500ドルを支払い、兵役を免れている (Erkkila “Art of Politics” 156)<sup>93</sup>。

また、戦争中、白人兵と黒人兵の給料の違いの差別など、生命と貨幣価値にまつわる問題は、多々物議をかもしことになる。ディキンソンは “Color - Caste - Denomination -” (F 836) の詩で、人種、階級、宗派の違いによる差別と、死の無差別性 (民主的な死) を取り上げている。

Color - Caste - Denomination -  
These - are Times's Affair -  
Death's diviner Classifying  
Does not know they are -

肌の色、階級、宗派  
これらは この世の区別  
死の神聖な分類には  
それらは無縁である

---

<sup>92</sup> クリスタン・ミラーは、サーモピレーの戦いにおける戦死者たちの英雄的な行為を墓標に記した故事を指摘している (*Emily Dickinson's Poems* 760n.233)。

<sup>93</sup> ただし、フランクリンによる分類ではこの詩 “It feels a shame to be Alive -” (F 524) は1863年の作とされており、兄オースティンの分担金の支払いはその後のことである。フェイス・バレットは1863年のリンカンの人身保護令発布をこの詩(F 524) に結びつけて論じている (*To Fight Aloud* 171-173)。

ヴェンドラーがディキンソンの階級意識について「初期は」と断りを付けたうえで、「他者の苦しみに対して不変的に無神経な面」(“a permanent insensitivity to the suffering of others”)があると認めている。だが、この詩が書かれた1864年の時点において、ディキンソンがいかに差別に対する意識を培っていたかに注目している (Vendler 349)。その意味で、ディキンソンの眼差しが戦争を通じて徐々に変化していったことの証にもなる詩である。

南北戦争中のアマストでは、教会や大学が中心になって士気を煽る説教がなされ、感化された学生たちが戦地に赴いたことは先に見た。女性たちは慈善裁縫会、慈善市で協力し、ディキンソン家でも父と兄が戦争協力する。南北戦争中のアマストでディキンソンを捉えたのは、スターンズをはじめとする友人の死という悲しみだけでなく、戦時下の人々の言葉や行動に見られる欺瞞も多々あっただろう。

前章で先述したように、フレイザー・スターンズにまつわる書簡と詩を書いた時期に、ディキンソンは詩論とともとれる詩を多く残している。スターンズの死からちょうど一か月後、ディキンソンは、ヒギンソンに初めての手紙を送った。アマストで様々な戦況報告が飛び交う時期に、「周縁」(“circumference”)、「斜めの」(“oblique”)、「斜めの」(“slant”)など、距離と関わる表現をディキンソンが用いたことは偶然ではないだろう。対象と直接の接点はない。だが、背を向けはしない。その微妙な距離感をどうとるべきか、自身の立ち位置を鋭敏に意識する所以だろう。

同時代の戦争詩は、「国旗」「自由」「神」などのモチーフを扱う際、一人称複数が主語となり、国家としての運命や戦争続行の意義を信仰と結びつけて肯定的に語る。なるほどハウの詩の語り手は、「私の眼」で見たとしながらも、それは預言者として人々に伝えるための公的、政治的な見解である<sup>94</sup>。一方、ディキンソンの「戦いの詩」はあくまでも一人称の見地に立つ。そして、「公的な」語りによる戦争詩が目を向けることのない、「個人」としての心情——動揺、怖れ、慄き、わだかまり、疑問、嫉妬、負い目——を掬い上げて言葉にする。そのために、一見、己の弱さを敢えて露呈しているようにも見える。しかし、同時代の人々との一体感に甘んじることなく、一人称の眼差しをもち続けたのである。

---

<sup>94</sup> 南北戦争詩歌集 “*Words for the Hour*”: *A New Anthology of American Civil War* (2005) を編集したバレットは、南北戦争によって、詩の性質が変化し、男性詩人による公的な「機会詩」(“occasional poems”)の要素と女性詩人による個人的な悲しみを歌った詩の要素とが融合したと指摘している [2]。バレットは、ハウの女性としてのジレンマ——作家としての野心、主婦としての役目、社会活動を反対する夫との確執、詩作による政治的改革参加への希望——を取り上げ、ハウの詩人としての歩みを考察している (*To Fight Aloud* 87-129)。したがって「リパブリック賛歌」などの戦争詩のみでハウの仕事を判断することはできない。

### 第3章

#### ディキンソンと「読者」

##### ——南北戦争時に「送られた」詩

A Soldier called - a Morning ago, and asked  
for a Nosegay, to take to Battle. (L 272)

#### 序節

南北戦争勃発後に新聞の購買数が飛躍的に増加したことは前章で述べた。この変化は人々の読書習慣の変化に密接に関わっている。南北戦争中の大衆文学を論じたアリス・ハウ (Alice Fahs) は、それまでの文学作品に取って替わり、刻一刻と変化する戦況ニュースが人々を引き付けたことに言及している (Fahs 19)。戦争中には鉄道網、通信網、軍事技術が急速に発達し、戦地のニュースが数時間後には市民にもたらされ、戦地と市民の距離が一気に縮小する。戦争中の科学技術の進展によって戦争報道の性質そのものが変化した事実をルネ・L・バーグランド (Renée L. Bergland) が検証している<sup>95</sup>。

人々の興味が戦況ニュースに集中したため、文学作品全体の出版・売り上げは極端に減少する。この急激な変化を印象付ける例として、ランダル・フラー (Randal Fuller) は、国民の尊敬を集めた詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow) の言葉を引用している。大詩人さえも世相を次のように嘆く——「弾薬臭い時代に、すべての文学作品はその風味を失う。新聞が唯一の読み物なのである。その日の記録であると同時にロマンスなのだ」 (“When the times have such a gunpowder flavor, all literature loses its taste. Newspapers are the only reading. They are at once the record and the romance of the day.” [22])。けれども新聞や雑誌を見る限り、詩は依然として人気があり、北部・

---

<sup>95</sup> 南北戦争における技術革新によって、殺傷のスケールが大きくなったこと、加えてその殺戮の場を非戦闘員の一般市民に伝える報道が可能になったことをルネ・L・バーグランドは紹介している。特にバルーンを用いて空中から撮影した戦場写真が報道されるようになり、鳥瞰図的な光景が読者にもたらされ、ディキンソンにも「複合の洞察力」 (“compound vision”)、つまりは歴史的な時間と死後の時間を意識させたと論じている (“The Eagle’s Eye: Dickinson’s View of Battle”を参照)。また、19世紀がそもそも「革命の時代」であったという問題意識から吉田要氏は特に交通・通信の技術の発展とディキンソンの詩・書簡とを照合させて論じている(「19世紀の交通革命と通信革命——エミリー・ディキンソン、鉄道、電信」を参照)。

南部を問わず、読者が新聞に詩を投稿し、戦いの報道と共に詩が掲載されることもあった。エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) は、この理由として詩の「伝達力」 (“communicative power”) を挙げ、「国家的な信念や感情を表現し、形づくる」 (“both express and shape national beliefs and sentiments”) うえで詩が有効であったことを指摘している。しかも、詩そのものが備え持つ「内在的な形式および修辭的性質」 (“its internal formal and rhetorical properties”) と共に、詩を掲載した雑誌や新聞が多数の読者の許へと届く、「膨大な情報ネットワーク」 (“the vast informational network”) が果たした効力にも注目している (“Weathering the news” 113)。さらにリチャーズは、戦争の時代に詩が担う役目にも触れ、人々に戦いへの参加を呼びかけ、兵士を勇気づけ、戦没者の家族への慰め、そして、犠牲者が出てはなお戦いを正当化することなどを列挙している (“How News Must Feel” 158)。前章で見たように、ジュリア・ウォード・ハウ (Julia Ward Howe) の「リパブリック賛歌」 (“Battle Hymn of the Republic”) が『アトランティック・マンズリー』 (*Atlantic Monthly*) 1862年2月号巻頭に掲載され、後に北軍兵士によって歌われるようになったことも、戦時における詩の存在感を反映する一例である。

詩が依然として人気を保ち続けたそもそもの理由として、アメリカ人の生活に密着してきた文化背景がある。これは、“*Words for the Hour*”—*A New Anthology of American Civil War Poetry* を編纂したフェイス・バレット (Faith Barrett) も序文で強調している。バレットによれば、特に 1830年代から 40年代の教育の場における詩の暗唱、講演や教会での集い、奴隷制反対論者や禁酒運動および女性参政権の集会や式典でことあるごとに詩が読まれた (1-3)。こうした環境で育ってきた世代には、戦時下に詩に親しむ下地ができていたことになる。「炉辺の詩人」と呼ばれるアメリカの詩人たち——ウィリアム・カレン・ブライアント (William Cullen Bryant)、ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー、ジェイムズ・ラッセル・ローウェル (James Russell Lowell)、ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアー (John Greenleaf Whittier)、ウェンデル・ホームズ (Wendell Holmes)——もまた、南北の亀裂が露わになる不穏な状況、戦いの場面、若者の戦死、訃報を受け取る家族の悲しみなどを主題にして詩を書き、雑誌に掲載した。ディキンソン家が購読していた『アトランティック・マンズリー』にも、毎号、こうした詩人たちの作品が次々と掲載されている<sup>96</sup>。

<sup>96</sup> 例えば、戦争前の早い時期に、ジェイムズ・ラッセル・ローウェルが黒人の惨状を歌った “The Present Crisis” (*Boston Courier* December 1, 1845)、ホームズが南北の亀裂を扱った “Brother Jonathan’s Lament for Sister Caroline” (*Atlantic Monthly* May 1861)、ブライアントが続行する戦いを書いた “Not Yet” (*New York Ledger* August 17, 1861)、ロングフェローが戦場を書いた “The Cumberland” (1862 初期作詩。詩集 *Songs of War* に所収)、ホイッティアーが老女の勇気ある行動を歌った “Barbara Frietchie” (*Atlantic Monthly* October 1863) 等がある。Faith Barrett and Cristanne Miller, eds. “*Words for the Hour*”: A New

戦時における詩と読者との関係を考えるとき、出版と微妙な距離をとったディキンソンは、読者をどう意識していたのだろうか。詩人たちが続々と戦争関連の詩を発表していた時期に、ディキンソンは“Publication - is the Auction / Of the Mind of Man -” (F 788) を書いている。「出版は人の心の / 競売だ」とする強烈な冒頭行で始まるこの詩は、作品に市場価値が結びつくことを非難している。詩の語り手は、結びの部分で“**But reduce no Human Spirit / To Disgrace of Price -**”（「人の魂を / 価格という恥辱に貶めてはならない」と言い放ち、市場での出版を否定している。これまで出版に関するディキンソンの姿勢は多々論じられてきた<sup>97</sup>。また、1984年のダンデュランドの論文以降は、ディキンソンの詩が北軍系新聞に掲載された事実とも併せ、ディキンソン自身が出版の有無を選択した可能性も考察されている<sup>98</sup>。だが、戦争中に新聞を媒介にディキンソンの詩を手にした

---

*Anthology of American Civil War Poetry* を参照。

<sup>97</sup> “Publication - is the Auction” (F 788) の解釈として、ドナルド・ミッチェル (Domhnall Mitchell) は出版界の変遷を階級意識と結びつけ、反奴隷制の用語に注目して論じており (“Emily Dickinson and class” 199-202)、ベンジャミン・フリードランダー (Benjamin Friedlander) もやはり反奴隷制の用語を取り上げている (“Auctions of the Mind”)。また、読者の存在を意識したディキンソン研究としては マーティン・オーゼック (Martin Orzeck) とロバート・ウェイスバック (Robert Weisbuch) 編集 *Dickinson and Audience* に収録された諸考察および、James L. Machor 編 *Readers in History: Nineteenth-Century American Literature and the Contexts of Response* に収録された Willis Buckingham による “Poetry Readers and Reading in the 1890s: Emily Dickinson’s First Reception” を参照。

<sup>98</sup> ベッツィ・アーキラ (Betsy Erkkila) は ディキンソンが意識的に詩を差し出したかどうかの問題に触れ、「もしディキンソンがこれらの詩を自発的に寄稿したのであれば、そしてその証拠がなくても、病人や負傷者、瀕死の人々を支援するためであったのだろう。彼らは——ディキンソンの考えでは——せいぜいよく見ても問題のある大義に賛同して自分たちの命を犠牲にしたのだ」 (“[I]f she [Dickinson] did contribute these poems voluntarily, and there is no evidence for this, they were more likely sent to support the sick wounded, and dying, who were sacrificing their lives in support of a cause that was—in Dickinson’s view—at best questionable.” [“*Art of Politics*” 172n.33]) と疑問視している。ヴァージニア・ジャクソン (Virginia Jackson) もまた、ディキンソンが自発的に詩を提供したとするダンデュランドの解釈およびその仲介役の同定を疑問視し、ブルックリン在住のヴァンダービルトが仲介したと解釈する——「ディキンソンは詩をヴァンダービルトか『ドラム・ビート』編集長アマスト大学卒業生リチャード・ソルター・ストーに渡したかもしれない。ダンデュランドや他の研究者たちの考えではストーがよりそれらしき候補とされてきたが、理由を述べるのは難しい。ディキンソンがヴァンダービルトと書簡のやりとりをしていたことがわかっているからである」 (“If so, then she may either have conveyed them to Vanderbilt or to Richard Salter Storrs, the editor of *the Drum Beat* and Amherst alumnus. Dandurand and others have thought Storrs the more likely candidate, but it is hard to say why, since we know that Dickinson had a correspondence with Vanderbilt.” [252 n.3])。どちらの場合にも、詩の掲載を巡るディキンソン自身の受諾の有無または仲介者の存在については注に提示するだけに留まり、その先の新聞の読者について考察すると

「読者」との関わりについてはいまだ十分に論じられていない。ディキンソンと読者を巡り、ベッツィ・アーキラ (Betsy Erkkila) は、ディキンソンが詩を送ったのは特権階級であり、「同時代の社会的・文化的に最も影響力のある人々」(“the most powerful social and cultural figures of her time” [“*Art of Politics*” 149])であったと指摘する。ここでアーキラが念頭に置くのはディキンソンが書簡に付した詩であり、新聞に掲載された詩の「読者」は対象としていない<sup>99</sup>。本章においては、ディキンソンの読者を考察する際に、手紙を直接やりとりした交友関係からさらに広げ、新聞掲載を介した、いわばディキンソンにとって未知の「読者」の存在も想定する。このような読者を念頭に置く場合は、カッコつきの「読者」として提示する。戦時において、ディキンソンはこの「読者」とどう関わろうとしたのか。あるいはこの「読者」との関係性をどう操作しようとしたのか。本章でこの問題を考察するために、前章に引き続き、北軍支援の新聞に掲載された詩を中心に見ていく。

## 第1節 19世紀アメリカ詩と雑誌

詩人と、新聞・雑誌の「読者」との関係性を考えるうえでまず、19世紀アメリカ詩と新聞・雑誌との関わりを概観したい。19世紀アメリカ詩は、雑誌や新聞の発展とともに読者を拡大したといっても過言ではない。イザベル・レフュ (Isabelle Lehuu) の推計に従うならば、植民地時代から18世紀を経て19世紀アメリカ庶民の識字率が上昇し、1850年代初期の白人成人の識字率が90パーセントとなり、イギリスの60パーセントと較べてかなり高い数字となっている (Lehuu 17)。この幅広い読者層を背景に、19世紀には新たな雑誌や新聞が次々と創刊されていく。

1820年代には政治雑誌、宗教雑誌、農業雑誌などが創刊されている。特に文化・文学の面で重要なのは、当時の東部主要都市で次々と雑誌が創刊されていた動きであり、アメリカの主だった都市で発行された雑誌を見ると、フィラ

---

ころまでは至っていない。

<sup>99</sup> この件に関してアーキラは次のように述べている——「ディキンソンが自分の『意志』や『力』を表すのは、国家的なレベルではなく、地方的なレベルにおいてであり、その際、家族や友人の選ばれたグループ及び、同時代の社会的、文化的な著名人たちに向かって、自身の上流階級の女性の声と視野を響かせているのである」(“Dickinson expressed her “will” and “power” not on the national but on the local level, where she made her upper-class female voice and vision heard to a select group of family, friends, and other socially and culturally prominent figures among her contemporaries.” [“*Art of Politics*” 144]).



デルフィアの『グレアムズ・マガジン』 (*Graham's Magazine*, 1826)、ニューヨークの『ニッカーボッカー・マガジン』 (*Knickerbocker Magazine*, 1833)、『ハーパーズ・マンスリー・マガジン』 (*Harper's Monthly Magazine*, 1850)、『パットナムズ・マンスリー・マガジン』 (*Putnam's Monthly Magazine*, 1853)、そしてボストンの『アトランティック・マンスリー』 (*Atlantic Monthly*, 1857) が文学との関わりで重要である。開拓が進む西部の小さな町から大都市に至るまで様々な規模で数多くの雑誌が登場した<sup>100</sup>。ここで重要なのは、こうした雑誌には必ずと言ってよいほど詩が掲載されていたことである<sup>101</sup>。文芸雑誌に限らず、日刊紙、週刊誌、大衆紙などの違い、また、地方版、全国版といった配給規模の違いに関わりなく常に詩が掲載された。紙面もニュース記事、社説、広告、死亡記事など幅広い (Lorang 1-2)。

それでは、書籍の形の詩集とは異なり、雑誌や新聞に掲載されることで、詩の性格はどう変わるのだろうか。ポーラ・ベネット (Paula Bennett) は、新聞紙面において詩が時事的な記事と並んで掲載されたことに注目し、植民地時代から、個人的または社会的な声を詩が担ってきたことを指摘している——「ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) のような権力の座にある者から、[黒人奴隷]フィリス・ホイートリー (Phillis Wheatley) のような力なき者たちに至るまで、個人的、社会的問題についての意見を、僅かながらも平等に、発表することができた」 (“[T]hose with power, like Benjamin Franklin, and those without, like Phillis Wheatley, could voice with at least a modicum of equality their opinions on personal and social affairs.” [*Teaching* 3]) と述べ、詩集で読む詩人との違いを強調する。そうしたアメリカ詩の性質を考慮するとき、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) がエッセイ「詩人」 (“Poet”) で描く詩人像はアメリカの詩人の定義となる——「詩人とは必要な力の釣り合いが保たれている人であり、他の人が夢見るものを障害なく実際に見たり扱ったりし、経験のあらゆる領域を通り、受け止め与えるうえで最大なる力のために人類を代表する者であ

---

<sup>100</sup> 亀井俊介『世界の歴史』347-349を参照。および Frank Luther Mott, *A History of American Magazines* I 343-354, II 32-33)も参照。

<sup>101</sup> カレン・ダンデュランドもまた、19世紀中葉のあらゆる新聞に詩が掲載されていたことに触れ、詩がアメリカの人々の暮らしに密着していたことを述べている——「詩は19世紀中葉のほとんどの新聞に必ずあった。読者は気に入った詩を新聞から切り抜いたり写したりして、スクラップブックに貼るのがお馴染みの光景であった。時には、暗誦し、友人どうしで共有することもよくあった」 (“Poetry was a regular feature of most mid-nineteenth-century newspapers. It was common for readers to clip or copy poems they liked from the newspapers, putting them in scrapbooks, sometimes even memorizing them, and often sharing the with friends.” [“Dickinson and Audience” 256])。

る」 (“The poet is the person in whom these powers are in balance, the man without impediment, who sees and handles that which others dream of, traverses the whole scale of experience, and is representative of man, in virtue of being the largest power to receive and to impart.”[448])。エマソンの詩人論を受けて、ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman) も『草の葉』(*Leaves of the Grass*) 初版の序文において、アメリカにおける庶民の代弁者として、詩人の役割を主唱し、「アメリカ合衆国の国民自体が本質的に偉大な詩なのだ」 (“The United States themselves are essentially the greatest poem.” [Whitman 616]) と述べ、したがって「詩人たちは自由の代弁者であり解説者である」 (“They [Poets] are the voice and exposition of liberty.” [Whitman 627]) と宣言している。19世紀中葉のアメリカ詩もまた、読者に向けた声（あるいは、同時代の人々を代弁する声）を意識し、担ってきたといえる。

## 第2節 ディキンスンと南北戦争

人々の声を引き受ける詩人像がある一方で、エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) は『愛国の血糊』(*Patriotic Gore*) において南北戦争中の詩の不毛を断じている。なかでも “Poetry of the War”の章では「南北戦争の時期は詩作には不利な時であった」 (“The period of the Civil War was not at all a favorable one for poetry.” [466]) と批判的であり、優れた詩作品がないと裁断する。ウィルソンはまた「戦争に関わる莫大な量の詩が書かれはしたが、今日読むには無益である」 (“An immense amount of verse was written in connection with the war itself, but today it makes barren reading.” [466]) とさえ書いている。だがウォルト・ホイットマンの *Drum Taps* やハーマン・メルヴィルの *Battle Pieces* など、19世紀の詩人たちが南北戦争詩集を出版しているように、戦争は詩人に詩作を促している<sup>102</sup>。こうした詩の声は、現代にあってはまったく響くことはないのだろうか。

植民地時代以来、詩が担ってきた役割について考えを巡らすとき、ディキン

---

<sup>102</sup> 南部連邦の代表的な詩人としてはヘンリー・ティムロッド(Henry Timrod, 1828-1867)を挙げなくてはならない。彼自身は戦争詩歌集の形で出版することはなかったが、戦時中には、サウスキャロライナの新聞 *Charleston Mercury* を中心に詩を発表している。戦争に関わる代表作として “Ethnogenesis”, “The Cotton Boll”, “A Cry to Arms”などがあり、南部連邦支持の立場から書いている。また、南北戦争終結後にはウィリアム・ギルモア・シムズ(William Gilmore Simms) が南部連邦の詩人たちによる戦争詩歌集 *War Poetry of the South* を1866年に編集・出版した。エライザ・リチャーズは、ティムロッドの戦争詩と、北部の詩人エリザベス・エイカーズ・アレン(Elizabeth Akers Allen) およびディキンスンの3詩人の詩を取り上げて、天候を戦争と結びつけた表現を比較している。リチャーズの “Weathering the news in US Civil War poetry”を参照。

スンの詩もまたアメリカ詩の系譜に連なり、何らかの声を担うのだろうか、という疑問が浮かぶ。激動の時代に家族以外の人々と会うことを避けて暮らすようになっていたからである。しかし、そうしたディキンソンと、「読者」とを結びつけたのが、北軍系新聞における詩の掲載であった。ディキンソンの詩が個人的なつながりのある読者だけではなく、未知の「読者」の許にも届けられていったのは、戦争の時代であるからこそ実現したといえる。

戦時には交通網や電報が発展し、それにより戦況のニュース伝達が加速度的に早まっていった事実に触れて、エライザ・リチャーズは、完結することのない断片的な報せが人々を駆り立て、次なる報せを求めさせた状況を説明している (“How News Must Feel” 158)。細切れのニュースの特徴は、例えばメルヴィルの詩「ダンルソン」 (“Donelson”) にも反映されている (Melville 33-52)。刻々と変わる戦況の報せが細断化され、続きを待ちわびる人々に届く報道が連の形で示されている<sup>103</sup>。リチャーズはまた、『アトランティック・マンスリー』に掲載されたジュリア・ウォード・ハウの詩 “Our Order” が、詩とニュース記事との境界を曖昧にしているという興味深い考察を提示している。詩とニュース記事の相互作用により、詩の声が時にはニュース記事の声となり、逆にニュース記事が抒情詩の語り手の声を帯び、戦況を伝えるというのである (“How News Must Feel” 160)。

自宅から出ることが極端に少なくなっていた時期とはいえ、マサチューセッツ州アマストの大学町で熱心に戦争協力をしていた父や兄のもと、ディキンソンもまた新聞・雑誌で戦況を逐一確認していたことは当時の書簡からも窺える。T・W・ヒギンソン (T. W. Higginson) の名前を戦争報道で見つけて、ヒギンソンにこうも書き送っている——「あなたが [戦地に] 赴かれたことを偶然知りました」 (“I found you were gone, by accident” [L 280])。熱心な新聞読者であったディキンソンの詩もまた、この時期の新聞に掲載されたことは先の章で言及した。ただし、ディキンソン自身、戦争によって拡大した新聞読者の一人であることはこれまでも論じられてきたが、本章では特に、戦時下に「読者」を拡大した詩人ディキンソンの面に注目していく。

---

<sup>103</sup> ジェルーシャ・ハル・マコーマック (Jerusha Hull McCormack) は電報の圧縮された形とディキンソンの詩との類似について指摘している。“Domesticating Delphi: Emily Dickinson and the Electro-Magnetic Telegraph”を参照。

### 第3節 南北戦争期のふたつの詩群

『ディキンソン詩集』(*Poems of Emily Dickinson*, 1890) が編纂・出版されたのはディキンソン死後である。生前、ディキンソンは親戚や友人たちに詩を送り、「彼女は手紙に詩を付して送り、仲間内で発表した」(“[S]he published herself coterie-style by sending poems in her letters.”) とマーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) は述べている。スミスの見積もりに従うならば、詩の3分の1が書簡で送られたことになり、また、書簡の多くが失われたことも考え併せると、ディキンソンの詩の半分以上が手紙の中で「発表された」(“published”) とスミスは指摘する (“Editorial History” 272)。

このように手紙に付して詩を送る行為を、カレン・ダンデュランド(Karen Dandurand) やポール・クラムブリイ(Paul Crumbley) は、19世紀アメリカ中産階級の女性たちの「贈り物の文化」(“gift culture”) を背景に考察している。そして、書簡とともに詩を送ったディキンソンの行為を一種の「出版」と見做す。「贈り物の文化」における詩のやりとりは、個人の信頼関係に基づくものであるが、やがては受け手を通じて新聞掲載など公の場に詩が現れ、また、親戚や友人のような既知の読者から未知の読者へと読者層が拡大する可能性も孕んでいる。ディキンソンの詩もこの道筋にしたがって戦時中に出版されたものと両者は捉えている<sup>104</sup>。当時のディキンソンの詩のやりとりを考えるうえで、ふたりの解釈を援用すると、1対1の手紙の文通だけに留まらず、手紙の受け手からさらに別の人物へと詩が伝えられていく流れを想定できる。このような交際のネットワークのなかでディキンソンの詩の新聞掲載を捉えることができる。

ただし、ディキンソンが友人や親戚に送った結果、新聞に載り、未知の読者に届いた詩がある一方で、ディキンソンが誰にも送ることなく手許に置いていた詩群もまた存在する。歴史のいわば表舞台に顔を出した詩と、ひっそりと草稿集に綴じられたまま、同時代の人々の目に触れぬままであった詩という、対照的な道筋を辿ったふたつの詩群が存在する。このふたつの詩群は、ディキンソンと「読者」の関係を探るうえで、重要な手がかりを与えてくれる。

生前に出版された詩は現在のところ10篇が確認されている。ディキンソン家の友人でジャーナリストのサミュエル・ボウルズ (Samuel Bowles) によって『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*) に掲載、南北戦争時の北軍支援のための日刊紙『ドラム・ビート』(*Drum Beat*) に掲載、幼馴染みの女性作家ヘレン・ハント・ジャクソン(Helen Hunt Jackson) を通じてロバート・

<sup>104</sup> カレン・ダンデュランド “Dickinson and the Public” 及び、ポール・クラムブリイ “Dickinson’s Correspondence and the Politics of Gift-Based Circulation” を参照。

ブラザーズ社から匿名詩選集 *No Name Series* に収録されるなど、どの場合も匿名ながらディキンソンの詩が生前から多数の読者の目に触れていたことがわかる<sup>105</sup>。実際、1890年にディキンソンの最初の詩集が出版された時、何篇かの詩をヒギンソンの知人たちはすでに知っていた (Danduland “Dickinson and the Public” 265)。

前章に引き続き、本章でも考察の対象としたいのが、南北戦争中に北軍系の新聞『ドラム・ビート』(*Drum Beat*)に掲載された詩である。この新聞について改めて確認するならば、北軍衛生委員会への寄付を目的に1864年2月22日から3月11日の間にブルックリンで六千部発行された日刊紙である(Danduland “*Drum Beat*” 19)。ディキンソンの3篇の詩が2月29日、3月2日、3月22日に掲載され、匿名ながらも六千人の読者に読まれたことになる。第1章において指摘したように、南北戦争中にディキンソンが詩を渡した相手としては、スーザン・ディキンソン(Susan Dickinson)に100篇、ノアクロス姉妹に38篇、反奴隷制主義者・文芸批評家T・W・ヒギンソンに32篇、雑誌編集者のサミュエル・ボウルズに30篇が目立つ例である。この4人との個人的な詩のやりとりが、新聞や雑誌の掲載へと結びついた可能性がある。

19世紀アメリカの「贈り物の文化」を背景にディキンソンの詩の贈与を間接的な「出版」と捉えるクラムブリィは、ディキンソンとスーザンの「贈り物＝詩」のやりとりに特に注目し、書き手と受け手の共同制作として解釈する(“Politics of Gift-Based Circulation” 38-44)。なるほど“Safe in their Alabaster Chambers -” (F 124)の詩には、フランクリンによれば6つの版があり、1859年にスーザンに送られ、それが恐らくボウルズに渡された版(A、現存せず)、ディキンソン自身がファシクルに清書した版(B)、スーザンとの間で第2連について意見交換をして、ディキンソンが新たな版を送ったもの(C)、最初の版のほうが好きだと返信するスーザンに、さらなる版を送ったもの(D)、ディキンソン自身改訂版を清書したもの(E)、ヒギンソンに送った版(F)がある。この詩をめぐってスーザンと具体的な意見交換をしており、クラムブリィはそれをふたりの

---

<sup>105</sup> フランクリンを参考にすると、生前に出版された10篇は以下のとおりである (Franklin 1531-1532)。①“Sic transit gloria mundi” (F 2), ②“Nobody knows this little rose” (F 11), ③ “I taste a liquor never brewed” (F 207), ④ “Safe in their Alabaster Chambers -” (F 124), ⑤ “Flowers - Well - if anybody” (F95), ⑥“These are the days when Birds come back -” (F 122), ⑦ “Some keep the Sabbath going to church -” (F 236), ⑧ “Blazing in Gold and quenching in Purple” (F 321), ⑨“Success is counted sweetest” (F 112), ⑩“A narrow Fellow in the Grass”(F 1096)

共同制作と見做す。もちろんその作業には「作者」の著作権は介在しない<sup>106</sup>。アメリカ人批評家クラムブリィならではの表現を借用するならば、特権的存在の無い、「民主主義的な」(“Democratic”)作業なのである<sup>107</sup>。またディキンソンの詩の受取人が、別の交友関係のなかでディキンソンの詩を紹介(朗読)したかもしれないとダンデュランドは推測している。ノアクロス姉妹は当時コンコードの読書会に参加しており、ルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott)やエマソンなどがディキンソンの詩を知っていた可能性、さらに「最も行動的な文通相手」(“the most active of Dickinson’s correspondents” [264])であったヒギンズンが百人を超える私的会合でディキンソンの詩を朗読していた可能性もダンデュランドは挙げ、聴衆にエマソンやオルコット、ウィリアム・エレリー・チャニング(William Ellery Channing)など、当時の錚々たる文学者たちが含まれていた可能性にも触れている(“Dickinson and the Public” 261)。生前のディキンソンの詩は、ボウルズや、やはり雑誌編集者のジョサイア・ギルバート・ホランド(Josiah Gilbert Holland)およびエリザベス・チャピン・ホランド(Elizabeth

---

<sup>106</sup> クラムブリィは「贈り物の文化」(“gift culture”)において詩を送る行為をいわゆる流通の一環の出版ではなく、私家版の「出版」として捉えたうえで、送られた側と詩人との合作としての意義をディキンソンの例に見出す。スーザンがディキンソンの詩にコメントしたり、あるいは友人たちの前で読んだり、出版のために出版社に送ったとしてもそれはディキンソンの許容範囲の行為であり、ディキンソン自身も何ら不満を述べていないことに注目している。その意味でスーザンがディキンソンの詩を流布させるうえで重要な役割を担っていたことにも言及している(*Winds of Will* 146-154)。「贈り物の文化」についてはメアリ・ルイーズ・キート(Mary Louise Kete)による研究も参照。

<sup>107</sup> コールマン・ハッチンソン(Coleman Hutchinson)とベッツィ・アーキラ(Betsy Erkkila)の議論を受けて、クラムブリィはディキンソンの政治的な側面を論じている。ただしクラムブリィの言葉「民主主義の」(“Democratic”)は21世紀的な観点によるもので、19世紀アメリカ女性ディキンソンにそのまま用いていることに私自身は違和感を覚える。参政権の有無など、政治的な環境が全く異なるためである。クラムブリィの著書 *Winds of Will: Emily Dickinson and the Sovereignty of Democratic Thought* の序文において「民主主義の詩人」ディキンソンについてクラムブリィは次のように定義する——「経験が盲目的に記録されるべきではないと彼女は主張し、習慣や文化的な前提によって曖昧にされることの多い多様な選択をはっきり述べ、まさにそのために、彼女を民主主義の詩人とみなしても良いだろう。個人の主権の表現として、画一化に抵抗するモデルになっている」(“Precisely because she insists that experience not be entered blindly and therefore articulates the multiple choices often obscured by force of habit and cultural assumption, she may be considered a democratic poet who models resistance to conformity as an expression of individual sovereignty.” [1-2])。ディキンソンの「個人の主権」を重んじる姿勢については理解できるが、“a democratic poet”の表現については疑問が残る。

Chapin Holland) 夫妻、ヒギンズ、ヘレン・ハント・ジャクソンなど、アメリカ文学界・出版界で活躍していた友人達に送られ、さらに彼等のネットワークを通じて未知の読者へと、相当拡大していたことになる。

それではディキンズ自身は「読者」をどのように想定していたのだろうか。詩を直接送った相手だけでなく、その人物を介して詩が渡るかもしれない未知の読者もまた念頭にあったのだろうか。さらに気になるのは、先にも触れた、この期間の詩の扱い方である。当時、ディキンズが南北戦争に影響を受けて書いたとされる詩、または戦争と関わるとされる詩のほとんどが、誰にも送られていない<sup>108</sup>。厳密な言い方をすれば、一部の例外を除いて、隣家に住むスーザンのような親しい間柄の人物にさえも送られた形跡がない<sup>109</sup>。

この事実に関する言及は、フェイス・バレットおよびクリスタン・ミラー (Cristanne Miller) が数少ない例である。バレットは “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F384) の詩について回覧の証拠がないことを示唆している<sup>110</sup>。クリスタン・ミラーはさらに議論を深め、「戦争詩」自体が送られていなかった可能性を指摘している (*Reading in Time* 147, 246)。ミラーは、「真剣に」書かれた詩であり、出来が悪くて送らなかったという解釈で終わらず、いくつかの可能性を提示している (*Reading in Time* 147)<sup>111</sup>。ふたりの指摘や議論をさらに押し進め、友人たちに送られた結果、戦争の時代に新聞や雑誌に掲載された詩と、送られなかった詩の、ふたつの対照的な詩群の存在に注目する。そしてどちらの詩群も、ディキンズにとって不可欠な存在であったことを最終的に確認し

---

<sup>108</sup> ただしエバウエインが *Reading Emily Dickinson's Letters* 序文で言及しているように、現在、私たちが読むことのできる手紙はディキンズが書いた手紙の 10 分の 1 ほどと想定しているため、全貌を確認することは残念ながら不可能である (i)。

<sup>109</sup> 例外としては、第 1 章で論じたヒギンズ宛てに送った例 “That after Horror - that ‘twas us -” (F 243) の後半と、第 2 章で論じたボウルズ宛てに送った例 “Victory comes late -” (F 195) がある。

<sup>110</sup> 「ディキンズがこの詩 [F 384] を回覧した証拠はない」 (“We have no evidence that Dickinson circulated this poem in correspondence.” [Barrett “Dickinson’s War Poems in Discursive Context” 112]). コーディ・マーズ (Cody Marrs) は戦争に関わる詩とは括らず、「後半に書かれた詩」 (“her later poems”) が回覧されていない事実を指摘し、具体例に戦後の詩を挙げている (Marrs 150)。

<sup>111</sup> ミラーは「恐らく数多くの理由がある」 (“There are no doubt a number of reasons” [*Reading in Times* 174]) として、いくつかの可能性を列挙している。具体的には次章で言及する。

ていく<sup>112</sup>。

#### 第4節 「送られた」詩

第1章ですでに言及したように、ディキンソンは南北戦争中だけでも100篇の詩をスーザンに送っている。そして恐らくスーザンを経由して、北軍系の新聞紙面に詩が登場した。また、前章で述べたように、南北戦争末期の1864年2月と3月に3篇の詩“Flowers - Well - if anybody” (F 95), “These are the days when Birds come back -” (F 122), “Blazing in Gold and quenching in Purple” (F 321) が北軍系の新聞『ドラム・ビート』に、その後、1864年4月にブルックリンで発行された同じく北軍系『ブルックリン・デイリー・ユニオン』(*Brooklyn Daily Union*)にも“Success is counted sweetest” (F 112) が載っている。

出版に至る正確な経緯は判明していないが、今のところ、ふたつの推論がある。第2章でも触れたが、ダンデュランドの推論では、兄オースティンと親しいリチャード・ソルター・ストー(Richard Salter Storrs, Jr.) が『ドラム・ビート』に携わっており、スーザンを通じてディキンソンの詩が渡された。一方、ヴァージニア・ジャクソン(Virginia Jackson) は、スーザンの友人でブルックリン在住のガートルード・ヴァンダービルト(Gertrude Vanderbilt) が、慈善市開催に携わっており、ディキンソンの詩の掲載に関与したものと推測している(252n.3, 253n.14)。いずれの場合にせよ、ディキンソンがスーザンに詩を送り、スーザンの交際ネットワークを介して北軍系の新聞に掲載されたことになる。しかもミラーが示唆しているように、著作権の抜け道のため、一度掲載されたものが別の新聞にも転載されている(*Reading* 94-95)。その結果、興味深いことに、ディキンソンの詩は最終的には個人的なつながりのない『ボストン・ポスト』(*Boston Post*)にも現れ、同時代の幅広い読者の許に届けられたのだ。

ここで『ドラム・ビート』に載った詩を改めて見てみたい。先述したように、ブルックリン慈善市の報告記事と共にディキンソンの詩が並ぶ。3篇のうち2篇(“Flowers - Well - if anybody” [F 95]と “These are the days when Birds come back -” [F 122]) が戦争前の作であることも先に述べた。残りの1篇 (“Blazing in Gold and quenching in Purple” [F 321]) は戦争中の作と推定されているが、戦争との関係を

---

<sup>112</sup> 2008年アマスト開催 Emily Dickinson International Society Annual Meeting のワークショップに筆者が提出した原稿 “Narrative of War”がこの着想の原点になる。



見出すのは難しい<sup>113</sup>。だが、“Flowers - Well - if anybody” (F 95) の詩は、北軍支援の新聞に次々と掲載され、1864年3月2日付『ドラム・ビート』、3月9日付『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』、3月12日付『スプリングフィールド・ウィークリー・リパブリカン』、そして3月16日付『ボストン・ポスト』と、2週間ほどの間に矢継ぎ早に4紙に登場した。ここでは『ドラム・ビート』に掲載された形で引用する。

Flowers - well, if anybody  
Can the extasy define,  
Half a transport, half a trouble,  
With which flowers humble men -  
Anybody find the fountain,  
From which floods so contra flow,  
I will give him all the Daisies,

---

<sup>113</sup> クリスタン・ミラーもこの3篇の詩は戦争と無関係であると断じている——「ディキンソンがこの新聞に送った詩は戦争とは関係がなく、かなり前に書かれたものである」(“The poems she sent this paper had nothing to do with the war and were written considerably earlier: “Flowers - Well - if anybody” (F 95 B; 1859), “These are the days when Birds come back -” (F 122 C; 1859); and “Blazing in Gold - and” (F 321 A; 1862)” [Reading 254n7]). しかし厳密には、“Blazing in Gold - and”(F 321A) は戦争中の作である。また、ヴァージニア・ジャクソン (Virginia Jackson) は、“These are the days when Birds come back -” (F 122A)の詩をディキンソンが1859年にスーザンに送っていることを指摘している。1859年の段階では戦争には無関係であったが、1864年にこの詩が『ドラム・ビート』に掲載された時点で、詩が戦死者を悼む哀歌に転じたと分析している——「この詩行は1850年代に初めてスーザン・ディキンソンに送られたようだが、ディキンソンが当初、戦争とともに強まった言説と共鳴する意図があったとは思えない。単に、北軍の大義に捧げられた新聞に1864年に偶然掲載されたことで、時期外れの『夏の日々の聖餐』が、陰鬱になりつつある季節に、神聖を帯びる希望の光と潜在的に似通うとされたのである」(“[S]ince the lines appear to have been first sent to Susan Dickinson in the 1850s, it is unlikely that Dickinson originally intended them to resonate with the discourse that intensified with war; it was only their accidental publication in 1864 in a paper devoted to the Union cause that made the untimely ‘sacrament of summer days’ potentially analogous to a divinely sanctioned ray of hope in a darkening season.” [76]). マーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) は、この詩をスーザンの詩 “There are three months of the Spring” に呼応したものとして、「呼びかけと応答の関係」(“a call- and response relationship”) を示唆している (*Open me Carefully* 71)。

Which upon the hillside blow!

Too much pathos in their faces,

For a simple breast like mine!

Butterflies from St Domingo,

Cruising round the purple line,

Have a system of aesthetics

Far superior to mine!

(F 95A)

花々のことと言えば、そう、  
あの陶醉感を定義できる人がいるかしら、  
半分は恍惚、半分は苦しみと共に  
花々は人を謙虚にする、  
あの泉を見つける人がいるかしら  
逆流が湧き出てくる泉を、  
そのひとに雛菊を全部あげましょう  
丘の斜面で咲いているものを

花々の面に浮かぶ情念は  
わたしのささやかな胸には耐えられないほど  
サントドミンゴから渡ってきた蝶たちは  
紫の列を旋回し  
わたしなどはるかに凌ぐ  
美学体系を持つ。

ディキンソンの詩には珍しい口語的な間投詞 “well” が用いられ、ささやかな雛菊の存在に圧倒される詩人（語り手）の言葉が囁く。小さなものが思いがけない力を秘めていることを歌った詩である。語り手の言葉は句またがりが進み、“flowers”, “find”, “fountain”, “from”, “floods”, “flow” と “f” の頭韻を効かせ、小さな存在が引き起こす強烈な源泉にまで至る。雛菊の咲く丘の中腹、異国の地サントドミンゴへ読者を誘い、そこから飛び立った蝶たちは、恐らく冒頭の花々に降り立つのだろう。こうしてひと巡りしても、花のささやかな存在が持つ圧倒的な力の不思議を、人は説明することができない。「定義」や「美学体系」を超えた存在なのである。

ジュディス・ファー (Judith Farr) は、この詩を、自然の神秘に対して詩人が抱く「恍惚」と「苦悩」の感情を歌ったものと捉えており、戦争については全

く言及していない(142-4)<sup>114</sup>。クリスタン・ミラーもまた、この詩が戦争とは無関係であると指摘している (*Reading in Time* 254 n.7)。戦争前に、戦乱とは無関係に作られたこの詩を、戦争中に発行された『ドラム・ビート』紙3月2日号の紙面で見ると、確かに、何の脈絡もなく配置されたかのような印象をまず与える。『ドラム・ビート』紙面には、戦争関係の記事や北軍衛生委員会の寄付金集めを目的にした慈善市関連の記事が所狭しと並ぶ。戦争を題材にした詩、戦争にまつわるエピソード、慈善市の紹介や報告、地元の人々のエピソードやエッセイ、そして保険会社の広告が連なり、ブルックリンでの戦争協力を伝えている。一緒に掲載されている他の詩人たちの詩——“Footsteps” (兵士の死を歌う詩)、“A Hard-Shell Lyric” (チェサピーク湾あたりの地方に伝わる十月の歌)、“Hiawatha, on The Fair” (ブルックリンの慈善市を称える詩)——の中にあって、ディキンソンの詩“Flowers” (F 95) は、主題に関わりなく、北軍支援の地元の有志が慈善で寄せた詩のように映る。だが、転載されていくにしたがってこの印象は変化する。

その後、“Flowers” (F 95) は『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』に転載され、最終的に『ボストン・ポスト』に至る。全国規模の新聞ならではの紙面で、シャーマン将軍の進撃、リンカンによる徴兵令、議会についてなど国政記事が目立つ。“Flowers” (F 95) とともに掲載された、別の詩人による匿名の詩“The First Snowdrop” は、戦争という「人生の嵐の只中であって」(“in the midst of life’s storm”), 「疲れた人々を慰める」(“to solace the weary”) 雪を歌ったものとして読むことができる。戦時色の濃いこの紙面に、ディキンソンの“Flowers” (F 95) を置くと、激動の時代に生きる人々に寄り添う声となる。「野」(“field”) の花々を前に、「戦場」(“battle field”) の「男性」(“men,” “him”) さえも涙するのである。

この詩で“blow” はアメリカ英語の「(花が) 咲く」の意味で使われているが、音としては「強打」(“blow”) の意味も喚起して、“flow”と押韻して暴力的な力を連想させる。さらに“blow” は“floods” や“flow”とも結びつき、「(嵐などが) 吹く」などの自然の威力も想起させる。思いがけない力がこもる花は、「詩」を喩えたものとも考えられる。花々について歌っているが、この詩と同じ時期、1858年春頃に書かれたものとしてトマス・H・ジョンソンが推定した宛先不明の書簡“Master Letters”にも花が登場する。そこでは“flowers”は詩の意味で使

---

<sup>114</sup> 雛菊のようなささやかな存在が“men”を謙虚にさせる箇所についてテリー・ブラックホーク(Terry Blackhawk) は「伝統的なヒエラルキーに挑戦する女性詩人として」(“a woman poet challenging traditional hierarchies”) の感覚を反映させたものと見なしている(116)。

われている<sup>115</sup>。さらにウェブスターの辞書にあたるならば、“poem”の語源はそもそも「作ること」(“to make”)であり、そこから「歌を作る」、「歌を歌う」意味となる。この語源は“strain”(旋律)と共通しており、さらにウェブスターの辞書の“strain”の語義を確認するならば、その筆頭に“a violent effort,” “any injury by exertion drawing or stretching”がある。したがって、武器を持たずして人々を圧倒させる力を、花は—そして詩は—自ずと持つのである。またテリー・ブラックホーク(Terry Blackhawk)が指摘するように、“daisy”は詩人の分身「女性詩人」の意も含むだろう<sup>116</sup>。先述した“Master Letters”のひとつ(L 233)では雛菊の語り手「私」が登場する。戦場において武器は人を殺傷する力を持つ。だが、花や詩には別の力がある——時には戦場で死を待つ兵士の傍らで、戦友を亡くした兵士を前に、戦いに疲れた人々に、家族や友人の身を案じる人々のそばで、人々の思いに寄り添う存在となる。戦争を意識して書かれたわけではない詩が、戦争の時代にディキンソンの意図を超えて、ささやかな花(詩)に宿る思いがけず大きな力を発信したといえる。

さて、この詩は戦争前に作られた詩ではあるが、戦争を引き起こす要因となった奴隷制に関わる用語を見出すこともできる。第2連3行目“St Domingo”は1791年に黒人の反乱・革命が起こったハイチの首都である。人間の争いとは関わりなく飛翔する蝶たちは、戦いにまつわるふたつの場所——ハイチと南北戦争の戦場——を“line”(線 / 詩行)で結ぶ。エリカ・フレットウェル(Erica Fretwell)はこの詩の「明確に革命的な用語」(“explicitly revolutionary terms” [78])に注目し、ハイチの黒人たちの革命を窺わせる要素と韻律の乱れから、主題と形式の両面で「無法」状態を表現していると解釈する(77-78)<sup>117</sup>。エライザ・リチャーズもまた“St Domingo”という言葉が戦前においてハイチの「血なまぐさい奴隷の反乱への恐怖」(“the fear of bloody slave insurrection”)を呼び起こす語であったと示唆している(“How News Must Feel” 173)<sup>118</sup>。ディキンソン自身も“St

<sup>115</sup> Marianne Noble の “Master” (*An Emily Dickinson Encyclopedia* 194-195)を参照。具体的には「あなたは私の花々が何と行ったかをお尋ねです。花々が不従順だったとも。私がそれらにメッセージを伝えたのですが」(“You ask me what my flowers said - then they were disobedient - I gave them messages.” [L 187])の箇所である。

<sup>116</sup> テリー・ブラックホーク(Terry Blackhawk)の “Flowers - Well - if anybody.” (*An Emily Dickinson Encyclopedia* 116-117)を参照。

<sup>117</sup> フレットウェルは“St Domingo”が使われている別の詩 “I could bring You Jewels - had I a mind to -” (F 726)も引用している。

<sup>118</sup> リチャーズは“As the Starved Maelstrom laps the Navies” (F 1064) を用いて例証している。この詩では“the Starved Maelstrom”, “the Vulture”, “the Tiger” のような獰猛な気象や鳥獣が比喩で用いられている (“How News Must Feel” 173)。

Domingo”の語が持つ時代性を共有していた可能性はある。それは、ディキンソン家が購読していた『アトランティック・マンスリー』1863年3月号では、牧師で反奴隷制主義者ジョン・ワイス(John Weiss)による文章“The Horrors of San Domingo”が連載され、西インド諸島の奴隷貿易や、奴隷制を規制した黒人法(“Code Noir”)、およびムラートについて説明しているからだ。先の“Flowers”の詩(F 95)が1864年に北軍系新聞に掲載された時には、「サントドミンゴ」の地名を奴隷制と結びつける下地がすでにあつたといえる。つまりは、詩を書き、友人に渡したときの詩人の意図を越えた、別の解釈を時代が提供したと考えられる。

ディキンソンの書簡研究においてマリエッタ・メスマー(Marietta Messmer)は、「公の、匿名の大衆にテキストを消費されるよりも、ディキンソンにとって理想的な受容の形は、個人的な書簡を熟読する行為に最も典型的に見られるような、もっと恭しい、個人的な行為である」(“Rather than a public, anonymous mass consumption of texts, Dickinson’s ideal form of reception is a much more reverential, private act, best epitomized in the perusal of a personal letter.” [186])と述べている。ディキンソンが手紙と共に送った詩には「書かれたレヴェル」とともに「書かれていないレヴェル」のコミュニケーションが暗に込められていたはずである<sup>119</sup>。つまりは具体的な事情を省いても差し支えない間柄で、送り手と受け手の暗黙の了解のうえに文通は成り立っていたはずである。その関係に基づいて、当初、“Flowers - well, if anybody”(F 95)の詩が送られたと考えられる。だが、1859年作のこの詩が送り先の友人(恐らくスーザン)の計らいで回覧され、何度も転載されていくにつれて、詩を送ったときのディキンソンの意図とはかけ離れ、詩自体が独り歩きをしていく。転載に次ぐ転載の結果、戦争の時代の要素も帯びつつ、未知の読者の目に触れることになった、そうした可能性をここに見出すことができる<sup>120</sup>。

---

<sup>119</sup> フランクリンによると、出版の元になった版は喪失しており、ファシクルの版だけがある(132-133)。

<sup>120</sup> クラムブリイは、ディキンソンが自分で選んだり、制御したりできない状況で「これらの詩が回覧されたり、限定的に出版され、1864年には[出版が]一種の最高潮に達し、ディキンソンも自分の詩が新たな生命を得たことがわかった」(“The circulation and limited print publication of these poems, which achieved a kind of high point in 1864, might also have led Dickinson to realize that her poems had lives of their own.” [Fascicle 192])と解釈している。

## 第4章 南北戦争時に「送られなかった」詩

One drop more from the gash that stains your Daisy's  
bosom - then would you *believe?* (L 233)

### 序節

前章では親戚や友人たちに送られた詩が新聞掲載を経て、未知の「読者」に届いた例を見た。戦争前に書かれた詩が、ディキンソンの意図を超えた意味を戦争中に帯びていった可能性がある。その一方で、戦争に関わる詩のほとんどは誰にも送られず、同時代の人々と共有されていない<sup>121</sup>。「送られた」詩と「送られなかった」詩という対照的な詩群が存在していたことになる。

これまでの研究でこのふたつの詩群を取り上げた十分な考察はない。フェイス・バレット(Faith Barrett) は一篇の詩 “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) について回覧されていない事実を示唆しており (“Drums off the Phantom Battlements” 121)、クリスタン・ミラー (Cristanne Miller) は戦いに関わる詩が回覧されなかった理由を推論している。またアルフレッド・ハベガー (Alfred Habbeger) は、この時期に書かれた苦悩の主題の詩について送られた形跡がないことを指摘している<sup>122</sup>。戦争に関わる詩と、苦悩を歌った詩のほとんどが回覧

---

<sup>121</sup> クリスタン・ミラーが言及するように、生前に出版された詩 10 篇の詩のうち 7 篇が戦争中のことであり、しかもそのうちの 3 篇が北軍の資金集めを目的に出版された『ドラム・ビート』(*Drum Beat*) に掲載された (*Reading* 148)。

<sup>122</sup> ハベガーは「極限の苦悩の概念」(“The idea of extreme pain”) の詩が 1859 年に数篇作られ、1860 年代初期の詩では主要な主題になっていることを指摘し、具体例として次の詩を挙げている [408-409] — “I shall know why - when Time is Over -” (F 215), “It is easy to work when the souls is at play -” (F 242), “That after Horror - that ‘t was *us* -” (F 243), “I should have been too glad, I see -” (F 283C), “A Weight with Needles on the pounds -” (F 294)。さらにハベガーは次の 3 篇を、苦悩を主題にした詩として挙げたうえで、回覧をしていないことを指摘している——「彼女が苦悩を最も印象的に扱っている詩——“I like a look of Agony” (F 339), “I felt a Funeral, in my Brain” (F 340), “After great pain, a formal feeling comes -” (F 372) ——は何ら[苦しみを宗教的に]正当化してはいない。我々がさらに気づくのは、この 3 篇の詩が 1862 年頃に草稿集 16 と 18 に入れられているものの、誰かに見せたかは不明であることだ”( “[H]er most impressive treatments of suffering—offer no such justification. We note as well that these three poems, entered about 1862 in manuscript books 16 and 18, aren’t known to been shown to anyone.” [409])。

されなかったことになる。生涯の詩の半数以上が書かれた戦争の時代に、しかも詩人として意識しながらヒギンソンに手紙を書いていた時期に、重要な主題の詩が回覧されなかったのは偶然ではないだろう<sup>123</sup>。前章における「送られた」詩の考察に引き続き、本章では「送られなかった」詩を考察し、ふたつの対照的な詩群が存在した意味を考える。

詩の回覧の有無について、ディキンソン研究では論じられたことはこれまでほとんどなく、その意味で、クリスタン・ミラーがその存在に言及し、推論した意義は大きい<sup>124</sup>——「恐らくこれらの詩を回覧するのは危険すぎると思ったからだろう。恐らくこれらの詩があまりにも多くを明るみに出すのではないかと彼女は案じたのだろう——明らかにしたいと望む、或いは友人たちに彼女自身について想像してもらいたいと思う以上のことを明かしてしまうと考えたからだろう」(“Perhaps they seemed too risky to circulate; perhaps she feared they would reveal more - or might seem to reveal more - about herself than she wished revealed or wanted friends to imagine.” [Reading in Time 175])<sup>125</sup>。ミラーが「危険」

---

<sup>123</sup> 例外としてヒギンソンに送った“*That after Horror - that 'twas us -*” (F 243) がある。この詩については第 1 章で考察したように、後半のみを送っている。1863 年当時のヒギンソンが戦傷を負って療養中であった。ヒギンソンが戦場での極限を経験したためにディキンソンも例外的に送ったものと解釈できる。

<sup>124</sup> クリスタン・ミラーは、*Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them* (2016) を編纂するうえで、詩が送られたかどうかという事実を考慮したとインタビューで語っている——「この版だけが、詩が回覧されたか、そして誰にかがわかる情報を提供しています」(“[I]t is the only reading edition that gives information about whether a poem was circulated, and whom.” [“An Interview” 14])。

<sup>125</sup> さらにミラーは「多数回覧された」(“the multiply circulated”) 詩の一例を挙げ、“*Safe in their Alabaster Chambers -*” (F 124) が「軽い調子と、生命力を祝福する様々な形の第 2 連を伴っている」(“with a light touch and with a variety of second stanzas celebrating the vibrancy of life” [Reading in Time 174]) と述べている。確かにミラーが指摘するように、差し障りがない詩を回覧し、人々がどう解釈するかを案じる詩は控えたと思われる。ミラーは、続けてディキンソンが回覧しなかった詩の性質について次のようにまとめている——「彼女が回覧しなかった多くの詩が、驚くほど率直に、苦しみの経験に直面しており、あまりにも極度の苦しみであるために狂気や無感覚になるほどである」(“[M]any others she did not circulate face with extraordinary forthrightness an experience of suffering so extreme it leads to madness or coma.” [Reading in Time 175])。ミラーは例として以下の詩を挙げている——“*I felt a Funeral, in my Brain,*” (F 340), “*After great pain, a formal feeling comes -*” (F 372), “*It was not Death, for I stood up,*” (F 355), “*'Twas like a Maelstrom, with a*

であると指摘するのは、人々との交際において自分の心の安定が脅かされることを指すのだろう。周囲の人々に対して、自分の内面を曝け出す恐れのある詩を控えたものと考えられる。ただしミラーはどの詩のどのような部分が「危険」なのかは具体的な分析をしていない。ミラーの指摘を踏まえつつ、「送られなかった」詩をめぐる考察をさらに進めていく。

## 第1節 苦悩から詩作へ

1862年4月25日にディキンソンがトマス・ウェントワース・ヒギンソン(Thomas Wentworth Higginson)に宛てた2通目の書簡(L261)からふたつのことがわかる。ひとつは、1861年の秋頃から、ディキンソンが何らかの深い苦悩を抱えていたことであり<sup>126</sup>、もうひとつはその苦悩が詩作へと結びついていったことである。

私の年齢をお尋ねでした。私は詩を書いていません 1・2篇だけです この冬までは。私は恐怖を抱えていました 9月からのことです 誰にも話すことができませんでした だから歌うのです 少年が墓地でそうするように 私は怖いのです

You asked how old I was? I made no verse - but one or two - until this winter -  
Sir - I had a terror - since September - I could tell to none - and so I sing, as the  
Boy does by the Burying Ground - Because I am afraid - (L 261)

---

notch,” (F 425), “There is a pain - so utter -” (F 515), “Pain - has an Element of Blank -” (F 760)。

<sup>126</sup> 引用した手紙以外に、苦悩の念が書かれた手紙としては、宛先不明の“Master Letters”と呼ばれる3通の下書きがある。ジョンソンの推定では最初の書簡(L187)は戦争前の1858年春頃、2通目(L233)は1861年前半の夏頃に、3通目(L248)は1862年初期に書かれている。2通目と3通目の順番についてフランクリンは異説を唱え、L248が2通目(1861年初期)であると主張している。どの下書きにも“Master”に対する深い傷心が綴られている。この手紙がディキンソン研究で注目を集めてきたのは、マリエッタ・メスマー(Marietta Messmer)が述べるように、生涯で最も充実した詩作の時期に書かれているからである(Messmer 130-135)。また、戦争への気運漂う1858年から戦争勃発後1861年の間に書かれているため、戦争との関わりを捉えるうえでも重要である。手紙の下書きには、弾丸や血、噴火のイメージ、暴力的な行為を示す表現が多々用いられ、鬱屈する時代の気配をも解釈できる。この手紙に関しては、金澤『『詩人』の仕事——ソローからディキンソンへ』(『ソロー学会研究論集』)を参照。



ここでの「恐怖」が具体的に何だったのかは不明である。しかし「9月から」とははっきりと書かれており、少なくとも実際に何かがあったらしいことは窺われる。決定的な原因は特定できないながらも、失恋、目の疾病、近しい人々の死などがこれまで推論されてきた<sup>127</sup>。

その中で、コーディ・マーズ(Cody Marrs) は特に戦争ゆえの「恐怖」であるとし、その「恐怖」が詩作に結びついたものと解釈する——「彼女は成熟した詩人としての起点を示しており、それは甚大な戦禍をもたらした戦争の最初の冬と一致する」(“She is locating an origin-point for her mature poetic self, and that moment coincides with the war’s first winter of devastating battles.” [122])<sup>128</sup>。マーズ

---

<sup>127</sup> ハベガー同様、リチャード・シューアル (Richard Sewall) も苦悩の主題に注目し、1862年に書かれた詩のうち366篇が苦悩の主題であると述べている。その際、サミュエル・ボウルズとの関わりで生じた「苦しみ」が基になっていると解釈する——「もしハーバード版[ジョンソン版]の日付がおよそ正しいなら、1862年に彼女が書いた366篇は、どんなにその苦しみが大きくとも彼女が悲しみに打ち伏さなかったことを示す。誰かが彼女を憐れむ気を起こしても、その苦しみの事実は心のうちに秘めておかなくてははいけない」(“If the dating in the Harvard edition is even approximately right, her writing of some 366 poems in 1862 shows that her anguish, however great, did not prostrate her, a fact which should be kept in mind when one is tempted to pity her.” [Sewall 491])。

また、トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) は“Master”をチャールズ・ワズワース (Charles Wadsworth)と見なし、L 248の“Master Letter”と対にして、ワズワースからの慰めの手紙 (L 248 a) を書簡集に収録している。この手紙でワズワースはディキンソンの「苦しみ」 (“the affliction”)として触れている。ベンジャミン・リース (Benjamin Lease)もまたワズワース説を唱え、1861年のワズワースの動向と関連付けて考察している (Lease 14-18)。

リンダール・ゴードン (Lyndall Gordon) は *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family’s Feuds* (2010) において“Master”を「夢想」 (“fantasy”)の存在とみなしている——「私の感覚ではマスターの存在は、大部分は、完全にというわけでもないが、刺激的な夢想であり、それだけいっそう興味をそそる。というのも女であることのゲームをしながらも性的な術策には束縛されぬ情熱的な女性について明らかにするからだ。認識内の既婚者たちとの交友関係にそうした人物が存在するとは思えない——親切な牧師と使い古された韻律に夢中な3人の文学界の権威者たち——彼等は彼女の欲望の対象というすばらしく卓越した地位には適さなかっただろう」(“My sense is that Master was largely, though not completely, a stirring fantasy, all the more intriguing for what it reveals about a passionate woman who played games of femininity but kept herself free from sexual artifice. I don’t think any existing man in her circle of recognizable husbands—a kindly minister and three literary authorities hooked on trite rhymes—could have lent himself to the royal extravagance of her desire.” [Gordon 98])。ゴードンの「ゲーム」とする解釈には賛同できないものの“Master Letter”を実際に特定の人物に送ったかは断定できない。実在の人物に送るには、あまりにも赤裸々な感情を語っている。詩と同様に、送られることなく下書きのまま置かれていたものと考えられる。恋愛感情の対象は確かにいたのだろう。しかしその人物を、“Master Letter”における“Master”と同一人物とするには更なる論究が必要であろう。

<sup>128</sup> 序章で先述したように、アルフレッド・ハベガーもまた、戦争が詩人ディキンソン

の見解を援用してこの手紙を読み直すならば、ここで「恐怖」に関わる死とは、戦争による死として推論できる——「だから歌うのです 少年が墓地でそうするように」。マーズが述べるように、本格的な詩人としての出発点がこの時期であると捉えるのが妥当であろう。第1章で先述したように、1862年の戦況に導かれたかのように、ディキンソンはヒギンソンに手紙を投函した。それは、いわば詩人としての名乗りとなる。また、この時期に書いた詩を、友人や知人に送る詩と、送らずに手許に置く詩とに分けていた。この行為は、詩作に関するディキンソン自身の思索と密接に関わるものと思われる。この2通目の手紙もまた、ヒギンソンに対して「詩人」の姿勢をとる一例になる。マーズは、ヒギンソンに年齢（“the chronology of her body”）を尋ねられたディキンソンが、「詩の年齢」（“the chronology of her poems”）に摩り替えて答えていることを鋭くも指摘している（122）<sup>129</sup>。ディキンソンがヒギンソンに望む文通とは、個人的な世

---

に大きな主題を与えたと解釈している——「南北戦争はディキンソンに明確な象徴的な劇場を提供した（中略）。戦争は彼女自身の極限を追究するための媒体をもたらしたのである」（“The Civil War offered Dickinson a stark symbolic theater . . . War gave her a powerful vehicle with which to parse her own extremity.” [404]）。ハベガーは、ディキンソンの苦しみを表現する「媒体」（“vehicle”）を戦争がもたらしたと解釈する。戦争自体が恐怖や苦しみを与えたとするマーズの解釈とは異なる。

<sup>129</sup> ハベガーは、戦争の時代に書かれた苦悩の主題の詩を取り上げ、具体的な単語に依拠しながら特定の時期に何度もディキンソンが立ち戻った言葉 “hurt” に言及している——「極限の痛みという概念が、1859年のいくつかの詩に現れ、1860年代前半には “hurt” の語（名詞・動詞共に）21例のどれもが1860年から63年の間に現れている」（“The idea of extreme pain, appearing in a few poems in 1859, became one of Dickinson’s major subjects in the early 1860s. Of the twenty-one instances of the word “hurt” in her poems (noun or verb), every single one occurs between 1860 and 1863.” [408]）。ハベガーはこの主題が戦争の時代に書かれた意味にも触れ、戦争故にもたらされる特別な局面が「苦悩」の主題に繋がったと指摘する [Habegger 404]。だが、ハベガーは肝心の個々の詩について掘り下げることはなく、伝記の次の項目へと移っている。

1860年代前半の南北戦争期のディキンソンの詩には、内なる深淵を見つめ、苦悩する魂を捉えようとするものが並ぶ。例えば、冬の午後に射す光に心の内なる疼きを捉える “There’s a certain Slant of light,” (F 320)、内面の苦悩を人の表情に見出だそうとする “I like a look of Agony” (F 339)、自身の葬式の間を想像する “I felt a Funeral, in my Brain,” (F 340)、亡霊に遭遇する恐怖 “’Tis so appalling - it exhilarates -” (F 341)、大きな衝撃を受け、目隠しされたような瞬間を経験する “The Soul has Bandaged moments -” (F 360)、とてつもない衝撃の後の「鉛の時間」を記す “After great pain, a formal feeling comes -” (F 372)、或いは、過ぎた苦しみを振り返る “It ceased to hurt me, though so slow” (F 421) など枚挙

間話をするものではなく、詩を中心とした話題に徹したものであったのである。

この時期のディキンソンの「苦しみ」は特定のひとつではなく、いくつもの要因が重なったものだろう。20代後半から30代という女性として心身ともに微妙な年齢にあって、女友達の結婚や出産による疎外感・喪失感・孤独感を抱えていたはずである。さらに個人的な悩みを相談していたチャールズ・ワズワース(Charles Wadsworth)がフィラデルフィアからはるか遠方サンフランシスコの教会に赴任、相談相手のボウルズもまた海外へ長期出掛けてしまう。眼の疾病の悩み、戦争の不穏な空気、知人の戦死、親戚の死、そして詩人としての展望の不安など、鬱積した精神状態を挙げることができる<sup>130</sup>。恋愛、別離、死別、精神的な苦悩、文学的な野心など様々な不安を抱えつつ、特に戦争による強烈な打撃によって、詩という表現がディキンソンにとって不可欠なものになっていったと考えられる。

## 第2節 フレイザー・スターンズの戦死

ディキンソンが手紙で戦争に言及したなかで、前章でも見たとおり、1862年3月14日、ノースカロライナ州ニューバーンにおけるフレイザー・スターンズの戦死が最も重要である。第2章で考察したように、マサチューセッツ州歩兵隊第21連隊に参加した21歳の若きスターンズの死は強い衝撃をディキンソンに与え、友人のサミュエル・ボウルズ(Samuel Bowles)と、従姉妹のノアクロス(Louisa and Frances Norcross)姉妹の双方に手紙を送った。それから半年ほど経った1862年の秋ごろ、ディキンソンが清書したのが“*It dont sound so terrible - quite - as it did -*”(F 384)である。先の章においても取り上げたが、回覧しなかった問題を考えるうえで、改めてここで再読する。

---

に暇がない。戦争の時代と苦悩の詩の主題との直接的な影響関係はあくまでも推定の域をでない。それでもなお、何らかの苦悩が詩作に結びついたことをヒギンソンに手紙で知らせながらも、書いた詩自体は送っていない。

<sup>130</sup> 2017年1月の『ニューヨークタイムズ』(*New York Times*)に掲載されたハロルド・コッター(Harold Cotter)のディキンソン像が、21世紀の読者としては受け入れやすい。設定時期こそ大雑把であるが、この頃の苦悩を友人関係と結びつけて解釈している——「1850年代は個人的な苦悶の時期であった。彼女の学校時代の友人たちは分散してしまった。何人かは結婚した。そのなかにスーザン・ギルバートがおり、彼女とは強い感情的な、知的な絆を作り上げ、自身の詩の最初の読者および編集者としても信頼していた」(“The 1850s were a period of personal tumult. Her school friends had dispersed. Several had married. Among them was Susan Gilbert, with whom she had forged a tight emotional intellectual bond, and whom she relied on as a first reader and editor of her poetry.” [*New York Times* 19 Jan. 2017]).

It dont sound so terrible - quite - as it did -  
I run it over - “Dead”, Brain - “Dead”.  
Put it in Latin - Left of my school -  
Seems it dont shriek so - under rule.

Turn it, a little - full in the face  
A Trouble looks bitterest -  
Shift it - just -  
Say “When Tomorrow comes this way -  
I shall have waded down one Day”.

I suppose it will interrupt me some  
Till I get accustomed - but then the Tomb  
Like other new Things - shows largest - then -  
And smaller, by Habit -

It's shrewder then  
Put the Thought in advance - a Year -  
How like “a fit” - then -  
Murder - wear! (F 384)

その言葉は前ほど恐ろしく響かない  
わたしは繰り返した「死んだ」、脳よ 「死んだ」と。  
学校時代に習った ラテン語に置き換えてみよう、  
文法のもとだと それほど金切り声をあげないようだ。

向きを変えてごらん 少しだけ。面と向かうと  
困難はひどく辛く見える  
置き換えてごらん ほんのちょっと  
「明日がこんなふうに来てくるなら  
切り抜けたことになるだろう」と言えば良い

それはいくらかわたしを妨げるだろう  
慣れるまでは けれどもそれから墓は  
他の新しいものと同じで もっと大きく見え それから

習慣で、小さく見えるようになる

だから抜け目なく

考えを前もって 一年先に進めて

「ぴったり具合」を確かめる それから

殺害の表現 を身に纏うのだ

知人の戦死という衝撃を和らげるにはどうしたら良いか、語り手は懸命に思案する。ボウルズ宛ての手紙 (L 256) とこの詩では重複する表現がいくつもある——訃報が「脳」に与えた衝撃 (手紙では“*He says - his Brain keeps saying over ‘Frazer is killed’ - ‘Frazer is killed,’ just as Father told it - to Him.*”)、鉛のように重くのしかかる言葉 (手紙では “*Two or three words of lead - that dropped so deep, they keep weighing -*”), 衝撃から克服する方法を問う (手紙では “*Tell Austin - how to get over them!*”), フレイザーの戦死を「殺人」 (“*Murder*”) と表現する (手紙では “*Frazer’s murder*”). 類似した表現を多く含みながらも、手紙はボウルズに送られ、詩の方は送られなかったのは何故だろうか。

手紙と詩を見較べると決定的な違いがある。手紙では兄オースティンが訃報から受けた衝撃を報告しているのに対して、詩では語り手自身が受けた衝撃を語っている<sup>131</sup>。手紙では “*Tell Austin - how to get over them!*” と、兄を助けて欲しいと請い、ディキンソン自身の悲しみには殆ど触れていない。一方、詩では全面的に語り手が受けた衝撃の深さを語っている。

この衝撃の大きさを、破格の文法と韻律の乱れに読み込むこともできるだろう。幾分は回復して「前ほど恐ろしくは響かない」 (“*It dont sound so terrible - quite - as it did -*”) と語るものの、その余波を伝えるかのように、文法の配慮を欠いた表現 “*dont*” (doesn’t とすべきところ) が2箇所目に見留まる。韻律も不安定であり、基本的には強弱4歩格で進みながらも、冒頭行で早速 “*as it did*” が付け加わり、次行 “*‘Dead’, Brain - ‘Dead’*” でも強強強と繰り返されて5歩格になっている。その後も突然、弱強格 (第2連2行目) や強弱格に翻り (第2連最終行)、歩格も2歩格のみで途切れる箇所がある (第2連3行目と第4連冒頭行)。

衝撃を克服しようとする前向きな姿勢に対して、形式面は歩調を合せることが出来ない。最終連では、前もって心構えをすることで厳しい現実を受け入れる方法を思いつく。だが、それも解決には程遠く、韻律の破綻はなおも続く。第3連・第4連で頻繁にダッシュや副詞「それから」 (“*then*”) が現れ、語り手の

<sup>131</sup> ディキンソンの評伝を書いたリチャード・シューアルは、兄オースティンを「口実」 (“*cover*”) に手紙を書いたものと解釈している。シューアルの解釈は書簡編集者ジョンソンの考えに従ったものである (Sewall 632)。

狼狽える口調を反映するかのようだ。23 箇所ダッシュが入り、リズムに微妙な間が生じる。語り手は、衝撃を指示代名詞 “It” で言い表し、その後も “as it did -”, “I run it over -”, “Put it in Latin -”, “Seems it don’t shriek so -”, “Turn it” のように代名詞 (“it”) のまま進み、“Dead”の言葉が出てきてようやく読者は誰かの死を推測する<sup>132</sup>。その後、語り手自身への命令形が並ぶ—— “I run it over”, “Put it in Latin -”, “Turn it”, “Shift it -”——が、結局、その試みは失敗に終わる。

語り手の動揺は、フレイザーの父が息子の死を神意として受け止める態度とは対照的である。アマスト大学学長ウィリアム・オーガスタス・スターンズ (William Augustus Stearns) が出版した追想録 *Adjutant Stearns* には、息子の生い立ち、家族に宛てた手紙、戦死を巡る数多くの新聞報道などがまとめられ、息子の死に殉教の意義を見出そうとする父親の思いを読み取ることができる。そもそもフレイザーが「ピルグリム・ファーザーズたち」の子孫であると強調し、息子の死を次のように粛々と受け止めている<sup>133</sup>。

息子を護って欲しいという祈りが聞き入れられなくとも、それは主がその智慧においてより良き目的をお持ちのためであり、内なる力を求める祈りは大いに叶えられた。「苦しみが増した時、慰めはさらに増した」からである。まさしく、イエスの信仰は、苦悩に抗う祈りにはほとんど励ましをもたらさず、苦悩に耐える力なら大いに与えてくれるのである。

While prayer for the preservation of the child could not be heard, since God, in his wisdom, had better purposes, prayer for inward strength was signally answered; for, “when sufferings abounded, consolations did much more abound.” Indeed, the religion of Jesus furnishes but little encouragement to prayer against afflictions, but much for power to bear them. [*Adjutant Stearns* 102]

様々な新聞がフレイザー・スターンズを「キリスト教の兵士」 (“Christian Soldier”

---

<sup>132</sup> フェイス・バレットは、ここで “Murder”の語が使われていることについて、「語り手自身の悲しみの衝撃に焦点が置かれているために、戦時の文脈からまったく切り離された死を表象している」 (“[T]he representation of death is wholly divorced from any wartime context in the speaker’s intense focus on her own state of shock and grief.” [“Slavery and the Civil War” 209]) と述べている。

<sup>133</sup> スターンズの父は、先祖にトマス・ダドレイ (Thomas Dudley)、エドワード・ジョンソン (Edward Johnson)、ジョン・オールデン (John Alden) の名を挙げている (*Adjutant Stearns* 7)。

[*Adjutant Stearns* 148]) としてその殉教的な行動を讃えている<sup>134</sup>。ディキンソンがノアクロス姉妹に宛てた手紙でも、葬式で頭を垂れ、従順に運命を受け入れる家族の姿を報告している<sup>135</sup>。遺族の態度に呼応するかのよう、葬式の翌日、アマストの教会では J・H・シーライ(J. H. Seelye) が “The Soul’s Remedy” と題する説教を行っている。「なぜ生はそんなにも悲しみに満ちているのでしょうか、罪を全く犯していないのに」 (“Why is that life so full of sorrow, which is so free from sin?”) と問い掛けながら、キリストへの信仰を人々に呼び掛け、次の聖書の言葉を繰り返す——「キリストは立って叫ばれた、もし喉が渇くなら、私の許に来て飲みなさい、と」 (“Jesus stood and cried saying if any man thirst, let him come unto me and drink.”)。ここには怒りや嘆きの言葉はない。まして疑問や不安の声もない。シーライが引用するヨハネ伝 7 章 37 節は、大多数のアマストの人々の心情に相応しい言葉であったに違いない。悲しみに暮れながらも、フレイザーの死を神意として受け止める主旨である<sup>136</sup>。

サミュエル・ボウルズ (Samuel Bowles) 自身はフレイザーの訃報を受けて 3 月 14 日に、ディキンソンの兄夫婦オースティンとスーザンに宛てて次のように書いている。

ニューバーンからの報せで残りの元気すべてが奪われた。彼[フレイザー・スターンズ]を知る者全員にとって非常に悲しい事実をひと目で知り、新聞を閉じて投げ棄てた。勝利など関心がなかった——そんなときには何も関心など持てない。

The news from Newbern took away all the remaining life. I shut & threw away the paper after seeing at first glance the great sad fact to all of us who knew him. I did

<sup>134</sup> *Adjutant Stearns* 巻末にフレイザーの戦死を扱った各紙の報道がまとめられている。

<sup>135</sup> 葬式での家族の様子をディキンソンは次のように報告している——「大勢の人々が彼にお休みなさいの挨拶を言いに来ました、聖歌隊は彼に向かって歌い、牧師様たちはどんなに彼が勇敢であるかを話しました、若き兵士の心を。そして家族は頭を垂れていました、風に吹かれる葦のように」 (“Crowds came to tell him good-night, choirs sang to him, pastors told how brave he was – early soldier heart. And the family bowed their heads, as the reed the wind shakes.” [L 255])。

<sup>136</sup> シーライによる手書きの原稿からの引用。原稿の冒頭には、この説教が読まれた場所と日付が羅列されており、1859 年から 1874 年の間にアマスト、ボストンやオールバニー、スプリングフィールドなどで、少なくとも 25 回用いられたことがわかる。戦争中の日付は 10 箇所確認できる。状況に応じてその都度修正が施されたものと推測できる (Collections at the Hitchcock Memorial Room, Amherst College)。シーライは兄オースティンの友人であり、ディキンソンの棺を墓地まで担った親しい間柄にある。

not care for victories – for anything then. [Leyda II 49]

ボウルズが書いた文面には死を直接表す言葉はなく、代わりに「非常に悲しい事実」(“the great sad fact”)という遠回しの表現になっている。一方、ディキンソンがボウルズに宛てた手紙では「オースティンはフレイザーの殺害にぞっとしています」(“Austin is chilled - by Frazer’s murder -”)のように“murder”の語が露骨に顔を出す。オースティンの反応について報告しながらも、“murder”の言葉自体は、それを選択した彼女自身の衝撃を間接的ながら伝える<sup>137</sup>。さらに詩では最終行に大文字で“Murder”の語が置かれている。フェイス・バレットはこの“Murder”の語に注目し、同時代の言葉の用い方とは明らかに異質であると述べている——「ディキンソンが“Murder”の語を使うことで戦争のイデオロギー的コンテキストから個人の死を分離している。我々がこの詩を南北戦争の哀歌のジャンルに応じたものとして読むならば、“Murder”の語は戦時の喪失という集団的なナラティブを再構成する役目を果たし、失われた個人の特異さ、哀悼者たちが感じる悲しみの個人的な特異さを強調する」(“While Dickinson’s use of the word “Murder” divorces the individual’s death from the ideological context of war, if we read the poem as a response to the genre of the Civil War elegy, the word “Murder” then serves to reframe collective narratives of wartime loss in order to emphasize the individual specificity of the life that has been lost and the individual specificity of the grief felt by the mourners.” [“Addresses to a Divided Nation” 164])。バレットは当時の数多くの雑誌や新聞の歴史資料にあたっており、多くの「哀歌」に目を通したならではの見解であろう。

バレットは「哀歌」を念頭に置いて論じているが、この詩 “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) 自体は、故人を偲ぶ伝統的な哀歌には程遠い。*Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* の「哀歌」(elegy) の項目では、「嘆き、賞賛、慰め」(“lament, praise and console”) の3つの要素が挙げられている(215-216)。喪失による悲しみを訴え、故人のかけがえのなさを挙げてその思い出を語り、自然の移り変わりや形而上的または宗教的な慰めを見出すのが伝統的な哀歌の

---

<sup>137</sup> 『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』(1862年3月20日)の報道では、18日にニューバーンの戦いが勝利したことを伝えている。見出しでは死者100人、負傷者400人の情報とともに、「副官F・A・スターンズ、アマスト大学スターンズ学長の息子が死者に含まれる」(“Adjutant F. A. Stearns, son of President Stearns of Amherst College, among the killed”)と特別の扱いで伝えられている。14日にボウルズがオースティンとスーザンに宛てた手紙では勝敗よりもスターンズの死の重さを訴えている。ディキンソンの手紙および詩では勝敗について全くふれず、スターンズ戦死の事実を書いている。



特徴である。ところがこの詩には、3つの要素はどれも見当たらない<sup>138</sup>。アマストにおけるシーライの説教とは全く異なり、語り手は宗教的な解決策にも一切触れていない。神意についても何ら触れず、代わりに時間による解決策を模索する。だが、その方法さえ、形容詞の比較級「より抜け目のない」(“shrewder”)が付いて否定的な眼差しを露呈し、結局、何ら解決には至らない。

フレイザーの戦死に直接影響を受けて書いたとされる詩は他にもあり、戦場の記憶が繰り返し付き纏う“Over and over, like a Tune -” (F 406)、戦死した若者と母親が天国で再会する場を思い浮かべる“When I was small, a Woman died -” (F 518)<sup>139</sup>、勇敢な戦死者に対して、生きていることを後ろめたく感じる“It feels a shame to be Alive -”(F 524)の詩が関連付けて解釈されてきた<sup>140</sup>。また、“My Life had stood - a Loaded Gun -” (F 764)は様々な読みが可能な詩であるが、スターンズの戦地からの手紙と照らし合わせた解釈もある<sup>141</sup>。犠牲者のモデルが誰であ

---

<sup>138</sup> アグニエズカ・サラスカ(Agnieszka Salska)は“elegy”について「歴史的そして実際的な理由で哀歌の明確な定義はほとんど不可能である」(“For historical and practical reasons a clear-cut definition of elegy is almost impossible.”)と述べながらも、エドワード・E・リバーマン(Edward E. Liberman)の*A Modern Lexicon of Literary Terms*の説明を引き、「哀歌は最終的な分析では死者のためというよりは残された者のためにある」(“Elegy is in the final analysis less for the dead than for the living.”)と説明している。そしてこの観点からディキンソンの詩を「哀歌」として分類するのは問題であると述べている(Salaska 97-98)。ただし、サラスカが例に挙げた詩は“I measure every Grief I meet”(F 550)と“I cannot live with You -”(F 706)であり、直接の知人の死を扱ったものではなく、切迫した悲しみはほとんど感じられない。

<sup>139</sup> トマス・H・ジョンソンはこの詩をフランシス・H・ディキンソン(Francis H. Dickinson)の戦死(1861年10月21日ヴァージニア州ボールズブラフの戦い)に触発されたものと解釈している。フランシス・H・ディキンソンが「アマストの町の割り当てで出征した兵士で最初の犠牲者」(“the first man on Amherst’s quota to give up his life for his country”)であると説明している(Johnson, *Poems* 457-458)。フランクリンは、この詩の清書の時期(1863年春ごろ)を考慮すると、ジョンソンの解釈は早すぎると分析している。また詩に出てくるメリーランド州ではその年の9月以前には戦闘は行われておらず、メリーランドで戦死したアマスト出身者もいないことから、アマスト出身の人物ではないと述べている(Franklin, *Poems* 527)。クリスタン・ミラーもフランクリンのこの解釈をそのまま引いている(*Emily Dickinson’s Poems* 760)。

<sup>140</sup> フェイス・バレットはこれらの詩をスターンズと結びつけて論じている(*To Fight Aloud* 161-180)。

<sup>141</sup> フレイザー・スターンズとディキンソンの詩の主題との関係についてフェイス・バレットは、「ディキンソンの南北戦争期の詩においてすべての道はフレイザー・スターンズに遡ると指摘するつもりはないが、スターンズ関連の文書と詩相互の対応は詩のテキストにさらに鮮明な焦点をあてるうえでいくつかの証や細部の情報をもたらしてく

れ、兵士の死を受けて、書いたものと推測できる<sup>142</sup>。しかし、これらの詩は、

---

れる (“While I do not mean to suggest that all roads in Dickinson’s Civil War – era poems lead back to Frazar Stearns, parallels between the Stearns texts and the poem bring some of the gestures and details in the latter text into sharper focus.” [To Fight Aloud 178]) と述べている。

ウェンディ・マーティン (Wendy Martin) もこの詩を南北戦争と関連付けている——「この詩では、語り手の生は可能性に満ちている——『装填された銃』は危険な潜在能力に満ちている。これは食物を確保するために動物を狩猟したり、戦争で人を殺したり、自殺の為の道具としてさえも用いられる。銃は準備ができていても詩の語り手は撃つかどうか、それはいつなのか、誰が引き金を引くのか、そして火薬で何を捕らえるかを判断しなくてはならない」 (“In this poem, speaker’s life is fraught with possibility—a ‘Loaded Gun’ is full of dangerous potential. It can be used for hunting animals for food, killing people in war, or even as a tool for suicide. The gun is ready but the poem’s speaker must decide if, and when, to shoot, who will pull the trigger, and what will be caught in the fire.” [Cambridge Introduction 38-39])。バレットは“Color - Caste - Denomination -” (F 836) の詩において、1863年7月にワグナー要塞攻撃で黒人連隊を率いて戦死したロバート・グールド・シヨウ (Robert Gould Shaw) の姿を見出している。南北戦争終結百年後に20世紀の詩人ロバート・ローウェル(Robert Lowell)はシヨウを主題に “For the Union Dead” を書いている。

<sup>142</sup> フレイザー戦死に先立つ1861年12月31日に、ディキンソンはアダムズ夫人の息子の死をノアクロス姉妹に手紙で伝え、夫人が受けた衝撃を報告している——「アダムズ夫人はそれ以来、床から離れられずにいます。『新年』の足取りはこうした戸口をそつと過ぎていくのです。『死んだとは！ふたりの息子とも！ひとは東部で海のそばで撃たれ、もうひとは西部で海のそばで撃たれて』(中略)キリストよ、慈悲を！(中略)哀れな未亡人の息子は、暴風のさなか今晚、馬車に乗って村の墓地に戻りました、そこで眠ることになるとは彼は夢にも思わなかったでしょう。夢とは無縁の眠りを」 (“Mrs. Adams herself has not risen from bed since then. ‘Happy new year’ step softly over such doors as these! ‘Dead! Both her boys! One of them shot by the sea in the East, and one of them shot in the West by the sea.’ . . . Christ be merciful! . . . Poor little window’s boy, riding to-night in the mad wind, back to the village bury-ground where he never dreamed of sleeping! Ah! The dreamless sleep!” [L 245])。同じ手紙の中で、ディキンソンはフレイザーの消息も伝え、その身を案じている。レイ-アン・アーバノウィッチ・マーセリン (Leigh-Anne Urbanowicz Marcellin) はこの手紙にいくつもの錯綜する声を読み込む。セント=アーマンド(Levi St. Armand) が指摘する典型的なヴィクトリア朝的な死の表象、エリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning) の詩「母と詩人」 (“Mother and Poet”) の愛国的な詩人の独白の声——彼女の息子たちは独立のための戦いで命を落とし、もはや詩人は悲しみに打ちひしがれて大義は気に掛けない。シェイクスピアの『ハムレット』の声。アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson) の詩 (“The Kraken”) の海獣の声。「この手紙は戦争についての数多くの声や態度を含むうえで重要である。それぞれの声の読みは新たな意味の層を明らかにするように思われる」 (“This letter is significant for its many voices of and attitude about war; each reading of it seems to uncover a new layer of meaning.”

戦争を話題にする手紙を送った親戚や友人にさえも送らず、手許に置いていた  
のである。

苦悩の詩や戦争に関わる詩が回覧されなかった理由について、先述したよう  
に、クリスタン・ミラーは断定を避けながらもいくつか挙げている。だが、「送  
られた詩」と「送られなかった詩」を峻別する詩人の姿がここでは重要であろ  
う。ミラーはそれには触れず、生涯で最も多く詩作した時期に話を進めている  
——「私が思うに国家的な危機、いつ、どのように戦争が終わるのか、これが  
アメリカのデモクラシーにとって、アマストの日常にとって何を意味するのか、  
それを知ることが出来ない宙ぶらりんの状態が引き続くこと、訃報を何度も読  
む悲しみが、ディキンソンに深く影響し、二度とないほどの質と量の詩作へと  
鼓舞した」 (“[I]t seems to me that the national crisis, the ongoing suspense of not  
knowing when or how the war would end and what this would mean for American  
democracy or daily life in Amherst, and the sorrow of reading repeated death tolls did  
affect Dickinson profoundly in ways that stimulated a quality and volume of writing she  
never repeated.” [Reading in Time 174] )。

戦争の時代に影響を受けて、ディキンソンが詩を書いたことはわかる。しか  
し、戦争に関係して書かれた、或いはそのように解釈できる詩を、なぜ手許に  
置いたのか。実際に送られた書簡と並べて明らかになるのは、手紙では、彼女  
自身の悲しみ、動揺、衝撃についてそれほど深くは語っていないことである。  
送られなかった詩との開きは大きい。

この事実は、第1章で考察した、ヒギンソン宛ての手紙 (L 280) の言葉 「斜  
めの」 (“oblique”) の再考を促す——「戦争はわたくしには斜めの場所に思えま  
す」 (“War feels to me an oblique place -”)。コーディ・マーズもこの一文に注目し、  
戦争という「出来事」 (“an event”) とは書かず、「場所」 (“a place”) と表現してい  
ることを指摘する。マーズが注目するのは、ディキンソンが戦地を「間接的に  
のみ感知できるどこかよその」 (“elsewhere that can only be indirectly apprehended”  
[125] ) 場所とみなしていることである。従軍中のヒギンソンに宛てた言葉にし  
ては、他人事のようにさえ映る。

マーズは手紙における表現を、詩作にそのまま結び付けて論じている。だが、  
手紙でヒギンソンに示した「斜め」の言葉を、そのまま詩作と結びつけず、区  
別する必要がある。先に見た、ボウルズ宛ての手紙と、詩 “It dont sound so terrible  
- quite - as it did -” (F 384) もその一例である。手紙では、ディキンソンは自分自  
身の悲痛な思いを吐露することはない。むしろそれを敢えて差し控えたのでは  
ないかとさえ思われる。人々が戦争について大いに語り、書き立てる、そうし  
た時代の潮流に呑みこまれまいとする抗いともとれる。

---

[Marcellin 66] )。

また、詩を送らなかったのは、詩に描かれた重い悲しみ、底なしの苦悩を、個人的な経験として曝け出すことを避けたとも考えられる。人が詩をどう読むのか、自分がどう人に見られるかを気にせずに、さらに深く探求して表現するには必要な処置だったに違いない。実際、回覧することによって、戦況と詩が具体的に結びつけられてしまう。語り手もディキンソン自身と重なり、詩の解釈自体も限定され、矮小化する。ヒギンソンに宛てた4通目の手紙(1862年7月頃)においてもわざわざ次のように断っている——「私自身が詩の代弁者として語るとき、それは私のことではなく想像上の人物を意味します」(“When I state myself, as the Representative of the Verse - it does not mean - me - but a supposed person.” [L 268])<sup>143</sup>。詩の語り手が、彼女自身のこととして混同されることを危惧している。

天国について思いを巡らすとき、現世の人間は「直接に」(“direct”)認識できず、未知の場所を推測するしかないことを、ディキンソンは「斜めの信心」(“oblique Belief” [F 1210])と表現した。ヘレン・ヴェンドラー(Helen Vendler)の言葉を借用するならば、「表現の究極的な真正」(“absolute authenticity of expression” [239])にこだわる詩人ならではの言葉であろう。アマストにいるディキンソンには真の戦場はわからず、「偏った」(“oblique”)見方しかできない。その限界故に、戦争に関わる詩を差し控えたとも考えられる。しかし、そうであるからこそ、核心に迫ろうとした証が、手許に置かれた詩群なのである<sup>144</sup>。

---

<sup>143</sup> シンディ・マッケンジー(Cindy MacKenzie)はここに、ヒギンソンに対するディキンソンの「ポーズ」を読み取る——「ディキンソンは本物の経歴を推測できる情報源をできるだけ残さないように試みている」(“Dickinson attempts to leave no possible source of legitimate biography.” [16])。写真を所望するヒギンソンに対して、間接的に拒絶の返答をしていると解釈する。

<sup>144</sup> “When I was small, a Woman died -” (F 518) は1863年春頃に作成のファシクル24に清書され、誰にも送られた形跡がない。同じファシクルに入っている詩で、送られた詩としては、降り積もる雪が辺り一面を埋め尽くしていく“*It sifts from Leaden Sives -*” (F 291) が1862年にスーザン・ディキンソンに、1871年頃ヒギンソンに、1883年3月頃編集者のトマス・ナイルズ(Thomas Niles)に送られている。また一緒に添えた松葉についての詩“*Of Brussels - it was not -*” (F 510) がノアクロス姉妹に(1863年初め)送られている。クリスタン・ミラー編 *Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them* を参照。尚、“*It sifts from Leaden Sives -*” (F 291) はこれまで戦争と関連付けて論じられることはなかったが、エライザ・リチャーズは、雪のモチーフで戦闘を表す英詩の系譜にこの詩を取り上げている。“*Weathering the news in US Civil War poetry*”を参照。

### 第3節 母と息子の詩

送られなかった詩には、戦死した若者について語る“When I was small, a Woman died -” (F 518) がある。ここで用いられた母と息子の主題は当時の戦争詩によく見られる<sup>145</sup>。

When I was small, a Woman died -  
Today - her Only Boy  
Went up from the Potomac -  
His face all Victory

To look at her - How slowly  
The Seasons must have turned  
Till Bullets clipt an Angle  
And He passed quickly round -

If pride shall be in Paradise -  
Ourselves cannot decide -  
Of their imperial conduct -  
No person testified -

But, proud in Apparition -  
That Woman and her Boy  
Pass back and forth, before my Brain  
As even in the sky -

I'm confident, that Bravoes -  
Perpetual break abroad  
For Braveries, remote as this  
In Yonder Maryland -

(F 518)

わたしが子どもの頃、ひとりの女性が死んだ  
今日 その一人息子が

---

<sup>145</sup> フェイス・バレットは、当時の新聞や雑誌に掲載された文学作品において「母・息子もの」(“a mother-son relationship”) の主題が見られることを、ディキンソンも読んで知っていたと論じている (*To Fight Aloud* 167-168)。

ポトマック河畔から昇った  
満面に勝利を示して

彼女を見るために どんなにゆっくり  
季節が巡ったことか  
ついに弾丸が一角をえぐり  
彼はすぐに回るようにして世を去った

誇りが天国にあるかどうか  
わたしたちは判断できない  
彼らの皇帝のような行いについて  
誰ひとりとして立証できなかつたのだから

けれども、亡霊になって誇らかに  
あの女性と息子は  
行ったり来たりする、わたしの脳裏を  
天国と同じように

わたしは確信している、喝采が  
絶え間なく広まるのを  
勇敢さ故に、ここと同じように  
はるか彼方メリーランドにおいても

先の詩 “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) では、訃報から受けた衝撃を反映するかのよう途切れがちの詩行であった。だが、この詩は句またがり滑らかに進み、戦死した青年と、先に他界した母が天国で再会する場を語り手は思い浮かべる。フェイス・バレットが指摘するように、繰り返しや回転、螺旋状の動き（昇天の動きと銃弾が体に入る動き）がある<sup>146</sup>。語り手は、青年の勇敢さを褒め称える声が響くと「確信して」(“confident”) いるが、この詩もディキンソンが誰かに送った形跡はない。

---

<sup>146</sup> フェイス・バレットはこの詩をフレイザー・スターンズの一週忌に、或いは他の知人の兵士の死を知って書いたものとしている。スターンズとの繋がり根拠としては、第2連の3行目で弾丸が回転しながら体内に入る場面 (“Till Bullets clipt an Angle”) を、スターンズが犠牲となった最新式のミニエ式銃弾 (“minie ball”) と結びつけている (*To Fight Aloud* 167-170)。確かに伝記的な類似点があり、フレイザー・スターンズは1850年に最愛の母を病気で亡くし、深く苦しんだ経験がある (*Adjutant Stearns* 15)。

ここで若者の戦死は仄めかされるだけだ。母親が「死んだ」(“died”) ことには触れてはいても、息子の戦死は明示せず、“went up” や “passed” などの遠回しの表現にとどまる。しかも、“It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384) の最終行の衝撃的な言葉“Murder”と較べると、こちらでは最終連の“Bravoes”および“Braveries”の語が、殉教的な死を讃えるように沸き起る。

この詩は、先述したように戦時中に多く書かれた「母と息子もの」の詩の一例となる。ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman) の詩 “Come Up from the Fields Father” (Whitman 253) もその一例であり、息子の訃報に接した母の嘆きに焦点があてられている。まず手紙を受け取った娘の声が冒頭に響き、その後、オハイオの秋の田園風景が鳥瞰図のように広がるなか、家族が訃報を読む場面が続く。

Lo, 'tis autumn,  
Lo, where the trees, deeper green, yellower and redder,  
Cool and sweeten Ohio's villages with leaves fluttering in the moderate wind,  
(Whitman 3-5)

見よ、秋だ、  
見よ、そこでは木々が繁り、緑は深まり、黄や赤はいよいよ鮮やかになる、  
涼しく甘美なオハイオの村々では穏やかな風に葉がはためく、

豊穡の秋を迎えるなか、家族は息子の訃報を知る。高みからから見下ろすような語り手の声は次第に降りてきて家族に近づく。母親の深くやり場のない悲しみが引き起す動作が、動詞の“-ing” 形 (“waking”, “weeping”, “longing”, “longing”) の連なりで表されている。

In the midnight waking, weeping, longing with one deep longing,  
O that she might withdraw unnoticed, silent from life escape and withdraw,  
To follow, to seek, to be with her dear dead son. (Whitman 35-37)

真夜中に目が覚め、嘆き、深い希求の念を抱き、  
ああ人知れずこの世を離れ、撤退できたなら、  
大事な死んだ息子を追って、求めて、一緒になるために。

語り手はさらに母親の心の内面へと入り込み、天国での息子との再会を願い、自身の死を待ちわびる。その際、“withdraw”, “withdraw”, “follow” の語の “r” や “f” の流音に導かれて詩行は滑らかに進み、母の悲しみに寄り添うように詩は閉

じる。

ホイットマンの詩では、母親の嘆きを描くうえで、高みから降りてきて傍らで見守るような語り手がいるのに対して、ディキンソンの詩 “When I was small, a Woman died -” (F 518) の語り手は、青年の戦死の場面から次第に遠ざかり、続く昇天、天国での母と息子の再会の憶測へと向かう。先述したように、一見、息子の名誉の死を讃える詩として読むことができる。

しかし、その解釈を遮るのは、第 3 連で天国での栄光について差し挟まれる疑問である——“If pride shall be in Paradise - / Ourself cannot decide -” (「誇りが天国にあるかどうか / わたしたちには判断できない」)。続けて “Of their imperial conduct - / No person testified -” (「彼らの皇帝のような行いについて / 誰ひとり立証できなかったのだから」)。ここで一人称の語り手の代わりに、一人称と二人称双方の性質を備えた “Ourself” と、“No person”の形が使われている。語り手自身があからさまに疑問を付すわけではない。個人の「私」と「国家的なイデオロギーを意味する集団的な「私たち」 (“the individual “I” and the collective “we” of nationalist ideologies” [To Fight Aloud 131]) が共存するものと、バレットが解釈する語り手とも異なる。誰ともつかぬ存在を示す人称によって、母と青年ふたりの再会が仄めかされる。

ジェイ・ロゴフ (Jay Rogoff) はイラク戦争の詩を書いた見地から、ディキンソンの「主題への斜めの取り組み」 (“oblique approach to theme” [45]) を論じ、この詩も取り上げている。ロゴフは母に会いに行くため (“To look at her”) という青年の目的が自発的なのか、つまりは戦場で命を捧げたことは自発的な行為なのか、その真相を問う——「彼の旅は自発的な性質とされているが、戦場における意図的な自己犠牲では決してなかったことも、冷笑的に反響する (“The supposedly voluntary nature of his journey also resonates ironically against what surely was no intentional self-sacrifice on the battlefield” [Rogoff 48])。この含みある解釈を援用するならば、むしろ、その本意でない戦死を批判的に見つめる眼差しを詩のなかに探さなくてはならない。そのうえで、レイ・アン・アーバノウイツ・マーセリン (Leigh-Anne Urbanowicz Marcellin) の指摘に大いに助けられる。マーセリンは、最終行の “Yonder” の代案とし草稿に書き込まれた “Scarlet” に注目し、そこに兵士たちの流血を読み込む。一見、若者の殉教を讃えるようであり、犠牲者の血に染まる戦場を前に、「怒れる会葬者」 (“An angrier mourner” [Marcellin 71]) の存在を、余白に付されたこの語に見出す。抒情的な再会を推測し、栄光を讃える表層とは別に、一筋縄ではいかぬ疑問や冷笑、怒りが潜む。ホイットマンの詩の語り手は、息子の訃報に接して自らも消えて行こうとする母の深い悲しみにひたすら寄り添う。一方、ディキンソンの詩はいくつもの疑



問の声を内包する<sup>147</sup>。

ディキンソンの “When I was small, a Woman died -” (F 518)では、戦死という実際に起きた事実を語る箇所と、目に見えない来世を推測する箇所とでは表現に明らかに区別がある。勇気ある行動に喝采があがっているのかどうか、来世で母と青年が再会を果たしたかは、断定を避けている。“No person testified -”, “I’m confident” などの表現が精一杯のところなのである。その意味で、この詩はディキンソンなりの “oblique” な観点から語られているといえる。つまりは、直接認知できないことについて、戦場やに来世については、いわゆる常套句が並ぶことはない。語り手の思考が及ぶ範囲で、「真正な声」 (“authentic voice” [Vendler 239]) が綴られている。

#### 第4節 戦場の詩

ディキンソンが誰にも送ることなく手許に置いた詩には、自身の認識をぎりぎりまで推し進めた、戦場を書いたものと解釈できる詩もある。“The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465) もそのひとつであり、秋の紅葉の風景と戦場の流血とが重ねて描かれている<sup>148</sup>。タイラー・B・ホフマン(Tyler B. Hoffman) も、戦況報道がディキンソンを促したと指摘している。両軍総計 26,000 人の負傷者が出たアンティータムの戦場での、折り重なる大勢の兵士の死体、血に染まった土壌など、『スプリングフィールド・リパブリカン』 (*Springfield Republican*) が連日伝えている(Hoffman 8)<sup>149</sup>。また “They dropped like Flakes -” (F 545) の詩からは、白

---

<sup>147</sup> フランクリンはこの詩の註において、トマス・H・ジョンソンの解釈 (Francis H. Dickinson をモデルとする) を否定している。フランクリンによれば、この詩が書かれる以前に、メリーランドで戦闘は起きていない。また、アマストからの出征兵のなかでメリーランドにおける犠牲は出ていない (*Poems* 527)。

<sup>148</sup> 第2章で先述したように、デイヴィッド・コーディ(David Cody) はこの詩 “The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465) に関して秋の風景と戦場の流血を重ねて解釈している。やはり第2章で触れたように、タイラー・B・ホフマン (Tyler B.Hoffman)もこの詩を 1862 年9月のアンティータムの戦いに関連付けて論じている。そのうえで “Autumn”の音が “Antietum”を暗示すると解釈している。

<sup>149</sup> ホフマンは 1862 年9月19日から10月23日までの紙面に当たっている。ミッシェル・コーラー(Michelle Kohler) は、ディキンソンのこの詩を、ジョン・キーツの “To Autumn” と比較している。キーツが描く平和な、豊穡の秋の実りの詩とは異なり、ディキンソンの詩は血の染まる戦場であり、さらに最終2行 (“Then - eddies like a Rose - away - / Opon Vermillion Wheels -”) の唐突な場面展開は、戦場から掛け離れた市民の安逸さを表すとともに、戦場から離れながらも否応なく戦争の影響を受ける市民 (女性) も表すと解釈

薔薇の花片や雪片が散るように、大勢の兵士達が次々と倒れる様が浮かぶ。どちらの詩も、多数の犠牲者を出した戦場を、風景に準えたものと解釈されている<sup>150</sup>。とりわけ次の2篇では戦場で戦う（或いは、戦った）兵士自身の声を捉えることができる。“If any sink, assure that this, now standing -” (F 616) は兵士の死の瞬間を、そして“My Portion is Defeat - today -” (F 704) は戦いの後、戦場に横たわる兵士の言葉として読むことができる<sup>151</sup>。どちらの詩も送られた形跡はない。

If any sink, assure that  
this, now standing -  
Failed like Themselves - and  
conscious that it rose -  
Grew by the Fact, and  
not the Understanding  
How Weakness passed - or  
Force - arose -

Tell that the Worst, is easy in  
a Moment -  
Dread, but the Whizzing, before the Ball -  
When the Ball enters, enters  
Silence -  
Dying - annuls the power to  
kill -

(F 616)

---

している (“The Ode Unfamiliar”参照)。

<sup>150</sup> エライザ・リチャーズは、平穏なニュー・イングランドの風景が戦場と化す場面設定の詩として論じ、一例として “They dropped like Flakes -” (F 545) を挙げ、ディキンソンが「大殺戮の事実からの隔たり」 (“the remoteness of the fact of mass death”) を繰り返し強調していると述べている。リチャーズが他に挙げた詩として、“Whole Gulfs - of Red, and Fleets - of Red -” (F 468), “The name - of it - is ‘Autumn’ -” (F 465), “It shifts from Leaden Sieves -” (F 291) がある。リチャーズはこれらの詩でディキンソンが戦場に近づくのではなく、むしろ戦場との「隔たり」 (“distance”) を提示していると論じている (“How News Must Feel” 170)。さらにリチャーズは、“It sifts from Leaden Sieves -” (F 291) の詩を、冬の天候と戦争とを結びつける英詩の系譜において論じている (“Weathering the news”を参照)。

<sup>151</sup> R. W. Franklin, *The Manuscript Books of Emily Dickinson*. vol.1. 676.に拠る。

もし誰かが倒れるなら、こう確信しよう、  
これは、今は立っているが  
彼ら自身のように停止したのだ、と　そして  
それが昇ったと意識しよう  
どのように弱さが過ぎ　または  
力が　生じたかは  
理解によってではなく  
事実によって起きたのだと

最悪も容易になると伝えよ  
それも一瞬で  
恐れは、弾丸を前に、かする音にすぎない  
弾丸が入ると、沈黙が  
入る  
死とは　無効にすること  
殺す力を

語り手は弾丸が飛び交う戦場にいる<sup>152</sup>。死と隣り合わせの戦場にあつて、信仰の言葉は一切なく、死の捉え方そのものは非常に即物的だ。同様の境遇を経験したフレイザー・スターンズが神に感謝する手紙から何と掛け離れていることか。人称代名詞は“Themselves”のみであり、いつ弾丸があたってもおかしくない局面で、語り手は、指示代名詞(“this”)で自身の体を指している。戦場で死はもはや“sink”, “rose”のような物理的な動きで捉えるだけのものだ。怖れさえ、弾丸が近づく音に集約される。死を以て、人を殺す力が「無効にする」(“annuls”)性質は“My Life had stood - a Loaded Gun -” (F 764)の末尾“For I have but the power to kill, / Without - the power to die -”とも共鳴する。戦場に立つ自身の存在を「殺す力」(“the power to kill”)とさえ表している。

クリスタン・ミラーはこの詩の語り手が死者であり、軍隊の命令的な暴力から開放された詩として解釈している。そしてディキンソンが戦争詩に対して成

---

<sup>152</sup> クリスタン・ミラーはこの場面においても「ミニエ式銃弾」を読み込んでいる——  
「南北戦争の間ミニエ式銃弾がもっともよく攻撃手段で使われた型である。比較的新しい発明品であり、この円錐形の、溝のある鉛の銃弾は素早く装備し、正確に発砲することが可能であった」(“[D]uring the Civil War the minie ball was the most frequently used type of small ammunition; a relatively new invention, this conical, grooved lead bullet could be loaded quickly and fired accurately.” [Emily Dickinson’s Poems 762n.261])。

した貢献は、極度の苦しみと悲しみを描いたことだと述べている (*Reading* 172)<sup>153</sup>。確かに、この時期には途方もない苦しみや悲しみを歌った詩が多くある。しかし、この詩にあっては、もはや苦しみや悲しみという感情すらも超越した、乾ききった言葉だけが響く。戦前の「戦いの詩」に見られる勝敗を問う視点すらない。殺伐とした声は、どこから聞こえてくるのだろうか——兵士の内面から沸き起こる声ではなく、兵士が自身の運命を突き放し、他人事のように隔たった眼差しで語る声である。この詩は、兵士に寄り添い、同情する次元を遥かに超えている。新聞に掲載された記事を読んだのか、死体が散乱する写真を見たのか、それとも体験談を聞いたのか、具体的に何が引き金になったかは定かではない<sup>154</sup>。けれども、何かに突き動かされて、ディキンソンは、死を目前にした、張りつめた場面を想定してこの詩を書いたのだろう。ただしこの詩が際立つのは、死の淵の極限の感覚を切り取って提示しただけではない。銃を持つ語り手自身の「殺す力」(“the power to kill”)も把握していることである。つまりは同じ境遇に置かれた敵の立場も包括する眼差しがあることを意味する。もはや戦場自体は遠景に退き、敵味方を区別することさえ超えた、空漠とした内面世界だけが広がる。

次の詩 “My Portion is Defeat - today -” (F 704) では、戦場で敗れた死者が語る。この詩は 1863 年後半に清書されたものとしてフランクリンは分類している。1859 年に書かれた “Success is counted sweetest” (F 112) と較べると、同様の立場にいる語り手でありながら、ふたつの詩の開きは大きい。戦争前に書かれた、いわば「道德劇」のような仕立ての「戦いの詩」から、かなりの変遷を経て、戦争中期のこの詩に辿り着いたといえる。“Success is counted sweetest” (F 112)

---

<sup>153</sup> ミラーは苦しみの詩のひとつに軍事的な表現を伴う詩として “Pain - expands the Time -” (F 833) も挙げている。

<sup>154</sup> ルネ・L・バーグランド(Renee L. Bergland) は、南北戦争の戦場写真が人々に与えた影響を論じ、『アトランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*) 1863 年 7 月号に掲載されたオリヴァー・ウェンデル・ホームズ(Oliver Wendell Holmes) の言葉を引用している。ホームズはアンティータムの戦いを映した写真の威力を述べている——「戦争がどのようなものか、知りたい人にはこれを見せればよい。(中略)ぞんざいに投げ出されて山積みになった死体、埋葬のためにぞっとするように並べられた死体はつい昨日までは生きていたのだ」(“Let him who wishes to know what war is look at this . . . These wrecks of manhood thrown together in careless heaps or ranged in ghastly rows for burial were alive but yesterday.” [“The Eagle’s Eye” 143])。また、バーグランドは、写真を見る者が感じる痛みについて示唆している——「我々はアンティータムで殺されたわけではないし、そこで死体のなかを歩いたわけでもない。我々の痛みの経験は、時間的にも空間的にも隔たった出来事に参加させるのだ」(“[W]e were not killed at Antietam, nor did we walk among the corpses there. Our experience of pain makes us participants in events far from us in time and space.” [“The Eagle’s Eye” 143])。

の詩は友人たちに回覧され、新聞に何度も掲載された。だが、この“My Portion is Defeat - today -” (F 704) の詩はそのまま手許に置かれた。ここでは「骨や血痕」が散乱する戦場の光景が広がる。

My Portion is Defeat - today -  
A paler luck than Victory -  
Less Paeans - fewer Bells -  
The Drums dont follow Me - with tunes -  
Defeat - a somewhat slower - means -  
More Arduous than Balls -

'Tis populous with Bone and stain -  
And Men too straight to stoop again -  
And Piles of solid Moan -  
And Chips of Blank - in Boyish Eyes -  
And scraps of Prayer -  
And Death's surprise,  
Stamped visible - in stone -

There's somewhat prouder, Over there -  
The Trumpets tell it to the Air -  
How different Victory  
To Him who has it - and the One  
Who to have had it, would have been  
Contenteder - to die - (F 704)

今日の わたしの運命は敗北だ  
勝利よりも青白い不運  
賛歌も少なく鐘もわずか  
太鼓は音もなく わたしに続きはしない  
敗北とは やや遅れてやってくるものを 意味する  
弾丸よりも耐え難い

それは骨や血痕にあふれ  
硬直して再び曲がることのない人々  
重い呻きの積み重なり

少年らしい目には 空白のかけら  
祈りの破片  
死の驚きが  
刻印されたのが見える 石のなかに

いくぶん誇り高いものがある、あそこに  
喇叭がそれを空に告げる  
勝利はどんなに異なるのか  
勝利を手にする者と そして  
それを手にしていれば  
死ぬことに もっと満足したかもしれない者とは

戦闘後、亡骸が積み重なる戦場で、死を待つばかりの兵士の言葉が書かれている。ルネ・L・バーグランド (Renée L. Bergland) は、戦争中の技術革新によって、空中から撮影された鳥瞰図的な写真が詩に与えた影響を論じている。この詩もその一例として挙げ、戦いの後の、停止した場面に注目している——「戦場の写真はすべてを硬直させる。戦いを想像するならば、動きを目にし、呻きを耳にし、眼差しをとらえ、祈りを分かち合う。だが、戦闘後の写真は徹底的に静止している。硬直して死んでいる」(“Battlefield photography freezes everything solid. Imagining a battle, one sees movement, hears moans, catches glances, shares prayers. But the photograph of a battle’s aftermath is absolutely still. Solid and dead.” [“The Eagle’s Eye” 146])。静止した画面ではあるが、第1連と第3連には比較級が並び (“paler”, “Less”, “slower”, “More”, “prouder”, “Contendeder”)、勝利した側と敗北した側とを比較する思考がある。ディキンソンの戦いの詩に「内面の戦い」 (“an inward war” [A Voice of War 55]) を見出そうとするシーラ・ウォルスキー (Shira Wolosky) もまた、さすがにこの詩については「外界」 (“the external world”) における戦いであると認めている——「第2連はこれ以上ないほど具体的である」 (“The second stanza could not be more concrete.” [A Voice of War 56])。そして、ディキンソンが党派に関わりなく常に敗者に共感していることをこの詩についても指摘している (A Voice of War 58-59)。ただし “Success is counted sweetest” (F 112) で見られる、痛切な敗北感はこの詩では見当たらない。それは、第1連と第3連でそれぞれ “somewhat” という語が繰り返されることで、勝敗の差を示す比較の度合いが薄められ、どこか客観的な、他人事のような目線となるためであろう。戦闘が終わった今、勝敗の差よりも、目の前に広がる殺伐とした光景の方がはるかに重い意味を持つ。

この戦場に横たわる個々の兵士が人として尊厳ある死を迎えたとは言い難い。

最新兵器による大量虐殺の結果、多くの死体が容赦なく折り重なる<sup>155</sup>。第2連の各行頭に“*And*”が羅列して置かれ、すべてが塵となり、祈りの言葉さえも紙屑のように「破片」(“*scraps*”)と化した光景が、感情を表す言葉を何ら伴わずに描かれている。ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の*Battle-Pieces and Aspects of the War: Civil War Poems*に収録された詩“*Shiloh. A Requiem*”(Melville 63)においても戦闘後の戦場が描かれているが、こちらのほうがよっぽど人間味がある。敵味方に分かれて戦ったものの、いまや一緒に横たわり、共に死を待つ姿があるからだ——“*Foemen at morn, but friends at eve --*”(「朝は敵どうし、けれども夜には友となる」)。ディキンソンのこの詩には、もはや、敗者の美学もない。バーグランドが指摘するように写真に触発された可能性は高い。書かずにはおられない、訴えかけてくるような写真だったに違いない。だが、その場面を語る言葉は激したものではない。また、改めて最後に置かれた比較級“*would have been / Contenteder - to die -*”は、勝敗の差を問うものではない。仮定法の表現によって、命を差し出した犠牲者の「満足度」を揺るがしかねない視点を提示しているのである<sup>156</sup>。

## 第5節 ディキンソンの両面性

戦争に直接あるいは間接に何らかの形で触発され、ディキンソンが書いた詩を見てきた。その殆どは送らずに手許に置かれていた。表向きには、戦争に関わる詩を親戚や友人に回覧してはいないが、人知れず、抜き差しならぬ気持ちで書きためていたと思われる。

一方、表向きには、戦争に対して非協力的であり、出征する兵士にも決して同情的とはいえない態度をディキンソンは取っている。1862年の夏にボウルズに宛てた手紙からも、そうした様子を推測させる。

ひとりの兵士が昨日の朝、立ち寄りまして、そして花束を所望しました、戦いに持って行くためですって。我が家に水槽があるとでも思ったのかしら。

A Soldier called - a Morning ago, and asked for a Nosegay, to take to Battle. I

<sup>155</sup> クリスタン・ミラーはここでもまた、当時最新式のミニエ式銃弾(“*minie-ball*”)が使用されていたことを註で触れている(*Emily Dickinson's Poems* 764n.287)。

<sup>156</sup> 戦争中にディキンソンが書き、誰にも送られた形跡がない他の詩として、“*He fought like those Who've nought to lose -*”(F 480), “*One Anguish - in a Crowd -*”(F 527), “*The Battle fought between the Soul*”(F 629)も挙げることができる。

suppose he thought we kept an Aquarium. (L 272)

皮肉な文面から、ディキンソンが喜んで兵士に花束を作ったとは考えられない。“Nosegay”は文字通り、鼻を楽しませる香りの良い花を束ねて作る。この兵士は心安らぐ香りを戦場に携えて行こうと思ったのだろうか。その求めに対してディキンソンは冷ややかである。

同じ手紙の冒頭では、奉仕活動に出掛けた妹ラヴィニア(Lavinia)と兄の妻スーザンの行動についても触れている——「ヴィニーとスーは戦争に出掛けてしまいました」(“Vinnie and Sue, have gone to the War.”)。第2章ですでに触れた手紙であるが、この手紙では、戦場そのものだけでなく、戦争にまつわることを総じて「戦争」と表現している。ディキンソンはふたりとは行動を共にせず、家に留まりこの手紙を書いている。「戦争に出掛ける」こと、つまりは奉仕活動に参加することも含めて、戦争に何らかの形で関わることから、ディキンソンは距離をとっている。これは、第1章でも述べた、「戦争はわたくしには斜めの場所に思えます」(“War feels to me an oblique place -”[L 280])とも結びつく。この態度は、周囲の人々とは異なっていたに違いない。

ボウルズにこの手紙を書いた頃、父エドワードが盛んに戦時協力をしている。7月18日付の『ハンプシャー・アンド・フランクリンエクスプレス』(*Hampshire and Franklin Express*)では、アマスト住民の集まりがあり、志願兵に100ドルの報奨金を授与することを、ディキンソンの兄オースティンの提案で可決されている。この決議の場には父エドワードも参加している(Leyda II 63)。さらに同じ号で、エドワードがアマスト近隣で新たな中隊を組織する許可を州知事から与えられたことも報告されている(Leyda II 64)。父や兄もまた「戦争」に積極的に関わっているのである。

ただし、この時期に従妹のレイザ・ノアクロス(Louisa Norcross)に宛てた手紙には次のような気持ちも綴っている<sup>157</sup>。

The seeing pain one cant relieve makes a demon of one. If angels have the heart beneath their silver jackets, I think such things could make them weep, but Heaen is so cold! It will never look kind to me that God, who causes all, denies such little wishes. It could not hurt His glory, unless it were a lonesome kind . . . Heaven hunts round for those that find itself below, and then it snatches. (L 234)

---

<sup>157</sup> ジョンソンは1861年と推定しているが、ジェイ・レイダ(Jay Leyda)は1862年の8月後半の時期に設定している(II 67)。手紙の文面から判断すると、やはりレイダの分類のように、戦争の犠牲者が多く出た1862年ととるほうが妥当だろう。



和らげてあげられない苦しみを見ると人は鬼になります。もし天使たちの銀の上着の下に心臓があるなら、そのようなことは彼等を嘆かせることができでしょう。それにしてもなんと天国は冷酷なのでしょう！神様はすべてを引き起こしておいて、こんなに小さな願いを退けるとは、親切とは思えません。そうしても神様の威光を傷つけることはないのに。それが物悲しい類でなければですが。(中略) 天は下界で見つけた人々を追い回し、連れ去るのです。

天の配剤と、冷酷さを非難する言葉が並ぶ。節約する神、吝嗇な神を商人 “The Mighty Merchant” に見立てた詩 (“I asked no other thing -” [F 687]) が他にあるように、どこにも向けようのない非難を、神への不満として並べ立てている。情け容赦ない戦況から、神を無慈悲な猟犬にも喩えている。しかも人々の苦しみを軽くする手立てを自分自身が持たぬことにやるせなさを抱く。年下の従姉妹には、苦しむ人々を慮る気持ちをディキンソンは書いている。それでいて、南北戦争の激動期に書かずにはおられなかった詩は、同時代の人々と共有することから差し控えた。途方もない悲しみ、克服できそうにない衝撃、底なしの苦悩、殺伐とした枯れ切ったような感覚、「大義」に命を差し出した人々の内面を、どこまで詩において極めることができるか、その極限まで突き詰めようとする取り組みにあって、気安く回覧できるものではなかったと考えられる。

戦争の時期に掲載された「送られた」詩と、戦争中に書かれながらも「送られなかった」詩という、ふたつの対極の詩群によって生じるある種の平衡感覚が、当時、詩人であることを意識していたディキンソンを支えていたのではないか。戦争が突きつける途轍もなく過酷な現実に対峙するために、同時代の言葉や表現を使いながらも、紛れもなく彼女自身の内なる思いを追求しながら詩作し、誰にも見せずにそばに置いていた。同時に、人々と共有できる詩を、友人や知人たちに送っていた<sup>158</sup>。ディキンソンの詩作と読者との関係を見ると、合わせ鏡のように表裏を成す。同時代に読者がいるという手応えがあったからこそ、人知れず詩作するディキンソンを支えていたに違いない<sup>159</sup>。それという

<sup>158</sup> ヒギンソンに宛てた手紙には公的な性質があったことを、メイベル・ルーミス・トッド(Mabel Loomis Todd)は指摘している——「私の意見では、彼女は自分の詩がいつか出版の日の目を見るかもしれないと思っていました。手紙については事情が異なります。ヒギンソン氏に宛てた手紙は、私的な性質のものではありません」 (“[M]y opinion is that she thought sometime her own verses might see the light of print, only by other hands than hers. As to the letters, that is different. Those to Mr. Higginson are not of a private nature.” [Dickinson in Her Own Time 87])。

<sup>159</sup> クリスタン・ミラーは、同時代の「戦争のレトリックの独善的な要素」 (“the self-righteousness of war rhetoric”)に批判的な詩もあれば「戦時中に流行った救済の言説

のも、ヒギンズンに送った 2 通の手紙に、相反する態度を見出すことができるからだ。第 3 通目の手紙（1862 年 6 月 7 日付）では、出版とは無縁の詩人として甘んじるかのようなポーズをとっている。

「出版」を遅らせるようにとの御示唆には微笑んでしまいます。それ [出版] は私にはまるで無関係のことなのです、魚のヒレが空には無縁であるように

I smiled when you suggested that I delay “to publish” - that being foreign to my thought, as Firmament to Fin - (L 265)

一方で、第 2 通目の手紙（1862 年 4 月 25 日付）では、彼女の詩を所望する編集者がいることを仄めかしている<sup>160</sup>。

ふたりの雑誌編集者が父の家に来ました、この冬の事です、そして私に心 [詩] を分けて欲しいとせがみました 私が「何故」と尋ねたところ、ふたりは私がケチだというのです 世のために使うのだそうです

Two Editors of Journals came to my Father’s House, this winter - and asked me for my Mind - and when I asked them “Why,” they said I was penurious - and they, would use it for the World - (L 261)

恐らくこの「雑誌編集者」からの依頼によって渡された数篇が、実際に新聞掲載へと繋がっていったのであろう<sup>161</sup>。ただし、この手紙においても、「世の中の

---

や感傷的な使用域) (“the popular war-time discourse of salvation and sentimental registers”) を用いた例も挙げ、その際、ディキンズンの戦争にまつわる詩が必ずしも「最良の詩」 (“not successful”) とはいえないと解釈している。そのような詩を手許に置くことに、ミラーは実験的な意味づけを捉えている (*Reading* 149)。

<sup>160</sup> シューアルは書簡の註に、このふたりの編集者はサミュエル・ボウルズとジョサイア・ギルバート・ホランド(Josiah Gilbert Holland) であると付している (*Letters* 405)。

<sup>161</sup> 1863 年後半には出版を主題にした“Publication - is the Auction” (F 788) の詩を書いている。ディキンズンの出版への姿勢を一筋縄で捉えることはできないが、「出版」そのものへの批判ではなく、買い手 (読者) に即した価値づけへの批判として読むことができる。この詩はディキンズンと出版の問題で多く取り上げられてきた。マリエッタ・メスマー (Marietta Messmer) は、慣例的な出版に批判的ではあっても、詩を友人たちに回覧している事実を目を向け、「公の匿名の大衆搾取のテキスト」 (“a public, anonymous mass consumption of texts”)ではなく、個人的なやりとりで読まれる受容を理想としたものと解釈している(Messmer 185-186)。エリザベス・ヒューイット(Elizabeth Hewitt)は、こ

ため」に詩を差し出すこと、つまりは戦争協力することを示る姿が浮かぶ。アマストにおいてディキンソン家の人々——父、兄、兄の妻、妹——が一同に戦争協力や奉仕活動をしていた。当然、ディキンソンにもその期待が掛かっただろう。だが、彼女はそうした役目を避けた。或いは、「奉仕」として詩を差し出すときも、他人と共有することが可能な詩を送った。名だたる詩人たちが雑誌や新聞に次々と「戦争詩」を載せた時代にあって、ディキンソン自身は手許に置いていたのである。そのことによって、戦争の時代に生じる極限の領域を詩の言葉にする営みを、妥協することなく推し進めていくことができたのである。

---

ここで使われている経済用語は単なるメタファーではなく、ディキンソンの父エドワードが実際に鉄道の株主であり、ディキンソン自身もアマストにおける経済的な変遷に気が付いていることに触れ、自分自身の価値を維持するため、他人による価格付けを嫌い、また価値づけを先送りになっているものと読んでいる。ベンジャミン・フリードランダー (Benjamin Friedlander) は奴隷売買に関わる時事的な用語が使われていると解釈し、ハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe)、ウォルト・ホイットマン、ナサニエル・ホーソンなど同時代の奴隷制に関する表現と併せて解釈している(“Auctions of the Mind”を参照)。

## 第5章 戦争前の「戦いの詩」

Bless God, he went as soldiers,  
His musket on his breast - (F 52)

### 序節

戦争詩のアンソロジーが21世紀に相次いで出版され、そこにディキンソンの詩が収録されている。J・D・マクラッチ (J. D. McClatchy) 編集 *Poets of the Civil War* (2005年) に6篇、フェイス・バレット (Faith Barrett) とクリスタン・ミラー (Cristanne Miller) 編集 *“Words for the Hour”: A New Anthology of American Civil War Poetry* (2005年) に19篇、そしてロリー・ゴールデンショーン (Lorrie Goldensohn) 編集 *American War Poetry* (2006年) に1篇の詩を見出すことができる<sup>162</sup>。社会から隔絶した隠遁詩人のディキンソン像が、21世紀にあつて、同時代の社会と関わりを持つ詩人像へと確実に変化している証であろう<sup>163</sup>。

---

<sup>162</sup> J・D・マクラッチ (J. D. McClatchy) 編集 *Poets of the Civil War* (2005年) では6篇収録 “Of Bronze - and Blaze -” (F 319), “If any sink, assure that this, now standing -” (F 616), “It feels a shame to be Alive -” (F 524), “When I was small, a Woman died -” (F 518), “My Portion is Defeat - today -” (F 704), “He fought like those Who’ve nought to lose -” (F 480), フェイス・バレット とクリスタン・ミラー編纂 *“Words for the Hour”: A New Anthology of American Civil War Poetry* (2005年) では19篇収録 “To fight aloud, is very brave -” (F 138), “Unto like Story - Trouble has enticed me -” (F 300), “I like a look of Agony,” (F 339), “After great pain, a formal feeling comes -” (F 372), “The name of it - is ‘Autumn’ -” (F 465), “He fought like those Who’ve nought to lose -” (F 480), “When I was small, a Woman died -” (F 518), “It feels a shame to be Alive -” (F 524), “One Anguish - in a Crowd -” (F 527), “They dropped like Flakes -” (F 545), “If any sink, assure that this, now standing -” (F 616), “The Battle fought between the Soul” (F 629), “No Rack can torture me -” (F 649), “My Portion is Defeat - today -” (F 704), “My Life had stood - a Loaded Gun -” (F 764), “Color - Caste - Denomination -” (F 836), “Dying! To be afraid of thee” (F 946), “My Triumph lasted till the Drums” (F 1212), “I never hear that one is dead” (F 1325)), ロリー・ゴールデンショーン (Lorrie Goldensohn) 編集 *American War Poetry* (2006年) には1篇収録 “It feels a shame to be Alive -” (F 524)。先の2つのアンソロジーは南北戦争に関わる詩のみ、ゴールデンショーンのアソロジーでは“The Colonial War”から “El Salvador, Bosnia, Kosovo, Afghanistan, and the Persian Gulf” までアメリカが関わった戦争を題材にした詩である。

<sup>163</sup> ベンジャミン・フリードランダー (Benjamin Friedlander) の “Emily Dickinson and

そのうえで問題となるのは、どのような基準でディキンソンの詩を「戦争詩」と見なすかである。先に挙げた“*Words for the Hour*”: *A New Anthology of American Civil War Poetry* では、南北戦争前に書かれた詩も掲載されており、選者が「戦争詩」と判断した観点がどのようなものなのか、その基準について何ら記載がない。それは他の 2 冊にも共通する<sup>164</sup>。そもそも、最初のディキンソン詩集が出版されたのが詩人の死後 4 年を経た 1890 年であり、ディキンソン本人は関わらず、T・W・ヒギンソン (T. W. Higginson) とメイベル・ルーミス・トッド (Mabel Loomis Todd) の判断に基づく編集であった。生前に雑誌や本に掲載された詩についても、ディキンソンの了解をどの程度得たうえで出版されたか定かではない<sup>165</sup>。自ら「戦争詩」を出版した同時代人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) やハーマン・メルヴィル (Herman Melville) とは事情が大きく異なる。

このことを考慮して、本論では、ディキンソンの詩を次の 3 つの観点から戦

---

the Battle of Ball's Bluff” (2009) の冒頭部分が本章の冒頭と非常に似ている。理由として考えられるのが、2005 年から 2006 年にかけて南北戦争詩集および戦争詩集の出版が相次いだこと、またディキンソンの詩が 3 冊の戦争詩のアンソロジーに収録されるという画期的な出来事があったためであろう。本稿は 2008 年アマストで開催された Emily Dickinson International Society Annual Meeting における Critical Workshop (Amherst College, MA, USA) に提出した原稿“Narrative of War” およびこの原稿に大幅に加筆・修正を施した“Emily Dickinson's Prewar Martial Poems”『人文・自然研究』第 9 号 (2015 年 3 月、一橋大学・大学教育研究開発センター) 51-66 に基づく。

<sup>164</sup> 2015 年 8 月 7 日から 9 日にかけてマサチューセッツ州アマストのアマスト大学において開催された Emily Dickinson International Society Annual Meeting において、“*Words for the Hour*”: *A New Anthology of American Civil War Poetry* を編纂したクリスタン・ミラーとフェイス・バレットの両氏に戦前の詩を収録した理由について質問した。編集主責任者であるバレットの説明によると、戦前とはいえ戦争の気配が近づく時代に作られているために判断したとのことである。

<sup>165</sup> 生前、ディキンソンの意図とは異なった操作がなされた典型的な出版例として、“A narrow Fellow in the Grass” (F 1096) の詩がスーザンからボウルズに渡され、*Springfield Daily Republican* および *Springfield Weekly Republican* に掲載された件がある。ヒギンソンへの手紙でディキンソンは次のように書いている、「あなたが私の蛇に出会って私が騙しているとお思いにならなるといけないので。それは私から盗まれたのです。3 行目に句点を打たれて挫かれもしたのです。3 行目と 4 行目はひとつつながりです」(“Lest you meet my Snake and suppose I deceive it was robbed of me - defeated too of the third line by the punctuation. The third and fourth were one -” [L 316])。詳しい背景については Thomas H. Johnson, *Poems* 713-714 を参照。

いの主題と結びつけてきた。

1. 戦いに関連した語やイメージが用いられた詩（第1章・第3章・第5章）
2. 解釈の仕方によって南北戦争と関係づけることが可能な詩（第1章、第2章、第3章、第6章）。
3. ディキンソンが南北戦争に具体的に触れた詩、もしくは実際に戦争に触発されて書いた詩（第2章、第4章）

これらの詩を書く際、ディキンソン自身が「戦争詩」として意識していたかを判断するのは難しいため、本章では「戦いの詩」という表現を用いる。

ディキンソンは戦争に積極的に関わることはせず、「戦争詩」を自ら発表することはなかった。戦争に対する「斜めの」(“oblique”) 姿勢を考える上で、上掲の3種類の詩のどれもが重要である。それぞれのタイプの詩が、ディキンソンの「戦い」の主題を支えているからだ。本章では、戦争前に書かれた、1に分類される詩を改めて扱う。

## 第1節 戦争前の「戦いの詩」

シーラ・ウォルスキー (Shira Wolosky) は、南北戦争をきっかけにディキンソンが戦いの言葉を用いて内面の苦しみを表現するようになったとして、次のように述べている——「ディキンソンの内なる生の暴力性は戦争の文脈において駆り立てられる形を帯びた。戦争は彼女の世界を構成する苦しみと混乱を劇的に強めた」(“The violence of Dickinson’s inner life took on impelling form in the context of war. War dramatically confirmed the anguish and confusion that constituted her world.” [A Voice of War 41])。ウォルスキーは社会の動向に無関心な詩人という、それまでのディキンソン像を覆し、南北戦争との関わりを一冊の研究書にまとめた先駆者である。ダニエル・アーロン (Daniel Aaron) もまた、「孤独は無関心を意味しなかった。南北戦争は彼女の想像力を焚きつけ、彼女の奥深い同情心に触れた」(“[I]solation did not signify indifference. The War inflamed her imagination, illuminated old enigmas, touched her deeper sympathies.” [Aaron 355])と、早い段階でディキンソンの詩作と戦争との関わりを認めている。その後こうした見方に追随する形でディキンソンと南北戦争との研究が進められ、ウェンディ・マーティン (Wendy Martin) もまた *The Cambridge Introduction to Emily Dickinson* において、南北戦争の影響を受けてディキンソンが戦争に関わる用語

を使い始めたと述べている——「国家の内戦はディキンソン自身が内面に抱えていた内戦の拡大モデルであった。彼女は戦争、戦闘、兵器類、死のイメージを、1863年に作られた最も有名な詩 [F 764, “My Life had stood - a Loaded Gun -”] で使っている」 (“The nation’s Civil War was a macrocosm of the civil war Dickinson waged inside herself. She uses the images of war, battle, weaponry, and death in her most famous poem from 1863.” [Cambridge Introduction 37] )。

ディキンソンが戦いの用語を使い始めたきっかけは、南北戦争だったのであろうか。フランクリン編集のディキンソン詩集に従って、戦争前に清書された詩 (1858年43篇、1859年82篇、1860年54篇) を読むと、実は戦争前からすでに戦いの用語を用いていた例を確認できる<sup>166</sup>。ディキンソンが戦いの用語を戦前にすでに用いていたことについては、バートン・リーヴァイ・セント＝アーマンド(Barton Levi St. Armand) とベンジャミン・リース(Benjamin Lease)が指摘している<sup>167</sup>。ただし、どちらの場合も個別の詩に触れるだけで終わっており、ひ

---

<sup>166</sup> 1858年から1860年にかけてディキンソンが清書した詩で、次の6篇を戦いの語彙を用いた詩として挙げるができる。“All these may banners be.” (F 29; 1858), “There is a word” (F 42; 1858), “Bless God, he went as soldiers,” (F 52; 1859), “My friend attacks my friend!” (F 103; 1859), “Success is counted sweetest” (F 112; 1859), “Who never lost, are unprepared” (F 136; 1860), “To fight aloud, is very brave -” (F 138; 1860)。最初に掲げた“All these may banners be”を除いた詩がどれも「戦い」の主題として解釈できる。

<sup>167</sup> セント＝アーマンドはキリスト教精神が殉教と尚武精神とが結びついてきた伝統を背景に、ディキンソンが軍事的なイメージを早い時期から用いていたと述べ、“Who never lost, are unprepared” (F 136) を例に説明している——「ディキンソンは軍事的な比喩表現を常に好んできた、そして彼女の初期の詩は軍事的な栄光の威風堂々に満ち溢れている」 (“Dickinson had always been fond of martial imagery, and her early poetry is full of the pomp and circumstance of military glory.” [Emily Dickinson and Her Culture: 100] )。リースは聖書(the King James Version) やアイザック・ワッツ (Isaac Watts) の讚美歌のような宗教的テキストがディキンソンに影響を与え、初期の詩に“martial imagery”が見られることを指摘し、さらに戦争の気運が高まる世相とも結びつけている。その際、“Bless God, he went as soldiers” (F 52), “Success is counted sweetest” (F 112), “To fight aloud, is very brave -” (F 138) の詩を引用している (67-70)。ただし、どちらの場合も戦争前に書かれた「戦いの詩」と、南北戦争期の「戦争詩」の両方を視野にいれて論じていない。また、アルフレッド・ハベガー(Alfred Habegger)もディキンソンの詩に顕著な軍事用語について言及しているが、「私的生活における決然とした態度」 (“a resolute attitude in private life”) を表すものとして解釈するに留まっている (369)。

とつの詩群として取り上げていない。戦争前の作とはいえ、南北戦争中の詩を理解するうえで不可欠な視点を提供してくれる詩群である。

戦争前に書かれた「戦いの詩」は、どれも敗者への共感が示されている。或いは敗者の立場からその境遇を描いている。その際、戦いに関連した語やイメージはどのように用いられているのだろうか。顕著な例として、1859年に清書された“Bless God, he went as soldiers” (F 52) を挙げたい。ディキンソンに典型的な4行連を2つ重ねた8行からなる短詩であり、戦いにまつわる7語が散りばめられている。韻律もアイザック・ワッツ(Isaac Watts)の讃美歌の影響を多分に受けた普通律 (common meter) に則しており、音節も4歩格と3歩格が交互に現れる構成である。

Bless God, he went as soldiers,  
His musket on his breast -  
Grant God, he charge the bravest  
Of all the martial blest!

Please God, might I behold him  
In epaulettes white -  
I should not fear the foe then -  
I should not fear the fight! (F 52)

神を讃えよ、彼は兵士たちのように出掛けた  
マスケット銃を胸に  
神よ彼に授け給え、祝福を受けた誰よりも勇敢に  
突撃できる勇気を

神もし許したまわば、白い肩章をつけた  
彼を目にして  
わたしがそのとき敵を恐れませんが  
わたしが戦いを恐れませんが

何らかの試練に向かう語り手の心情が、戦いのメタファーを用いて表されている。第1連は、「兵士達のように」出掛けた人物に触れており、キリストの姿を重ねることも可能だろう<sup>168</sup>。第2連は語り手自身が「戦い」に赴く不安が書か

---

<sup>168</sup> ベンジャミン・リースは、「兵士たちのように出掛けた」 (“went as soldiers”) 人物を



れ、最終2行で「わたしは恐れるべきでない」("I should not fear") が繰り返され、自身のための祈りとも、鼓舞する眩きともとれる言葉で閉じる。この詩の場面は必ずしも文字通りの戦いである必要はない。戦いの用語「敵」「戦い」を使って語り手が臨むのは、人生の節目にあたる出来事や日々の不安、或いは些末な諍いであってもよいだろう。それぞれ克服しなくてはならない「敵」や「戦い」は付き物だからだ。

そして「戦い」には勝敗が付き物である。ただし、この時期に書かれたディキンソンの詩には「勝利」を手にする結末は見当たらない。ベンジャミン・リースは「戦争勃発数年前に書かれたディキンソンのいくつかの初期の詩は、この世の試練を通じて精神的な勝利を得る概念を表現している」("Several early Dickinson poems, written a few years before the outbreak of the war, dramatise [sic] the idea of spiritual victory through mortal trial." [Lease 67]) と述べ、この詩を一例に挙げている。だが、「精神的な勝利を得る」詩であるとは言い難い。先述したように、詩の形は讃美歌と同様の4歩格と3歩格とを交互にした普通律(common meter) に則している。讃美歌に沿った詩形とは裏腹に、その展開は讃美歌とは異なり、勝利や報酬を得ることなく終わるのである。

確かにディキンソン研究において、コネチカット川流域に位置するアマストが「ワッツの影響を受けた飛び地の中心」("the heart of a Watts enclave" [England 113])であり、アイザック・ワッツの讃美歌がいかに浸透した日常であったかは多々指摘されてきた<sup>169</sup>。ワッツの影響を論じた先行研究は、韻律について考察

---

1862年3月に戦死したフレイザー・スターンズの予示として解釈する(67-68)。スターンズがこの詩から3年後1862年3月に22歳の若さでノースキャロライナ州ニューバーンの戦いで戦死し、ディキンソンも含めてアマストの人々に大きな衝撃を与えたことは第1章および第2章で述べた。1862年3月のスターンズ戦死に先立ち、1861年12月31日にディキンソンがノアクロス姉妹に宛てた手紙で彼のことを案じている——「キリストよ、慈悲深くあれ！フレイザー・スターンズはちょうどアナポリスを発ったところです。彼のお父様が今日、面会に行ってきました。彼の紅色の顔が凍りついて家に戻ることはないように願っています」("Christ be merciful! Frazer Stearns is just leaving Annapolis. His father has gone to see him to-day. I hope that ruddy face won't be brought home frozen." [L 245])。またフォーダイス・R・ベネット (Fordyce R. Bennett) は黙示録の光景と結びつけている (24-25)。

<sup>169</sup> ワッツのディキンソンへの影響研究としては、シーラ・ウォルスキー(Shira Wolosky)が "Rhetoric or Not: Hymnal Tropes in Emily Dickinson and Isaac Watts" (1988)にまとめている。ウォルスキーの情報を基に次のようにまとめることができる。ジョンソン版出版

したものが多い。そのうえで、本章で特に注目したいのは、ワッツも含めてピューリタン文学の展開の仕方である。当時、ニュー・イングランドで広く読まれていたピューリタン文学にジョン・バニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*Pilgrim Progress*)がある<sup>170</sup>。『天路歷程』も信仰と戦いのモチーフが結びついた作品であり、ディキンソンと同世代の女性作家ルイザ・メイ・オルコット(Luisa May Alcott)にもその影響は多々見られる。ワッツとオルコットの両者に共通するのは、最後に報酬を得る展開になっていることである<sup>171</sup>。

---

前の研究としてジェイムズ・デイヴィッドソン (James Davidson) “Emily Dickinson and Isaac Watts” (1954) があり、「正統的な」ワッツの言葉をいかにディキンソンが振って使用しているかを論じている。トマス・H・ジョンソン(Thomas H. Johnson) は評伝 *Emily Dickinson* (1955) においてディキンソンの韻律がワッツの讃美歌に基づくものとの基本的見解を確立。オースティン・ウォーレン (Austin Warren) の *Emily Dickinson* (1957) はジョンソン版詩集出版を受け、ワッツについて簡単に触れている(570)。マーサ・ウィルバーン・イングランド (Martha Wilburn England) の “Emily Dickinson and Isaac Watts” (1966)では讃美歌の造詣が深い著者が確かな知識を裏付けとしながら両者の詩を徹底的に照合させている。ただし、ディキンソンと戦争との研究をある程度認識した現在の読者には残念ながら受け入れ難い解釈も目立つ。ブリタ・リンドバーグ＝セイエステッド(Brita Lindberg-Seyested) の *The Voice of Poet* (1968)では押韻や文法の問題で議論を展開。ウェンディ・マーティン(Wendy Martin) の *An American Triptych* (1984) ではディキンソンがワッツの“pious certainties”を嘲笑していると解釈する。メアリ・ドウ・ジョング(Mary De Jong) “Watts, Issac” (1988)はディキンソンがワッツの讃美歌を引用、言い換え、パロディ化することでワッツから離れた独自の方法を展開していると論じる。ベンジャミン・リース(Benjamin Lease) は *Emily Dickinson's Reading of Men and Books* (1990) においてダッシュの多用をワッツの影響とみなし、彼女自身が目指す創造を実現させるための踏み台としてワッツを用いているとする。そのうえで具体的な讃美歌とディキンソンの詩を照合させている。ただし、ジュディ・ジョー・スモール (Judy Jo Small) は *Positive as Sound* (1990) においてワッツの影響を認めつつも、ワッツとディキンソンふたりの詩型を緊密に結びつけることに疑問を呈している。

<sup>170</sup> ディキンソン家にも蔵書がある。ディキンソンはハーバード在学中の兄オースティンに読むことを手紙で勧めている (Capps 71, 169)。

<sup>171</sup> オルコットの *Little Women* は各章が『天路歷程』の展開に沿って並ぶ。南北戦争中、従軍牧師の父親が不在の間、マーチ家の四人娘たちが様々な窮状に陥りながら乗り越えて成長していく。巻頭のエピグラムには『天路歷程』の第2巻のエピグラムの言葉があり、冒頭章はその名も“Playing Pilgrims”とある。『天路歷程』の主人公クリスティが “the

ディキンソンの詩にあっては、リースが「精神的な勝利」とする報酬は見当たらない。この点で、バニヤンやオルコットの展開とは大きく異なる。戦争前に戦いの用語を使って書かれたディキンソンの詩に共通するのは、むしろ、何らかの苦境にある存在が、最終的に勝利や報酬を得るところまで至らずに詩が閉じることである。この“Bless God, he went as soldiers” (F 52) の後半で語り手が心情を吐露する部分では、語り手の口調に力がこもる。仮定法を含む祈願 (“might I behold him, / In epaulettes white -”) が最終的に叶えられたのか。語り手が恐れずに「戦い」に赴いたかは不明のままである。そもそも戦いについて何の情報もない——「敵」とは誰か、どのような「戦い」なのか、「彼」とは誰であり、語り手とどのような関係にあるのか。ジェイ・レイダ (Jay Leyda) がディキンソンの詩の特徴として示唆する「省略された中心」 (“omitted center” [Leyda I xxi]) 故に、読者は状況をはっきりと掴むことができない。

確かにこの詩は、讃美歌の形式で作られてはいる。ただし、普通律の韻律のようでありながらも、よく見ると、通例の弱強格が、神に対する祈願の部分では強弱格になっている。苦境に立つ語り手の心情が強弱格への転換によって強く響く。詩句は宗教的な常套句のようであり、篤き信仰心の吐露ではない。最後の感嘆符も語り手自身の弱腰の気持ちを自ら鼓舞するように置かれている。

## 第2節 ディキンソンとヘレン・ハント・ジャクソン

ディキンソンがすでに戦前から用いていた戦いに関わる語彙を、ピューリタニズムの戦闘的な用語に結びつけて捉えられることは、先述したようにセント＝アーマンドやリースがすでに論じている。

戦いの用語を用いて書かれた、戦いの主題と、アマストのピューリタンの土壌との関わりを見るうえで、ディキンソンと同じ年にアマストに生まれた詩人ヘレン・ハント・ジャクソン (Helen Hunt Jackson; 1830-1885) の詩をここで対照させたい<sup>172</sup>。ジャクソンとディキンソン——まさに同時代を生きたふたりの

---

City of Destruction”を脱出して後に道中で受ける様々な試練を、マーチ家の姉妹たちは、南北戦争中の実生活を通して追体験する。“Burdens”, “Amy’s Valley of Humiliation”, “Jo Meets Apollyon”, “Meg Goes to Vanity Fair”など一連のタイトルはふたつの物語の関わりを示す。さらに、クリスティが辿り着く“Celestial City”同様、*Little Women* ではその名も「収穫」 (“Harvest”) と名付けられた最終章で、マーチ家の人々のユートピア的な実りの場面が描かれている。

<sup>172</sup> ディキンソンが生きたニュー・イングランドの宗教的な風土・文化については、ジ

詩人——は共に「戦い」の主題を使い、非常に類似した詩をそれぞれ書いている。ふたりの同時代人の「戦い」の主題には、宗教色の濃いアマストで生まれ育った同時代人ゆえの共通点と、それぞれの詩人の個性ゆえの相違点が見られる。

ふたりの詩はどちらも、衆目認める勇敢な戦士の姿と、誰にも悟られずに胸のうちで戦う戦士とを対置させている。ディキンソンの詩 “To fight aloud is very brave -” (F 138) は 1860 年に清書されたものであり、ジャクソンの詩 “Triumph” は残念ながら制作年は不明である。ただし軍人であった最初の夫エドワード・ハント (Edward Hunt) 少佐が 1863 年 10 月にブルックリンの海軍造船所で潜水艦の備砲に携わる工作中、爆発事故に巻き込まれて事故死し(Leyda II 83)、続けて 1865 年 4 月に息子ウォレン・ホースフォード (Warren Horsford) がジフテリアのため 9 歳で死亡。独り残されたジャクソンがその後創作を始めた経緯を踏まえると、戦後の作として推定できる。したがってジャクソンの詩 “Triumph” が戦争の高揚感から生まれたものではないことは確かである。また、具体的な戦争について書かれた詩でもないため、どちらの場合も「戦争詩」ではない。戦いの題材を使って、ふたつのタイプの「戦士」を描いた詩である。戦いのモチーフを用いた、共通した展開という観点からふたりの詩をここで対照させる。

ディキンソンの “To fight aloud is very brave -” (F 138)では、対照的な立場にあるふたりの兵士が並置されている。とはいえ、衆目認める英雄について触れているのは冒頭一行のみである。残りの詩行はすべて内面的な戦士についてであり、語り手の共感は明らかに後者にある。

To fight aloud is very brave-  
But *gallanter*, I know  
Who charge within the bosom  
The Cavalry of Wo -

Who win, and nations do not see -  
Who fall - and none observe -  
Whose dying eyes, no Country  
Regards with patriot love -

We trust, in plumed procession

---

エイン・ドナヒュー・エバウエイン (Jane Donahue Eberwein) がまとめている。ワッツなどの讚美歌のある暮らし、教会の教義、祈り、聖書、信仰復興運動、などとの関わりについての説明が全般に渡っている (“Is Immortality True?”参照)。

For such, the Angels go -  
Rank after Rank, with even feet -  
And Uniforms of snow. (F 138)

声高に戦うことはとても勇ましい  
でも、さらに勇敢なのは  
胸のうちで突撃する  
悲哀の騎兵隊だと  
私は知っている

その人が勝っても、国民は見ない  
負けても、誰も気がつかない  
その死にゆく目を、祖国の人々は  
愛国者への愛を抱いて見つめはしない

私達は信じる、羽根飾りをつけ、  
そのような人のために天使たちが行進すると  
一列一列、足並み揃え  
雪の軍服を身につけて。

語り手の眼差しは、人知れず戦う兵士と共にある。第1連の「私は知っている」(“I know”)は、誰にも知られずに心の中で戦う苦境を理解していることを示す。さらにその共感を強調するように、第1連2行目“know”と四行目“Wo”が押韻し、語り手自身も同様の苦悩を経験したかもしれない、そうした可能性も仄めかす。

また、語り手の語調を考えるうえで、第1連の1人称「私」(“I”)が最終連で2人称「私たち」(“We”)に変化していることは重要である。最終連で人称が複数形となり、語り手ひとりの思いが、「私たちは信じる」(“We trust”)と繋がり、人々の期待——地上での苦労が天国で報われる——を反映するものとなるからだ。そのとき「私たち」(“We”)が誰を指すかによって、最終連の解釈は大きく変わる。仮に、一般的な人々とする、最終連は、個人の声が集団の声に吸収され、宗教的な報酬を期待することを、冷笑的に示すものとなる。ヘレン・ヴェンドラー (Helen Vendler) は、第一連の“I”から最終連の“we”への変化は「宗教的な信頼への転換を可能とし、彼女の声はひとりの詩人の声というよりはむしろ国家の声となる」(“The change of from her initial ‘I’ to a final collective ‘we’ enables the turn to religious trust: her voice becomes that of nation, rather than that of a

single poet.” [49]) と述べ、「『私』から『私たち』への変換は傑出ではなく、融合として際立つ」(“[T]he mutation of “I” into “we” is marked as a fusion rather than as a distinction.” [49]) と解釈している。

しかし、ここで仮に「私たち」 (“We”) を、語り手のような、内面的な苦悶を知る（或いは経験している）者として読むならば、最終連はむしろそうした人々の切なる願いを反映する。人知れず戦う苦悶を知る者たちが、死後、天使たちの祝福を願うのである。

人称の変化だけでなく、動詞も“know” から “trust” に変化している。「私たち」が一般的な人々を指すなら、その期待に対する語り手の懐疑心を伝える語となる。ヘレン・ヴェンドラーは、“trust”という言葉は常に疑いの混ぜ物を伴って訪れる」(“[T]he word ‘trust’ always arriving with an admixture of doubt.” [49]) と意味づける。しかし、「私たち」が、語り手を含めて、人知れず傷つき、倒れ、命を落とす者（最終連の “such” が指す存在）に共感を寄せる人々を指すならば、最終連は肯定的な言葉となり、内なる戦いが報われるように希求する声となる。

私自身は、この詩の語り手はやはり、内なる戦士に寄り添うものと考え。または語り手自身の境遇を歌ったものとして読むこともできる。その際、世の人々の注目を意識する声が気になる。「悲哀の騎兵隊」 (“The Cavalry of Wo”) とは何か。そしてどのような戦いであるのだろうか。クリスタン・ミラーはこの詩と、アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson) の詩 “The Charge of the Light Brigade” との関連性に言及している (*Emily Dickinson’s Poems* 746)。確かに “charge” という語はどちらの詩にも見られるが、テニスンの場合はクリミア戦争を舞台にした六百人の旅団 (“Brigade”) の戦いである。常に旅団で行動し、大砲に数多くの兵士が倒れるも、衆目認める栄光を手にする—— “All the world wondered.” (「世界中の人々が驚異の目をみはる」)。しかし、ディキンソンのこの詩にあっては、誰にも知られることのないたった一人の孤独な戦いである。テニスンの詩のように、実際の戦場なら “Cavalry of War” とでも表現できるだろうが、ディキンソンのこの詩にあっては “Cavalry of Wo” と記されている。ここに詩人の姿を認めても良いだろう。自身の抱えた苦悶を詩に書く営みを、戦いの比喻で記したものとして解釈することもできる。例えば、出版とは無縁に詩作するという「戦う」姿である。この戦士の性別を示す代名詞は用いられておらず、ディキンソン自身も含めて、人知れず詩を書く女性詩人の姿を投影してもよい。

テニスンの旅団とは異なり、この内なる戦士が最終的に祝福されるかどうかは不確かなままである。あくまでも祝福を希求する声だけが響く。冒頭1行の戦場の英雄と対応するように、最終連の天使たちは「雪の軍服」 (“Uniform of snow”) に身を包み、軍隊のごとく「足並み揃えて」 (“with even feet”) 行進する。

ひとりの戦いを、最終連ではそれこそ旅団が祝福するかたちになっている。世に認められることなく書き続け、志半ばでいつ果てるとも知れぬ。最終的に（詩人としての）永遠の名声を約束されるのか、或いは忘れ去られるのかもわからない。そんな悲痛な「戦い」がいつか報われて欲しいという望みを最終連に見出すこともできる<sup>173</sup>。

一方、ジャクソンの詩“Triumph”はどうか。“Triumph”というタイトルから、最終的な報酬を予測させるこの詩においても、ディキンソンの場合と同様に対照的なふたつの姿が描かれている。ひとり、敵と英雄的に戦って勝利し、その凱旋を人々は喝采して迎える。もう一方の兵士は胸の内の敵と戦う。ジャクソンは冒頭2連で、誰もが勝者と認める人物を次のように描写している。

Not he who rides through conquered city's gate,  
At head of blazoned hosts, and to the sound  
Of victors' trumpets, in full pomp and state  
Of war, the utmost pitch has dreamed or found  
To which the thrill of triumph can be wound;  
Nor he, who by a nation's vast acclaim  
Is sudden sought and singled out alone,  
And while the people madly shout his name,  
Without a conscious purpose of his own,  
Is swung and lifted to the nation's throne; (Jackson 151-152)

征服した都市の門を、  
紋章で飾った軍の先頭に立ち、勝利のトランペットの  
音に合わせ、戦争の華麗で堂々たる様式で、

---

<sup>173</sup> ウォルスキーはこの詩を“the inner struggle of the soul”のタイプとして例示し、次のように解釈している——「ここでは、他の詩と同様、戦闘はディキンソンの内面の世界を見通すものとなっている。内なる意味において、個々の一般市民は兵士であり、個々の兵士は内なる戦争を戦う。ディキンソンは詩人として軍事的戦略の特定の事実にはほとんど興味はない。しかし『祖国の人々は / 愛国者への愛を抱いて見つめはしない』戦いを、愛国心が認める戦いと対照させている。ディキンソンは内なる争いを客観的な戦場の争いのように見ているのである」(“Here, as elsewhere, combat penetrates Dickinson's private world. In this inner sense, every civilian is a soldier, and every soldier fights an inward war. Dickinson as poet had little interest in the specific facts of military strategy. But the battle which ‘no Country / Regards with patriot love’ is pointed contrast with the battle patriotism recognizes. Dickinson sees her inward strife as like the strife of objective battlefields.” [A Voice of War 55-56]). ウォルスキーは、詩作の時期について戦争前・戦争中の区別をせずに解釈している。

通り過ぎる者が  
勝利の興奮渦巻く究極の高みを夢見て  
見出すのではない

国民の大きな喝采に  
突然探し求められ、ひとり選ばれ  
人々が半狂乱にその名を呼び  
彼自身の意識的な決意とは関係なく  
揺り動かされ、国家の王座へと持ち上げられる人物でもない

凱旋の場面が、弱強五歩格で、ababb / cdcd と規則正しい脚韻で進行する。A・R・フィンチ (A. R. Finch) は、弱強五歩格がディキンソンの時代に至るまで「不断の、ほとんど議論の余地のない基準として五百年間用いられてきた型」 (“[I]ambic pentameter had been in uninterrupted and nearly uncontested standard use for five hundred years.” [Finch 168]) であると説明している。しかも「チョーサー、スペンサー、シェイクスピア以降、この歩格が担ってきた権威よりもさらに重い権威をミルトンの『失樂園』 (*Paradise Lost*) が与えた」 (“Milton’s blank verse in *Paradise Lost* had given iambic pentameter an even heavier weight of authority than it had carried after Chaucer, Spenser, and Shakespeare.” [Finch 168]) 型であるため、一層、父権的な要素を帯びた韻律として解釈できる。このような権威的な重々しさを持つジャクソンの韻律は、興奮した人々が英雄を迎える場面に相応しい。だが、詩自体は英雄に始終するわけではない。冒頭の否定語 “No”, “Nor” に促されて、読者は第1連・第2連から第3連冒頭 “But” に向かう。そして冒頭2連で見た勝者とは対照的な、内なる兵士の姿に出会う。

But he who has all single-handed stood  
With foes invisible on very side,  
And, unsuspected of the multitude,  
The force of fate itself has dared, defied,  
And conquered silently.

Ah that soul knows  
In what white heat the blood of triumph glows! (Jackson 152)

独りで立ち  
四方を目に見えぬ敵に囲まれ、  
群衆にその存在すら知られず、



運命の力に挑み、  
そして黙して征服する者。

ああ、その魂は知っている、  
どんな白熱に包まれて勝利の血が輝くかを。

ジャクソンの詩では目に見えぬ敵と戦う兵士にも勝利がもたらされる。ディキンソンの詩では内なる兵士にひたすら重点が置かれるが、ジャクソンでは、むしろふたりの兵士の姿の明暗を描いており、衆目の賛美を受ける兵士と、誰にも知られず戦う内なる兵士という対照的な姿を並べる。内なる戦士は、ジャクソンにあっては苦難の末に栄光を勝ち取る。しかもディキンソンの詩では戦士の性別は明示されていないが、ジャクソンでは男性に限定されている。結末も、アイザック・ワッツの賛美歌と同じく、神の教えに従う者に勝利が約束される結末となる<sup>174</sup>。

---

<sup>174</sup> サミュエル・N・ウースター (Samuel N. Worcester) 編の賛美歌集 *The Psalms, Hymn and Spiritual Songs of the Rev. Isaac Watts, D* に収録された、戦いの詩の典型的な例として次の詩行がある。

We love thee, Lord, and we adore;  
Thou art our strength, our heavenly tower  
Our bulwark and our shield. (*The Psalms* 78)

われらは汝を愛す、主よ、われらは崇める  
汝はわれらの力、天なる塔  
われらの砦そしてわれらの楯。

ワッツの詩では、信仰の拠り所として、神の存在を要塞や武器に喩える表現が目立ち、単語も“bulwark”, “shield”, “arm”, “triumphs”, “foe”など戦いの語彙が多用されている。イングランドによれば、ワッツの父親は国教徒になることを拒否して投獄された。宗教対立の渦中にワッツは生まれたのである。政治的背景を持つ18世紀人ワッツに、イングランドが「普遍化の有効性への確信」(“confidence in the validity of generalization” [England 124])を見出し、19世紀人ディキンソンの「独りの歌い手」(“a lone singer” [119])と対比させており、戦いのモチーフを考えるうえで示唆に富む。ワッツの表現は、政治的な圧力に屈することのない、揺るぎない信仰のうえに成り立つ。したがって一人称の場合も、特定の個人「私」ではなく、誰にでも当てはまり得る普遍的な「私」を歌っている。これは先に見たディキンソンの「戦いの詩」の語り手と大きく異なる。

戦前にディキンソンが戦いの語を用いた詩では、最終的な勝利や報酬が約束されずに詩が閉じる型が繰り返される。どの詩も最後まで何の報酬も与えられないことはない。ジョン・バニヤン (John Bunyan) の『天路歷程』(*Pilgrim's Progress*)、およびこの作品を下地にしたルイザ・メイ・オルコットの *Little Women* では、対照的に、最終的な到達点が示される。戦いの語を用いたディキンソンの詩では勝利を確信する者はひとりとしていない。戦いに敗れた者、戦闘で命を落とす者に、語り手の眼差しは全面的に向けられている。

ジャクソンとディキンソンとでは展開の仕方は異なりながらも、戦いの主題を用いてふたつの対照的な立場を描いたのは、偶然ではないはずだ。ふたりともアマストで生まれ育ち、どちらの生い立ちもそのニュー・イングランドのピューリタニズムの宗教的土壌と深く関わる。ジャクソンの父ネイサン・ウェルビー・フィスク (Nathan Welby Fisk) と母デボラ・ヴァイナル・フィスク (Deborah Vinal Fisk) は共に敬虔な信仰の持ち主であり、ネイサンはアマスト大学でラテン語、ギリシャ語、哲学を教え、さらに定期的に教会での説教も担当していた。健康が優れぬネイサンが大学を休職して転地療法と聖地巡礼を兼ねてエルサレムに旅し、そのまま客死してシオンの山に葬られたことから信仰に篤い人物であったことが窺われる。ネイサンは、想像力豊かな娘ヘレンを案じたとみられ、それは娘への読書の指南によく反映されている。ジャクソンの伝記を著したケイト・フィリップス (Kate Phillips) によれば、「彼[ネイサン]は娘に教育的なものか宗教的な文章、すなわち「頭」と「心」の両方を「進歩」させるような文書だけを読むように強く勧め、それでも彼女が小説や詩を読まなくてはならないなら、シェイクスピアのような人本主義の作家——少なくとも 1841 年秋には崇拜し始めていた——はやめるべきで、ハンナ・モアのような道徳主義者の作品に集中すべきだ」(“He urged her to read only educational and religious writings, which could “improve” both her “head” and her “heart,” and tells her that if she must

---

For ever blessed be the Lord,  
My Saviour and my Shield;  
He sends his Spirit with his word,  
To arm me for the field. (*The Psalms 275*)

永遠に主の讃えられんことを  
私の救い主であり私の楯  
主はその精霊を御言葉とともにつかわす  
私に戦場の準備をさせるため

read fiction or poetry, she should give up her interest in such humanistic authors as Shakespeare—whom she had begun to admire at least by the fall of 1841—and focus instead on such moralists as Hannah More.” [Philips 53]) と伝えたという。父と娘の確執が、後にジャクソンのカルヴィン主義に対する懐疑へと発展したことは容易に想像できる<sup>175</sup>。

ジャクソンは作家・詩人としての地位を確立した後、ニュー・イングランドからコロラドへと生活の基盤を移し、教会に行く習慣もやめている。ディキンソンもまた、家族のなかでひとり、信仰告白をせず、次第に教会から遠のく。同時代人のふたりが、戦いのモチーフを使って類似した展開の詩を書くとき、ワッツの讃美歌のような信仰を守る「戦い」ではなく、内面の秘められた「戦い」をともに用いている<sup>176</sup>。

両者の詩が非常に似通っているために、ディキンソンからジャクソンへの直接の影響関係を推測したくなるものの、ディキンソンの詩 “To fight aloud, is very brave -” (F138) は誰にも送られていない。一見、偶然のように映りながらも、共通のモチーフは、ふたりの生まれ育った環境が反映しているだろう。ユニテリアニズムのハーバード大学に対抗して、ピューリタン信仰の「牙城」 (“fortress of orthodoxy”) アマスト大学が建てられた。ディキンソンの祖父は創立に尽力し、ジャクソンの父はその大学で教えている。讃美歌や説教を通じて戦いのメタファーが息づく土壌で生まれ育ったふたりの詩人は、教会に通う習慣をやめながらも、ピューリタン信仰に根差した戦いのモチーフをしっかりと受け継いだのである。ジャクソンの詩では衆目認める英雄と内なる戦士の双方が最終的に報酬を手にし、ディキンソンの場合は敗者として勝利を見つめる。この違いは、詩人としての姿勢の違いが根底で関わる。ジャクソンは同時代の読者を意識し

---

<sup>175</sup> ジャクソンが幼少期からすでにカルヴィニズムへの反抗心を抱えていたとフィリップスは記している——「幼少の頃から、ヘレンはカルヴィニズムの多くの教義に抵抗した。彼女の感情に『非常に嫌悪感』を与えたからである。『私は聖書の平易な英語を理解する前から懐疑的でした、聖書を疑っていました』と後にジャクソンはジュリウス・パーマー[ジャクソンの後見人]に説明している」 (“From an early age, Helen had resisted many of the tenets of Calvinism, finding them ‘very repulsive’ to her feelings. ‘I was a skeptic before I could understand the plain English of the Scriptures which I doubted,’ she later explained to Julius Palmer.” [Philips 53])。

<sup>176</sup> チェリル・ウォーカー (Cheryl Walker) は 19 世紀アメリカの女性詩人を論じた *The Nightingale’s Burden* において、女性詩人に典型的なテーマとして「秘めた悲しみ」 (“secret sorrow”) を主張し、特に「禁じられた恋」 (“forbidden love” [Walker 91]) の観点からディキンソンとジャクソンの作品を分析している。

て作品を書いた<sup>177</sup>。それは、フィリップスも言及しているように「読者に靈感と励ましを提供するため」(“to offer inspiration and encouragement to her readers” [Philips 132])であったことも関係しているだろう。一方、ディキンソンの詩 “To fight aloud is very brave -” (F 138) は、読者を意識することよりもまず敗者の側の心情を、声を持たぬ者の声を書きつけることを優先したためと考えられる。

### 第3節 逆説の展開

戦争前に戦いの用語を使って書かれた詩において、逆説の展開が目立つ。その例として “Who never lost, are unprepared” (F 136) を見たい。この詩の語り手も、敗者に共感を寄せる。しかも敗者こそ勝利の音に耳を傾ける下準備があるという逆説の展開が用いられている。1860年初期にスーザンに送られた稿と、草稿集に清書された稿のふたつがあり、ここでは草稿集に収められた方 (F 136 B) を引用する。

Who never lost, are unprepared  
A Cornet - to find!  
Who never thirsted  
Flagons, and Cooling Tamarind!

Who never climbed the weary league -  
Can such a foot explore  
The purple Territories  
On Pizarro's shore?

How many Legions overcome -  
The Emperor will say?  
How many *Colors* taken  
On Revolution Day?

How many *Bullets* bearest?

---

<sup>177</sup> ディキンソンとジャクソンそれぞれの出版市場に対する考え方の相違については Betsy Erkkila 著 *The Wicked Sisters: Women Poets, Literary History & Discord* を参照。また、ジャクソンが市場をいかに意識して執筆したかについては Susan Coultrap-McQuin 著 *Doing Literary Business: American Women Writers in the Nineteenth Century* を参照。

Hast Thou the Royal scar?  
Angels! Write “promoted”  
On this soldier’s brow! (F 136 B)

負けたことの無い者は  
コルネットを見つける準備ができていない。  
喉の渇きを覚えたことの無い者は  
細口瓶と冷たいタマリンドを見つける備えがない。

うんざりする距離を登ったことの無い者  
そんな足が  
ピザロの岸辺にある  
紫の領土を探索することが可能だろうか。

軍隊をいくつ征服すべきだと  
皇帝は言うのか?  
革命の日に  
どのくらい多くの軍旗をとれと?

いくつの弾丸に耐えるべきと。  
あなたは王の傷を持っている  
天使たちよ、「昇格」と書け!  
この兵士の額に

聖書や史実に関連する語が散りばめらながら、語り手が報酬を強く訴える詩である。フォーダイス・R・ベネット(Fordyce R. Bennett) の解釈を参考にすると、“Who . . . thirsted” (第1連3行目) はマタイ伝 (5:6) と関わりがある。これは先述した、J・H・シーライ(J. H. Seelye) の説教 “The Soul’s Remedy”において何度も同じ主題が繰り返されている。第4章で先述したように、シーライはフレイザー・スターンズ(Frazer Stearns)の死を神意として解釈する説教をした。“Royal Scar” は磔刑のキリストが受けた傷を、“Angels! . . . ‘Promoted’” (最終連3行目) は黙示録との関連をベネットは指摘している(Fordyce R. Bennett 12)]<sup>178</sup>。聖書の他に、史実に関する言葉があり、インカ帝国を征服した16世紀スペインの軍人

<sup>178</sup> 黙示録7章3節から8節(“[T]he name of God is written or sealed upon the foreheads of the ‘Promised’”).

フランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) の名前も見られる。第2連1行目 “Who never climbed the weary league -” は彼が率いた兵士たちが強行軍により多数死んだ史実を反映する。“purple” はフォーダイス・R・ベネットが指摘する旧約聖書ではなく、むしろピサロとの関わりで捉える方が妥当だろう。インカ帝国の王家の人々又は僧侶たちの衣の色を指し、したがって「紫の領土」 (“The purple Territories”) とはインカ帝国のことになる。また “The Emperor” はピサロの時代の皇帝カルル 5 世を指すだろう。このように聖書や歴史における人々の労苦を徹底的に羅列したうえで、語り手は天使たちに強く報酬を要求するのである。しかし、羅列する疑問形は、語り手の懐疑心を反映する。

スーザンに送った原稿 (F 136 A) では冒頭行 “Who never lost, is unprepared” (下線筆者) に単数形 (“is”) が用いられているが、清書された原稿 (F 136 B) では複数形 (“are”) である。特定の個人ではなく、普遍的な設定に変化している。感嘆符もさらに 2 箇所付け加えられ、語調も強くなっている。また、先に見た詩と同様に、戦士の性別をはっきり示さずに関係代名詞 “who” が用いられている。戦いのモチーフが使われながら、やはりここでも具体的な戦いというよりは内面的な戦いを描いている<sup>179</sup>。

それにしてもこの詩の語り口はかなり強引である。“Who never” を 3 度繰り返し、“How many” の疑問形も 3 度重ね、「戦い」で苦勞した者への報酬を天使たちに迫る。1891 年に出版された第一詩集では、皮肉にも “Triumph” というタイトルがつけられている。しかし、最終的に語り手が報酬を手に入れたかどうかはわからず、タイトルは上滑りの感を与える<sup>180</sup>。

さらに 1859 年の夏頃に清書されたと推定される “Success is counted sweetest” (F 112) もまた勝敗を逆説的にとらえている。本章の冒頭で触れたように、戦争

---

<sup>179</sup> 大井浩二は『アメリカのジャンヌ・ダルクたち——南北戦争とジェンダー』において南北両陣営で活躍した女性たちを紹介している。

<sup>180</sup> フレッド・D・ホワイト (Fred D. White) はこの詩の主題として、人間には神意を把握できないものと解釈している—— 「ディキンソンは抽象的な聖書の智慧を例に挙げて、軍隊の類比を用いることで、その智慧をトラウマ的な人間の経験に根付かせている。そうすることで人間の領域はどの点から見ても神聖なものと同じくらい活力に満ちていると表現している。実際、本当には把握することはできず、経験的に置き直されてようやく把握できるのものを、ディキンソンは示唆しているようである」 (“Dickinson has taken an example of abstract Biblical wisdom, and through the use of military analogies, has rooted the wisdom in traumatic human experience. In so doing she renders the human realm every bit as vital as the divine; in fact, the divine cannot be truly comprehended, Dickinson seems to suggest, until it is recast experientially.” [White 35])。ただし、後半の畳み掛けるように羅列された質問および感嘆符は、神意がわからず、苦境に納得することのできない語り手の苛立ちとしても解釈できる。

前に書かれながらも戦争詩としてアンソロジーに収録された詩である。草稿集に清書された形で引用する。

Success is counted sweetest  
By those who ne're succeed.  
To comprehend a nectar  
Requires sorest need.

Not one of all the purple Host  
Who took the Flag today  
Can tell the definition  
So clear of Victory

As he defeated - dying -  
On whose forbidden ear  
The distant strains of triumph  
Burst agonized and clear! (F 112 C)

成功はもっとも甘美なものとされる  
一度も成功したことのない者たちに。  
ネクターの味を理解するには  
激しい渇きが必要だ

今日勝利を治めた  
紫の軍の誰一人として  
勝利を定義することは  
できない

打ち負かされ 瀕死の者ほどはっきりとは  
その禁じられた耳に  
遠方の勝利の歌が  
はっきりと轟き、苛まされるのだ！

先に見た詩“To fight aloud is very brave” (F 138)および“Who never lost, are unprepared” (F 136)と同様に、この詩もまた敗者の立場から勝利を見る。その際、味覚、視覚、聴覚を通して相手の勝利（したがって、自分自身の敗北）を否応

なく認めさせられる。そこには有無を言わさぬ結果がある。第1連ではギリシヤの神々の飲みものネクター (“nectar”) の甘さが比喩に使われ、第2連では “the purple Host” のイメージが用いられ、アクキガイの染料で染めた紫衣 (“Tyrian purple”) が翻る。権力者がまとう象徴的な色は勝者の色として目に焼き付く。そして第3連では、凱旋の歌が痛いほどに耳に響くのである<sup>181</sup>。

この詩が敗れた側の設定であることと、動詞の受動態が用いられていることを関係づけても良い。第1連冒頭に “counted” があり、第3連になると “defeated”, “forbidden”, “agonized” と受身の型が続く。受け身の立場として否が応なく強制的とも言えるほどに「勝利」を見せつけられる実感がこもる。

語り手は敗者の立場にあるが、この詩自体は出版のうえでは「成功」した例ともいえる。1859年夏にスーザンに送られ、1862年7月にヒギンスンに送られているために、それぞれのネットワークを通じて、生前に何度も出版されたからである。この詩が南北戦争中の1864年4月27日に『ブルックリン・デイリー・ユニオン』(*Brooklyn Daily Union*) に掲載されたことは、第2章で先述した<sup>182</sup>。また、ヒギンスンを通じて、ヘレン・ハント・ジャクソン (Helen Hunt Jackson) の手にも渡っている。その結果、匿名の詞華集 *A Masque of Poets* に収録されたことはすでに触れた<sup>183</sup>。1890年にジャクソンがこの詩を収録した時、最終行の “agonized” を受け身から能動態 “agonizing” に変えている。この修正は読み手がどちらの側に立つかを反映する逸話だろう<sup>184</sup>。文法的には主語が “strain” であり、

<sup>181</sup> ここで “forbidden” の解釈によっては、逆説の構造を突き崩すことになる。私は「勝利を禁じられた」敗者の立場として解釈した。だが、マーガレット・ホマンズ (Margaret Homans) は、瀕死ゆえに、もやは聞くことのできない (“forbidden”) 状態の耳を解釈している——「ディキンソンは相対立する事項の概念を崩す方向へ向かって詩作している」 (“Dickinson works toward undermining the whole concept of oppositeness.” [Homans 177])。この解釈に従うと、冒頭から積み重ねてきた逆説の展開が最終行に転覆され、結局、兵士は何も理解せず息を引き取ることになる。戦争前に戦いの用語を用いて書かれた詩を詩群としてまとめて読むとき、逆説の展開を主軸として認める解釈が有効といえる。

<sup>182</sup> マーサ・ネル・スミス (Martha Nell Smith) は、スーザンと親交のあったリチャード・ソルター・ストー (Richard Salter Storrs) の手に渡り、彼が編集を手掛ける新聞に掲載されたと説明している (*Open me Carefully* 86)。

<sup>183</sup> 何も実現されない詩の例として、旅のモチーフを用いた詩ではどれも目的地に到達することなく終わる。例えば “Our journey had advanced -” (F 453), “I cross till I am weary” (F 666), “I had a daily Bliss” (F 1029)などを挙げるができる。

<sup>184</sup> 1878年にロバート・ブラザーズ社 (Robert Brothers) ら出版された匿名シリーズ *A Masque of Poets* にはジャクソンの計らいで、ディキンソンの “Success is counted sweetest” (F 112) が掲載された。その際、“Success” というタイトルが付けられている。ディキン



動詞“burst”の主格補語として“agonizing”の形が適切である。しかしこの詩の4種類の版、スーザンに送った版(A)、恐らくスーザン経由で『ブルックリン・デイリー・ユニオン』に掲載された版(B)、草稿集に清書された版(C)、そしてヒギンソンに送った版(D)のどれにおいても“agonized”が常に使われている。瀕死にある者と聴覚を共有する立場であるからこそ、否応なく「苛まされる」受け身の状態が最終行で大きくクローズアップされるのである。

#### 第4節 言葉の力

“There is a word” (F 42) の詩は、これまで見てきた詩とは異質である。勝者と敗者、誰もが認める勇者と内なる戦士など、相対する立場を並べた詩とは異なるからだ。1858年頃の作とされるこの詩は言葉の力を歌っている。ただし戦いにまつわる単語はやはり多く使われ、冒頭から“Sword”, “armed man”のように、神の言葉を刃に喩える黙示録的な表現が飛び出してくる<sup>185</sup>。

There is a word  
Which bears a sword  
Can pierce an armed man -  
It hurls it's barbed syllables  
And is mute again -  
But where it fell  
The Saved will tell  
On patriotic day,  
Some epauletted Brother  
Gave his breath away!

---

スンの他にもブロンソン・オルコット(Bronson Alcott)、ルイザ・メイ・オルコット(Louisa May Alcott)、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau)などの詩が匿名で登場する。ディキンソンの詩が当時エマソン作とされた背景については金澤「詩的主題の<流通>——エマソンからディキンソンへ」(『アメリカ文学』日本アメリカ文学会東京支部)を参照。

<sup>185</sup> 2017年7月29日から公開「静かなる情熱 エミリー・ディキンソン」(東京・岩波ホール)では、この詩は南北戦争の激戦地の映像とともに朗読される。池澤夏樹が映画に寄せたエッセイに引用している(「詩のなぐさめ 65 映画の中のエミリー・ディキンソン」参照)。

Wherever runs the breathless sun -  
Wherever roams the day -  
There is it's noiseless onset -  
There is it's victory!  
Behold the keenest marksman -  
The most accomplished shot!  
Time's sublimest target  
Is a soul "forgot"! (F 42)

剣を帯びた  
言葉がある  
武装した男を突き刺せる  
鏃のついた音節を投げつけると  
また黙る  
けれどもそれが落ちたところで  
命拾いをした者が語るだろう  
愛国記念日に、  
肩賞をつけた仲間が  
息を引き取ったと。

息も絶え絶えの太陽が走るところで  
昼間がぶらつくところでは  
音のない攻撃があり  
その勝利がある  
鋭利な狙撃兵を見よ  
最も熟練した発砲を。  
時の最も至高なる的は  
「忘れられた」魂なのだ。

語り手は言葉の持つ力を、武器の威力に相当するものとしている。これまで見てきた戦争前の「戦いの詩」ではどれも敗者への共感が示されていた。この詩も言葉の攻撃を受ける側の立場で語られている。特に最終 2 行では、神の言葉という剣の攻撃から「救われ」たのは「(神から) 忘れられた」ためだという、一見、安全なようでいて、見放された微妙な境遇が語られている。明らかに語り手は報酬を得る立場の対極にいる。

言葉に鋭利な刃の威力を見るこの詩では、聖書ヨハネ伝や黙示録との関連も

示唆され、第1連7行目の“The Saved”や第2連最終行の“a soul ‘forgot’”にも宗教的な解釈が可能である (Fordyce Bennett 3)。ただし、先述したように、この詩が作られた1858年は、ディキンソンが草稿を作成し始めた頃でもある。詩人であることを意識し始めたディキンソンが、言葉に武器のような手ごたえを感じ得ていることに目を向けるべきだろう。しかも“an armed man”(「武装した男」)を相手に、弱者である女性さえも、言葉の武器で刺し貫くことができる。だが、最終連に至ると、語り手は、言葉の威力に脅かされる方の側に立っている<sup>186</sup>。神の恩恵からは程遠い立場にいるのである<sup>187</sup>。

## 第5節 戦争前のディキンソン

これまで1858年から1860年の時期にかけて、ディキンソンが戦いの語彙を用いて作った詩を見てきた。どれも敗者や弱者の立場の詩ばかりが並ぶ。ここで、この頃のディキンソンを見ておきたい。それは、詩人ディキンソンの成り立ちを考えるうえで重要であるからだ。草稿集を綴じる作業を開始したのもこの頃であり、トマス・H・ジョンソン (Thomas H. Johnson) の表現を借用するならば、この時期に「エミリー・ディキンソンは真剣に詩作に興味を持つようになった」(“Emily Dickinson became seriously interested in writing poetry.” [Letters 332])。その様子は1859年1月頃に、12歳年下の従妹ルイザ・ノアクロス (Louisa Norcross) に宛てた手紙にも窺がわれる。ルイザと共に詩人になる誓いを立てた日 (1858年の秋) についてディキンソンは次のように回想している。

しばらくあなたのことを伺っていません、あの十月の朝から。皆がドライブに出掛けているとき、食堂にいてあなたと一緒に著名になろうと決心しましたね。「偉大」になるのはすばらしいことです、ルウ、あなたとわたしで生涯頑張っても、達成できないかもしれない、けれどもわたしたちが[その目標を]見つめるのを誰も止めることはできません、歌えない人はいても、果樹園は鳥たちでいっぱい、わたしたちは皆聞くことができます。いつかわたしたちが自力で [歌うことを] 学んだらどうなるでしょう。誰もわかりませんよ。

---

<sup>186</sup> 言葉の戦いという主題においては“My Life had stood – a Loaded Gun - ”(F764)の詩も挙げられるだろう。この詩を詩作のメタファーとして江田孝臣氏は解釈している。語り手自身は銃弾が込められた武器となっている。

<sup>187</sup> この詩は1858年後半にスーザンに送られている(Franklin, *Poems* 93-94)。

I have known little of you, since the October morning when our families went out driving, and you and I in the dining-room decided to be distinguished. It's a great thing to be "great," Loo, and you and I might tug for a life, and never accomplish it, but no one can stop our looking on, and you know some cannot sing, but the orchard is full of birds, and we all can listen. What if we learn, ourselves, some day! Who indeed knows? (L 199)

「著名に」なることと、詩を書くことへの夢が語られている。ふたりが目指そうとした「著名な」("distinguished")、「偉大な」("great") 立場とはどのようなものだったのだろうか。ディキンソンがこの段階で出版によって有名になることを想定していたかは定かではない。しかし、何らかの形で人々に認めてもらいたいという願望が前面に出ている。そして、「著名に」なること以上にここで強調されているのは、「歌うこと」(詩を書くこと)への特別な情熱である。詩作を鳥の囀りに見立てた喩えはささやかなようでいて、「誰も止めることはできません」という言葉には強い意志が響く<sup>188</sup>。否定的な予測を“not”を用いて書きながらも、すぐその後に“but”を置いて打消すことで、強い意志を表明する。この形を繰り返していることから、詩作への弾むような前向きな気持ちが伝わってくる<sup>189</sup>。家族の留守中に密やかな野望を語るこの行為を、ハベガーは「ディキンソン家に育った者なら誰にとっても、女性が偉大になるという考えは物事の基本的な秩序を脅かすことだった」("For anyone growing up in the Dickinson family, the idea of female greatness defied the basic order of things." [388]) と述べ、ふたりのやりとりがいかに大胆であったかを指摘している。

この「大胆な」誓いを秘かに一緒に立てたルイザおよび妹のフランシス・ノアクロス(Francis Norcross)との文通には、家族の消息に加え、文学の話題が目立つ。従姉妹のふたりとは詩作への真剣な思いを共有していたことがわかる。ヒギンソンやホランド夫妻に宛てた手紙でも詩の話題が見られるが、同じ話題がノアクロス姉妹への手紙でもっと早い段階で見られる。例えばノアクロス姉妹宛の先の引用箇所では、果樹園に集う鳥の歌声に耳を傾ける行為を詩作に重ねている。その後ディキンソンの詩作が充実していった証として、3年後にヒギンソンに宛てた次の表現に結びつけることができる。

---

<sup>188</sup> "The Robin's my Criterion for Tune -" (F 256) でも、詩作を鳥の歌声に喩えている。7行目に“we're Orchrdr sprung -” (“わたしたちは果樹園育ちです”) とある。

<sup>189</sup> この手紙は詩作への熱い思いを語っているために重要であるが、ディキンソンの書簡研究の2冊 *A Vice for Voices: Reading Emily Dickinson's Correspondence* (Marietta Messmer) と *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays* (Jane Donahue Eberwein および Cindy Mackenzie 編集) のどちらもこの書簡を取り上げていない。

果樹園に突然射す光、あるいは風のなかに新しい様式に出会い、わたしの心の注意力が波立ち 麻痺を覚えました、ここで詩作がまさに楽にしてくれるのです。

[A] sudden light on Orchards, or a new fashion in the wind troubled my attention - I felt a palsy, here the Verses just relieve - (L 265)

ディキンソン家の裏手に広がる果樹園に光が射すのを見て、動揺を覚える。その微妙な心情を克服するうえで、詩がなくてはならない存在になっている。やはり先のノアクロス姉妹宛ての手紙にある「わたしたちが[その目標を]見つめるのを誰も止めることはできません」(“no one can stop our looking on”) という部分から、詩人を目指す強い意志が伝わる。その後、詩人としての自負心が深まっていった証拠として、ヒギンソン宛の別の書簡の次の言葉を読むことができる。

恐らくあなたはわたしを見て笑うことでしょう。だからといって止めることはできないのです わたしの仕事は円周なのですから

Perhaps you smile at me. I could not stop for that - My Business is Circumference - (L 268)

ノアクロス姉妹は後にコンコードに住み、ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson) やルイザ・メイ・オルコット、ウィリアム・エラリー・チャニング(William Ellery Channing) たちと文学的な交流があり、コンコード・サタデイ・クラブ(Concord Saturday Club) の読書会にも参加している。文学を愛する彼女たちとの気の置けないやりとりにはディキンソンの言葉が弾むように連ねられている<sup>190</sup>。

また、ルイザにこの手紙を書いた頃、女性が詩人になる可能性を歌ったエリザベス・ブラウニング (Elizabeth Browning) の *Aurora Leigh* をディキンソンは読んでおり、女性詩人として目指すべきモデルを得ていたことは確かである<sup>191</sup>。

---

<sup>190</sup> ノアクロス姉妹が文学的な活動に従事していたことについてはマーサ・アックマン (Martha Ackamann) の解説“Norcross, Louisa”を参照。

<sup>191</sup> 1861年にエリザベス・ブラウニングが死去したのを受けて、ディキンソンはエレジーを3篇書いている——“Her - ‘last Poems’ -” (F 600), “I think I was enchanted” (F 627), “I went to thank Her -” (F 637)。どれも戦争中の1863年の作である。*Aurora Leigh* には(女

1855年にウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)が出版した *Leaves of Grass* が新たな時代の男性詩人の名乗りであるならば、翌1856年にブラウニングが出版した *Aurora Leigh* はいわば女性詩人の誕生の名乗りには相当するだろう<sup>192</sup>。先述したように、この頃のディキンソンはすでに、人知れず詩を清書しては糸で綴じた草稿集を作り始めていた。

着実に詩作に取り組んでいくものの、戦争の暗雲もまた立ち込めていく。ディキンソンを取り巻く、戦争勃発当初のアマストの様子もここで一瞥するならば、ピューリタン信仰の牙城を目指してディキンソンの祖父たちが創立したアマスト大学の礼拝では、戦争の意義について教師たちの説教がなされている。当時のアマスト大学学長ウィリアム・A・スターンズ (William A. Stearns) が1861年4月1日に行った説教もその顕著な例である。

北部の私たちは本質的に正しい、目前の直接の問題についてはそう言える、だが私たちは尊大で、自分勝手であり、神の存在を忘れた者たちであったため、罰せられなくてはならない。私たちは神の正義を達成するため兄弟に向ける神の刀となっているが、戦争の不幸は私たちにもまた重く降りかからなくてはならない。私たちも罪を犯したからである。

---

性) 詩人論として解釈できる詩行が多数ある。例えば、同時代の声を代表すべきであるとする箇所——「彼女たちの唯一の仕事は時代を代表すること / 自分たちの時代であって、シャルルマーニュ皇帝の時代ではない—この活気ある、鼓動する時代を」(“Their sole work is to represent the age, / Their age, not Charlemagne’s—this live, throbbing age” [Book V, ll. 203-204])および同時代の人々に受け入れられないのなら、未来の人々に託すべきとする箇所——「手から手へと、さらに手から手へと受け継がれ掴むまで」(“From hand to hand, and yet from hand to hand / Until the unborn snatch it” [Book V, ll.265-266])がある。

<sup>192</sup> エリザベス・ブラウニング、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë)、ジョージ・エリオット(George Eliot)などイギリスの女性詩人・作家たちがディキンソンに与えた影響についてはパラリック・フィナティ (Paraic Finnerty) の“Transatlantic Women Writers”およびベッツィ・アーキラ(Betsy Erkkila)の *The Wicked Sisters: Women Poets, Literary History & Discord* (68-79)を参照。アーキラは、ボウルズが1862年春に渡欧する際、ディキンソンがブロンテの墓に触れ来て欲しいと依頼した手紙 (L 266)を紹介している (*Wicked Sisters* 69)。またジャック・L・カップス(Jack L. Capps)によれば、ディキンソン家蔵書の *Aurora Leigh* は、ディキンソン自身のものと思われる版(ニューヨークのC. S. Francis and Co.から1859年出版)と、隣家に住むスーザンのものと思われる版(同じ出版社のもので1857年出版)とあり、引用したノアクロス姉妹宛の手紙を書く頃にはすでに読んでいたものと推測できる (Capps 167-168)。

Though we of the north are essentially right, on the immediate issue before us, yet we have been a proud, selfish, and God-forgetting people and must suffer. While we are made the sword of the Lord to execute his justice, on our brethren, the calamities of war must fall heavily upon us also, because we also have sinned.

(Thomas Le Duc 17、下線執筆者)

南北戦争期におけるニュー・イングランドの宗教観について、アン・C・ローズ (Anne C. Rose) は、人々が戦争遂行を神の意図と結びつけた傾向を指摘している。スターンズの説教もまた、戦争遂行を神意として捉る一例にあたる。先のディキンソンの詩では言葉が「神の剣」だった。スターンズにおいては戦士が神の刃となっている。後に、彼の息子フレイザーが学徒兵として従軍し、1862年のニューバーンの戦いで命を落とした経緯はすでに見た。

このような南北の亀裂から戦争へと向かう政治的な危機的状況が、ディキンソンの戦いの語彙に関わったものとも考えられる。1854年にカンザス・ネブラスカ法案が成立し、反奴隷制勢力が結集して共和党を結成。1856年には南部のプレストン・ブルックス上院議員 (Preston Brooks) が奴隷制廃止論者チャールズ・サムナー (Charles Sumner) を杖で乱打する事件が起こり、ジョン・ブラウン (John Brown) がカンザス、ポタワトミーで奴隷所有者を虐殺する事件も起きている。1857年には奴隷は国民ではなく財産だとするドレッド・スコット判決が言い渡されている。ディキンソンが戦いの用語を用いて詩を書いた1858年から1860年頃をさらに見ると、1858年にはエイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) とステイヴン・A・ダグラス (Stephen A. Douglas) の討論、1859年にジョン・ブラウンの襲撃と処刑があり、1860年のリンカン大統領当選を受けて、サウスカロライナ州が連邦を離脱するなど、南北の軋轢がますます高まり、戦争到来の暗雲が刻一刻と立ち込める。ディキンソンの父エドワードはこの時期、連邦議会を舞台に政治家として活動しており、ディキンソン自身もまた、不穏な空気を共有していただろう<sup>193</sup>。ディキンソンの戦いのモチーフは、このような時代を反映しているとも考えられる。

戦争中にジュリア・ウォード・ハウ (Julia Ward Howe) などの同時代の詩人たちは、戦争遂行の主旨を詩で書く際、ピューリタンの土壌に根差した語彙を用いた。ディキンソンもまた戦争前に「戦いの詩」を書く際、ニュー・イングラ

---

<sup>193</sup> ベッツィ・アーキラは父エドワードの政治的変遷をディキンソンの詩作と結びつけて論じている。その際、ディキンソンが父の政治的斜陽を理解していたと考察している。“Dickinson and the Art of Politics”を参照。

ンドのピューリタンの土壌に根ざしたモチーフを用いている。したがって、ディキンソンの戦争前の「戦いの詩」にはバニヤンの『天路歷程』に見られる、いわば道德劇の要素があることも否めない。また、ディキンソンは同時代の詩人たちと共通した語彙およびモチーフを持っていたことになる。同じ時代を生きた詩人たちが書いた「戦争詩」と同様の詩を書く潜在的な語彙をディキンソンも持ち合わせていたといえる。しかし、ディキンソンの詩には、人知れず苦悩する者、戦いに敗れて瀕死の状態の者、武器の威力に慄く者、試練に向かう者が登場し、受け継がれてきた語彙を用いながらも、報酬を手にする成功を書くことはない。詩人ディキンソンの語り手は、報われない敗者の側に立つ。それは、注目されることのない境遇、歴史に残らず、人々が知ることもなく消え去ってしまう記憶、誰にも気づかれずに胸の奥深くで抱える思いを書き留めることに、詩人としての本領を見据えていたためである。そして、その立ち位置からは、「栄光」や「成功」のような報酬は到底視野に入らない。そして、「斜めの」詩作においては、認識できないものを、安易に常套句を用いて書くことはしないのである。



## 第6章

### 声なき者たちの声

#### ——ディキンソンと「殉教者たち」

Through the Straight Pass of Suffering  
The Martyrs even trod - (F 187C)

### 序節

ディキンソンの詩の声は時として揺らぎ、途切れ、逸れる。この顕著な特徴は、これまで数多く論じられてきた。クリスタン・ミラー(Cristanne Miller) は詩人の人生観、世界観として捉え、ポール・クラムブリイ(Paul Crumbley) は社会の規範への反抗として解釈しており、両者とも、詩人と詩行の関わりを中心に論じている<sup>194</sup>。ミーガン・クレイグ (Megan Craig) は戦争を背景に論じ、エマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Levinas) とディキンソンを対照させている。19世紀南北戦争中に「アマストの部屋の閉じた空間から」(“from the confines of her

---

<sup>194</sup> クリスタン・ミラーはこの特徴は「古英語の詩の根本的な有機的な本質」(“a fundamental organizing principle of Old English poetry”)であり17・18世紀の“plain style”に見られる、詩に顕著なものとしている。そのうえで形式上の分断を意味上の分断と結び付けて次のように解釈する——「特に形式上の断絶が文化的な規制の型からの相違を反映するとき、その断絶が語る信条とは、世界は調和しておらず、人生は道理的でも簡単でもなく、始まりの混沌の脅迫から安全だと意味し続ける自然あるいは神の計画など存在しないというものだ」(“Especially when the formal disruptions reflect variance from cultural ordering patterns, they seem to voice a belief that the world is not harmonious, that life is neither reasonable nor easy, that there is no natural or divine plan of things keeping meaning safe from the threat of incipient chaos.” [A Poet’s Grammar 46])。ポール・クラムブリイは「反抗的な声」(“rebellious voices”)にダッシュを意識して捉える——「ダッシュという手段でディキンソンが合図する声の領域を意識するならば、その詩を数多くの反抗的な声を抑えることの拒絶として理解できる。その声は、調和を強いる保守的な意見という相当社会的な圧力にも関わらず、彼女の心の中にすでに表れている」(“Once we are sensitive to the range of voices Dickinson signals by means of dashes, we can understand the poems as her refusal to silence the many rebellious voices that registered already in her own mind despite the considerable social pressure of more orthodox opinion seeking to enforce conformity.” [Inflections 20])。本研究のダッシュや揺らぎの捉え方は両者の解釈に負うところが大きい。ふたりの論はディキンソンの信条と表現の相互関係を中心としている。

Amherst room”) 詩を次々と生み出したディキンソンと、「1940年から1945年の年月に収容されたドイツの強制労働収容所から」(“from the imposed captivity of a German labor camp in the years between 1940 and 1945” [Craig 208]) 思想を生み出したレヴィナス、ふたりの途切れ、逸れる文体を意味づけている<sup>195</sup>。クレイグの考察は、ディキンソンの揺らぎの特徴を、時代と関連付けている点で示唆に富む。

ここで、戦争前の時期1859年12月2日の、奴隷解放論者ジョン・ブラウン(John Brown) 処刑の出来事を軸に、ディキンソンを同時代の人物たちの中に位置付けてみる。当時、詩人や作家たちが「殉教者」ジョン・ブラウンの処刑に触れる際、デイヴィッド・レノルズ(David Reynolds)の表現を借用するならば、“meteor-metaphor”を何人もが用いた<sup>196</sup>。レノルズによれば、「11月15日、ブラウンが刑の執行を待っているとき、天空の異常な出来事が北東の空で起きた」(“On November 15, while Brown was awaiting execution, an unusual astronomical event took place over the skies of the Northeast.” [John Brown, Abolitionist 383])。実際の流星出現が、作家・詩人たちの用いたメタファーの背景にある。ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)は“Year of Meteors”で、ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)は“The Portent”でブラウン処刑を描く際、流星のイメージを戦争の予兆として使っている。

H・D・ソロー(H. D. Thoreau)もまたブラウン処刑後12月5日の日誌で「彼の後半の仕事は——この6週間のことだが——流星のようであり、我々が生きている暗闇を煌めいて通過した」(“His late career – these six weeks, I mean—has been meteor-like, flashing through the darkness in which we live” [Journal 13:6])と書いている。さらに翌日の日誌で再び“meteor”の語を用いている。

彼の横たえられた遺骸はなんとという移動をしたことだろう。絞首台の横木か

---

<sup>195</sup> 「両者とも戦争を作品の明らかな主題とはしていないが、にもかかわらず彼らの思考は暴力と破壊の消すことの出来ぬ痕跡を帯びる。中断は彼らの作品の重大な主題であり、両者の執筆体型の支配的な特徴である——どもり、停止する詩行や散文はディキンソンのダッシュやレヴィナスの震動する文法において本能的なものとなる」(“Although neither of them make war an explicit theme of their work, their thought nonetheless bears indelible traces of violence and rupture. Interruption becomes a critical subject of their work and a dominant feature of the very syntax of their writing—a stuttering, halting verse or prose made visceral in Dickinson’s dashes and in Levinas’s jarring grammar.” [Craig 208-209]).

<sup>196</sup> ウォルト・ホイットマンの“meteors”に関しては、11月15日の流星とは別の流星を扱った可能性もある。Donald D. Kummings (ed.) *Routledge Encyclopedia of Walt Whitman* の“Years of the Meteor”を参照。また、マイケル・ムーン(Michael Moon)はこの詩の注で1833年11月13日の流星群と1858年11月12日から13日にかけての流星群との関わりにも言及している (*Leaves of Grass and Other Writing* 200)。

ら刈り取られてそのままにだ。フィラデルフィアを通過して、土曜日の夜にはニューヨークに到着したことを読んだ。流星のように遺体は南部の地域から北へ向かって北部を通過したのだ。

What a transit that of his horizontal body alone, but just cut down from the gallows-tree! We read that at such a time it passed through Philadelphia, and by Saturday night had reached New York. Thus like a meteor it passed through the Union from the Southern regions toward the North. (*Journal* 13:10)

レノルズに先立ち、ケント・リュンキスト(Kent Ljungquist) が、11月15日の流星とブラウン処刑を結び付けた作家たちの表現をすでに分析し、ホイットマン、メルヴィル、ソローの3人が「同じ自然現象に形而上的な意味を与えて反応した」(“responded to the same natural phenomenon by endowing it with metaphysical significance” [675]) と述べ、詩人や作家と報道の関係を綿密に調査している<sup>197</sup>。ただし、流星報道の事実関係に始終して、ブラウン事件に対する作家・詩人各自の姿勢と“meteor-metaphor”の関係の考察には至っていない。

ディキンソンは、ブラウンについて詩や手紙で直接言及してはいない。だが、やはり“meteor”と“martyrs”の語を用いた詩を1861年に書いている。詩に用いられた“meteor-metaphor”の語彙を通じて、時代の周縁とも言える場で詩を書いていたディキンソンを、同時代の詩人や作家たちに結びつけたい。ソロー、メルヴィル、ホイットマンの例に加えることにより、ディキンソンの詩の語彙(“meteor”, “martyrs”)が単なる偶然の選択ではなく、同時代に連なった選択として捉えるためである。実際、ディキンソンがこの時期以外にこれらの語彙を使った例はほとんどない<sup>198</sup>。どの程度ブラウンを意識していたかは判断できない

---

<sup>197</sup> レノルズは彗星の表現についてホイットマン、メルヴィル、ソローの3人をひとまとめに括っている。ただしソローの“meteor-metaphor”は、ブラウンの生と死の在り方を表現しており、ホイットマンやメルヴィルがアメリカ国家の危機の前触れとして用いているのとは異なる。ケント・リュンキストはソローが新聞や雑誌の報告から流星のイメージを得た可能性を詳細に調べている。ホイットマンの場合、11月15日以外の別の流星の可能性について全く触れていない(Ljungquist 677)。

<sup>198</sup> ディキンソンが“martyr”の語を用いた詩は次の3篇である——“By such and such an offering” (F 47), “Through the Straight Pass of Suffering” (F 187), “The Martyr Poets - did not tell -” (F 665)。また“meteor”の語に関しては“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) と“One of the ones that Midas touched” (F 1488)の2篇がある。*Emily Dickinson Lexicon*. [<http://edl.byu.edu>] および S. P. Rosenbaum の *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson* を参照

が、少なくとも、“meteor”及び“martyr”は同時代に流布していた語である<sup>199</sup>。

この点を具体的に分析するうえで、1859年に起きたジョン・ブラウンのハーパーズ・フェリー襲撃を背景に、ディキンソンの詩を、特にソローの日記と対照させて読む。ソローはブラウンと直接会い、ハーパーズ・フェリー襲撃を知るとすぐにブラウン支持を公にした。その意味で、歴史の表舞台でブラウンに関わったひとりである。一方、ディキンソンはアマストの家でひっそりと詩を書いていた。とはいえ、これまで論考してきたように、彼女は社会に背を向けた「隠遁者」では決してない<sup>200</sup>。フェイス・バレット (Faith Barrett) が強調するのは、ディキンソンが戦時中の政治・戦況によく通じていたこと、そして雑誌や新聞、同時代の文学作品に通暁していたことである (“Slavery and the Civil War” 208)。ブラウンの事件と共振して、ソローの日記の記述は、揺らぎ、途切れ、逸れる。一方、“meteor”と“martyr”の語を含むディキンソンの詩“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) もまた、詩行が揺らぎ、途切れ、逸脱する。戦争へ向かう時代、または、その後、女性「詩人」ディキンソンが詩人として成熟していくうえで、この揺らぎや途切れをどう解釈できるのか。ブラウンの事件との外面的な関わりではまったく対照的なソローとディキンソンを敢えて並べ、この問題を考えていく。

---

<sup>199</sup> 「処刑」にまつわる語 (“crucifix”, “rack”, “gallows”, “scaffold”) もこの時期の詩に急に表われ、特に1861年から1863年に集中している。“Unto like Story - Trouble has enticed me -” (F 300), “This World is not conclusion.” (F 373), “No Rack can torture me -” (F 649)などの例がある。ディキンソンとブラウンとの関わりについては、金澤「ディキンソンから『大佐』ヒギンソンへ——南北戦争中の手紙を読む」(新倉俊一編『エミリー・ディキンソンの詩の世界』)においてすでに論じた。その後、東雄一郎氏「ジョン・ブラウン、ヒギンソン、ディキンソン」(松本昇編『ジョン・ブラウンの屍を越えて——南北戦争とその時代』49-66)において伝記的な関わりが検証されている。ただし、どちらも具体的な詩の考察はない。

<sup>200</sup> 序章で先述したように、シーラ・ウォルスキー (Shira Wolosky) の *Voice of War*、カレン・ダンデュランド (Karen Dandurand) の “New Dickinson Civil War Publications”、バートン・リーヴァイ・セント＝アーマンド (Barton Levi St. Armand) の *Emily Dickinson and Her Culture* が1984年に出版され、南北戦争とディキンソンを結びつける論調が本格的に出発した。

## 第1節 ディキンスンとブラウン

ディキンスンの詩をブラウンの事件と結びつけて十分に論及した研究は少ない<sup>201</sup>。詩や書簡においてブラウンに直接言及した例がないことがその大きな理由だろう。しかしディキンスンを取り巻く人物達は確実にブラウンに繋がっている。その意味で、全く無関係に見えるふたりを伝記的に結びつけたデイヴィッド・レノルズの *John Brown, Abolitionist* の功績は大きい。レノルズは、父エドワードが「反ブラウン集会」を支持する手紙を送った事実を確認し、両者に共通する「反乱」、「反抗」の気概を指摘する。ブラウンを批判するユニオニストのエドワードに対して、娘エミリはトマス・ウェントワース・ヒギンスン(Thomas Wentworth Higginson) に手紙を送った。ヒギンスンは、ブラウンをサポートした「秘密の六人」(Secret Six) の一人であり、後に黒人連隊を率いた「アメリカで最もラディカルな男」(“the most radical man in America” [450])である。ディキンスンとヒギンスンの「ふたりは反抗的な精神を共有していた」(“They shared a rebellious spirit.” [451]) とレノルズは断言する。そして、ディキンスン自身のことともまた「最もラディカルな女性」(“the most radical woman” [451]) と見做し、父エドワードに対する「反抗」を家庭内の父娘関係だけに留めず、さらに時代の大きな見取り図のなかに設定してみせる。しかしあくまでもブラウン評伝であるため、ディキンスンの側に立った検証は不十分である。

先述したように、ディキンスンはブラウンと直接の接点はない。対照的に、ソローは歴史の表舞台で、ブラウンを擁護した。ブラウンとの関わりでヒギンスンと近い立場にもあった。レノルズは、ディキンスンの「師」ヒギンスンが、トランセンデンタリストとブラウンを結ぶ存在であったことを重要視している——「彼女の師ヒギンスンが、ブラウンとトランセンデンタリストたちを結ぶ強力な接点であったことは恐らく偶然ではないだろう。エミリ・ディキンスンは、アメリカの兵士達についてのトランセンデンタリスト的な見方で、ジョン・ブラウンの意義を拡大して、南北戦争全体を含めたのだ」(“It was perhaps no accident that her preceptor, Higginson, was the strongest link between Brown and the Transcendentalists. Emily Dickinson, with her Transcendentalist take on American soldiers, was extending the meaning of John Brown to include the whole Civil War.” [John Brown, Abolitionist 452])。ブラウンに対するディキンスンの見方が、果たし

<sup>201</sup> 先述したように、唯一、レノルズが、ディキンスンの詩とブラウンを結び付けている。“It feels a shame to be Alive -” (F 524) 及び “Much Madness is divinest Sense -” (F 620) はジョン・ブラウンに触発された可能性を示唆している (*John Brown, Abolitionist* 451-452)。刺激的な提示ではあるが、ディキンスン自身の立場を考慮した分析はなされておらず、可能性を提示するに留まっている。

てトランセンデンタリストたちと同じだったかは定かでない。しかしブラウンの事件が起きた時期のディキンソンを把握することは、戦争の時代のディキンソンの詩作を把握する手助けになる。ソローの日誌とディキンソンの詩をここで一緒に取り上げ、同一の背景に置くことによって、戦争直前の時代の詩人ディキンソンに迫る。

## 第2節 ソローとブラウン

奴隷制廃止論者ジョン・ブラウンが18人の仲間とともにヴァージニア州ハーパーズ・フェリーの連邦軍武器庫を襲撃したのは1859年10月16日である。ソローが知らせを受け取ったのは10月19日で、ブロンソン・オルコット (Bronson Alcott) とエマソン家にいた (Harding 416)<sup>202</sup>。ディキンソン家が購読していた『スプリングフィールド・リパブリカン』 (*Springfield Daily Republican*) でも10月18日に “Serious Troubles at Harper’s Ferry, Va. The U.S. Arsenal seized by the mob” という見出しで第一報を大きく伝えている。

深刻な[事件]勃発がヴァージニア州ハーパーズ・フェリーで日曜日にあり、夜間そして翌日も絶え間なく続いた。騒ぎの性質はまだ十分には説明されておらず、奴隷制反対者たちと黒人によるものだとする報告もあれば、軍隊の不満分子によって反乱は構成され、黒人たちは関与していないという報告もある。反乱の人数も250人から700人と様々言及されている。

A serious outbreak occurred at Harper’s Ferry, Va., Sunday, and continued without intermission during the night and following day. The nature of the disturbance is not as yet fully explained, one account ascribing it to the abolitionists and negroes, while another says the insurgents are made up of disaffected armors, the negroes having nothing to do with it. The number of the insurgents is also variously stated at from 250 to 700. (*Springfield Daily Republican* Oct. 18, 1859)

この記事が書かれた段階では事件の全容はまだ把握されておらず、ブラウンの名前はない。反乱に関わった人数の情報にもかなり混乱がある。ソローは日誌にブラウンについて記し始め、10月30日にコンコードの第一教会で “A Plea for

---

<sup>202</sup> ケント・リュンキストによればソローは *Atlas and Daily Bee* などいくつかの新聞でブラウン情報を「調べた」 (“consulted” [Ljungquist 677])。

Captain John Brown”と題して講演し、ブラウン支持を真っ先に表明している(Harding 417- 418)。

事件直後は、暴力に訴えたブラウンを「狂気の沙汰」とする批判が一般的であり、ソローの講演にも非難の声があった。だが、次第に同時代の文学者たちはブラウンを「殉教者」として扱うようになっていく。その経緯についてベティ・L・ミッチェル(Betty L. Mitchell)は、暴力に訴えたブラウンの行動に対する批判が、当初、北部では一般的であったものの、次第に変化していく過程を詳説している。南部が有罪評決を目指して性急に司法手続きを進め、また裁判で陳述する際の、ブラウンの沈着な態度が報道されると、北部のブラウン批判が南部に対する怒りへと変化していく<sup>203</sup>。新聞では当初ブラウンを“mob”として扱っていたが、死刑後は“martyr”に一変している<sup>204</sup>。

ソローとブラウンの関係については、ウォルター・ハーディング (Walter Harding) がふたりの出会いに遡ってまとめており (415-426)、マイケル・マイヤー (Michael Meyer) は、暴力に訴えたブラウンを支持することとソローの非暴力主義との矛盾を説明している。非暴力主義との矛盾を孕みつつも、トランセンデンタリストたちがブラウンをクロムウェルの再来と見做し、支持した事情をレノルズは説明している(*John Brown, Abolitionist* 229-230)。高橋勤もこの矛盾に注目し、ソローがブラウンを「キリストの再来」と捉えるに至った経緯を分析している(74-99)。だが、ここで私自身が疑問に思うのは、ソロー自身は日々の暮らしにおいてブラウンの事件をどう記録したのか、という問題である。自然観察をライフワークとするソローが、ブラウンの事件をどのように受け止めたのか。講演や演説ではなく、日々の思索を記録した日誌にどのように書き留めたか、という問題である。

ソローの“A Plea for Captain John Brown”及び“The Last Days of John Brown”は日誌に基づいており、日常の思考が土台になっている。ソローの日誌で気になるのは、主題が多々移り変わることである。生活者としては、それが当然かもしれない。ただし、ブラウン事件で大きな衝撃を受けた時期でさえ、ソローはブラウン以外のことも多々、些末なことも一緒に記している。記述はしばしば話題が移り、自然の観察と、ブラウンに対する彼の内なる思いが隣り合わせに並ぶ。例えば、ブラウンの襲撃を知った日、日誌のほとんどはブラウンに集

---

<sup>203</sup> Betty L. Mitchell “Massachusetts Reacts to John Brown’s Raid”を参照。

<sup>204</sup> 奴隷制反対の立場をとる各紙も当初はブラウンを批判していたが、やがて「殉教者」(“martyr”)の言葉を使うようになる。例えば『リベレイター』(*Liberator*)も最初は「ブラウンの善意を認めながらも、『誤り導かれた、野蛮な、そして明らかに正気でない』(“misguided, wild, and apparently insane,” while allowing for Brown’s good intentions” [Mott II 46])と非難したが、やがて「殉教者」(“martyr”)として記述するようになる。

中している。だが、激烈な記述の最中に主題がふと目にしたシシウドの若木へ飛ぶ。

シシウドの若木を見つけた、2 フィートほどに育っており、まだまだ青く、伸びている最中だ、成熟した植物は丈が高い、根や茎が枯れた後も。

Find the seedling *archangelica* [sic] grown about two feet high and still quite green and growing, though the full grown plants are long since dead, root and stalk.

[*Journal* 12: 402-403]

この記述の後、再びソローの関心はブラウンに舞い戻り、「隣人たちがブラウンの死[刑]と想定上の運命についての言及」(“The remarks of my neighbors upon Brown’s death and supposed fate” [*Journal* 12: 400-410]) することについての記述が続く<sup>205</sup>。ブラウンの事件を念頭にソローの日誌を読んでいると、こうした主題の揺れに戸惑いを覚える。歴史の大事件と野に咲くシシウド(“*archangelica*”)の成長——ふたつの記述の開きはあまりに大きい。だが、先行研究ではこうした「揺れ」がはっきりと排除されている。この切り捨てられた「揺れ」に焦点を当て、さらに次節でディキンソンの「揺れ」に結びつけていきたい。

ソローの日誌におけるふたつの主題——ブラウンの問題と自然観察——はまったく別物として乖離するのではなく、むしろ「自然世界の決まり仕事」(“*routine of the natural world*” [*Reform Papers* 145]) の観察が、ブラウンについてソローが考えるときの下地を成している。逆の見方をすれば、ブラウンについての思考が、日々の観察を支えており、両者は相互に繋がっている。どちらもソローの毎日の思索の根幹に関わる。確かにソロー自身、「痛ましい人間の出来事が自然の対象物に向ける私たちの眼を目隠しするかもしれない」(“Any affecting human event may blind our eyes to natural objects.” [*Journal* 12:448]) と書き、ブラウンの事件によって普段の自然観察が中断したことを認めている。因みに、ブラウンの襲撃前日の日誌には秋の実りを書き連ね、「メギの実」(“*Barberries*”) から始まり「ゼニアオイ」(“*Mallows*”) で終わる長い一覧を記している (*Journal* 12:381-384)。ブラウンが捕えられ、裁判にかけられ、刑が執行されたとき、ソローは秋の収穫の

<sup>205</sup> マイケル・マイヤー (Michael Meyer) はソローにおける自然観察の記述とブラウン関連の記述との類似性に言及している。マイヤーは「ソローの経験的事実よりも詩的真実を好む特徴」(“his characteristic preference for poetic truth over experiential facts” [310]) を指摘しており、したがって、オサワトミーでのブラウンの残虐行為にソローが言及していないのは、ソローが自分の好むようにブラウンを観察しているためであると分析する (310-311)。



メタファーを用いてブラウンとその追従者たちの殉教を表し、「彼等は熟して絞首台に架けられた」(“They were ripe for the gallows” [Journal 12:420]) と書く。ブラウンの亡骸が死刑台から降ろされる時も、先に引用したように、「絞首台の横木から刈り取られて」(“just cut down from the gallows-tree” [Journal 13:10]) と、一種の収穫物のように記す。

特に目立つのは 10 月 19 日、ブラウンの事件を知った日の書き込みであり、ここではブラウンの死刑執行を予測して、ソローは「種」のメタファーを用いている。

そういった [ブラウンに否定的な] 人々は、果実は種のようなものであること、そして道徳的な世界では、良い種が植えられると、良い実が必ず結び、水やりや耕作には左右されないということを知らないのだ。英雄を畑に植える、言い換えれば埋葬すると、英雄という穀物が必ずや芽をだすことを知らないのだ。わざわざ発芽する許しを請うことのない力や生命力を持つ種なのだ。

Such do not know that like the seed is the fruit, and that, in the moral world, when good seed is planted, good fruit is inevitable and does not depend on our watering and cultivating; that when you plant, or bury, a hero in this field, a crop of heroes is sure to spring up. This is a seed of such force and vitality that it does not ask our leave to germinate. (*Journal* 12:406)

“A Plea for Captain John Brown”にもこの部分が再利用されているが、“Yankee-like”な損得勘定を揶揄する箇所が続けられておられ、種の話はむしろ唐突な印象を与える<sup>206</sup>。1850 年代後半という時期とこの部分を照らし合わせるうえで、ロバート・D・リチャードソン(Robert D. Richardson, Jr.) の説明は示唆的である。リチャードソンによれば、1850 年代後半、つまりはブラウンの事件が起こるまで、ソローは「コンコードにおけるすべての現象とその現象が毎年現れる順序」(“all phenomena in Concord and the order in which they appeared each year” [4]) のリスト作りに勤しんでいた。したがって日誌の記述はリサーチを反映したものになる。それまでのソローの日課について、リチャードソンは「彼はどの果実が特定の年のある月のいつ熟したかの一覧を作成した」(“He made a

---

<sup>206</sup> “A Plea for Captain John Brown” は日誌とほとんど同じ文面で記されているが、2 箇所コンマが挿入されている。“good fruit is inevitable<sub>2</sub>” と “This is a seed of such force and vitality<sub>2</sub>” (下線執筆者) の下線部分である。

list of which fruits ripened on what day during one month of one specific year.” [4]) と述べている。が、その日課の最中にブラウンの事件に「捕われた」(“became caught up, for a time, in the John Brown affair” [4]) のである。このことを考慮すると、1859年10月16日に起きたブラウンの事件はあたかもソローを日々の日課から逸らした印象を与える。だが、ブラウンに関連した記述を読み直してみるならば、別の見方ができる。ソローはブラウンの行動を「種の拡散」のメタファーを用いて説明することで、当時の関心事の語彙を具体的に反映させたのである。したがってブラウンについての記述は、自然現象の「生と死」の観察記録の一部として捉えることができる。

自然を観察していると、ブラウンが引き起こした大事件があっても、自然は何ら変わりなく日々営みが続けていることを実感する。人間社会の出来事に対して自然が超然としていることについて、ソローは次のように記している<sup>207</sup>。

このところブラウン隊長の運命に没頭していたため、昔からの決まり仕事が相変わらず進行しているのを見つける度に驚いた—— [ブラウンのことには] 無関心に自分たちの用向きで出掛ける人々に会う度に。私にとって不思議だったのは、小さなカワセミがなおも昔のように川で飛び込むことで、コンコードがなくなってもカイツブリはここで潜るだろう。

I have been so absorbed of late in Captain Brown's fate as to be surprised whenever I detected the old routine running still, —met persons going about their affairs, indifferent. It appeared strange to me that the little dipper should be still diving in the river as of yore; and this suggested that this grebe might be diving here when Concord shall be no more. (*Journal* 12:163)

自然はそれ自身のペースで進み、人間社会に興味を持ちはしない。まして同情などしない。ブラウンと自然観察の主題が織り交ざる記述は、ソローを捉えていた自然現象の「生と死」のより深い観点を示す。エマソンはブラウンについて「勇気」(“Courage”) というタイトルで11月8日にボストンで講演を行い、「あの新たな聖人、人類への愛によって争いと死にこれまで導かれた者たちで彼よりも純粋で勇敢な者はいない——この新たな聖人が自身の殉教を待ち受け、も

---

<sup>207</sup> ハーディングは日誌のこの部分を引き合いに出して、「数日間、ソローは他の事を何も考えられなかった。自然さえも一時その魅力を失った」(“For days Thoreau could think of nothing else. Even nature temporarily lost its appeal.” [416]) と述べている。ただし本章で注目するのは、自然についての記述が全く消えるのではなく、ブラウンの記述と自然観察の記述とが交錯する特徴である。

し殉死するなら、彼は処刑台を十字架のように栄光あるものとするだろう」 (“That new saing, than whom none purer or more brave was ever led by love of men into conflict and death,--the new saint awaiting his martyrdom, and who, if he shall suffer, will make the gallows glorious like the cross.” [John Brown, *Abolitionist* 366]) と述べている<sup>208</sup>。その6日後にチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の *The Origin of Species* が出版される (Fuller 80)。そしてソローは1860年初めにダーウィンの理論に興味を持ち始めるようになっていく (Richardson 11)。やがてブラウンの事件が1860年1月には報道から消え、それに従い、ソローも日誌の中でブラウンに触れるのを止め (Meyer 311)、再び彼自身の本来の日課を中心とした記述に戻る。

ブラウンはソローには大きな意味を持つ人物であった。ジョエル・マイアソン (Joel Myerson) は、ソロー自身にとって重要な要素として、ブラウンの行動力を挙げている——「ブラウンは行動のひとであり、アメリカにおける奴隷制に対して、ソロー自身が正義感から抱いていた苛立ちを具現していた」 (“[T]he man of action who embodied his own righteous impatience with slavery in America.” [311])。それでいて、ブラウンの記述をあっさり止めるのは不可解にも映る。ブラウンについて書くことを止めた理由として、マイアソンは、次のソローの記述を引用している。

偉大な人物の名前には常にばからしいところがある。(中略) その名前は人と意志疎通を図るには便利だが、自分自身と意志疎通を図る時には、記憶する必要はない。

There is always something ridiculous in the name of a great man . . . The name is convenient in communicating with others, but it is not to be remembered when I communicate with myself. (*Journal* 13:155)

日誌の記述からブラウンの名は消えても、ソローの思考の中にブラウンは存在し続けたのである<sup>209</sup>。記録の対象ではなくなったが、思考の対象として、ブラ

---

<sup>208</sup> レノルズの説明によると、この演説は『ニューヨーク・ヘラルド』 (*New York Herald*) に掲載された。ブラウン批判の急先鋒に立つこの新聞が掲載したのはエマソン批判のためであった (*John Brown, Abolitionist* 367)。

<sup>209</sup> ソローがブラウンを考え続けた証拠として、マイケル・マイヤーは、1860年夏にウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) がソローを訪問したときの逸話を紹介している。ソローはブラウンの信念について語ったという (Meyer 311)。

ウンは依然として重要な存在であり続けたことになる。

### 第3節 ディキンスンと政治

アマストにいたディキンスンは党派的な声を残していない<sup>210</sup>。しかしそれはディキンスンがまったく社会の動向に無関心であったためではない。友人や親戚との文通、周囲の人々との関係から、政治や社会問題をめぐる話に日々触れていたことは各章で見てきた。アマストにおけるブラウン事件の報道を見ると、ディキンスン家の人々が通っていたアマストの第一会衆派教会 (the First Congregational Church) でも、ブラウン処刑を数日後に控えた感謝祭の日曜礼拝で、大勢の参列者を前に牧師エドワード・ストロング・ドワイト (Edward Strong Dwight) がブラウンについて説教を行っている。ドワイトはブラウンの純粋な意図を認めながらもその暴力行為から、処刑は致し方ないと述べている<sup>211</sup>。ドワイト家とディキンスン家は家族ぐるみの付き合いがあり、ディキンスンの父も恐らく同じ意見であったと考えられる。ディキンスンもこの説教を聞いた可能性があり、ブラウンの話題が身近な場所でやりとりされていたことがわかる<sup>212</sup>。

---

<sup>210</sup> クリスタン・ミラーはシーラ・ウォルスキー (Shira Wollosky) の見解を引きつつ次のように述べている、「ウォルスキーが別のコンテキストで挙げているように、ディキンスンは戦争、勝利、敗北、戦闘についての詩では敵味方の言及をしていない。誰が誰を殺したかはせいぜい伝記的・歴史的コンテキストからしか推測できない」 (“As Wolosky points out in other contexts, Dickinson does not mention sides in any poem referring to war, victory, defeat or battle so one can only infer who has killed whom from biographical and historical context.” [“Pondering ‘Liberty’” 55])。

<sup>211</sup> ドワイトの説教は“Thanksgiving in Amherst” (*Hampshire and Franklin Press* Dec. 2, 1859) の見出しで次のように報道されている——「わが町の住人たちは感謝祭の安息日に大勢出席した。どの教会でも礼拝がおこなわれた。第一組合教会ではドワイト氏が説教し、ジョン・ブラウンの事件を主題にした。ブラウンの意図は純粋であると信じるも、刑罰は正当であると彼は考えていた」 (“Our village presented much the appearance Sabbath on Thanksgiving day. Services were held in all our churches. In the First Congregational Church, Rev. Mr. Dwight preached, and made the case of John Brown the topic. While believing the intentions of Brown were pure, he thought the punishment just.” [1])。

<sup>212</sup> ロウイーナ・リーヴィス・ジョーンズ (Rowena Revis Jones) は、ディキンスンがドワイト牧師の説教に共感する書簡を紹介している。彼がアマスト第一教会を1860年に辞してから、ディキンスンは教会に行くのをやめている (*Encyclopedia* 90-91)。兄オーステイン宛てのこの書簡(1853年6月5日付)には次のようにドワイトを称賛する言葉がある——「ドワイト氏の説教が終わったところです。人々が彼に留まるように頼むかど

ブラウンの件に限らず、政治的な話題が飛び交う環境でディキンソンは暮らしていた。ディキンソン自身も早くから政治の話題に関心を持っていた様子は、次の書簡からも読み取れる。後に兄の妻となる親友スーザン宛ての手紙（1852年6月11日）もその一例である。

どうしてわたしはホイッグ党大会への代表になれないのかしら。わたしがダニエル・ウェブスターや関税のことや法律を知らないとでも？そうすれば、スージー、わたしはあなたに会うことができる、会期中休みにね わたしはこの国が本当に嫌い、これ以上長くはいないでしょうよ。

Why cant I be a Delegate to the great Whig Convention?—dont I know all about Daniel Webster, and the Tariff, and the Law? Then, Susie I could see you, during a pause in the session—but I dont like this country at all, and I shant stay here any longer! (L 94)

政治家の娘として、普段から国政の話題を家庭で共有しているディキンソンが、娘として、女性として政治の場から外されている不満を冗談めかしつつも、押し強い表現を用いて訴えている。

ディキンソンに対する政治的な影響を考えるうえで重要な人物は、弁護士・政治家であった父エドワード、『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*) 編集長サミュエル・ボウルズ (Samuel Bowles)、そして文芸批評家であり戦争中に黒人連隊を率いたトマス・ウェントワース・ヒギンソンの3人であろう。3人ともそれぞれタイプは異なるものの、動乱の時代に自身の信念に従って行動した点で共通している。

ディキンソンが育ち、生活した環境を知るうえでも、父エドワードの影響は特に重要である。まさに奴隷制を巡って南北の確執が沸き立っていた時期、下院議員として国政に関わっている。エドワードの政治的な立場およびディキンソンとの関わりについてはコールマン・ハッチンソン (Coleman Hutchison) とベ

---

うか今のところまだわかりません。彼は私たち皆を魅了しました。きっと彼は招待を受けるでしょう。彼の半分ほども気に入る説教を聞いたことがありません。スージーも彼が好きです、私たち皆がそうです。彼が説教をするときはいつでもあなたにいて欲しいものです」 (“Mr Dwight has finished preaching, and it now remains to be seen if the people ask him to stay. We are all charmed with him, and I’m sure he will have a call. I never heard a minister I loved half so well, so does Susie love him, and we all—I wish you were at meeting every time he preaches.” [L 123]). ドワイト牧師のブラウンに関する説教もディキンソンが聞いていたものと推測できる。

ツツイ・アーキラ (Betsy Erkkila) が特に詳細に論じている<sup>213</sup>。ふたりの分析から浮かび上がるエドワードは、南北戦争へと向かう時期にあつて、「公的権能が失われたフェデラリストおよび保守的なホイッグ党員のエリート階級」 (“an elite class of disempowered Federalists and conservative Whigs” [Erkkila “Dickinson and the Art of Politics” 135]) の政治家であり、国政の舞台では斜陽の境遇にあつた。南北の軋轢が大きくなっていった時代に、奴隷制に関わる案件に関して、エドワードは1854年のカンザス・ネブラスカ法案に議員として反対するも法案は成立し、また「逃亡奴隷法」廃案の請願書を取りまとめて提出するが、結局この請願は実を結ばず棚上げとなる。奴隷制自体には反対であっても、急激な変化には懐疑的であつたエドワードは、政治的にラディカルなトランセンデンタリストたちとは異なり、ブラウンの行動に批判的であつた<sup>214</sup>。先述したように、ブラウン処刑後、12月6日にボストンのファニエル会館で開催された“Union meeting” (反ブラウン集会) を支持する手紙を送っている (Leyda I 375)。また、1860年9月にベル・エヴェレット党のマサチューセッツ州大会でエドワードが副知事候補にノミネートされるも辞退した際に、政治的信条から「ジョン・ブラウン主義」に連なるわけにいかなかったと指摘する見解が新聞掲載されている。エドワードが反ブラウンの立場にあることは公の事実であつた<sup>215</sup>。

---

<sup>213</sup> Coleman Hutcinson “‘Eastern Exile’: Dickinson, Whiggery and War” および Betsy Erkkila “Dickinson and the Art of Politics” を参照。ハッチンソンは特に父エドワードの政治的姿勢が娘エミリの「政治的・詩的姿勢と立場」 (“politico-poetic poses and positions” [3]) に多分に影響したと考察し、両者に共通する「亡命のナラティブ」 (“narratives of exile” [5]) に注目する。コールマンの論に大いに依拠したと思われるアーキラの論は、政治の勢力図の変遷期にあつて、「ニュー・イングランドの旧きエリートの秩序」であるホイッグ党に忠誠を捧げるエドワードが、政治的な力を失っていく様子をエミリがいかに共感し、詩や手紙に表現したかを分析している。そして両者ともディキンソンの隠遁を「親類縁者、地位、愛情の旧き牧歌的な秩序へ隠遁することの望み」 (“desire to retreat into an older pastoral order of kinsip, status and love” [“Art of Politics” 142]) と解釈する。政治的な状況からのふたりの解釈は新たなディキンソン理解において大変示唆に富む。だが、詩の解釈うえでは「階級意識」が過大に操作されているものと私は考える。アーキラが議論の場で用いる書簡と、ディキンソンの「隠遁」の時期がずれているためでもある。

<sup>214</sup> この経緯の詳細はミリセント・トッド・ビンガム (Millicent Todd Bingham) の *Emily Dickinson's Home* を参照(244-245)。

<sup>215</sup> エドワードの辞退に関して、1860年9月21日 “Warrington’s”なる人物によるボストンからの通信文が『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』に掲載されている——「ディキンソン氏が副知事候補のノミネートを辞退するのがわかり喜ばしい。私が思うにジョン・ブラウン主義に進まなければならぬにしても、彼は巻き込まれるのを最低限にしたいのだろうし、彼の魂に反乱の罪を抱えたり、ドイルズ家やハーパーズ・

1860年9月中頃、父エドワードが副知事候補にノミネートされ、政治的決断を迫られていたまさにその時期、娘のディキンソンは、ボストンでエドワードと共にいたノアクロス姉妹に手紙を書いている。ここで注目したいのは、エドワードを取り巻く政治の話題を、彼女自身の話題に摩り替えていることである。

ファニーは私のために「ベルとエヴェレットの党」によろしく伝えて下さらない？学校に行く途中にその団体の前を通るなら。聞いた話だと、あの人たちはわたしを副知事の娘にしたいのですって。あの人たちが猫だったら尻尾を引っ張りたいところだけれど、ただの愛国主義者たちだから、そのお楽しみは控えておきます。

Wont Fanny give my respects to the “Bell and Everett party” if she passes that organization on her way to school? I hear they wish to make me Lieutenant-Governor’s daughter. Were they cats I would pull their tails, but as they are only patriots, I must forego the bliss. (L 225)

この文面に当事者エドワードの名は全く出てこない。エドワードが出張先から家へ送る手紙では、政治の話題は常に息子オースティン宛てであり、娘エミリに送る手紙は身の回りのことで、家事や教会、天気の話だった。息子オースティンと娘エミリでは話題がまったく異なる点をミリセント・トッド・ビングガム (Millicent Todd Bingham) が指摘している (*Dickinson’s Home* 386)。だが、父から送られてくる書簡とは対照的に、ディキンソン自身が女友達、従姉妹、身近な女性たちに宛てた手紙では、政治の話題に彼女自身を置き、自分の声を響かせている。先に引用した、スーザン宛の手紙もその一例である。

また、1860年10月中旬頃とされる兄宛のメモ書きに「オースティン、あなたがフランク・コンキーにこづかれたとお父様が言っていましたよ」(“Austin - Father said Frank Conkey touched you -” [Leyda II 18]) とある<sup>216</sup>。書簡に付されたジョンソンの註に拠ると、「フランク・コンキー」とは父の政敵イサマー・フラ

---

フェリーの犠牲者の血が必要以上に彼の手を汚したくないと考えたのだろう”(“I am glad to see that Mr Dickinson declines the nomination for lieutenant-governor. I suppose he thinks if he must go the John Brown doctrine, he will be implicated therein as little as possible, and will not have the guilt of insurrection on his soul or the blood of the Doyles and the Herper’s Ferry victims staining his hands any more than is needful.” [Leyda II 17]) 。

<sup>216</sup> ジョンソンはこの手紙 (L 240)を 1861年頃のものとして推定している (*Letters* II 381)。

ンシス・コンキー (Ithamar Francis Conkey) であり、その政敵に兄がこづかれたのではないかとディキンソンは茶化している。父をめぐる人間関係をよく把握していたことがわかる<sup>217</sup>。父は兄については政治的な影響も心配する。父の政治活動から社会の動向を知るディキンソンは、そこに自分の入る余地がないことも認識している。

1858 年から家族ぐるみの付き合いがあったサミュエル・ボウルズもまた政治的な影響を与えていたと思われる。『スプリングフィールド・リパブリカン』の編集長にして、奴隷制反対者、女性の権利主張の擁護者であり、党派的な意見を新聞に反映させ、ブラウンについても多くの記事を載せているからだ。ボウルズとの文通は主に文学や個人的な悩みの相談役として論じられてきた<sup>218</sup>。だが、本論では特に政治的な影響の関わりとして、1860 年 8 月初め頃の手紙を挙げたい。ディキンソンが人種問題に触れた珍しい例である<sup>219</sup>。手紙の背景は不明だが、人種問題に関して軽率な態度をとり、ボウルズにその謝罪をしている

---

<sup>217</sup> アーキラはこの逸話に関連して“A Burdock twitched my gown” (F 289) を挙げている (“Art of Politics” 137-138)。

<sup>218</sup> ボウルズの妻メアリからは奴隷制反対主義者セオドア・パーカーの本(*The Two Christmas Celebrations*)を1859年のクリスマスのプレゼントに贈られている(Leyda I 376)。恐らくボウルズとの交際から、隣に住む兄の家に奴隷制反対論者ウェンデル・フィリップス (Wendell Phillips) が滞在するなど、奴隷制批判の話題をディキンソンが共有していたものと推測できる。

<sup>219</sup> エレノア・ヘギンボサム (Eleanor Heginbotham) はボウルズとの文通に「読書会」 (“Epistolary Book Club”) 的要素を指摘している。ボウルズは出版前の著名な作家な原稿を携えて訪れ、気に入った作品の感想を交換した逸話を紹介している (“Epistolary Book Club” 133)。またジュディス・ファー (Judith Farr) はボウルズ宛てのディキンソンの手紙と “Master Letters” との関連性を指摘している——「ディキンソン家の友人で『スプリングフィールド・リパブリカン』編集主任サミュエル・ボウルズに宛てた 50 通以上のディキンソンの手紙は、『マスター』宛ての彼女の手紙や詩と非常に連携する比喩表現を含むため、ふたりの頑健なる人物は同一であるかもしれない」 (“[H]er more than fifty letteres to the Dickinson family’s friend Samuel Bowles, editor of the *Springfield Republican*, contain imagery that is so complicit with that of her letters and poems for ‘Master’ that the two lustrous figures may be identical.” [177])。ベンジャミン・リース (Benjamin Lease) は、個人的な悩み (ヒギンソン宛ての手紙(L 261) で言及している「恐怖」) についての相談役、そして文学上の相談役 (“a beloved confidant” [22]) として論じている。健康が優れぬボウルズは転地療法のため 1862 年 4 月にヨーロッパへ旅立ち、その代わりとして、ディキンソンは同じ 4 月にヒギンソンに手紙を書き、文通を始めたものとリースは解釈する (25)。



ものと推測できる<sup>220</sup>。

本当に情けない思いです。今晚わたしは不躰に振る舞いました。朽ち果てたいくらいです。もうあなたの小さな友人ではなくなり、ジム・クロウ夫人になるのでしょうか。女性達に微笑んだりしなければ良かったです。本当のところ、私は神聖な女性たちを尊敬しています、フライ夫人やナイチンゲール嬢のような方々を。もう二度と浮ついたりしません。どうぞこの場でわたしを許してください。小さなムクドリモドキをもう一度振り返ってください。

I am much ashamed. I misbehaved tonight. I would like to sit in the dust. I fear I am your little friend no more, but Mrs Jim Crow. I am sorry I smiled at women. Indeed, I revere holy ones, like Mrs Fry and Miss Nightingale. I will never giddy again. Pray forgive me now: Respect little Bob o'Lincoln again! (L 223)

文面からディキンソン自身の政治的信条を判断することはできない。この手紙はこれまでほとんど注目されることはなかったが、反奴隷制主義、女性政治参加を擁護し、活躍するボウルズから、同時代の社会が抱える諸問題や、それに関わる配慮の仕方を学ぶ機会を得ていた様子が窺える<sup>221</sup>。

ブラウンを批判したエドワードやボウルズとは異なり、トマス・ウェントワース・ヒギンソンは「秘密の六人」(Secret Six)としてブラウンをサポートした。すでに第1章で見たように、後に黒人連隊大佐として戦地に赴いた。ヒギンソンの政治的な行動としては、ブラウン逮捕後も堂々とブラウン擁護の態度をとり続けたことでも際立つ。ブラウンに関しては、父エドワードとは政治的信条が異なり、しかも全くの他人であるヒギンソンに、ディキンソンは手紙を送つ

---

<sup>220</sup> ジェイ・レイダによればこの頃アマスト大学卒業式関係のパーティがあり、ボウルズは取材のために滞在していた(Leyda II 13)。

<sup>221</sup> マリエッタ・メスマー(Marietta Messmer)はこの手紙に言及しているが、内容には触れず、ディキンソンの一種のポーズとして注目している——「彼女もまた神話的、歴史的、文学的、そして実生活の人物達を引き出している。サミュエル・ボウルズに対しては、例えば、こう書いている、『もうあなたの小さな友人ではなくなり、ジム・クロウ夫人になるのでしょうか』 (“[S]he also draws on a wide variety of mythological, historical, literary, and real-life characters. To Samuel Bowles, for example, she writes: ‘I fear I am your little friend no more, but Mrs Jim Crow.’ [137])。またクラムブリィもこの手紙を取り上げているが、ふざけたポーズに注目し、その背景についてはまったく言及していない——「1860年8月にボウルズに宛てた手紙は許しを請うときでさえどんなに冗談めかすことができるかを立証する」 (“Dickinson’s August 1860 letter to Bowles demonstrates how playful she could be, even when asking for forgiveness.” [Inflections 183 n.10])。

たのだ。それが 1862 年 4 月であり、彼が出征する直前の時期にあたる。ふたりの書簡を巡る動向はすでに第 1 章で見た。

父エドワード、ボウルズ、ヒギンスンの 3 人に共通するのは、それぞれの立場においてアクティヴィストであったことだ。ソローも自身の信条に従ってウォールデンでの実験的な生活を行い、メキシコ戦争反対の立場から税金の支払いを拒み、逃亡奴隷を「地下鉄道」で助けた。エマソンは「アメリカの学者」(“The American Scholar”)において行動の必要性について果実の比喩を用いて述べている——「行動は学者に関しては副次的なものだが、本質的なものでもある。行動無くして人としてありえない。行動無くして思考は真実へと成熟することはできない」(“Action is with the scholar subordinate, but it is essential. Without it he is not yet man. Without it thought can never ripen into truth.” [60])。ソローはブラウンの「行動と性格」に突き動かされ、「ジョン・ブラウンの人生と人柄と最後の行動に関する新聞の論調や発言を正したい」(“I wish to correct the tone and the statements of the newspapers respecting the life and charater and last action of John Brown.” [Journal 12:424]) と日誌に書き込んでいる。

ディキンソンの父エドワードの活躍ぶりは、アマストの内外を問わず幅広い。アマスト大学の財務を 38 年間担当、州議会の代表、1842 年と 1843 年に州議会上院議員、また 1854 年と 55 年には連邦下院議員に選出されている。地元のためにも精力的な仕事ぶりである<sup>222</sup>。ボウルズもまた『スプリングフィールド・リパブリカン』を通じて政治的な見解を次々と発表した行動の人であった<sup>223</sup>。ヒギンスンは逃亡奴隷アンソニー・バーンズ(Anthony Burns) 救出のために実力行使に参加し、先述したように黒人連隊を率いて従軍している。そうした人物たちに囲まれたディキンソンは、兄が受ける期待や信頼が、娘であるがゆえに自分は無縁であることを自覚しながら育った。周囲の人物たちと較べて“nobody”であることを痛感する。“How dreary - to be - Somebody!” (「なんて退屈

---

<sup>222</sup> 具体的には、禁酒協会、農業協会の熱心な会員、アマストアカデミーの評議員、畜牛品評会や町民会の議長。第一教会教区の委員会および精神病院委員会において活躍。1853 年にはアマスト・ベルチャータウン鉄道の誘致、戦争中は軍隊の編制にも尽力している。ポリー・ロングズワース(Poly Longworth) “Dickinson, Edward”を参照。

<sup>223</sup> シヤノン・L・トマス(Shannon L. Thomas) “‘What News must think when pondering’ Emily Dickinson, the *Springfield Daily Republican*, and the Poetics of Mass Communication”を参照。またマイケル・マイヤー (Michael Meyer) は“Thoreau’s Rescue of John Brown from History”において早々にブラウン支持を表明したソローに対して、*New York Tribune* や *Liberator* のような新聞さえもソローに批判的であり、『スプリングフィールド・リパブリカン』もまたソローを “fanatic”として揶揄した報道を紹介している。おそらくボウルズの見解を反映していると思われる (309)。

なことでしょう！偉い人であるのは」[F 260])と揶揄するかのようには詩に書きながらも、自分自身の存在の手応えをなんとか確かめたい、そんな魂の叫びに近い声を手紙に、詩に見出す。戦争の時代になり、次々と出征していく同世代の知人や友人たちを見送り、友人の訃報を受け、自分のすべきことについて思案する姿がある。この声と詩の主題との関わりを次に探る。

#### 第4節 “Through the Straight Pass of Suffering (F 187) を読む

“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩は1861年にスーザンに送られ、次いで1862年にボウルズに送られた。その後1863年に草稿集に綴じられたものとされる。戦争の間、ディキンソンが何度か立ち戻った詩のひとつである<sup>224</sup>。

一読すると、自身の信念に身を捧げた「殉教者たち」(“martyrs”)を歌った詩として捉えることができる。“martyrs”の概念については、バートン・リーヴァイ・セント=アーマンド(Barton Levi St. Armand)がディキンソンの詩における軍事用語をピューリタニズムの伝統に結びつけて説明しており、「キリスト教信仰を殉教と軍国主義に結びつける長い伝統」(“a long tradition linking Christianity with both martyrdom and militarism” [100])を指摘している。セント=アーマンドはディキンソンの初期の詩について述べているが、本論では、戦争中に何度か立ち戻ったこの詩“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187)を中心に、「殉教」の主題を考える<sup>225</sup>。

---

<sup>224</sup> ディキンソンが何度もこの詩に立ち戻ったことについて、クリスタン・ミラー(Cristanne Miller)から次のような見解をメールの返信で受け取った——「おそらくこの詩が最初に書かれたのは、殉教一般あるいは初期の戦死を考えてのことだろう。戦死者が増加し、戦争が続行するにつれ、彼女にはもっと重要な詩になったのだろう」(“Perhaps a poem initially written thinking of martyrdom more generally, or thinking of the early war deaths, became more important to her as the deaths mounted and the war went on.” [July 17, 2016])。

<sup>225</sup> セント=アーマンドは「ディキンソンは常に軍事のイメージを長らく好んでおり、初期の詩には軍事的な栄光の華やかさと儀式に満ちている」(“Dickinson had always been fond of martial imagery, and her early poetry is full of the pomp and circumstance of military glory. . . . it was only the culmination of a long tradition liking Christianity with both martyrdom and militarism.” [100])とも述べている。引用している詩は“Who never lost, are unprepared” (F 136)の第3連であり、本論ではこの詩を第5章において考察した。

“martyr”の解釈について、エードリアン・チャスタイン(Adrian Chastain)は初期ピューリタンの殉教に基づいて論考している。古くは信仰のために殺される人物を意味した“martyr”が、時代とともに変遷し、信仰のために人を殺す兵士さえも“martyr”の範疇にあったと指摘している(5)。本章ではこの広義の意味で“martyr”を用いる。戦争の時代とは、数多くの人々が「殉教者」に仕立て上げられる場と言っても過言ではない。殺し、殺される、双方が「殉教者」となったわけである。当時人口三千人ほどのアマストでは、ポリー・ロングズワース(Poly Longworth)によると、「384人のアマスト大学の学生たちが南北戦争に出征した。そのうち38人が従軍牧師として、47人が軍医もしくは軍医の助手としてであった。31人の命が奪われた」(“384 Amherst College men served in the Civil War—38 of them as chaplains and 47 as surgeons or assistant surgeons. This was claimed the lives of 31.” [“Brave among the Bravest” 31])<sup>226</sup>。そのひとりが、本論で何度も言及してきたフレイザー・スターズ(Frazer Stearns)であり、戦前の存在としてはジョン・ブラウンもまた「殉教者」なのである。

“Through the Straight Pass of Suffering”(F 187)の詩は、殉教者たちの姿で始まる。彼等は最終目的地である神から視線を逸らすことなく歩み続ける<sup>227</sup>。

Through the Straight Pass of Suffering  
The Martyrs even trod -  
Their feet upon Temptation -  
Their foreheads - upon God - (F 187 C)

苦しみのまっすぐな道を通り  
殉教者たちはなおも歩む  
その足は誘惑の上を  
その額は 神に向く

---

<sup>226</sup> クリスタン・ミラーは、ディキンソンの父や兄が戦争協力に加担していた事実にも言及している——「ディキンソンの父と兄は積極的にアマストの戦争努力に奉仕しており、軍服を買うための寄付を募ったり、志願兵を勧誘したりして、地域的な支えの水準を上げた」(“Dickinson’s father and brother actively supported Amherst’s war effort by collecting subscription money to buy uniforms, recruiting volunteers, and boosting levels of local support.” [“Pondering ‘Liberty’” 49])。)

<sup>227</sup> この詩は先述したように、スーザンに送った版(A)、ボウルズ宛ての手紙に入れた版(B)、草稿集に清書した版(C)の3種類があり、ここではCの版を用いる。

殉教者たちの歩みがいかに堅固な信仰に支えられているかを示すように、第 1 連では弱強格の韻律が規則正しく続き、しかもその確かさは“trod” (2 行目) と “God” (4 行目) が押韻して強調されている。この韻律はそのまま第 2 連 1 行目 “A Stately - Shrivven Company -” (「罪が償われた威厳ある一団」) まで続く。けれども奇妙なことに、突然、第 2 連第 2 行目で “martyrs” の確かな足取りは途絶え、殉教者の姿から語りは逸れて、場面は一気に宇宙へ、北極の空間へと広がる。

Convulsion playing round -  
Harmless as Streaks of Meteor -  
Opon a Planet's Bond -

変動がまわりで起ころうと  
流星の光線が惑星の軌道に  
かかろうと害はない

この時点で弱強格は強弱格に入れ替わる。だが、再び第 3 連冒頭で弱強格に戻る——“Their faith the Everlasting Troth - / Their Expectation - sure -” (「彼らの信仰は永遠の誓約 / 彼等の希望は確かなもの」)。しかし、結びの 2 行で読者はまたも「北極の空」 (“Polar Air”) へと導かれ、韻律も強弱格に戻る。

The Needle to the North Degree  
Wades so - through Polar Air -

北の角度を指す針が  
北極の空をそのように渉る

このように場面が何度も途切れ、韻律も何度も翻り、殉教者たちの信仰の堅固さとは矛盾する。

アン・C・ローズ (Anne C. Rose) は、親の世代の宗教観が子供の代に揺らぎ始めた傾向を指摘し、「この世代の人々は受け継がれてきた洞察を掴み損ねた」 (“[T]he members of this generation lost hold of inherited insights.” [20]) と解釈する。この指摘を援用するならば、詩の韻律や展開の揺れは、若い世代の心の揺れに繋がっているのかもしれない。そのために、信仰の拠り所として、あらゆる局面に神意を見出そうとするのである——「宗教的な確信を一時的な報酬に摩り替え、自分たちの仕事、余暇、家族、政治、特に戦争に永続的な意味を付与しようともがいた」 (“[T]hey tried to replace religion's assurances with temporal rewards,

striving to invest their work, leisure, families, politics, and particularly their war with enduring meaning.” [Rose 20] )。神意のありかを戦争における「報い」に見出そうとする姿勢は、先に見た、フレイザー・スターンズが父に送った書簡にも共通する。

それにしても規則正しい歩みとして進む韻律が、所々で反転する揺れをどう解釈すべきだろうか。この点を考えるうえで、“martyrs” と “meteor” の言葉に目を留めたい。ディキンソンは珍しくこのふたつの言葉をこの時期に限定的に使っている。先述したように、当時ジョン・ブラウンの処刑をキリスト磔刑に準え、ブラウンを “martyr” とする表現が広がっていた (Reynolds, *John Brown, Abolitionist* 406)。ディキンソン家が購読していた新聞『ハンプシャー・アンド・フランクリン・エクスプレス』 (*Hampshire & Franklin Express*) にもブラウン処刑の当日 12 月 2 日に同様の表現が見られる。

また、南北戦争の時代の “martyrs” 像については、戦争で命を落とした若者を「殉教者」として表した次の文章を参考にしたい<sup>228</sup>。O・B・フロシングガム (O. B. Frothingham) という牧師による追悼文「我等の殉教者とその復活」 (“Our martyrs and Their Resurrection”) が、1862 年 3 月 29 日の『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』 (*Springfield Daily Republican*) に掲載された<sup>229</sup>。最初の地上戦ビッグ・ベセル (Big Bethel) の戦い (1861 年 6 月 10 日) で戦死したセオドア・ウインスロップ (Theodore Winthrop) を悼んだものである<sup>230</sup>。行動的であることが理想化された時代に、無名であった若者が、大義のために武器を手に戦ったことが、称賛の的になっている。

自由の精神が力と真実において増大し、その量と純度は、若い殉教者たちによって増えている。彼らは自分たちの屍を、自分たちが生じた土くれに与え、自分たちの命を国に捧げる、彼らの考えはその滋養となり靈感となる。

---

<sup>228</sup> 後に 1864 年に黒人連隊を率いてワグナー要塞を攻め、命を落としたロバート・グールド・ショウ (Robert Gould Shaw) もまた “martyrs” たちの列に連なる。ディキンソンの身近な戦死の例としては他に 1861 年 12 月にアダムズ夫人の息子がアナポリスで戦死した報せをルイザ・ノアクロス (Louisa Norcross) への手紙に書いている (L 245)。

<sup>229</sup> 同じ号の『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』ではヒギンソンが『アトランティック・マンスリー』 (*Atlantic Monthly*) 4 月号に書いた『若き投稿者への手紙』 (“Letter to a Young Contributor”) を推奨している。

<sup>230</sup> セオドア・ウインスロップ (Theodore Winthrop) の戦死についてはランダル・フラー (Randall Fuller) を参照 (27)。

The spirit of liberty is increasing in power and truth, and the volume of it, the purity of it, are swelled by the souls of these young martyrs, who give their dust to the dust whence it came, and their life to the country whose ideas were its sustenance and inspiration. (*Springfield Daily Republican* 29 March 1862: 2)

ここでフロシガムは国家への自己犠牲を賛美している。その際に、殉教者たちを「種」に喩えている。戦死した若者たちは種のように蒔かれる。

気高い若者たちが戦闘で死に、最初に訃報に接して、私たちは身震いした、なぜこのように生命を痛ましくも無駄にしないでほしいのかを問う、そんなにも多くの勇敢な棺がカチリと開き、実り豊かな人類の土壌へと新たな国家と人の生命を宿す成長の早い種を落とすのだ。

These deaths of noble young men in battle, which, on our first hearing of them, make us shudder so and ask why this dreadful waste of life, are the snapping open of so many brave caskets, and the dropping into the fruitful soil of humanity of the quick seeds of a new national and human life.

(*Springfield Daily Republican* 29 March 1862: 2)

先に見たソローの日誌でも、ブラウンたちを「種」に喩えていた。ソローの場合は種子そのものが「力と活力の種」(“a seed of such force and vitality”)であるために水分や耕作に頼らずとも「英雄という作物」(“a crop of heroes”)が芽吹く(*Journal* 12: 406)。ラスロップなる牧師のこの文章では、「人類の肥えた土壌」(“the fruitful soil of humanity”)に「新たな国家的および人類の生命を宿す成長の早い種」(“the quick seeds of a new national and human life”)が零れ落ち、次々と人々が生産されていく。この追悼文のタイトルにある「復活」(“Resurrection”)とは、来世における永遠の生を得る「復活」ではなく、この世で、新たな「殉教者」を促すための「復活」なのである。

兵士と種子のメタファーは、本論で何度か言及してきたフレイザー・スターンズにも用いられている。父ウィリアム・オーガスタス・スターンズ(William Augustus Stearns)が息子の追想録 *Adjutant Stearns* の表紙に掲げたエピグラフはヨハネ伝 12 章 24 節からの引用であった——「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(“Except a corn of wheat fall into the ground and Die, it abideth alone; but if it DIE, it bringeth [sic] forth much fruit.”)<sup>231</sup>。神意を結びつけることで、息子の死を無駄にしたくない親心が感じら

<sup>231</sup> 翻訳は『舊新訳聖書』(日本聖書協会)に拠る(211)。

れる<sup>232</sup>。ラスロップにしても、ソローやスターンズの父にしても、ブラウンや、倒れた兵士たちを表す「殉教者」たちは、さらなる「殉教者」を導く「種」なのである。

ディキンソン自身も、地中に埋められた種のイメージをいくつもの詩で用いている<sup>233</sup>。ディキンソンにあっては地中に眠るのは兵士ではない。そして必ずしも男性ではない。しかも「種」は戦場ではなく、墓地と思われる場所に埋められる。1864年に清書された“*No Notice gave She, but a Change -*” (F 860) では地中に眠りつつ復活を待つ女性が描かれている。ここでは第4連1行目から3行目を引用する。

And when adjusted like a seed  
In careful fitted Ground  
Unto the Everlasting Spring (F 860)

注意深く準備された土壌に  
種のように設えられ  
永遠の春に向かう

ここで埋められているのは詩人であり、永遠に向けて芽を出す種は、詩として解釈できる。春が来て芽吹くとき、永遠の命を持つ言葉が地表に現れる。また、1865年に清書された“*I heard, as if I had no Ear*” (F 996) では語り手自身が復活の時を物語る。ソローやフロシガムおよびスターンズの父たちが描く「殉教者」とは異なる。

“*martyr*”に続き、もうひとつの語“*meteor*”に関しては、先述したとおりホイットマンやメルヴィルなど同時代の詩人たちが、ブラウンの襲撃・処刑に前後した時期に巨大な流星が出現し、それを戦争の予兆として描いた<sup>234</sup>。ブラウン

---

<sup>232</sup> 戦争中に詩人たちが書いた戦争詩においても、戦死を秋の収穫に重ねた詩、さらに死者が「種」として土壌に蒔かれ、再生を待つ詩が多く見られる。例えば、ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアー(John Greenleaf Whittier)の詩“*The Battle Autumn 1862*” (*Atlantic Monthly*, October 1862) もそのひとつである——“*She knows the seed lies safe below / The fires that blast and burn; / For all the tears of blood we sow / She waits the rich return.*” (「自然はその種が安全にあるのを知っている / それを爆破し燃やした火の下で。 / 私たちが蒔いた血の涙全ての代償に / 自然は豊かな報酬を待ち受ける」)。

<sup>233</sup> この主題に関しては、石川まりあ「種まく詩人--Emily Dickinson における『墓』と『眠る種』」を参考にした。墓を苗床として捉える詩に注目した興味深い論考である。ただし石川氏は戦争との関連性には言及していない。



関連の報道と流星の騒ぎとが同時期の紙面を賑わせ、ディキンソン家が購読していた『スプリングフィールド・リパブリカン』にも流星出現の翌日にその報告が載っている<sup>235</sup>。頭韻を好むディキンソンが単に音のために“martyr”と“meteor”を用いただけでなく、他の詩人たちと同様、時代に顕著な 2 語を選んだに違いない。“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩では、宇宙からの突発的な出来事にも脇目を振らず、殉教者たちは黙々と歩み続ける。その一途さを語る声は、流星の出現を差し挟み、皮肉な気味さえ帯びる。

それにしてもこの “Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の語り手の声は、はるか遠くから響く印象を与える。語り手は一体どこにいるのか。私たち読者は詩の表層にその足掛かりを見つけないことはできない。語り手を探そうえで、最終連の “needle” とそれを受ける現在形の動詞 “wades” に手がかりを求めてみたい。ヘレン・ヴェンドラー (Helen Vendler) はこの詩が過去形で始まり、最終的に現在形 “wades” で終わることに注目している。過去の殉教者の歩みは永続的に現在にも連なっているのである。ヴェンドラーは “needle” は殉教者たちの「内なる羅針盤・方位磁石」 (“internal compass”) であり、北極圏探検を意識して、水夫の羅針盤さながらに海を進む (“wade”) ものと解釈する<sup>236</sup>。

ひたすら神の方向を目指す殉教者たちの歩みが、常に北を指す磁石の針 “needle” で表現されているのは納得できる。だが、それを受ける動詞は何故 3 人称単数に呼応すべき “wades” なのだろうか。一糸乱れぬ “martyrs” の動きが単数形 “needle” とみなされているためか。ここでヴェンドラーの解釈を重ねて、現在形の 3 人称単数の動詞 “wades” に語り手自身の歩みを見出してみたい。これまでその姿すら見せずにはいた語り手は、「現在」を生きる。仮に “needle” の意味として、羅針盤の針と重ねて、女性が縫物に用いる縫い針を、さらには、姿を見せ

---

<sup>234</sup> ホイットマンの場合 “meteors” と複数形であり、別の時期の彗星も解釈の対象となり得る。

<sup>235</sup> “Items by Telegraphs” の項目で次のように報告されている——「大きく明るい流星がニューヨーク市街の上空を、火曜日の午前、北から南へと通り過ぎ、その時太陽が明るく輝いていたにもかかわらず、公衆の注目を引くところとなった」 (“A large and brilliant meteor passed over the city of New York, Tuesday forenoon, from north to south, attracting general attention although the sun was shining brightly at the time.” [Springfield Daily Republican, November 16, 1859])。

<sup>236</sup> サー・ジョン・フランクリン (Sir John Franklin) が北極探検で消息を絶ち話題になったのが 1847 年であった。ただしディキンソンが手紙で触れているのは 1873 年ノアクロス姉妹に宛てた手紙においてである (L 394)。

ない語り手の存在を見出してみてもどうか。それというのも、ディキンソンは縫物の作業を、詩人の仕事に準えた詩をいくつも書いているからだ。例えば “A Spider sewed at Night” (F 1163) の詩が顕著な例である。

A Spider sewed at Night  
Without a Light  
Upon an Ark of White - (F 1163)

蜘蛛が夜縫物をした  
光もなく  
白の弧のうえで

ここでは詩を書く営みを、糸を紡ぐ蜘蛛の姿で示している。“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩とは異なり、韻律の揺れもなく、戸惑いとも無縁な蜘蛛の姿がある。ヴェンドラーは、「蜘蛛の完璧な自立をディキンソンが羨ましがっている——彼女は（少なくとも初期は）義理の姉スーザンや友人のトマス・ウェントワース・ヒギンソン、或いは他の人々が自分の作品についてどう思うかを気に掛けていた」（“The complete autonomy of the Spider is envied by Dickinson—who did care (at least at first) what her sister-in-law Susan or her friend Thomas Wentworth Higginson or others thought of her work.” [419]) と付言する。この蜘蛛の詩が 1869 年に清書される頃には、ディキンソンの詩作姿勢も定まり、蜘蛛も詩人自身の姿を反映していたに違いない。

また “Don’t put up my Thread & Needle” (F 681) の詩では、ディキンソンは針仕事や庭仕事と詩作を同列に並べている。ここで “stitch”（縫い目）の語は視覚的に “stich”（詩行）の語義も訴え掛けてくる。

Don’t put up my Thread & Needle -  
I’ll begin to Sow  
When the Birds begin to whistle -  
Better stiches - so - (F 681)

わたしの針と糸を片づけないで  
縫い始めるのだから  
鳥たちが囀り始めるときに  
もっと上手なかがり縫いで そうしますから

これらの詩に見られるように、針仕事や“needle”の語には詩人の存在を見出すことができる。“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩における “needle” を、針を持つ人、さらにペンを持つ詩人のメトニミーとして捉えるならば、“wades”は縫い針が布地を縫い進み、ペンが紙を進む動きとしても解釈できる。詩作の営みは容易なものではなく、決して真っ直ぐ(“straight”) にはいかない<sup>237</sup>。実際、詩は家の中で書くのだが、ディキンソンの詩の政治性を論じたポール・クラムブリィ(Paul Crumbley) は、家庭の領域でいかに政治的な意味を持つ行為ができるか、その可能性と関連させてディキンソンの詩作を解釈する。

ディキンソンの詩の構築される方法が示唆するのは、彼女の目的が、詩や語り手が解決すべき苦境を提示することではなく、主権のドラマと、家庭領域でなされる選択という政治的な重要性を読者に考えるように促すことである。

The way her poems are structured suggests that her aim is not to pose quandaries that her poems and their speakers solve, but rather to stage dramas of sovereignty and consent that require her readers to think independently about the political significance of choices made in the domestic sphere. (*Winds of Will* 34)

クラムブリィは「政治的な重要性」について具体的に説明してはいない。だが、“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩もクラムブリィのこの解釈の一例になるだろう。ディキンソンが詩作・思索する場である家は、社会から閉ざされた空間では決してない。その意味で、仮に “martyrs” に、ディキンソン自身の姿を読み込むのもあながち見当外れではないはずだ。

そもそも “martyrs” の語源は “witness” であり、ウェブスターの辞書にあたるならば、「死を以て福音の真実の証人となるひと、その行為または態度は人々の注視を意図してなされる」 (“One who, by his death, bears witness to the truth of the gospel, whose actions or behavior are intended for public observation.”) とある。衆目の場における行動が殉教者の特徴となる。それに対して、詩作は内なる行為である。実際、第5章でみた戦争前の詩群では「心の中」の戦いとして描かれて

---

<sup>237</sup>人の姿も稀な荒涼とした空間での、極めて孤独な作業に喩えられる。この空間を舞台にして“I stepped from Plank to Plank” (F 926) では、語り手は未知の世界を進むぞくぞくした感覚「経験」(“Experience”) について語る。宇宙空間が頭上に広がる中、一步ずつ、進む。また“I tried to think a lonelier Thing” (F 570) においても、詩人は話し掛ける人物すら見出すことができぬ北極の孤独な場所にいる。

いた。だが、“Through the Straight Pass of Suffering” (F 187) の詩においては、疑念や恐れ・不安・自分に対する不信感に苛まされながら、宇宙空間を「苦勞して進む」(“wade”) 姿となる。冒頭の、脇目も振らずに「まっすぐな道」(“the Straight Pass”) 歩む殉教者の過去形の歩みは、この殺伐とした風景を進み続け、最終的には現在形の3人称単数形 (“wades”) の、姿を見せぬ主体の揺らめく歩みに取って替わる。

ディキンソンは1862年初期にこの詩をボウルズ宛ての手紙に付して送っている (L 251)。手紙の散文は詩へと移り変わり、彼女自身の歩みであることを示唆している<sup>238</sup>。

Dear friend  
If you  
Doubted my Snow -  
for a moment - you  
never will - again -  
I know -  
Because I could not  
say it - I fixed it  
in the Verse - for  
you to read - when  
your thought wavers,  
for such a foot as  
mine -  
Through the strait pass  
of suffering - [page break]  
[blank space]  
The Martyrs - even - trod.  
Their feet - opon Temptation -  
Their faces - opon God -  
A stately - shriven -

---

<sup>238</sup> ここでの引用はドナルド・ミッチェル(Domhnall Mitchell) がディキンソンの手紙を書き写した形に従った (*Measures of Possibility* 129-130)。1861年にボウルズに送られた形では、詩の冒頭部分は “the strait pass” (「狭き道」) となっている。後に1863年後半にファシクルに清書された際に “the Straight Pass” に変えられている (Franklin, *Poems I* 221-223)。

Company -  
Convulsion - playing round -  
Harmless - as streaks  
of meteor -  
Opon a Planet's Bond -  
    Their faith -  
the everlasting troth -  
Their expectation - fair -  
The Needle - to the North  
Degree -  
Wades - so - thro' Polar Air!

(Mitchell, *Measures of Possibility* 129-130)

親愛なる友へ  
    もしあなたが  
わたしの雪を疑ったとしても  
ほんの一瞬でも  
二度と　そうすることはないでしょう  
私にはわかります  
うまく言うことが  
できないので　それを  
詩の形に整えました　あなたが  
読むように  
あなたの気持ちが揺らぐときに備えて  
私の足のように  
揺らぐ足のために  
苦しみの  
狭き道を通り  
殉教者たちはなおも歩む  
その足は誘惑の上を  
その額は　神に向く  
    罪が償われた威厳ある  
一団  
変動が　まわりで起ころうと  
流星の  
光線が惑星の軌道に

かかろうと害はない  
          彼らの信仰は  
永遠の誓約  
彼等の希望は 確かなもの  
北の角度を  
指す針が  
北極の空を そのように 渉る

ボウルズ宛ての手紙ではメッセージが中断せずにそのまま詩行へと変わる。メッセージは語り手（ディキンソン）自身の歩みとなり(“such a foot as / mine”)、詩行が揺れるように歩みも揺れる(“waver”)。ボウルズ宛ての手紙に付されたこの詩について、ドナルド・ミッチェル(Domhnall Mitchell) はインデントの幅を定規で測り、手紙と詩が意識的に区別されていると判断する<sup>239</sup>。アレクサンドラ・ソカリデス (Alexandra Socarides) も同様の解釈をしており、ディキンソンがインデントによって、手紙と詩の区別を明確にしているとみなす<sup>240</sup>。確かにスペースがあるために、詩行が散文に埋没することはない。だがミッチェルやソカリデスは、手紙と詩が一体化したこの形において、詩の解釈を捉え直そうとする試みは全くしていない。

ボウルズに送られたこの形において、子音の響きが視覚的に強く伝わる。“Convulsion”, “Company”の “K”の頭韻、そして最後の“faith”, “troth”, “North”の“th”の音が詩行の折り返し部分で繰り返され、「信仰」と「歩み」と、目指すべき方角「北」が音で連なる。音の効果とともにやはり目立つのは「揺れ」である。そもそもここでの歩みは書き手（ディキンソン）の歩み (“such a foot as / mine”)として揺れる (“wavers”)。殉教者の過去の歩みはやがて、現在を生きる語り手を天体へと結びつける。本来なら、殉教者たちの歩みが向かうのは天国である。ところが、最終的にこの詩で示されるのは磁石であり、19世紀を生きる語り手

---

<sup>239</sup> ミッチェルは散文の形で述べること(“saying”)と詩の形で表現すること(“verse”)をディキンソンがここで区別していると解釈している (*Measures of Possibility* 129)。

<sup>240</sup> ソカリデスは書簡に詩を引用する場合を取り上げる際、インデントの取り方に注目している——「ディキンソンは注意して詩として記している。例えば1862年初期の手紙 (L 251) の原稿が示すように、スタンザごとに初めをインデントし、“Through the strait pass of suffering”の各詩行を損なわずに保持している。行を折り返さなくてはならない時も、残りの行をブランクのまま残した」(“Dickinson was careful to mark it as a poem. For instance, the manuscript of her letter of early 1862 (L 251) indicates that Dickinson indented the beginning of each stanza and attempted to hold each line of the ‘Through the strait pass of suffering-’ (F 187) intact, for when she had to turn the line, she left the rest of that line blank.” [56])。

自身が手に持つ<sup>241</sup>。ボウルズ宛ての手紙では、過去形の「殉教者たち」の姿に続いて、詩人ディキンソンの姿が「殉教者」として、苦勞しながら進み、その歩みが詩行の揺れとなる<sup>242</sup>。

## 第5節 「殉教詩人」の仕事

他人には知られることのない内なる戦いをディキンソンが書いていたことは先述した。戦争前の詩では、“Success is counted sweetest” (F 112) および “To fight aloud, is very brave -” (F 138) などがある。衆目の場で戦う殉教者とは異なり、これらの詩では秘かに心の内面で戦う。この「戦いの詩」は戦場での戦いと対照的な、内面の戦いとして語られている。しかし、戦争中に書かれた次の詩 “The Battle fought between the Soul” (F 629) では、多くの場所でまさに起きている戦闘のひとつ (“One of all the Battles prevalent”) として記されている。

The Battle fought between the Soul  
And No Man - is the One  
Of all the Battles prevalent -  
By far the Greater One -

No News of it is had abroad -  
It's Bodiless Campaign  
Establishes, and terminates -  
Invisible - Unknown -

---

<sup>241</sup> 戦争の時代には天体観測の技術も発達した。ルネ・L・バーグラント (Renée L. Bergland) の *Maria Mitchell and the Sexing of Science* は天体観測の成果を当時の女性教育の観点から論じた一冊である。ディキンソンとほぼ同時代を生きた女性天文学者マリア・ミッチェル (Maria Mitchell; 1818-1889) の評伝であり、当時の女性の科学教育を知るうえで大いに参考になる。

<sup>242</sup> ベンジャミン・リース (Benjamin Lease) もこの詩をボウルズ宛ての手紙において解釈している。リースは『スプリングフィールド・リパブリカン』に掲載された “Our Martyrs” (1862年) との直接の関連性に言及している。だが、この詩が書かれたのは1861年であり、時期が合わない。この詩をボウルズ宛ての手紙に限定して解釈しているため、リースは「殉教者」を “martyr-sufferers” と見なしている。リースはこの詩をジェイムズ・モンゴメリ (James Montgomery) の讃美歌の書き換えとみなし、後に帰国したボウルズとの面会を拒否したディキンソンが「讃美歌の書き手としての自分の仕事」 (“her vocation as a maker of hymns”) = 詩人の仕事を見出したものと解釈する(25)。

Nor History - record it -  
As Legions of a Night  
The Sunrise scatters - These endure -  
Enact - and terminate - (F 629)

魂と、人ではない存在との間で  
戦われた争いは  
おこなわれている争いのうちのひとつで  
はるかに大きなもの

その報道は外では手に入らない  
肉体を持たない戦いが  
確立し、そして終局する  
目に見えず 知られることはない

歴史も それを記録しない  
夜の軍勢を  
太陽が追い散らしても それらは持ちこたえ  
演じて そして終了する

コールマン・ハッチンソン(Coleman Hutchison) は斜陽の立場にある父エドワードの「戦う」姿をここに読み込み、政治的な詩として説明している——「この詩は個人的、政治的そしてイデオロギー的な戦いを厳粛に黙想するものとなる。これらの戦いは、アメリカ南北戦争という物理的な戦いをひき起こし、その戦いに付随する戦いなのである」 (“[T]he poem becomes a weighty meditation on the personal, political, and ideological battles that accompanied and occasioned the physical battles of the American Civil War.” [20])。「戦い」の場から締め出されてきたディキンスンが敢えて父をモデルにした詩を書くだろうか。この詩に相応しいのはむしろ詩人ディキンスンの姿である。実際の戦闘では、兵士たちの肉体 (“body”) が戦場でお互いに殺し合う。しかし、この詩は、表舞台には出ることのない (“Nor History - record it -”)、報道されることのない (“No News of it is had abroad -”) 内なる「肉体を持たない戦い」 (“Bodiless Campaign”) を、記録したものである。そうでありながら、この詩における戦いは、巷の戦闘のひとつ (“One / of all the Battles prevalent”) として数えており、しかも「はるかに大きなもの」 (“By far the Greater One”) であり、そこで戦うことの意義を伝えている。



しかし、表舞台で武器を手に勇敢に戦い、命を落とした「殉教者」に対して、罪悪感や羨望さえ抱く語り手が登場する詩もある。先に扱った “It feels a shame to be Alive -” (F 524)の詩もその一例である<sup>243</sup>。

It feels a shame to be Alive -  
When Men so brave - are dead -  
One envies the Distinguished Dust -  
Permitted - such a Head - (F 524)

生きていることが恥ずかしく思える  
とても勇敢な人々が 死んだときに  
そのような墓標が許された  
気高い亡骸を人は羨む

フェイス・バレットはこの詩を 1863 年 3 月のエイブラハム・リンカン(Abraham Lincoln) による人身保護令と結びつけて解釈している (“Drums off” 119)。クリスタン・ミラーも同様に「この詩では徴兵を避けるために支払われた「ドル紙幣」として生命がプラグマティズム的に測量されている」 (“Life is measured in this poem as the pragmatic ‘Dollars’ paid to avoid conscription.” [“Pondering ‘Liberty’” 57]) と述べ、徴兵を避けて人々が払った代金を踏まえて解釈する。

歴史的背景に加えて私が注目したいのは、命を捧げる人々に対して語り手が抱く引け目(“shame”) や羨望 (“envy”)である。一人称複数形 (“we”) は非戦闘員の女性たちとしても解釈でき、国家の危機にあっても戦場で戦えず、不甲斐無く思いながら、家でただ案じて待つしかない (“as we wait”)。戦いで命を捧げる者たちと、家で案じつつ生きる者たちの対比は、最初の連での “Alive” と “dead” の対比、そして最終連での “live” と “die” の対比で繰り返される。実際に戦場で戦う行動を執ることと、家にいるしかないもどかしさを抱く、このふたつの立場

---

<sup>243</sup> クリスタン・ミラーはこの詩の註として、フェイス・バレットと同じく歴史的背景を付している——「ディキンソンは 1864 年 3 月の北軍徴兵令に言及しているかもしれない。それは 7 月にニューヨークにおける暴動を引き起こした。招集兵は身代わりの代金を支払うことができた。オースティン・ディキンソンやアマスト出身の他の者たちも翌年 1864 年にその手続きを取った。エマソンも類似したメタファーを「ボストン賛歌」に用いている——奴隷所有者が『自分の犠牲者を質入れにいく』 (“ED may also allude to the March 1863 Union draft law, which caused riots in New York City in July; draftees could pay a substitute to take their place, as AD and others from Amherst did the following year, in 1864. Emerson used a similar metaphor in ‘The Boston Hymn’: the slave owner ‘goes in pawn to his victim’ (*Atlantic Monthly*, Feb. 1863).” [*Emily Dickinson’s Poems* 760n.233]”。

の開きは外面的には大きい。

しかし、行動した結果、戦場に倒れ、「殉教者」となる空虚さも暗示している。冒頭連の“Distinguished Dust”は、ふたつの語が大文字で表され、名誉ある死が羨望の的となりながらも、死んでしまえば所詮は“Dust”でしかない虚しさも“D”の頭韻で響く。戦争の時代、アクティヴィストとして行動する男性たちに囲まれたディキンソンは、自分自身の存在の意味について考えたに違いない。そんな彼女が、詩を書くことの意義を手繰り寄せて書いた詩として“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665) を読みたい。その際、“martyr”について書かれていた先の“Through the Straight Pass of Suffering” (F187) の詩の延長線上に置く<sup>244</sup>。“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665) は 1863 年に清書されたものと推定されている。

The Martyr Poets - did not tell -  
But wrought their Pang in syllable -  
That when their mortal name be numb -  
Their mortal fate - encourage Some -  
The Martyr Painters - never spoke -  
Bequeathing - rather - to their Work -  
That when their conscious fingers cease -  
Some seek in Art - the Art of Peace - (F 665)

殉教詩人たちは 語らなかつた

---

<sup>244</sup> ベッツィ・アーキラ(Betsy Erkkila)の“Dickinson and the Art of Politics”は、政治との関わりからディキンソンを捉えた先駆的な論として大いに示唆的である。ジャクソニアン・デモクラシーを背景に政治の権力図が変遷する時代における、父エドワードの政治的斜陽を説明する。父の立場を把握する娘エミリが、女性ゆえに市民権、政治的参加から締め出された立場にあり、それでもなお特権階級の女性として“upper-class female voice”を一部の選ばれたグループに送っていたとアーキラは分析する。またディキンソンの戦争中の詩作をいわば「審美的代替」(“aesthetic substitution” [“Art of Politics” 156])とも解釈する。確かにディキンソン家の社会的地位、そして兄オースティンと妹エミリとの「政治的」存在感の有無の対照性は本論でも先述した。しかし、私自身がアーキラと異なるのは、ディキンソンが想定していたとする読者層についてである。アーキラは「家族、友人、その他社会的・文化的に卓越した人物たちからなる秘密のグループ」(“a select group of family, friends, and other socially and culturally prominent figures among her contemporaries” [“Art of Politics” 144])と解釈する。第3章で論じたように、ディキンソンが同時代の読者と共有することを差し控えた詩は、未来の読者をも想定していた(この点はハベガーも言及している [409])。同時代の政治的・社会的な背景だけで論じ切ろうとするアーキラの解釈と私が異なるのは、時代を越えて詩人としての声を届けようとする側面も視野に入れていることである。

自分たちの苦悩を綴って記した  
この世の名声が感覚を無くすとき  
この世の運命が 誰かを励ますようにと  
殉教画家たちは 話さなかった  
むしろ後世へと 作品に託した  
その意識ある指が止まるとき  
誰かが芸術に 平和の術を求めるようにと

“Martyr Poets”（「殉教詩人たち」）は自身の苦悩について声を大にして主張する代わりに、詩の言葉に思いを託す。ここで詩人と画家は表現者としてほぼ同義で用いられている。シーラ・ウォルスキー(Shira Wolosky)は対比の要素——“public / private”, “selfhood / self-denial”, “declare / deny”, “assertion / renunciation”, “utterance / revocation”, “assertion / denial” and “claim / disclaim”——を挙げ、二項対立の狭間に立つ詩人の姿を見出す (“Public and Private” 125)。なるほど“not”, “but”, “not”, “rather”と進む詩行は肯定と否定の反復がなされ、対極的なベクトルが目立つ。

先述してきたように、“martyr”の語を、人々に「目撃・立ち合い」(“witness”)をさせるといふ語義に則して捉えるならば、人々の前で声をださずして“martyr”とはならない。そこで、私はこの詩の時間軸を意識したい。“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665)の詩では時間に関わる単語が目立つ。そもそも語り手は過去を「現在」の視点から振り返り、詩人の行いを記している。2度出てくる“mortal”の語は、人として死すべき運命、現世に縛られていることを示す。同時代にあって、多くの「殉教者たち」が戦況や訃報に登場する。そうした人々を詩に書き、次々と発表する詩人たちもいる。だが、“The Martyr Poets”は未来の読者に向けて言葉を託すのだ (“bequeathing”)。複数形の「殉教詩人たち」にはディキンソン自身の姿も入るだろう。殉教詩人たちは“mortal”な身でありながら、“immortal”なメッセージを残すことに専念する<sup>245</sup>。ウォルスキーはこの詩の“martyrdom”を「自己否定としての自我」(“selfhood as self-denial” [“Public and Private” 125])と見据えているが、ウォルスキーが指摘する出版の拒絶のメッセージよりは、むしろ、未来の読者を意識する言葉が強く響く<sup>246</sup>。

---

<sup>245</sup> 第1章ですでに引用した詩“Essential Oils - are wrung -” (F 772)もまた詩人の“mortal”な面と詩の“immortality”な面を書いた詩人論・詩論として解釈できる。

<sup>246</sup> ウォルスキーは出版の拒否を次のように解釈する——「自分の詩を手紙で回覧したり、草稿集で保管しながらも、ディキンソンは出版を拒否して劇的に制定した。この否定には恐ろしいほどの重荷があり、詩が切に訴える聴衆からは容赦なく分離している」

「殉教者」ブラウンについてソローは次のように賞賛している——「揺らぐことのない目的に関しては、自分自身よりも大きな経験と知恵による以外は思いとどまるはことない。気まぐれや衝動にもなびかず、人生の目的を果たす」(“Of unwavering purposes, not to be dissuaded but by an experience and wisdom greater than his own. Not yielding to a whim or transient impulse, but carrying out the purpose of a life.” [Journal 12:420])。「行動」を重視するソローならではの言葉である<sup>247</sup>。ディキンソンの“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665) の詩では、語り手は未来の読者を意識し、詩を綴る「行動」をとる。その意味で、詩人自身は未来の、未知の読者に対する「殉教者」となる。詩人論ととれる詩のひとつ“The Poets light but Lamps -” (F 930) でもやはり「詩人たち自身は 姿を消す」(“Themselves - go out -”)。種蒔きに関わる語(“disseminate”)は明らかに、先述した、戦死者を種に見立てる比喩とは異なる——“Each Age a Lens / disseminate their / Circumference -” (「それぞれの時代は レンズとなり / それぞれの円周を / 蒔き広める」)。ここで播かれるのは、「殉教者」の体ではなく、言葉である。“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665)の詩に戻るならば、“Poets,” “Pang,” “Painters” と“p”の頭韻を響かせながら “Pang” が詩人や画家の手を経てへて最終的に “Peace”へと到達する。

ディキンソンの声を特権階級の女性の声とみなし、特に社会的・文化的にエリートの友人たちに向けられた声としてベッツィ・アーキラは解釈する(“Art of Politics” 144)。ジェフリー・サンボーン(Geoffrey Sanborn) もまたディキンソンが、社会的に下層にいた女性たちに無頓着であったと示唆する。ディキンソン家で家事を担当したアイルランド人マーガレット・マハー (Margaret Maher) の存在があつてこそディキンソンの詩作が可能になった事実は否めない<sup>248</sup>。また、ディキンソンが詩を送ったのがボウルズ、ヒギンソン、ホランド夫妻など、いわ

---

(“Dickinson dramatically enacted in her own refusals to publish, even while circulating and preserving her poems in letters and fascicles. There is a terrible burden in these denials, a severe disjunction from the audience the poem yearningly addresses.” [“Public and Private” 125])。ただし、ウォルスキーは、過去形から現在形(或いは未来)への時制の変化を考慮しておらず、現時点での出版の拒否に言及している。

<sup>247</sup> マイケル・ギルモア (Michael T. Gilmore) はソローが重視する “doer” と “sayer” の両面について、戦争前の時代を背景に説明している(62-63)。

<sup>248</sup> アイフ・マレイ (Aife Murray) は、アイルランド移民のマーガレット・マハー (Margaret Maher) がディキンソン家で働いた時期とディキンソンの詩作が充実した時期が合致していることに注目し、マーガレットの家事の助けが創作に大いに貢献したものと考察している。“Miss Margaret’s Emily Dickinson”を参照。

ば社会的に著名人であったのは確かである。だが、先述したとおり、苦悩を扱った詩、戦争と関わりがある詩を送ることは差し控えた事実がある。“The Martyr Poets - did not tell -” (F 665) もそのひとつであり、送られた形跡はない。戦場で倒れた「殉教者たち」とは明らかに異なる。戦争の時代に、声を大にして「戦争詩」を公表した同時代の詩人たちとも異なる。歴史に記されることない「苦しみ」(“pang”)を、その場限りの「戦争詩」ではなく、永遠の言葉(詩)に「針 / ペン」(“needle”)で仕立て、未来へ届けることを詩人の使命としたのである。

戦争の時代における、このような「殉教者」を、“I died for Beauty - but was scarce” (F 448) の詩の中に読み取ることは可能だろう<sup>249</sup>。

I died for Beauty - but was scarce  
Adjusted in the Tomb  
When One who died for Truth, was lain  
In an adjoining Room - (F 448)

わたしは美のために死んだ けれども  
墓に納められてまもなく  
真のために死んだ者が  
隣の部屋に横たえられた

清書されたのが 1862 年であることを考慮すると、実際に戦いに赴いた「殉教者」に対する意識があるといえる。“die for” という表現には、戦争の時代に使われた常套句を再利用した感もある。ヴェンドラーも、「殉教者」の姿をここに読み込む。そして戦死との違いを指摘する——『「私は美のために死んだ[失敗した]』という用語は、行動を表す強変化動詞の代わりに、不行動を表す弱変化動詞を用いる。『私は美のために戦った』や『私は美のために意見を述べた』とは異なる」 (“The idiom ‘I died [failed] for Beauty’ substitutes a weak verb of nonaction for a strong verb of action, as in ‘I fought for Beauty’ or ‘I spoke for Beauty.’” [217])<sup>250</sup>。デ

<sup>249</sup> この詩はジョン・キーツ(John Keats) の “Ode on a Grecian Urn” と関連づけられることが多い。だが、クリスタン・ミラーはエリザベス・ブラウニング (Elizabeth Browning) の詩との符合を指摘する—— “These were poets true / Who died for Beauty, as martyrs do / For truth - the ends being scarcely two.” (“正しき詩人たちがいる / 美のために死んだ人々であり、殉教者たちが / 真のために死んだように - その目指すところはほとんど同じだ”)。ミラーはスーザン所蔵のブラウニング詩集にディキンソンの手によると思われる書き入れがあると指摘している (*Emily Dickinson’s Poems* 757-758n.204)。

<sup>250</sup> 厳密には、ここでヴェンドラーは、戦闘における死 (“He died for God and Country”)

イキンスンもまた、同時代の人々に詩を送らないという、いわば「不行動」によって、「殉教者」としての役目を果たしていたのである。ジョン・ブラウンやフレイザー・スターンたちは、「真理」のために武器を手に戦いに出掛け、時代の「殉教者」として歴史にその名が刻まれた。「殉教詩人」は「美」のために、未来へと詩を遺したのである。時代に埋もれ、消えていった声なき声を、詩人は掬い上げて記す。そのメッセージは、揺れ——この世を生きるうえで誰もが経験する迷い、不安、ためらい、疑念、嫉妬——を経ながら綴られ、場所と時代の枠を超えて、未来の読者の許に届けられる。

---

と、殉教 (“She died for her faith”) を区別している。これまで述べてきたように、私自身は「殉教」に「戦死者」も含める点で、ヴェンドラーの区別の仕方とは異なる。

## 第7章 言葉の軌跡

And so around the Words I went -  
Of meeting them - afraid - (F 719)

### 序節

南北戦争の時期に書かれたエミリ・ディキンソンの詩に、明らかな変化を認めることができるのだろうか。フランクリン版に記された創作年は、詩が清書された年の推定でしかなく、正確な詩作の時期や順序がわからない場合が多い。そのため創作の微妙な変化を確認することは難しい。しかし、本論の第1章から6章において扱ってきた戦いに関わる詩を振り返るとき、戦前に書かれたものと、戦中に書かれたものとは明らかに違いがある。また、詩の記録や回覧の仕方にも、戦争前と戦争中とは変化が見られる。これらの変化を頼りに、戦争の時代がディキンソンの詩に与えた影響を跡付けたい。

### 第1節 苦悩の記録

ヒギンソンに書いた手紙によれば、1861年の秋頃から、ディキンソンは何らかの深い苦悩を抱いていた (“I had a terror - since September -”[L 261])。それが恋愛によるものなのか、存在にまつわる不安なのか、戦争と直接関わるものなのか、それとも戦争の余波で生じた苦悩なのかはわからない。しかしまさにこの時期に、ディキンソンが心のうちで苦しみの諸相を詩のなかに次々と象っていたことは重要である。冬の午後に射す光を見て心の奥深くに疼きを覚える “There’s a certain Slant of light,” (F 320), 自分自身の葬式を語る “I felt a Funeral, in my Brain,” (F 340), 亡霊に遭遇し、大きく動揺する “’Tis so appalling - it exhilarates -” (F 341), 精神的な衝撃の後、視界が真っ白になる “The Soul has Bandaged moments -” (F 360), 衝撃の後に心と体が分離する感覚を覚える “After great pain, a formal feeling comes -” (F 372), 過ぎた苦しみを振り返る “It ceased to hurt me, though so slow” (F 421), 軍隊用語で苦悩を描く “One Anguish - in a Crowd -” (F 527) などの苦悩の主題の詩を書いている。

心の内なる痛みや疼きとじっくり向き合う詩を書きながらも、自身の内面に埋没してしまうことはない。身の回りで起きている、社会の出来事にも目を向け、その眼差しが、戦争の時代の様々な局面を取り上げ、衝撃や恐怖、残された者の罪悪感、死者に対する思い、戦闘の最中や戦闘後に死を待つ兵士の身と

なり、その刹那を描く。こうした詩では、戦前の詩に特徴的であった、勝敗にまつわる視点、敗者に歩み寄る姿勢はほとんど見られない。勝敗に関わる言葉があっても、勝敗自体は主題ではない<sup>251</sup> ——勝利が訪れた時にはもはや死を待つばかりで、神の儉約ぶりに不満をぶつける“Victory comes late” (F 195)、奈落の底に危うく落ちるところであった危機の瞬間を振り返る “That after Horror - that 'twas us -” (F 243)、訃報を聞き、その衝撃にうろたえる “It dont sound so terrible - quite - as it did -” (F 384)、戦死した青年と母親の天国での再会を思い浮かべる “When I was small, a Woman Died -” (F 518)、生きていることの罪悪感を抱く “If feels a shame to be Alive -” (F 524)、戦闘の最中、飛び交う銃弾の中で死を分析する “If any sink, assure that this, now standing -” (F 616)、戦場に折り重なる亡骸を見つめる “My Portion is Defeat - today -” (F 704)。ここに並べた詩には北部支持の党派的な態度は見られない<sup>252</sup>。戦争の大義を説く言葉もまったくない。ましてや英雄的な行為や自己犠牲的な美談は皆無である。

このような詩を作りためながら、ディキンソンは戦争の時代に詩人としての意義を探っていたと考えられる。第 6 章でも言及した詩 “The Battle fought between the Soul” (F 629) は、その通過点として捉えることができる。戦中に書かれたこの詩において心の内面の戦いが歌われている。しかしその戦いの状況は新聞や雑誌で伝えられはしない (“No News of it is had abroad -”)。また歴史に残るものでもない (“Nor History - record it -”)。新聞や雑誌が扱わぬ、人々が気付かぬ心の内面を掬い上げることを詩人の使命としている<sup>253</sup>。

その意味では、同時代のウォルト・ホイットマン(Walt Whitman) やハーマン・メルヴィル (Herman Melville) とは、戦争の主題の取り上げ方が異なる。ホイッ

---

<sup>251</sup> “Triumph - may be of several kinds -” (F 680) は、“Success is counted sweetest” (F 328) のような勝敗の立場の違いではなく、「勝利」の種類について吟味する詩である。

<sup>252</sup> エライザ・リチャーズ (Eliza Richards) は、当時、出版された詩のほとんどが、南北どちらの側に着くかを明言していたのに対して、ディキンソンの詩の語り手は党派的な立場を語っていないことを指摘している (“How News Must Feel When Travelling” 169)。クリスタン・ミラー(Cristanne Miller) は、北部支持の基盤で用いられた修辞を、ディキンソンが詩において共有しており、全面的に中立とはいえないことを示唆している (Reading 156)。

<sup>253</sup> エライザ・リチャーズは、共同通信社(the Associated Press) などによる電報を用いた通信網の発達を背景に、戦争に関わるディキンソンの詩を解釈している。リチャーズは、戦場での他人の経験を読者はニュースで十分に理解できないことを、ディキンソンが詩において読者に警告していると解釈する (“How News Must Feel When Traveling” 164)。ニュースの重要性など、リチャーズの論に負うところは大きい。だが、リチャーズは、ディキンソンの意図する「読者」をどのように捉えているのかを一切明示していない。



トマンとメルヴィルは共に、終戦後に相次いで戦争詩集を出版した。ホイットマンの *Drum-Taps* は 1865 年に、そしてメルヴィルの *Battle-Pieces and Aspects of the War* は 1866 年に出た<sup>254</sup>。どちらも戦争中の具体的な出来事を詩に反映させている。ホイットマンの詩のタイトルを見るならば、年月、場面や出来事が発端となって詩が作られている——まさに戦争開始の 1861 年をタイトルにした“Eighteen Sixty-One” (236-237), 太鼓を打ち鳴らし、人々を戦いへと誘う“Beat! Beat! Drums!” (237-238), 独立戦争を経験した老人の話を聞く“The Centenarian’s Story”(247-251), 若い兵士の通夜を歌う“Vigil Strange I kept on the Field One Night”(Leaves 255-256), 敗退の途中、野戦病院となった教会に立ち寄り、目撃した惨状を描く“A March in the Ranks Hard-Prest, and the Road Unknown”(256-257), 野営地で明け方に見た死体について語る“A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim” (257),そして負傷者や病人の看護にあたった経験を語る“The Wound-Dresser”(259-261)などがある。

ホイットマンの詩集が「戦争の真只中でしたためられた本」(“a book penned amidst the war” [Marrs 27]) であるならば、メルヴィルの詩は、戦争を振り返る回想として時系列に並ぶ。ジョン・ブラウン (John Brown) の処刑を描いた“The Portent (1859)” から始まり(ただし、目次にこのタイトルは記載されていない)、ピクニック気分若くは若い兵士達が戦闘に出掛け、悲惨な結果に終わる“The March into Virginia, Ending in the First Manassas (July 1861)” (22-23), 出征する若い兵士達を見送る“Ball’s Bluff. A reverie. (October, 1861)” (28-29), 日曜日に教会のそばで行われた戦闘の後、負傷者や瀕死の兵士の上を燕が飛ぶ“Shiloh, A requiem. (April, 1862)” (63)。これらの詩のタイトルには、戦いの進行に従って日付も添えられている。開戦当時、両者とも 41 歳、徴兵に差し掛かる年齢であったが従軍しなかった。だが、それぞれ戦争と深く関わり、ホイットマンは、病院を巡り、兵士たちを励まし続けた。メルヴィルは次々と届く戦況を読みあさり、軍人であった従弟のついでに前線も見学している<sup>255</sup>。ふたりの詩人は、歴史の表舞台の戦争と向き合う。

だが、ディキンソンは新聞や雑誌を熱心に読みつつも、その詩の語り手は戦

---

<sup>254</sup> メルヴィルとホイットマンの詩集については次の版を使用。メルヴィルは *Battle-Pieces and Aspects of the War: Civil War Poems*. 1866. New York: Herper & Brothers, 1995. ホイットマンは *Leaves of Grass and Other Writings*. Ed. Michael Moon. New York: Norton, 2002. 詩のタイトルの後のカッコ内に頁を記す。

<sup>255</sup> スタントン・ガーナー(Stanton Garner)著 *The Civil War World of Herman Melville* を参照。特にジョン・シングルトン・モズビー(John Singleton Mosby) 追跡の部分(304-323)を参照。

況とは異なる「速報」にも耳を傾けた。第1章で扱った“The only news I know” (F 820) の詩もそうしたこだわりを表す詩である。ヒギンズンに送られた第1連のみを引用する(L 290)。

The only News I know  
Is Bulletins all day  
From Immortality (F 820)

わたしが知る報せは  
不滅から終日届く  
報告だけ

ディキンズン家で購読していた『スプリングフィールド・リパブリカン』(*Springfield Republican*) を始めとする様々な新聞や雑誌、友人や親戚との文通、或いはアマストの人々の噂話から「ニュース」をディキンズンは日々耳にしていた。だが、そうした種類のニュースとは異なる「報せ」をこの詩では取り上げている<sup>256</sup>。戦争の時代における“Bulletins”とは、まず「戦況報告」の意味で使われたが、この詩では敢えてこの言葉を用いながらも「戦況報告」ではなく、別の類の「速報」という意味で使っている。ここで「不滅」(“Immortality”)とは、身の回りや社会で実際に起きていることに対して、目に見えない世界、あるいは目に見えない形而上的な世界を指している。

この詩を付した手紙をヒギンズンに送った1864年6月に、ディキンズンは眼科治療のためにボストンでノアクロス姉妹と共に過ごしていた。姉妹の下宿は商業地区の繁華街に面しており、アマストよりもさらに身近に社会の動向を察知する場所にいたことになる<sup>257</sup>。1864年11月8日リンカン再選を祝う行進についてスーザン宛の手紙に書いている——「沈黙の男[リンカン]のために太鼓が鳴り続けています」(“The Drums keep on for the still Man” [L 297])<sup>258</sup>。ただし、第1

---

<sup>256</sup> ジョーン・カークビー (Joan Kirkby) はディキンズンが生きた半世紀(1830年から1886年)が、まさしくアメリカの雑誌が築き上げられた時代と重複していると主張する。そして、ディキンズン家が購読していた雑誌・新聞として特に次の例を取り上げている——*Springfield Republican, Hampshire and Franklin Express* (後の *Amherst Record*), *Harper's* (“Periodical reading”)

<sup>257</sup> ボストン滞在中の地区の特徴については、第1章の註51で先述した鶴野ひろこ著 *Emily Dickinson Visits Boston* を参照。

<sup>258</sup> ジョンソンの註によれば、この日、「ケンブリッジのリンカンクラブが昨晚松明を灯

章で先述したように、ヒギンズンに対しては、常に「詩人」としての態度を通しており、ボストンで不自由な生活を送りながら詩作を続けていることを伝えている——「牢獄で仕事をして、お客様のおもてなしをしています」(“I work in my Prison, and make Guests for myself -” [L 290])。医者に鉛筆を取り上げられてもなお詩を書いていることを伝えている。そして現実に繰り広げられている戦争報道とは異なる次元の「報せ」を強調している。

「報せ」に耳を傾ける主題の詩に、“The Birds reported form the South -” (F 780) がある。ここでは、南から吹く風、南からやって来た鳥たちから、便りがもたらされる<sup>259</sup>。第1連のみをここで引用する。

The Birds reported from the South -  
A News express to Me -  
A spicy Charge, My Little Posts -  
But I am deaf - Today - (F 780)

鳥たちは南の土地からやってきて報告した  
わたしに至急便を  
芳しい突撃、わたしの小さな急使たち  
でもわたしは耳が聞えない 今日には特別に

鳥たちの報せは季節の移り変わりを伝えるものだ。だが、語り手は夏の終わりを受け容れることができない。そして、鳥たちがもたらす「至急便」に背を向ける。第1連最終行の代案として“you must go away”（「あっちへ行きなさい」）、そして第2連最終行の代案には“harass Me - no More -”（「これ以上私を悩ませないで」）が書き込まれており、小さな鳥や野の花々からのメッセージを語り手は繰り返し撥ね付けている。過ぎ行（逝）く夏を弔う“a Mourner”（「会葬者」）として、目の前の季節の変化だけでなく、ふとした空気の微妙な気配に、風のそよぎに、光の一瞬の煌めきに、目に見えぬ何かしらの変化を語り手は感じ取っ

---

した行進をおこない、サミュエル・フーパー氏を招いて演説をしてもらった」(“The Lincoln Clubs of Cambridge had a torchlight procession last evening, and invited Hon. Samuel Hooper, and were addressed by that gentleman.” [436]) とあり、ここで言及されている太鼓(“drums”)はリンカン当選を祝って叩かれたものとジョンソンは推測している。

<sup>259</sup>この詩は日本エミリ・ディキンズン学会首都圏地区研究会（2016年3月5日）において取り上げられ、戦争を背景に読む機会を得た。

たのかもしれない。それを察知させる「報告」は、詩の言葉が紡ぎだされていくきっかけになる。ディキンソンは1862年6月7日の手紙でヒギンソンにこう伝えている——「果樹園に突然射す光、あるいは風のなかの新しい様式に出会い、わたしの心の注意力が波立ち 麻痺を覚えました、ここで詩作がまさに楽にしてくれるのです」(“a sudden light on Orchards, or a new fashion in the wind troubled my attention - I felt a palsy, here - the Verses just relieve -” [L 265])。冬の日午後、一筋の光を目にして心の疼きを覚える“*There’s a certain Slant of light,*” (F 320)もそうして生まれた詩であろう。見慣れた情景に異質な要素を感じ取る。はっきりと確かめられぬものに息を殺し、五感を研ぎ澄ますのである。

ただし、この“*The Birds reported from the South*” (F 780) の詩では、“charge” (攻撃), “posts” (急使) など軍隊と関わる単語が使われており、戦場を背景に読むことができる。コーディ・マーズ(Coddy Marrs) は、戦争の時期に作られたディキンソンの詩において、風は時として戦地に関わる存在にもなると述べている。マーズの指摘を受けて、戦場から吹く風をここで想定して読むこともできる<sup>260</sup>。この詩はフランクリンの推定によると1863年に清書されており、同年7月にはゲティスバーグの激戦があった。鳥たちから伝えられるニュースは、新聞などマス・メディアが不特定多数の人々に対して大量に流した情報とは異なる。無名の兵士がひとりで最後に発した言葉の報告かもしれない。或いは死の瞬間にふと思いつかべた故郷の風景かもしれない。語り手は、自然のなかに不穏な気配を感じて怯む。受け容れたくない真実を突き付けてくることを察しているのかもしれない。陽射しの加減で風景の印象が変化するように、この詩は読み方によっていくつもの物語を許容する。

“*The Morning after Wo -*” (F 398) では、鳥たちの「報告」は、重い罫りとなって響く。ここで第3連のみを引用する。

The Birds declaim their Tunes -  
Pronouncing every word  
Like Hammers - Did they know they fell  
Like Litanies of Lead - (F 398)

鳥たちは自分たちの節を暗唱する  
ひとことずつ発音される言葉は

<sup>260</sup> コーディ・マーズは南北戦争時に書かれた他の詩人の詩と同様に、ディキンソンの詩においても風を戦争と結びつけている——「比喩的に戦争を風と結びつけることで、ディキンソンは自分の詩を、天気にかかわる他の多くの南北戦争詩に結びつけている」(“By figuratively linking the war to the wind, Dickinson connects her own verse to many other Civil War poems that linger on the weather.” [138]).

金槌のようだ 鳥たちは知っていたのだろうか  
まるで鉛の連禱のようにそれらが落ちるのを

鳥の囀りは心を波立たせ、耳障りでさえある。冒頭行 “The Morning after Wo -” は、語り手にとって何らかの悲しみがあつたことを推測させる。“morning” の音は “mourning” の音も響かせ、知人もしくは親しい人の死など、誰かの訃報を想像させる。しかも「連禱」 (“litany”) は、司祭が唱える祈りを会衆が唱和する形式であり、繰り返して唱えられる。金属音のような鳴き声が果てしなく、まとわりつくように繰り返され、それを耳にする者の心を圧迫する。金槌の音は、棺桶の蓋を打ち付ける音も連想させる。

何らかの苦悩を抱える語り手が、鳥の囀りを耳にして、いよいよ気持ちが重くなる場面で「鉛の連禱」 (“Litanies of Lead”) は、第2章で引用したサミュエル・ボウルズ (Samuel Bwles)宛ての手紙の言葉「ふたつみつつの鉛の言葉が深く落ち、重くのしかかるのです」 (“Two or three words of lead – that dropped so deep, they keep weighing.” [L 256]) と結びつけることもできるだろう。フレイザー・スターンズ (Frazer Stearns) の訃報が心に重くのしかかるのを鉛の重さに喩えた箇所である。或いは、逆に、それまで意識せずに抱えていた苦悩が、「報告」に接して初めて、「悲哀」 (“Woe”) として浮上し、はっきりと認識されたのかもしれない。何らかの変化の気づきから生み出された詩なのである。

## 第2節 詩の記録と回覧の変化

1858年頃からディキンソンは詩を清書し、糸で綴じた草稿集 (ファシクルズ) を作成し始めた。1864年の段階で第40番目に到達し、その作業を止めている。そのために、批評家たちは1864年を、ディキンソンの創作におけるひとつの区切りと見做している。ポール・クラムベリィ (Paul Crumbley) は40番目のファシクルについて、「内省的な精神状態」 (“Dickinson’s reflective state of mind” [“This was my finallest occasion” 194]) で書かれた詩が集められていると指摘している<sup>261</sup>。アルフレッド・ハベガー (Alfred Habegger) もまた、1864年を詩人ディキンソンの移行期として捉えている——「1864年に我々が見るようになる詩は、若さゆえの奮闘と初期の成熟期が終わることを感知した記録である」 (“In 1864 we begin to see pomes registering a sense that the struggles of youth and early maturity are over.”

<sup>261</sup> 第40番目のファシクルは、最後であるため、多くの批評家たちが注目しており、クリスタン・ミラーもそのひとりである (*Reading* 180)。

[“This was my finallest occasion” 482]).これ以降、ディキンソンは、糸で綴じない「セット」(“set”)に詩を書くようになる<sup>262</sup>。1865年以降は、清書自体を止め、代わりに紙片に詩を記録する方法にさらに変化する(Miller, *Reading* 187)<sup>263</sup>。

ここで興味深いのは、この頃にやはり詩の回覧の割合も変化することである。詩の回覧については第3章で述べたが、クリスタン・ミラーは、書いた詩を送る割合の変化を、特に、スーザンが受け取り手の場合に注目して分析している。ミラーによれば、1858年から59年には、書いた詩の25パーセントがスーザンに渡された。そして1860年にはその割合は37パーセントに増えている。しかし、1861年から65年の間になると8から17パーセントの間になり、そのほとんどの年が10パーセントになる。そして1866年からはさらに少なくなっていく(*Reading* 255 n.19)。この数字を見ると、生涯で最も旺盛に詩作していた戦争中において、回覧の割合が極端に少なくなっていることがわかる。

この変化は何を意味するのだろうか。先にも述べたように、送られなかった詩には、戦争に関わる詩や苦悩の詩が含まれていた。戦争の時代にディキンソンが詩人であることを意識し始め、何を書き、追究していきたいのかを極めていくにつれて、回覧の変化に繋がったと考えられる。そうした意識を持つようになったのが、戦争の時代であったことは、決して偶然の巡り合せではないはずだ。回覧することよりも、書きたいものを極めることを優先し、苦しみの諸

---

<sup>262</sup> クリスタン・ミラー編 *Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them* (2016) は、タイトルが示すように、ディキンソンが自分の詩を保存した方法を反映した編集になっている。ミラーはファシクルの重要性についてインタビューで次のように語っている——「ファシクルはディキンソンが私たちに残した唯一最重要な作品です。彼女は私たちに詩の実際の冊子を残しました。時間をかけて新しいきれいな便箋に記入し、それを冊子の形に綴じたものです。写し、綴じ、保存するというプロジェクトは私には途方もなく思えます。ディキンソン自身が自分の作品をどのように保存して扱ったかを理解するためには、ファシクルからまず着手するべきです」(“The fascicles are the single most important work that Dickinson left us. She left us actual booklets of poetry that she took a lot of time to inscribe onto clean stationary and then to bind into booklets. That project of copying, binding, and preserving is quite extraordinary to me. In order to get at how Dickinson herself preserved and handled her work, one needs to begin with the fascicles.” [“An Interview” 13]).

<sup>263</sup> この時期に糸で綴じる作業を止めたことに関しては、外的な要因も推論することができる。眼科治療のため、ディキンソンは長期間アマストを離れているからだ。ディキンソンは少なくとも3回ボストンに出掛けている。1回目は1864年2月4日にボストンの眼科診察のためである(L 287)。この時の滞在期間については不明であるが、それほど長期ではなかったと思われる。2回目は4月から11月21日までの7か月間(L 287, L 297)。そして3回目が1865年4月から10月までの6か月間である(Leyda II 98, L 302, L 306, L 308, L 309, L 310)。ボストン長期滞在とファシクル作成の停止との相互関係について論じた先行研究はないが、戦争末期にアマストを離れてボストンに長期間滞在していた事実は重要であろう。

相を、そして戦いにまつわる、ひとの意識の極限の領域を、いくつもの詩に書きとめながら、詩人としての内面を次第に深めていった。クリスタン・ミラーはまた、1860年代に書かれた詩の傾向として、内省的な詩が回覧されていないことを指摘している<sup>264</sup>。詩人として追究すべき主題を掴み始めたことと、送られない詩が増えていった事実が結びついたものと考えられる。

### 第3節 詩人の挑戦

“My business is circumference”（「私の仕事は周縁です」[L 268]）——ヒギンソンにこのように告げたディキンソンは、中心（“Center”）よりも周縁（“Circumference”）を、「直接」（“direct”）よりも「斜め」（“oblique”）の位置を取る。衝撃が大きすぎる場合は、まともに向き合わずにはずらし（“Turn it, a little -” [F 384]）、あまりにも強烈な対象とは距離をとる（“Tell all the truth but tell it slant -” [F 1263]）。一方で、曖昧模糊とした抽象的な苦しみを、何とか把握しようとする試みが1864年に書かれた“A nearness to Tremendousness”（F 824）である<sup>265</sup>。

A nearness to Tremendousness -  
An Agony procures -  
Affliction ranges Boundlessness -  
Vicinity to Laws

Contentment's quiet Suburb -  
Affliction cannot stay  
In Acres - It's Location  
Is Illocality -

---

<sup>264</sup> 「1860年代前半に書かれた、認識論的、形而上的に、感情的に強烈な詩の多くは、誰にも送られておらず、彼女が回覧した半分が、短い詩である。1862年頃からは、ディキンソンは度々、詩の一部だけを回覧した」（“[M]any of her epistemologically, metaphysically, and emotionally most intense poems of the early 1860s were sent to no one and around half the poems she circulated were brief. Staring in around 1862, Dickinson also occasionally circulated only part of a poem.” [Reading 187]）。

<sup>265</sup> この詩はヒギンソンとメイベル・トッド(Mabel Loomist Todd) が1890年の第一詩集に向けて、ディキンソンの詩を振り分ける作業をした際に、意味が不明瞭なために出版には適さないと判断した詩(Class C)のひとつである(Bingham 424)。

途方もないものへの近さを  
苦悶はもたらす  
苦痛は無限をめぐる  
法則の近辺には

満足の静かな郊外がある  
苦痛は面積の単位にとどまることは  
できない その所在は  
無所在なのだから

何とも意味を掴みにくい詩である。この詩を南北戦争の空前の動乱とそれによって生み出される数々の悲劇を扱った詩の延長線上に置いてみるとどうだろうか。これまで経験したことのないほどの「苦悶」(“Agony”) や「苦痛」 (“Affliction”) によって、捉えどころのない「途方もないもの」 (“Tremendousness”) や「無限」 (“Boundlessness”) にぶつかる。20 世紀の告白詩人たちならば、具体的なイメージで、語り手の感情を注ぎ込んでいくところだが、ディキンソンの場合、「苦悶」は具体的なイメージでは追いつかぬほど、理解を超えたものになっている。感情自体が、それを抱える人から分離して、大きく膨張して広がっていったかの印象を与える。

それにしてもやはり意味は不明瞭だ。その原因は使われている語にあるだろう。この短い詩には空間と関わりのある語が多く見られる。第 1 連の 1 行目 “nearness”, 3 行目 “ranges”, “Boundlessness”, 4 行目 “Vicinity”, さらに第 2 連の 3 行目に “Acres” と “location”, そして最終行に “illocality” と 7 語ある。全部で 25 語からなるこの詩の 4 分の 1 強を占める語が、空間に関わる言葉である。また、動詞 3 語のうちの 2 語 “range” と “stay” が状態を表す語であるために、詩のなかで物語が展開するというよりは、むしろ漠とした気配が漂うだけである。また、圧縮した名詞的表現が非常に抽象的である。クリスタン・ミラーはディキンソンの詩法を論じる際に、この詩を多音節語の項目で取り上げ、多音節語およびラテン語起源の語が抽象的になりやすいため、語り手の置かれた状況が把握しにくくなると述べている (*Grammar* 41- 42)。

空間に関わる表現に加えて、この短い詩には、苦痛を表す語が繰り返し出てくる。第 1 連の 2 行目 “Agony”, 3 行目 “Affliction”, そして第 2 連の 2 行目に再び “Affliction” がある。何が原因の苦悶や苦痛なのかは全く触れられていない。その苦悶や苦痛によって「途方もないもの」 (“Tremendousness”) や「無限」 (“Boundlessness”) に近づく。それは死の恐れかもしれないし、或いは何か神聖な存在かもしれない。具体的なイメージや言葉では掴みきれない。せめて大き



さや輪郭を掴もうとしても、人間の距離の単位で計ることは到底不可能である。それでは何らかの法則にあてはめてみたらどうか。宗教であれ、法律であれ、人々の常識や道徳であれ、文法であれ、理解可能なカテゴリーにあてはめられるなら、心穏やかになる。例えば“*It dont sound so terrible - quite - as it did -*” (F 384)の詩においても、“*Put it Latin -*” とあるように、ラテン語の文法法則にあてはめることを勧めている。

そこで辿り着いた方法として、詩という「法則」で表現することが、その解決といえる。この詩自体は、漠とした苦悩を明確に描くことはしない。掴みきれない感覚や存在そのものを敢えて言葉にしようとする。冒頭の“*A Nearness to Tremendousness*”という極度に圧縮された表現に導かれて読み進めると、痛みを承知のうえで対象に対峙しようとする語り手の視線に出会う。遠巻きに見ているだけではない。法則の範囲内で安穩としているのでもない。囲いを越え、敢えて「途方もないもの」 (“*Tremendousness*”) を象ろうとする。これは、境界線のぎりぎりのところまで思考を押し進めて掴んだ言葉ともいえる。とはいえ、境界線の向こうにある、認識できない領域を語るために、社会の通念や常套句で語ることは決してない。

スーザン・ユハース(Suzanne Juhasz) はディキンソンの詩に見られる心理状態の描写の一例としてこの詩を取上げている。だが、ディキンソンを取り囲む当時の社会にはまったく言及していない(“*To make a prairie*” 21-22)。この詩が書かれた戦争の時代を意識することで、この詩における痛みの手応えを想像することができる。そのうえで最終行 “*illocality*” をどう解釈すべきだろうか。ディキンソンが愛用したウェブスターの辞書では、“*locality*” の第一義は“*existence in a place, or in a certain portion of space*”とあり、空間に場所を確保する、という意味である。“*A nearness to Tremendousness -*” (F 824)では、内なる「苦痛」を捉えようとして行き着いた先に「無所在」 (“*illocality*”) があり、否定形を用いず、あえて肯定の文脈でこの語を使っている<sup>266</sup>。所在がないのではなく、「無所在」 (“*illocality*”) が存在するという発想であり、ここに途方もなく把握しきれないものに近づこうとする、詩人の挑戦がある。いまだかつてない近代戦争の、目を覆うばかりの惨禍が続々と伝えられた時代に、「苦悩」を描く。とはいえこの感覚は、もはや、戦前に書いた “*Success is counted sweetest*” (F 112) に見られる、勝敗を描く

---

<sup>266</sup> ヒギンソンが『アトランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*)に掲載したエッセイ“*The Procession of the Flowers*” (1862年12月)においても“*locality*”の語が10回登場し、植物の生息地の意味で使われている。ディキンソン自身は“*locality*”という語を3篇の詩 “*The Drop, that wrestles in the Sea -*”(F 255), “*Unfulfilled to Observation -*”(F 839), “*It bloomed and dropt, a single Noon -*”(F 843)で使っており、最初の2篇は第一義の「存在」という意味であり、最後の1篇ではヒギンソンと同様に花の「生息地」として用いている。

段階を乗り越えている。それでいて観念的な方向へ流れてしまうことはない。とはいえ明確なイメージを提示することもできない。近づく——しかし、「隔たり」を認識する。時代に重くのしかかる、掴みどころのない気配を描こうとして行き着いたのが、この詩“A nearness to Tremendousness -” (F 824)の抽象的な言葉と、極度に圧縮された表現の組み合わせなのである。この組み合わせが持つ許容力が、捉え難い対象を追究する詩人を支えているのである。

## 結論

トマス・ウェントワース・ヒギンソン(Thomas Wentworth Higginson) に宛てた7番目の手紙において、エミリ・ディキンソンが初めて戦争に触れた言葉が“War feels to me an oblique place -” (L 280) であった。この一文の意味を捉えるうえで鍵となる言葉“oblique”を用いたさらなる詩が“The Robin is a Gabriel” (F 1520) である。第1章でも触れたように、戦後15年を経た、1880年に作られている。

The Robin is a Gabriel  
In humble circumstances -  
His Dress denotes him socially,  
Of Transport's Working Classes -  
He has the punctuality  
Of the New England Farmer -  
The same oblique integrity,  
A Vista vastly warmer -  
A small but sturdy Residence,  
A Self denying Household,  
The Guests of Perspicacity  
Are all that cross his Threshold -  
As covert as a Fugitive,  
Cajoling Consternation  
By Ditties to the Enemy  
And Silvan Punctuation (F 1520B)

コマツグミはつつましい境遇の  
天使ガブリエル  
その服が示すのは彼の社会的地位  
運搬の労働者階級  
彼にはニュー・イングランド農夫の  
几帳面さ  
同じ斜めの誠実さがあり  
はるかに温暖な眺望を持つ  
小さいながらも堅固な住処  
禁欲的な家庭を持ち

洞察に富む客人だけが  
その敷居をまたぐ  
逃亡者のようにひと目につかず  
騙して仰天させる  
敵に向けた素朴な短詩と  
森の句読法で

北米でお馴染みのコマツグミを詩人の分身として描いた詩である。実直で質実剛健な性質を、ニュー・イングランドの農夫に喩えており、その際に“oblique”の語が用いられている。ここでコマツグミの仕事は“transport”（運搬）である。「素朴な短詩」を作り、それを「運搬」する。

この詩には3つの版があり、ここで引用したのはアマストの親しい友人サラ・タッカーマン (Sarah Tuckerman) に1880年3月頃に送った形である。第1章で言及した“Some we see no more, Tenements of Wonder” (F 1210) の詩では、“oblique”の語はこの世の人間の認識の限界を表していた。“That oblique Belief which we call Conjecture”（「わたしたちが推測と呼ぶ斜めの信心」）とあるように、来世のような未知の世界、目に見えない場所について推測し、捉えようとするも、人としての認識の限界を意識する、そうした立場から発せられた表現である。また、上掲のヒギンスン宛ての手紙の“oblique”は、未知の場所としての、戦争の捉え方をめぐる用い方であった。戦争との認識上の隔たりを指す意味と、戦争への詩人の対峙の仕方を含む意味を第1章で見てきた。

“The Robin is a Gabriel” (F 1520) の詩では7行目に“The same oblique integrity”とあるのは、コマツグミの側に立った言葉である。つまりは声を発する側、詩人の立場から、その表現方法を語るうえで“oblique”の語が用いられている。未知のものを捉えようとするとき、そもそも対象との隔たりを認識することが出発点にある。人々が用いる常套句で甘んじることはしない。そのために人々と異なる観点に立つこともある。この「斜め」の姿勢が最も試されたのが戦争の時代であったといえる。人々が同じ方向を向きがちな、またそうすることが無難な時代にあって、「隔たり」を認めることは自分を追い込むことにもなる。それでも「斜め」を、つまりは「隔たり」を意識するからこそ、広く見渡しのきく「眺望」（“A Vista”）を手にするができる。

未曾有の動乱の時代に生きるうえで突き付けられる未知のもの、明確に掴みとれないものを捉えようと試みた一例が先に見た“A nearness to Tremendousness” (F 824) であり、1864年に40番目のファシクルに清書されている。詩作におけるこうした至難の軌跡を、同じファシクル40番の最後に置かれた“Unfulfilled to Observation -” (F 839) の詩にも見出すことができる。前半部分をここに引用する。

Unfulfilled to Observation -  
Incomplete - to Eye -  
But to Faith - a Revolution  
In Locality – (F 839)

観察に足るほど満たされておらず  
目には 不完全に映る  
けれども信仰にとっては 場所を得れば  
革命となる

未知の感覚、捉えがたい感情など容易に把握できないものを、詩という「所在」に据えることで「革命」に相応しい新たな視野をもたらす<sup>267</sup>。ファシクルの最終頁にこの詩が清書された 1864 年に至るまで、戦いの諸相をめぐってディキンソンは詩を書いていた。これまで見てきた一連の詩群を経てこの詩に至るとき、個別の場面や展開を超えて、時代自体を覆う漠とした雰囲気をなんとか掴もうとする、詩人のひとつの到達点を見出す。その気配には気が付いてはいても、何ともわからない。観察の対象となるほどはっきりとした形もなく、捉えどころがない。眼で認識する段階にも至っていない。自身では経験不可能の領域であることを認める。それでもその状態を、存在を、詩という枠に収めるとき、これまでにない見方—「革命」—を提示することができる。ここで“Place”という語ではなく“Locality”にしたのは、視覚韻のためであるかもしれない。さらには、“Locality”には植物の生息地の意味もあり、そこから、詩自体が植物の様に有機的に成長していくさまも想起させる<sup>268</sup>。目に見えるものの先にある、目に見えないものを引き寄せようとする力である。ここには詩の力を信じる心がある。この意識の延長線上において“Compound Vision”（「複合の視野」“The Admirations - and Contempts - of time -” [F 830]）とディキンソンが呼ぶ、死を通し

---

<sup>267</sup> グレグ・ジョンソン(Greg Johnson) はここでは天国を指すと解釈している(40)。またクランブリイは詩自体を歌ったものとしている (“This was my finallest” 215)。クランブリイの解釈では“Locality”は読者の心であり、それぞれの読者において詩の存在が変わり得るという意味も有効であろう。ただし、この捉え方だと冒頭 2 行の解釈が難しい。

<sup>268</sup> トマス・ウェントワース・ヒギンソンが『アトランティック・マンスリー』1862 年 12 月号に掲載したエッセイ “The Procession of the Flowers” では、“locality”の語をやはり植物の生息分布の意味で使っている。また、ウェブスターの辞書の第 3 番目の定義にもこの意味がある (“Position; situation: place; particularly geographical place or situation, as of a mineral or plant”)

て生を見つめ直す眼差しがあり、生と、未知の領域である死との「隔たりを渡る」(“traversing the intervall”) 詩人の姿を見出すことができる (“This Consciousness that is aware” [F 817])。この世の経験と目に見えぬものとの狭間を進んでいく。

コーディ・マーズは、ディキンソンが第 40 番を最後に、ファシクルを綴じる作業を止め、回覧の割合も激変した理由を次のように述べている——「南北戦争は、端的に言えば、詩を公にするという考えに関してディキンソンを幻滅させた。戦争が与える苦しみ——さらに重要なのは、どうにもならない隔たりと、底知れぬ、理解できぬ苦しみ——がディキンソンを促して、詩を回覧するよりも保存する方を選ばせた」 (“The war, in short, disillusioned Dickinson of the idea that poetry should be made public: the war’s suffering – and more importantly, the inexorable distance and unfathomability of that suffering – led her to opt for preservation rather than circulation.” [152])。しかし、最終ファシクルの最終ページに置かれたこの“Unfulfilled to Observation -” (F 839) の詩を見る限り、幻滅ではなく、むしろ、「底知れぬ、理解できぬ苦しみ」を詩に描こうとする挑戦を見出すことができる。

戦争の時代を通してディキンソンが辿り着いたのは、把握し難いものを突き付けられたときにさえも、それを捉えようとする覚悟である。苦しみを描くにも観念的な言葉に埋没することはない。より圧縮した言葉で、断片的な詩行となっていく。そのようにして並べられた詩句は、もはや、回覧するための言葉ではない。幻滅ではなく、なおもその挑戦が続いていった証が、戦後 15 年を経た、この“The Robin is a Gabriel” (F 1520) の詩に記された“oblique integrity”なのである。未知の対象との隔たりを認める「斜めの」認識は、詩人が自分自身に対する「誠実」を守るために不可欠な視点である。詩を送らずに手元に置き、自身にとって偽りのない言葉だけを連ねる。未知のもの、認識不可能なものであると認めるところから出発する。そのためには、時代との繋がりを求めながらも、表現をするときは敢えて繋がりを断つことで「斜め」の立ち位置を確保する。この強靱な意志によって紡ぎだされた詩は、言葉の重みが低下し、信憑性さえ怪しい情報が横溢する 21 世紀の現代にあって、より一層、強く響く。

## 参考文献

### 1. Primary Sources

#### Texts

特に断りがない場合、詩と手紙の引用は全て以下の版に拠る。

*The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Ed. R.W. Franklin. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1998. 省略記号 F に詩番号を付す。

*The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1958. 省略記号 L に書簡番号を付す。

Dickinson, Emily. *Poems by Emily Dickinson*. Ed. Mabel Loomis Todd and Thomas Wentworth Higginson. Boston: Roberts Brothers, 1890.

---. *Poems by Emily Dickinson*. Second Series. Ed. Mabel Loomis Todd and Thomas Wentworth Higginson. Boston: Roberts Brothers, 1891.

---. *The Poems of Emily Dickinsons*. 3 vols. Ed. Thomas H. Johnson. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1955.

---. *Emily Dickinson's Home: Letters of Edward Dickinson and His Family*. Ed. Millicent Todd Bingham. New York: Harper and Brothers, 1955.

---. *The Manuscript Books of Emily Dickinson*. Ed. R. W. Franklin. 2 vols. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1981.

---. *Open Me Carefully: Emily Dickinson's Intimate Letters to Susan Huntington Dickinson*. Ed. Ellen Louise Hart and Martha Nell Smith. Ashfield: Paris Press, 1998.

---. *Emily Dickinson's Pomes: As She Preserved Them*. Ed. Cristanne Miller. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 2016.

---. "Flowers." *Drum Beat* 2 March 1864: 2.

---. "Flowers." *Springfield Daily Republican* 9 March 1864: 6.

---. "Flowers." *Springfield Weekly Republican* 12 March 1864: 6.

---. "Flowers." *Boston Post* 16 March 1864: 2.

---. "October." *Drum Beat* 11 March 1864: 7.

---. "Sunset." *Drum Beat* 29 Feb. 1864: 3.

---. Success is counted sweetest [F 112]. *Brooklyn Daily Union* 27 April 1864: 12.

## 2. Secondary Sources

- Aaron, Daniel. *The Unwritten War: American Writers and the Civil War*. New York: Alfred A. Knopf, 1973.
- Ackmann, Martha. "Norcross, Louisa." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1998. 216-217.
- Albrecht, Robert C. "The Theological Response of the Transcendentalists to the Civil War." *New England Quarterly* (March 1965): 21-34.
- Alcott, Louisa May. *Hospital Sketches*. 1863. Bedford: Applewood, 1993.
- . *Work*. New York: Penguin, 1994.
- . *Little Women*. New York: Penguin, 1989.
- Anderson, Charles R. *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1960.
- Asahina, Midori. "'Fascination's is absolute of Clime': Reading Dickinson's Correspondence with Higginson as Naturalist." *Emily Dickinson Journal* 14.2 (2005): 103-119.
- Attie, Jeanie. *Patriotic Toil: Northern Women and the American Civil War*. Ithaca: Cornell UP, 1998.
- Barrett, Faith. "Addresses to a Divided Nation: Images of War in Emily Dickinson and Walt Whitman." *Arizona Quarterly* 61 (Winter 2005): 67-99.
- , and Cristanne Miller, eds. *"Words for the Hour": A New Anthology of Civil War Poetry*. Amherst: Massachusetts UP, 2005.
- . "Public Selves and Private Spheres: Studies of Emily Dickinson and the Civil War, 1984-2007," *Emily Dickinson Journal* 16.1 (2007): 92-104.
- . "'Drums off the Phantom Battlements': Dickinson's War Poems in Discursive Context." *A Companion to Emily Dickinson*. Ed. Martha Nell Smith and Mary Loeffelholz. Oxford: Blackwell, 2008. 107-132.
- . *To Fight Aloud Is Very Brave: American Poetry and the Civil War*. Amherst: Massachusetts UP, 2012.
- . "Slavery and the Civil War." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. New York: Cambridge UP, 2013. 206-215.
- Baym, Nina. *American Women of Letters and the Nineteenth-Century Sciences: Styles of Affiliation*. New Brunswick: Rutgers UP, 2002.
- Benfey, Christopher. "Emily Dickinson and the American South." *The Cambridge Companion to Emily Dickinson*. Ed. Wendy Martin. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 30-50.



- Bennett, Fordyce R. *A Reference Guide to the Bible in Emily Dickinson's Poetry*. London: Scarecrow Press, 1997.
- Bennett, Paula. "Not Just Filler and Not Just Sentimental: Women's Poetry in American Victorian Periodicals, 1869-1900." *Periodical Literature in Nineteenth Century America*. Eds. Kenneth M. Price and Susan Belasco Smith. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. 202-279.
- , Karen L. Kilcup, and Philipp Schweighuser, eds. *Teaching Nineteenth-Century American Poetry*. New York: Modern Language Association of America, 2007.
- . "Looking at Death, is Dying": Fascicle 16 in a Civil War Context." *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities*. Ed. Paul Crumbley and Eleanor Elson Heginbotham. Columbus: Ohio State UP, 2014. 106-129.
- Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. Madison: Wisconsin UP, 1978.
- Bergland, Renée L. "The Eagle's Eye: Dickinson's View of Battle." *A Companion to Emily Dickinson*. Ed. Martha Nell Smith and Mary Loeffelholz. Oxford: Blackwell, 2008. 133-156.
- . *Maria Mitchell and the Sexing of Science: An Astronomer among the American Romantics*. Boston: Beacon, 2008.
- Berkove, Lawrence I. "'A Slash of Blue!': Unrecognized Emily Dickinson War Poem." *Emily Dickinson Journal* 10.1 (2001): 1-8.
- Bingham, Millicent Todd. *Ancestors' Brocades: The Literary Debut of Emily Dickinson*. New York: Harper & Brothers, 1945.
- Blackhawk, Terry. "Flowers - Well - if anybody." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport: Greenwood Press, 1998. 116-117.
- Browning, Elizabeth. *Aurora Leigh*. Ed. Kerry McSweeney. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Bunyan, John. *The Pilgrim Progress*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Cameron, Sharon. *Lyric Time: Dickinson and the Limits of Genre*. Baltimore: John Hopkins UP, 1979.
- Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading 1836-1886*. Cambridge: Harvard UP, 1966.
- Cappucci, Paul. "Depicting the Oblique: Emily Dickinson's Poetic Response to the American Civil War." *War, Literature & the Arts*. Colorado Springs: United States Air Force Academy, 1998. 260-273.
- Cody, David. "Blood in the Basin: The Civil War in Emily Dickinson's 'The Name - of it - is "Autumn" -.'" *Emily Dickinson Journal* 12.1 (2003): 25-52.
- Cotter, Harold. "'I'm Nobody'? Not a Chance, Emily Dickinson." *New York Times* 19 Jan. 2017, New York ed.: C17.
- Coultrap-McQuin, Susan. *Doing Literary Business: American Women Writers in the*

- Nineteenth Century*. Chapel Hill: North Carolina UP, 1990.
- Craig, Megan. "The Infinite in Person: Levinas and Dickinson." *Emily Dickinson and Philosophy*. Ed. Jed Deppman, Marianne Noble, and Gary Lee Stonum. New York: Cambridge UP, 2013. 207-226.
- Crumbley, Paul. *Inflections of the Pen: Dash and Voice in Emily Dickinson*. Kentucky: UP of Kentucky, 1997.
- . "Dickinson's Correspondence and the Politics of Gift-Based Circulation." *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays*. Ed. Jane Donahue Eberwein and Cindy MacKenzie. Amherst: Massachusetts UP, 2009. 28-55.
- , *Winds of Will: Emily Dickinson and the Sovereignty of Democratic Thought*. Tuscaloosa: Alabama UP, 2010.
- . "Democratic Politics." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 179-187.
- , and Eleanor Elson Heginbotham, eds. *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities*. Columbus: Ohio State UP, 2014.
- Culler, Jonathan. *The Pursuit of Signs: Semiotics, Literature, Deconstruction*. Ithaca: Cornell UP, 1981.
- . "Why Lyric?" *PMLA* 123.1 (January 2008): 201-205.
- Danduland, Karen. "Another Dickinson Poem Published in Her Lifetime." *American Literature* 54. 3 (1982): 434-437.
- . "New Dickinson Civil War Publications." *American Literature* 56.1 (1984): 17-27.
- . "Dickinson and the Public." *Dickinson and Audience*. Ed. Martin Orzeck and Robert Weisbuch. Ann Arbor: Michigan UP, 1996, 255-77.
- . "Drum Beat." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport, CT: Greenwood Press, 1998. 89.
- De Forest, J. W. *Miss Ravenel's Conversion from Secession to Loyalty*. 1867. New York: Penguin, 2000.
- Diehl, Joanne Feit. *Dickinson and the Romantic Imagination*. Princeton: Princeton UP, 1981.
- Duc, Thomas Lu. *Piety and Intellect at Amherst College, 1865-1912*. New York: Arno Press and New York Times, 1969.
- Eberwein, Jane Donahue, ed. *Early American Poetry: Selections from Bradstreet, Taylor, Dwight, Freneau & Bryant*. Madison: Wisconsin UP, 1978.
- , ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport, CT: Greenwood Press, 1998.
- . "'Is Immortality True?': Salvaging Faith in an Age of Upheavals." *A Historical Guide to Emily Dickinson*. Ed. Vivian Pollak. Oxford: Oxford UP, 2004. 67-102.

- . "‘Where - Omnipresence - fly?’ Calvinism as Impetus to Spiritual Amplitude." *Emily Dickinson Journal* 14.2 (2005): 12-23.
- , and Cindy MacKenzie, eds. *Reading Emily Dickinson's Letters*. Amherst: Massachusetts UP, 2009.
- . "New England Puritan Heritage." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. New York: Cambridge UP, 2013. 46-55.
- . Ed. *Dickinson in Her Own Time: A Biographical Chronicle of Her Life, Drawn from Recollections, Interviews, and Memoirs by Family, Friends, and Associates*. Iowa City: Iowa UP, 2015.
- Edelstein, Tilden G. *Strange Enthusiasm: A Life of T. W. Higginson*. New Haven: Yale UP, 1968.
- Emerson, Ralph Waldo. *Ralph Waldo Emerson: Essays and Lectures*. New York: Library of America, 1983.
- England, Martha Winburn. "Emily Dickinson and Isaac Watts: Puritan Hymnodists." *Hymns Unbidden: Donne, Herbert, Blake, Emily Dickinson and Hymnographers*. Ed. Martha Winburn England and John Sparrow. New York: New York Public Library, 1966. 113-147.
- Erkkila, Betsy. *Whitman: The Political Poet*. Oxford: Oxford UP, 1989.
- . "Emily Dickinson and Class." *American Literary History* 4.1 (Spring 1992): 1-27.
- . *The Wicked Sisters: Women Poets, Literary History & Discord*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . "Dickinson and the Art of Politics." *A Historical Guide to Emily Dickinson*. Ed. Vivian R. Pollak. Oxford: Oxford UP, 2004. 133-174.
- Fahs, Alice. *The Imagined Civil War: Popular Literature of the North & South 1861-1865*. Chapel Hill: North Carolina UP, 2001.
- Farr, Judith. "Emily Dickinson and Marriage: 'The Etruscan Experiment'." *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays*. Ed. Jane Donahue Eberwein and Cindy MacKenzie. Amherst: Massachusetts UP, 2009. 161-188.
- Fetterley, Judith. *Provisions: A Reader from 19<sup>th</sup>-Century American Women*. Bloomington: Indiana UP, 1985.
- Finch, A. R. C. "Dickinson and Patriarchal Meter: A Theory of Metrical Codes." *PMLA* 102. 2 (March, 1987): 166-76.
- Finnerty, Páiraic. "Transatlantic Women Writers." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. New York: Cambridge UP, 2013. 109-118.
- Ford, Thomas W. "Emily Dickinson and the Civil War." *The University Review* 31,

- 1965: 199-203.
- . *Heaven Beguiles the Tired: Death in the Poetry of Emily Dickinson*. Tuscaloosa: Alabama UP, 1966.
- Frederickson, George M. *The Inner Civil War: Northern Intellectuals and the Crisis of the Union*. With a New Preface. Urbana: Illinois UP, 1993.
- Fretwell, Erica. "Emily Dickinson in Domingo." *The Society of Nineteenth-Century Americanists* (Spring 2013): 71-96.
- Friedlander, Benjamin. "Auctions of the Mind: Emily Dickinson and Abolition." *Arizona Quarterly* 54.1 (1998): 1-26.
- . "Emily Dickinson and the Battle of Ball's Bluff." *PMLA* 124.5 (Oct. 2009): 1582-1599. JASTOR. 28 August 2016.
- Frothingham, O. B. "Our Martyrs and Ressurrection." *Springfield Daily Republican* 29 March 1862:2. Microform. *American's Historical Newspaper*.
- Fuller, Randall. *From Battlefields Rising: How the Civil War Transformed American Literature*. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Garner, Stanton. *The Civil War World of Herman Melville*. Lawrence, Kansas: UP of Kansas, 1993.
- Genoways, Ted. "Civil War Poems in "Drum-Taps" and "Memories of President Lincoln." *A Companion to Walt Whitman*. Ed. Donald D. Kummings. Oxford: Blackwell, 2006. 522-538.
- Gilmore, Michael T. *The War on Words: Slavery, Race, and Free Speech in American Literature*. Chicago: Chicago UP, 2010.
- Goldensohn, Lorrie, ed. *American War Poetry. An Anthology*. New York: Columbia UP, 2006.
- Gordon, Lyndall. *Lives Like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds*. New York: Viking, 2010.
- Grant, Mary H. *Private Woman, Public Person: An Account of the Life of Julia Ward Howe from 1819 to 1868*. New York: Carlson, 1994.
- Gross, Robert A. "Lonesome in Eden: Dickinson, Thoreau and the Problem of Community in Nineteenth-Century New England." *Canadian Review of American Studies* 14 (1983): 1-17.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid Away In Books: The Life of Emily Dickinson*. New York: Random House, 2001.
- Hawthorne, Nathaniel. "Chiefly about War Matters. By a Peaceable Man" *Atlantic Monthly* 10 (July 1862): 43-61. *Making of America*. Web. 11. Nov. 2015.
- Hallen, Cynthia L., et al. *The Emily Dickinson Lexicon*. Online at ed.byu.edu.

- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau: A Biography*. New York: Dover, 1962.
- Hart, Ellen-Louise, and Martha Nell Smith, eds. *Open Me Carefully: Emily Dickinson's Intimate Letters to Susan Huntington Dickinson*. Ashfield, Mass.: Paris Press, 1998.
- Heginbotham, Eleanor. "“What are you reading now?”: Emily Dickinson's Epistolary Book Club." *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays*. Ed. Jane Donahue Eberwein and Cindy MacKenzie. Amherst: Massachusetts UP, 2009. 126-160.
- . "Reading in the Dickinson Libraries." Ed. Eliza Richards. *Emily Dickinson in Context*. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 25-35.
- Hewitt, Elizabeth. *Correspondence and American Literature 1770-1865*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Higginson, Thomas Wentworth. "Emily Dickinson's Letters." *Atlantic Monthly* 68.408 (October 1891): 444-456.
- . *The Complete Civil War Journal and Selected Letters of Thomas Wentworth Higginson*. Ed. Christopher Looby. Chicago: U of Chicago P, 2000.
- . *The Magnificent Activist: The Writing of Thomas Wentworth Higginson*. Ed. Howard N. Meyer. New York: DaCapo, 2000.
- History of the Town of Amherst, Massachusetts 1731-1896*. Amherst: Carpenter and Morehouse, 1896.
- Hoffman, Tyler B. "Emily Dickinson and the Limit of War." *Emily Dickinson Journal*. 3. 2 (1994): 1-18.
- Homans, Margaret. *Women Writers and Poetic Identity: Dorothy Wordsworth, Emily Brontë, and Emily Dickinson*. Princeton: Princeton UP, 1980.
- Hooker, Richard. *The Story of an Independent Newspaper*. New York: Macmillan, 1924.
- Howe, Susan. *My Emily Dickinson*. Berkeley: North Atlantic, 1985.
- . *The Birth-mark: unsettling the wilderness in American literary history*. Hanover: Wesleyan UP, 1993.
- Howe, Julia Ward. *Later Lyrics*. Boston: J. E. Tilton, 1866.
- . "Battle Hymn of the Republic." *Atlantic Monthly* 9.52 (Feb. 1862): 145.
- . *Reminiscences 1819-1899*. Boston: Houghton Mifflin, 1899. 273-277.
- Howells, William Dean. "Review of Battle-Pieces." *Atlantic Monthly* 19.112 (February 1867): 253.
- Hughes, James M. "Dickinson As 'Times Sublimest Target'." *Dickinson Studies* 34 (2<sup>nd</sup> Half 1978): 23-37.
- Hutchinson, Coleman. "“Eastern Exiles’: Dickinson, Whiggery and War." *Emily Dickinson Journal* 13.2 (2004): 1-26.
- "Items by Telegraphs." *Springfield Daily Republican*. 16 November 1859: 3.

- Microform. *American's Historical Newspaper*.
- Jackson, Virginia. *Dickinson's Misery: A Theory of Lyric Reading*. Princeton: Princeton UP, 2005.
- . "Who Reads Poetry?" *PMLA* 123.1 (January 2008):181-187.
- Jackson, Helen Hunt. *Poems by Helen Jackson*. Boston: Robert Brothers, 1892.
- Johnson, Thomas H. *Emily Dickinson: An Interpretive Biography*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1955.
- Jones, Rowena Revis. "Dwight, Edward Strong." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport, CT: Greenwood Press, 1998. 90-91.
- Juhasz, Suzanne. "'To make a prairie': Language and Form in Emily Dickinson's Poems about Mental Experience." *Ball State University Forum* 21.2 (Spring 1980): 12-25.
- Keller, Karl. *The Only Kangaroo among the Beauty: Emily Dickinson and America*. Baltimore: John Hopkins UP, 1979.
- Kelly, Morgan, Carolyn Vega, Marta L. Werner, Susan Howe, and Richard Wilbur. *The Networked Recluse: The Connected World of Emily Dickinson*. Amherst: Amherst College Press, 2017.
- Kete, Mary Louise. *Sentimental Collaborations: Mourning and Middle-Class Identity in Nineteenth-Century America*. Durham: Duke UP, 2000.
- Kirkby, Joan. "Periodical Reading." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 139-147.
- Kohler, Michelle. "Dickinson and the Poetics of Revolution." *Emily Dickinson Journal* 19.2 (2010): 20-46.
- . "The Ode Unfamiliar: Dickinson, Keats, and the (Battle) fields of Autumn." *Emily Dickinson Journal* 22.1 (2013): 30-54.
- . *Miles of Stare: Transcendentalism and the Problem of Literary Vision in Nineteenth-Century America*. Tuscaloosa: Alabama UP, 2014.
- Kummings, Donald D., ed. *The Routledge Encyclopedia of Walt Whitman*. London: Routledge, 2011.
- Lease, Benjamin. *Emily Dickinson's Readings of Men and Books: Sacred Soundings*. New York: St. Martin's, 1990.
- . "Higginson, Thomas Wentworth." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Eberwein. Westport, CT: Greenwood Press, 1998. 139-141.
- Lee, Maurice S. "Writing through the War: Melville and Dickinson after the Renaissance." *PMLA* 115 (2000): 1124-28.
- Lehuu, Isabelle. *Carnival on the Page: Popular Print Media in Antebellum America*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2000.

- Leyda, Jay. *The Years and Hours of Emily Dickinson*. 2 vols. New Haven: Yale UP, 1960.
- Ljungquist, Kent. "Meteor of the War": Melville, Thoreau, and Whitman Respond to John Brown. *American Literature* 61.4 (Dec 1989): 674-680. Project Muse. Web. Oct. 2. 2015.
- Loeffelholz, Mary. "U. S. Literary Contemporaries: Dickinson's Moderns." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards Cambridge: Cambridge UP. 129-138.
- Longworth, Polly. "Dickinson, Edward." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport, CT: Greenwood Press, 1998. 67-70.
- . "Brave among the Bravest: Amherst in the Civil War." *Amherst College Quarterly* (Summer 1999): 24-31.
- Lorang, Elizabeth. "American Poetry and the Daily Newspaper from the Rise of the Penny Press to the New Journalism." Diss. U of Nebraska, 2010.
- Lowell, Robert. *For the Union Dead*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1964.
- Mackenzie, Cindy. "'This is my letter to the world': Emily Dickinson's Epistolary Poetics." *Reading Emily Dickinson's Letters*. Ed. Jane Donahue Eberwein and Cindy Mackenzie. Amherst: Massachusetts UP, 2009.
- Marcelin, Leigh-Anne Urbanowicz. "'Singing off the Charnel Steps': Soldiers and Mourners in Emily Dickinson's War Poetry." *Emily Dickinson Journal*. 9.2 (2000): 64-74.
- Marrs, Cody. *Nineteenth-Century American Literature and the Long Civil War*. New York: Cambridge UP, 2015.
- Martin, Wendy. *American Triptych: Anne Bradstreet, Emily Dickinson, Adrienne Rich*. Chapel Hill: North Carolina UP, 1984.
- . *The Cambridge Introduction to Emily Dickinson*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- , ed. *All Things Dickinson: An Encyclopedia of Emily Dickinson's World*. 2 vols. Santa Barbara: Greenwood, 2014.
- McCormack, Jerusha Hull. "Domesticating Delphi: Emily Dickinson and the Electro-Magnetic Telegraph." *American Quarterly*. 55.4 (December 2003): 569-601.
- McClatchy, J. D., ed. *Poets of the Civil War*. New York: Library of America, 2005.
- McPherson, James M. *For Causes and Comrades: Why Men Fought in the Civil War*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Melville, Herman. *Battle-Pieces and Aspects of the War: Civil War Poems*. 1866. New York: Da Capo, 1995.
- . *Selected Poems of Herman Melville*. Ed. Robert Penn Warren. New York: Barnes &

- Noble, 1970.
- Menand, Louis. *The Metaphysical Club*. London: Flamingo, 2002.
- Messmer, Marietta. *A Vice for Voices: Reading Emily Dickinson's Correspondence*. Amherst: Massachusetts UP, 2001.
- Meyer, Michael. "Thoreau's Rescue of John Brown from History." *Studies in the American Renaissance*. Ed. Joel Myerson. Boston: Twayne, 1980: 301-316.
- Miller, Christanne. *Emily Dickinson: A Poet's Grammar*. Cambridge: Harvard UP, 1987.
- . "Pondering 'Liberty': Emily Dickinson and the Civil War." *American Vistas and Beyond: A Festschrift for Roland Hagenbuchle*. Ed. Marietta Messmer and Josef Raab. Trier, Germany: Wissenschaftlicher Verlag, 2002. 45-64.
- . *Reading in Time: Emily Dickinson the Nineteenth Century*. Amherst: Massachusetts UP, 2012.
- . "An Interview with Dr. Cristanne Miller on *Emily Dickinson's Poems: As She Preserved Them*." *Emily Dickinson International Society Bulletin*. 28. 1 (May / June 2017): 13-15.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Pearson-Longman, 2007.
- Mitchell, Betty L. "Massachusetts Reacts to John Brown's Raid." *Civil War History*. 54.1. March 1973: 65-79.
- Mitchell, Domhnall. "Emily Dickinson and class." *The Cambridge Companion to Emily Dickinson*. Ed. Wendy Martin. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 191-214.
- . *Measures of Possibility: Emily Dickinson's Manuscripts*. Amherst: Massachusetts UP, 2005.
- Moore, Margaret B. "Nathaniel Hawthorne and 'Old John Brown'." *Nathaniel Hawthorne Review* 2.1 (Spring 2000): 25-32.
- Moorhead, James H. *American Apocalypse: Yankee Protestants and the Civil War 1860-1869*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Mott, Frank Luther. *A History of American Magazines*. 5 vols. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1966.
- Murray, Aife. "Miss Margaret's Emily Dickinson." *Signs* 24.3 (Spring 1999): 697-732.
- . *Maid as Muse: How Servants Changed Emily Dickinson's Life and Language*. Durham, NH: New Hampshire UP, 2009.
- Noble, Marianne. "Master." *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Ed. Jane Donahue Eberwein. Westport CT: Greenwood Press, 1998. 194-195.
- Orzeck, Martin, and Robert Weisbuch. *Dickinson and Audience*. Ann Arbor: Michigan UP, 1996.



- Peel, Robin. *Emily Dickinson and the Hill of Science*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2010.
- Pollack, Vivian. *Dickinson: The Anxiety of Gender*. Ithaca: Cornell UP, 1984.
- . "Dickinson and the Poetics of Whiteness." *Emily Dickinson Journal* 9.2 (2000): 84-95.
- Porter, David. *Dickinson, the Modern Idiom*. Cambridge: Harvard UP, 1981.
- Preminger, Alex, T. V. F. Brogan, Frank J. Warnke, O. B. Hardison, and Earl Miner eds. *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Princeton: Princeton UP, 1993.
- "Remarkable Phenomenon New Yorkville." *Evening Post* 15 Nov. 1859: 1. Microform. *American's Historical Newspaper*.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge: Harvard UP, 1989.
- . *John Brown, Abolitionist: The Man Who Killed Slavery, Sparked the Civil War, and Seeded Civil Rights*. New York: Vintage, 2005.
- Richards, Eliza. "'How News Must Feel When Travelling': Dickinson and Civil War Media." *A Companion to Emily Dickinson*. Ed. Martha Nell Smith and Mary Loeffelholz. Oxford: Blackwell, 2008. 157-179.
- . "Weathering the news in US Civil War poetry." *The Cambridge Companion to Nineteenth-Century American Poetry*. Ed. Kerry Larson. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 113-134.
- Rogoff, Jay. "Certain Slants: Learning from Dickinson's Oblique Precision." *Emily Dickinson Journal* 17. 2 (2008): 39-54.
- Rose, Anne C. *Victorian America and the Civil War*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Rosenbaum, S. P. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*. Ithaca. Cornell UP, 1964.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. 1951. New York: Little, Brown, 2014.
- Sanborn, Geoffrey. "Keeping Distance: Cisneros, Dickinson, and the Politics of Private Enjoyment." *PMLA* 116. 5 (Oct. 2001): 1334-1348. Web. 17 Nov. 2015.
- Saxton, Martha. *Louisa May Alcott: A Modern Biography*. New York: Noonday Press, 1995.
- Seelye, J. H. "The Soul's Remedy." Collections at the Hitchcock Memorial Room, Amherst College.
- Sedgwick, Ellery. *A History of the Atlantic Monthly 1857-1989: Yankee Humanism at High Tide and Ebb*. Amherst: U of Massachusetts P, 1994.
- "Serious Troubles at Harper's Ferry, Va. The U.S. Arsenal seized by the mob." *Springfield Daily Republican* 18 Oct. 1859: 1. Microform. *American's Historical*

*Newspaper.*

- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. 2 vols. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1974.
- Shoptaw, John. "Dickinson's Civil War Poetics: From the Enrollment Act to the Lincoln Assassination." *Emily Dickinson Journal* 19.2 (2010): 1-19.
- Smith, Martha Nell, and Mary Loeffelholz, eds. *A Companion to Emily Dickinson*. London: Blackwell, 2007.
- . "A Hazzard of a Letter's Fortunes: Epistolary and the Technology of Audience in Emily Dickinson's Correspondence." *Reading Emily Dickinson's Letters: Critical Essays*. Ed. Jane Donahue Eberwein and Cindy MacKenzie. Amherst: Massachusetts UP, 2009. 239-256.
- . "Editorial History I: Beginnings to 1955." *Emily Dickinson in Context*. Ed. Eliza Richards. New York: Cambridge UP, 2013. 271-281.
- Stearns, William Augustus. "A Sermon: Preached in the Village Church before the College and the united Congregations of the town of Amherst, Mass." Amherst: Henry A. Marsh, 1861.
- . *Adjutant Stearns*. Boston: Massachusetts Sabbath School Society, 1862.
- St. Armand, Barton Levi. *Emily Dickinson and Her Culture: The Soul's Society*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Sweet, Timothy. *Traces of War: Poetry, Photography, and the Crisis of the Union*. Baltimore: John Hopkins UP, 1990.
- Taylor, Edward. *The Poetical Works of Edward Taylor*. 1939. Ed. Thomas H. Johnson. Princeton: Princeton UP, 1966.
- . *The Poems of Edward Taylor*. Ed. Donald E. Stanford. 1960. Chapel Hill: North Carolina UP, 1989.
- "Thanksgiving in Amhers." *Hampshire and Franklin Press*. 2 Dec. 1859: 1.
- Thomas, Shannon L. "'What News must think when pondering': Emily Dickinson, the *Springfield Daily Republican* and the Poetics of Mass Communication." *Emily Dickinson Journal* 19.1 (2010): 60-80.
- Thoreau, Henry David. *The Journal of Henry D. Thoreau*. Ed. Brandford Torry and F. H. Allen. 14 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1906.
- . *Reform Papers*. Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 1973.
- . *Thoreau on Birds: Notes on New England Birds from the Journals of Henry David Thoreau*. Ed. Francis H. Allen. Boston: Beacon Press Books, 1993.
- Trninic, Marina. "A Call to Humanity: Hawthorne's 'Chiefly about War-Matters.'" *Nathaniel Hawthorne Review* 37.1 (Spring 2011): 109-132.

- Uno, Hiroko. *Emily Dickinson visits Boston*. Kyoto: Yamaguchi Publishing House, 1990.
- . *Emily Dickinson's Marble Disk: A Poetics of Renunciation and Science*. Tokyo: Eihōsha, 2002.
- Vendler, Helen. *Dickinson: Selected Poems and Commentaries*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 2010.
- Wadsworth, Charles. *The Christian Soldier*. Philadelphia: Lindsay & Plakiston, 1861.
- Walker, Cheryl. *The Nightingale's Burden: Women Poets and American Culture before 1900*. Bloomington: Indiana UP, 1982.
- Ward, Theodora. *The Capsule of the Mind: Chapters in the Life of Emily Dickinson*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1961.
- Wardrop, Daneen. *Emily Dickinson's Gothic: Goblin with a Gauge*. Iowa City: Iowa UP, 1996.
- Warren, Robert Penn. Introduction. *Selected Poems of Herman Melville*. New York: Barnes & Noble, 1967. 3-71.
- Watts, Isaac. *The Psalms, Hymns and Spiritual Songs of the Rev. Isaac Watts, D.D.* Ed. Samuel N. Worcester. Boston: Crocker and Brewster, 1834.
- Webster, Noah. *An American Dictionary of English Language*. 2 vols. New York: S. Converse, 1828.
- Weimer, Adrian Chastain. *Martyr's Mirror: Persecution and Holiness in Early New England*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Wells, Anna Mary. *Dear Preceptor, The Life and Times of Thomas Wentworth Higginson*. Cambridge: Houghton Mifflin, 1963.
- Werner, Marta, and Katie Chaple, Dave Higginbotham, Michelle Newcome, and Rebecca Harrison. "A Nosegay to Take to Battle: The Civil War Wounding of Emily Dickinson." <http://www.classroomelectric.org/volume2/werner/>. Web. 25 Nov. 2017.
- Whicher, George Frisbie. *This Was a Poet: A Critical Biography of Emily Dickinson*. New York: Charles Scribner's Sons, 1938.
- White, Fred D. *Approaching Emily Dickinson: Critical Currents and Crosscurrents Since 1960*. New York: Camden House, 2008.
- Whitman, Walt. *Leaves of Grass and Other Writings*. Ed. Michael Moon. New York: Norton, 2002.
- Wilson, Edmund. *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. 1962. New York: Farrar, Straus and Giroux; New York: Norton, 1994.
- Wineapple, Brenda. *White Heat: The Friendship of Emily Dickinson and Thomas Wentworth Higginson*. New York: Alfred A. Knopf, 2008.

- Wolosky, Shira. *Emily Dickinson: A Voice of War*. New Haven: Yale UP, 1984.
- . "Rhetoric or Not: Hymnal Tropes in Emily Dickinson and Isaac Watts." *New England Quarterly* 61.2 (June 1988): 214-232.
- . "Public and Private in Dickinson's War Poetry." *A Historical Guide to Emily Dickinson*. Ed. Vivian R. Pollak. Oxford: Oxford UP, 2004. 103-132.
- . *Poetry and Public Discourse in Nineteenth-Century America*. New York: Palgrave, 2010. 15-30.
- Worcester, Samuel N. *The Psalms, Hymn and Spiritual Songs of the Rev. Isaac Watts, D.* Boston: Crocker and Brewster, 1834.
- Young, Elizabeth. *Women's Writing and Disarming the Nation: the American Civil War*. Chicago: Chicago UP, 1999.
- Zapedowska, Magdalena. "Wresting with Silence: Emily Dickinson's Calvinist God." *American Transcendental Quarterly* 20.1 (2006): 379-98.

3. ディキンソンの詩・書簡の翻訳にあたって、以下の書籍を参考にした。  
(五十音順)

- 武田雅子・編訳『エミリの窓から Love Poetry of Emily Dickinson』蜂書房、1988年。
- 新倉俊一訳篇『ディキンソン詩集』思潮社、1933年。
- 岡隆夫訳『エミリー・ディキンソン詩集』桐原書店、1980年。
- 加藤菊雄『完訳 エミリー・ディキンソン詩集』研友社、1976年。
- 亀井俊介『対訳 ディキンソン詩集 アメリカ詩人選 (3)』岩波文庫、1988年。
- 山川瑞明・武田雅子編訳『エミリー・ディキンソンの手紙』弓書房、1988年。

4. 邦文参考文献  
(五十音順)

- 朝比奈緑「エミリー・ディキンソンと『アウトドア・ペーパーズ』——ナチュラルリスト・ヒギンソンへの手紙」スコット・スロヴィック・野田研一著『アメリカ文学の＜自然＞を読む：ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、1996年。217-236。
- . 「傷ついた心のもとへと」新倉俊一編『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩』金星堂、2016年、214-224。
- 池澤夏樹「詩のなぐさめ 65 映画の中のエミリー・ディキンソン」『図書』岩波書店、2017年8月号、60-63。

- 石川まりあ「種まく詩人——Emily Dickinson における「墓」と「眠る種」」『*The Emily Dickinson Review*』第4号(2016):15-26。
- 江田孝臣「エミリー・ディキンソンの〈推敲途上の詩〉を話者とする詩三篇とその発想の淵源」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第57輯、第2分冊(2012):5-17。
- 大井浩二著『アメリカのジャンヌ・ダルクたち——南北戦争とジェンダー』英宝社、2005年。
- 梶原照子「詩は“*The Wounded Dresser*”になるのか? ——Walt Whitman と南北戦争」日本ソロー学会『ヘンリー・ソロー研究論集』第38号、2012:41-51。
- 金澤淳子「詩的主題の〈流通〉——エマソンからディキンソンへ」、日本アメリカ文学会東京支部『アメリカ文学』第60号(1999):1-9。
- 。「ディキンソンから『大佐』ヒギンソンへ——南北戦争中の手紙を読む」、『エミリー・ディキンソンの詩の世界』新倉俊一編、国文社、2011年。188-206。
- 。「Emily Dickinson's Prewar Martial Poems」一橋大学・大学教育研究開発センター『人文・自然研究』第9号(2015):51-66。
- 。「「詩人」の仕事——ソローからディキンソンへ」、日本ソロー学会『ヘンリー・ソロー研究論集』第41号(2015):1-10。
- 紀平栄作・亀井俊介著『世界の歴史23:アメリカ合衆国の膨張』中央公論社1998年。
- 『舊新約聖書』日本聖書協会、1981年。
- 酒本雅之著『ことばと永遠——エミリー・ディキンソンの世界創造』研究社出版、1992年。
- サリンジャー、J・D 著 村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』白水社、2003年。
- 嶋崎陽子著『ディキンソンとスティーヴンズ——アメリカの詩神』沖積舎、1998年。
- 新倉俊一著『エミリー・ディキンソン 不在の肖像』大修館書店、1989年。
- ファウスト、ドルー・ギルピン著 黒沢眞理子訳『戦死とアメリカ——南北戦争62万人の死の意味』彩流社、2010年。
- 藤村希「流血のテクスト Nathaniel Hawthorne の“*Chiefly about War-Matters*”と“*Northern Volunteers*”」『英米文学』第76号(2016):23-41。
- 松本昇・高橋勤・君塚淳一編『ジョン・ブラウンの屍を越えて 南北戦争とその時代』金星堂、2016年。
- 吉田要「19世紀の交通革命と通信革命——エミリー・ディキンソン、鉄道、電信」井川眞砂・福士久夫・三石庸子・村山淳彦編著『アメリカ文学と革命』英宝社、2016年。163-196。